

ラブライブ！～歴史の阻止～

夜櫻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある日に車に轢かれた1人の男、その男はラブライブと世界で仮面ライダーとして世界を守る……ラブライブと仮面ライダー、決して交わる事の無いふたつの物語が今始まる

目次

＼1章μ，s誕生

第1話希望の魔法使い | 1

第2話音ノ木坂学院とゲート | 7

第3話絶望？のテスト | 16

第4話再開のゲーム | 24

第5話通りすがりの仮面ライダー | 29

第6話常に加速する | 37

第7話テストの結末カブトの正体 | 43

第8話9人の歌の女神 | 50

第9話秘密のアルバイト | 54

第10話 炎の進化 | 58

＼2章破壊者の正義

第11話ワンダーゾーン | 64

第12話夏の合宿 | 68

第13話運命の再開・王のバイオリン | 73

第14話夏の地獄のレッスン | 80

第15話ゲームオーバー | 84

第16話怪人ライダー | 90

第17話破壊者の正義 | 95

＼3章歴史の変化

第18話学園祭のライブの場所は | 102

第19話迷い | 107

第20話浦の星女学院に転校 | 112

第21話消える力 | 119

第22話消えた闘志	124
第23話μ'sとAquoursの合同練習	133
第24話学園祭ライブ	139
第25話現れる仮面ライダー	145
第26話海外留学	152
日常編 誰の水着がよかった？	157
第27話バラバラの心	160
第28話μ's再結成	164
第29話ミュージックスタート！	170
《テレビ本編》2期	
第30話ラブライブ再び	177
第31話ラブライブ出場とドラゴン乱舞	184
第32話二度目の合宿	197
日常編 美晴と花陽のデート	203
第33話助け合い	210
第34話ドラゴン集結	218
番外編 天使と仮面ライダー	
第一話 変身出来ない!?	230
第二話天使降臨	234
第三話 絶望の魔法使い	240
第四話決戦！絶望の魔法使い	246
最終話 最終決戦	252
く4章 偽物のライダーと新たなライダー	
登場人物紹介	265
第35話地区予選に向けて	270

第36話	ユメノトビラ	279
第37話	魔法が消える日	285
第38話	無限の命	292
第39話	トランプのライダー	305
第40話	新たなブレイド	311
劇場版	平成ライダー対昭和ライダー！ライダー大戦	322
第41話	フルーツ鎧武者	348
第42話	新たな將軍	353
第43話	913	364
第44話	555	372
第45話	堕ちた月	377
第46話	start your yosoro	384
第47話	Dは怒る／堕天使だつて戦いたい	396

く1章μ， S 誕生

第1話希望の魔法使い

ある日、俺は車に轢かれた。不意に轢かれたわけじゃないぞ？
ちゃんと子供を守ったのだ。そんな俺は今真っ白の空間の中に
いる

俺「ここは…俺轢かれたはずじゃ」

「おっ目覚めたか」

俺「あんたは？」

今俺の目の前に謎の爺さんがいた

神「わしは神じゃ」

俺「what？」

神「自分の命と引替えにあの子供を守る勇姿見たぞ」

俺「あの子供は!？」

神「安心せい無事じゃ」

良かった…

神「そんなお主に見込んで頼みがある」

俺「頼み？」

神「とある世界にファントムという怪物が入ってしまったんじや
あ」

俺「？ファントムですか」

神「その世界に行き奴らを倒してくれないか」

とある世界が気になるが他人からの要望は断り切れない

俺「いいですけどファントムについて教えてください」

神「そうじゃた説明がまだじゃたの」

く説明中く

神「とうわけじゃ分かったかのお？」

俺「はいだいたいわかりました」

神「では新たな世界を救い、楽しむがよい」

そう言われた瞬間俺の足にでっかい穴が空いた…そう言えばどこ

の世界に行くのか聞いてなかった

俺「うわああああ」

その後俺は無事転生した

神からはファントムを倒れるのは指輪を使う魔法使いだけのよう
だ

ん？指輪の魔法使いどこかで聞いたことが…まあいいか

母「美晴、起きなさい」

美晴「はい」

俺の名前は氷海美晴

どうやら、転生しても名前は同じみたいだ

俺は今高校2年生という設定らしい

母「美晴も今日から高校2年生ね」

美晴「そうだね」

俺はそう言ったが母は少し嬉しいような顔で言った

母「美晴、音ノ木坂学院って知ってる？」

美晴「ふえ？知ってるよ、女子高なんですよ」

母「実は音ノ木坂学院の理事長があなたを試験生として入れたらしいの」

美晴「フア!?なんで女子高の理事長が俺を」

母「実は理事長とは幼馴染なんだよ」

美晴「ああ、なるほどってなるかあ！」

母「ごめんなさいね、あつ登校は明後日からね」

そう言っ母は仕事に向かった

美晴「いつてらっしやい」

母「ええ、行ってくるわ」

片付けをしているとアタッシュケースに目が入った。開けると手の形をしたベルトと赤の指輪が入っていた

美晴「これが…指輪の魔法使い」

素晴らしい俺はベルトを腰に付けるそして神様からの手紙があった

何故だろう？俺は何となく使い方を知っている……そして、ファントムの名前も

「このアタッシュケースの中にはフアントムと戦う唯一無二の存在のものだ。丸い指輪右手に付けるのじゃ 白いサングラスのような指輪は左手に付けるのじゃ」

という手紙だった

美晴「なるほどね」

☒ ガルーダ ・ プリーズ ☒

そうやって紅い鳥の指輪をかざした

レッドガルーダ 赤い鳥のプラモモンスター魔力がある限り行動できるが切れると指輪に戻ってしまう

美晴「よろしくガルーダ、早速この辺りにフアントムが居ないか見てきてくれ」

そうやって指示を出すとガルーダはコクコクと頷き、見回りに行っ

た
? 視点

部活が終わり、家に向かい帰宅していると

「海末ちゃん」

幼馴染の2人が声をかけやってきた

海末「どうしたんですか? 穂乃果、ことり」

穂乃果「いや、海末ちゃん忘れ物してるって部活の先輩が言ってたから届けに来たの」

海末「そうだったですか!? すみません」

ことり「2人ともあれ見て」

ことりがそう言ったのでそこに視線をやると

フアントム「さあ、狩りを始めようか」

穂乃果「何…あれ」

フアントム「ん? おっゲート見つけ」

そう言い牛の化け物が私たちに剣を向けた

穂乃果「あわわわ」

ことり「穂乃果ちゃんしっかりして」

もうダメと思ったら

バァーン

銃声が鳴り、弾が怪物の角に当たり苦しんでいる
ファントム「なんだ？」

私達も視線を銃声の方に向けると私達と同年ぐらいの男の人が
いた

美晴視点

どんな指輪があるかを実験しているとガルーダが帰ってきた

美晴「ファントムか？」

そう聞くとガルーダはコクコクと頷く

美晴「よし案内してくれ」

☒ コネクト・プリーズ ☒

俺はコネクトリングでバイクを取りだし、ガルーダの誘導について
行ってる

美晴「あれか」

ファントムらしきものが女子高校生3人を襲っている

美晴「こっからいつでも間に合わないなら」

☒コネクト・プリーズ☒

俺は銀の銃を取りだし、牛のファントムに向かって打ち出した
バアーン

見事にファントムの角に命中した

ファントム「なんだ？誰だ？」

美晴「俺さ」

ファントム「何者だ！」

美晴「俺は希望を守る魔法使いだ、隠れてな」

は、はいと女子高校生3人は隠れた

美晴「さあこっからは俺が相手だ」

☒ ドライバーオン・プリーズ ☒

ベルトに指の絵柄の指輪をかざしたらベルトが出てきて、シフトレ
バーを1回上下に動かした

☒ シャバドウビタッチヘンシー・シャバドウビタッチヘンシーン

☒ 陽気の音楽と音声の流れ、俺はフレームウイザードリングを左手に

着けてそして

美晴「変身」

と言い左手に付けた指輪のサングラスを下に下げて、ベルトにかざした

☒ フレイム・プリーズ ヒーヒー、ヒーヒーヒー☒

そして俺は仮面ライダーウィザードに変身した

ウィザード「さあ、ショータイムだ」

ファントム「出やがれ、グール共」

ファントムは魔法石を地面に投げるとグールがでてきた

ウィザード「邪魔すんなってーの」

俺はそう言い銀の銃、ウィザードソードガン☒ 剣モード☒に切り

替えた

ウィザード「はっ、うらア」

だが、余り剣を使わず、回し蹴りなどをしている

海末・穂乃果・ことり「「綺麗」」

3人はウィザードの蹴り技にみとれていた

ウィザード「ファイナーだ」

☒ キヤモン・スラツシユシエイクハンド☒

☒ フレイム・スラツシユストライク☒

☒ ヒーヒーヒー・ヒーヒーヒー☒

ウィザード「だア」

俺がグールを一掃するとファントムの姿は無かった

ウィザード「ありや？逃がしちやったか」

そう言い、俺は変身を解除した

穂乃果「凄い！」

美晴「ええ〜？すごいって何が？」

海末「何がって蹴り技もそうですけど」

ことり「何より魔法！」

ああ〜そうかこの世界に元々ウィザードやファントムはいなかった

たからか納得

美晴「自己紹介がまだだね俺は氷海美晴、気軽に美晴で呼んでくれ」

穂乃果「私は高坂穂乃果だよ。私も穂乃果でいいよよろしくね美晴くん」

海末「園田海未です私も気軽に海未と呼んでください。美晴さん」
ことり「南ことりだよ。私もことりでいいよ。よろしくね美晴くん」

第2話音ノ木坂学院とゲート

その後、穂乃果達と別れた俺が魔法使いであることも内緒にしてな
そして転入日

美晴「ついに来てしまったかこの日か」

俺は音ノ木坂学院の前でそんなことを呟いていると校門から金髪の女の人が出てきた

「君が氷海美晴君？」

美晴「は、はいあのくあなたは？」

絵里「私の名前は絢瀬絵里よろしくね」

美晴「よろしくお願ひします絵里さん」

絵里「早速だけどついて来て」

そう言われたので俺は絵里さんの後を歩いていく

く理事長室前く

絵里「じゃあ私はここで」

美晴「はい、ありがとうございます」

俺は絵里さんにお礼を言い、理事長室の扉をノックした

コンコン

「どうぞぞ」

扉の奥から声が聞こえたので俺は中に入った

美晴「失礼します、今日から試験生としてこの学校に転入した氷海美晴です」

「ごめんなさいね急に私の名前は南いずみよろしくね」

南？ことりと同じ苗字だ…まあ世界は広いし同じ苗字がいて不思議じゃないな

いずみ「美晴くんはこの学校の状況を理解してる？」

美晴「いえ、何も」

いずみ「そう、実はね今年から生徒募集やめて廃校にすることにしたの」

うえっ!?!廃校!?!

美晴「廃校…ですか」

いずみ「ええだけど今この学校のスクールアイドルって言うのが頑張ってるの」

スクールアイドル？ああ昨日穂乃果達が言ってたやつか
コンコン「失礼します」

扉からノック音が聞こえたので俺は扉に視線を送った

いずみ「あら、栗原先生」

栗原「理事長、試験生は来ていますか？」

いずみ「ええ、彼よ」

美晴「は、初めまして氷海美晴です」

栗原「君のクラスの担任の栗原だヨロシク」

そう挨拶を済ませると栗原先生の頭に疑問を思った

美晴「先生、頭どうしたんですか？」

栗原「ああ、階段から落ちてしまったてね見ての通りだ」

栗原「よし、教室に行くぞ」

そう言われ、俺は理事長室を後にした

教室前へ

うるさい、…まあ女子高に男が来るのだから騒ぐか

栗原「よし、氷海入ってこい」

栗原先生に呼ばれたから教室に入る：待ってめっちゃ緊張する

美晴「初めまして氷海美晴です今日からよろしくお願いします」

栗原「よしじゃあ質問ある人は手をあげろ」

かなりの人数が手を上げる

栗原「よし、じゃあ美空」

「特技はなんですか？」

美晴「特技は料理とバイオリンです」

そう答えたら見覚えあるやつが手を挙げた

栗原「よし高坂」

穂乃果「バイオリンはどんな種類の曲を弾くんですか」

美晴「まあ色々ですかね」

栗原「氷海の席は園田の隣だ、園田手をあげろ」

海末「はい」

栗原「あいつの隣だ」

海末もいるのか…ん？穂乃果の隣はことり!?

全員いるのか

〜昼休み〜

穂乃果「美晴くん一緒にお昼食べよ」

美晴「ん？いいよ別に」

穂乃果「じゃあ部室にレッツゴー」

部室？何か部活やってたのか？

〜アイドル研究部 部室前〜

美晴「アイドル研究部って何をするんだよ」

そう小声で言ってる

穂乃果「入ってきていいよ」

美晴「失礼します」

「高坂先輩、この人が試験生の人かにや？」

穂乃果「うん、そうだよ」

美晴「まさか海末までいるとは」

海末「まあ誘われたから来たんですけどね」

ことり「でもでも海末ちゃんはスクールアイドルなんだからここを

使っていいに決まってるでしょ」

……えっ?!スクールアイドルってこいつらの事!?

美晴「あっそうだ自己紹介がまだだったね俺は氷海美晴ですよろし

くお願いします」

花陽「小泉…花陽ですよろしく…お願いします」

凜「星空凜ですよろしくお願いします」

真姫「西木野真姫よ、よろしくね」

にこ「この部活の部長矢澤にこよ」

えつなにスクールアイドルって部なの!?

凜「先輩立ってないで早く食べるにや」

にや…ふふ可愛い語尾だな

そう凜に言われ、腕を引っ張られたが心の中で語尾が可愛いと思っていた

花陽「凜ちゃん無理矢理先輩を引張ちゃダメだよ」

美晴「俺は大丈夫だよ小泉さん」

花陽「／／／／／」

俺が苗字読みすると小泉さんの顔が赤くなった…何でだろう

花陽「あの…先輩」

美晴「どうしたの？」

花陽「花陽って…呼んでください」

美晴「ああいいよ花陽さん」

ことり「なんかあそこだけ雰囲気良さげじゃない」

海末「そうですね、それにしても驚きました花陽が自分から名前呼びを要求するなんて」

穂乃果「美晴くんイケメンだからねえー呼んで欲しいって思ったんじゃないの？」

キンコンカンコーン

「ただいま緊急事態発生生徒は今すぐに帰宅するように、繰り返します緊急事態発生生徒は今すぐに帰宅するように」

アナウンスが流れた

全員「ええー！ー！？」

にこ「と、とりあえず、帰りましょ」

美晴「そうですね」

く帰宅中く

穂乃果「にしてもビックリしたね」

海末「はい、急に緊急事態が起きましたからね」

ピロロロロロロロロロロ

海末「すみません、もしもし、はい…はいえっ!?!それは本当ですか

!?!はい行きます」

ことり「どうしたの？海末ちゃん」

海末「お父様とお母様がフロントムに殺されたって」

美晴「何!?!」

つまり、ゲートは海末だったのか

栗原「お前達何してる？」

美晴「栗原先生…」

海末「先生大変なんです、お父様とお母様が」

栗原「知っているなんてっただって、俺が殺したからな」

先生がそう言うのと栗原先生の姿がああ時のフアントムの姿になっ
た

海末・穂乃・こと「!？」

美晴「やっぱりお前だったか」

フアントム「指輪の魔法使いには気づかれていたか」

美晴「当然さ、あの時お前は階段から落ちて頭を怪我したんじやない、俺の打った銃弾が角に当たった時の傷だったんだろ、穂乃果ことり、海末を連れて隠れてろ」

☒ ドライバーオン・プリーズ ☒

ベルトが現れ、俺はシフトレバーを上下に動かす

美晴「許さない、人の家族の命を奪ったお前を！」

☒ シャバドウビタッチヘンシーン・シャバドウビタッチヘンシーン
☒

陽気な音楽と音声が流れ始めた

美晴「変身！」

ああ時は違う、怒鳴った声で叫び、ウイザードリングの白いサンダラスを下に下げてベルトにかざした

☒ フレイム・プリーズ ☒

☒ ヒーヒー、ヒーヒーヒー！ ☒

俺の左から魔法陣が現れ俺が通過するとウイザードに変身した
ウイザード「さあ、ショータイムだ」

ウイザードソードガンを持ちながらウイザードはフアントムと
グールの群れに走ってた

ウイザード「はっ、ういやあ、数が多いなあだっただらこれで」

☒ コピー・プリーズ ☒

穂乃果・ことり「ええー！美晴くんが4人!？」

ウイザード「うらあ、少し止まってる」

☒ バインド・プリーズ ☒

魔法陣がグールの下に出てきて、鎖でグール達を縛った
ウィザード2「俺も一緒に行くぜ」

☒ キャモン・スラツシユ・シャイクハンド☒

 キャモン・シューティング・シェイクハンド☒

☒ フレイム・スラツシユストライク☒

☒ フレイム・シューティングストライク☒

☒ ヒーヒーヒー、ヒーヒーヒー☒

ウィザード1、2「だアーーーー」

グール達は爆散した

☒ ビック・プリーズ☒

ウィザード3「道が開いた、今のうちにファントムを」

ウィザード4「分かった、ありがとう」

ファントム「うらあーーーー」

ウィザード4「のあ!?!」

ファントムの体当たりによりウィザードはたまたまらず吹っ飛んで、止まっ
てるトラックにぶつかつた

シユン、シユン、シユン

ウィザードの分身がウィザード1人に戻つた

ファントムはもう一度突進をする構えをする

ウィザード「同じ鉄は2度も踏まない」

☒ デイフェンド・プリーズ☒

ファントム「うらあーーーー、な、何!?!」

ファントムが突進して来たタイミングで壁が出てきて、ファントム
は壁に挟まってしまった

ウィザード「どうした、どうした」

 と言ひ、挟まってしまったファントムを上蹴り飛ばした

ウィザード「こんながあるんだぜ?」

☒ ハリケーン・プリーズ☒

☒ フー、フー、フーフーフー!☒

ファントム「!?! 貴様エレメント変化できるのか」

ウィザード「まあな」

と言いウィザードは空を飛び、空中にいるファントムを斬りまくっている

☒ シャバドウビタッチヘンシーン ☒

☒ フレイム・プリーズ ☒

☒ ヒーヒー、ヒーヒーヒー ☒

ウィザード「さあ、ファイナーレだ」

☒ キツクストライク・サイコー ☒

音声が流れた瞬間ウィザードの右足に炎が集まっている

ウィザード「はぁー、だぁー」

ファントム「うわぁーぐっだがゲートはもう絶望するぐわぁー」

ファントムはそう言い残し爆散した

ウィザード「海末！」

穂乃果「美晴くん、大変海末ちゃんが」

海末「お父様、お母様うううう」

ウィザード「絶望するな！両親が殺されたならお2人のためにも長く生きようぜ、なっ？」

そう言いウィザードは海末の右手にエンゲージリングを取り付けた

ウィザード「約束する、俺が最後の希望だ」

☒ エンゲージ・プリーズ ☒

〜園田海未アンダーワールド〜

ウィザード「ここが海末のアンダーワールドか」

幼い海未とお父さんとお母さんが仲良く出かけてる背景の所にヒビがはいり、巨大翼竜ファントムジャバウオックが現れた

ウィザード「約束したからな、絶対助けてやる」

☒ ドラゴン・ライーズ ☒

ドラゴン「ぐわああ」

ウィザードのファントム、ウィザードドラゴンはジャバウオックに攻撃したがウィザードにも攻撃して来た

ウィザード「痛って、ドラゴン俺に従え」

☒ コネクト・プリーズ ☒

ウイザードはマシンウインガーでドラゴンを追いかけて、ドラゴンの背中に乗る

ウイザード「行くぞっはあ」

激しい弾幕バトルが繰り広げられている

ウイザード「あともう少しだからな、海末」

☒ キャモン・スラッシュ・シェイクハンド ☒

☒ フレイム・スラッシュ・ストライク ☒

ウイザードはジャバウオツクのとこに入り、ジャバウオツクを真つ二つにした

ドラゴン「グオオオ」

ドラゴンも勝利の雄叫びを上げている

穂乃果ことり「美晴くん」

美晴「安心しろ、これでもう海末はゲートじゃない」

穂乃果ことり「よかった」

美晴「海末を家に上がらせよう」

穂乃果「なら、私の家に」

美晴「案内してくれ」

→ 穂乃果の家

海末「ここは？」

美晴「気がついたか、ここは穂乃果の家だ」

海末「ですけど私は……」

海末は何かを疑問に思っていると自分の右手についてるエンゲージリングに目をやる

海末「美晴さんこれは？」

美晴「お前の新しい希望だ……海末提案があるんだかいいか」

海末「はい、いいですよ」

美晴「穂乃果達と話した結果、お前は誰かの家に住むことになったんだが」

海末「……どうしてですか？」

美晴「お前はファントムの手によって親を殺された、今家に行っても寂しいだけだろ？」

海末「ですが、一体誰の家にな？」

「美晴くんの家だよ♪」

海末「ことり!？」

ことり「美晴くん、海末ちゃんの準備終わったよ」

美晴「OK、という訳だ海末これからよろしくな」

海末「あまり整理が追いつきませんがわかりました、これからよろしくお願ひします」

次回仮面ライダーウィザード

「ラブライブ開催です!」

「ラブライブって何?」

「条件があるわ」

「申し訳ございません」

次回第3話絶望?のテスト

第3話絶望？のテスト

コンコン

美晴「海末く起きてる？」

海末「はい、起きてます少し待ってて下さい」

美晴「はいよー」

そう返事をし、俺はリビングで朝食を作っている

海末「お待たせしましたさあ、食べましょ？」

美晴「おっと、その前に」

☒ ガルーダ・ユニコーン・クラークン・プリーズ

☒

美晴「ファントムが居ないか見回りしてきてくれ」

海末「いいのですか？昨日私のせいで魔力を沢山使用したのでは？」

美晴「寝たから大丈夫だし、海末のせいじゃないよ」

海末・美晴「いただきます」

海末「美味しいですね」

美晴「そう？ありがとう」

俺達が朝食を食べていると扉からゴーレムが帰ってきた

美晴「おっおっつかれゴーレム」

そうお礼をし、ゴーレムは新しい指輪を美晴に渡した

海末「新しい指輪？それと彼も使い魔なのですか？」

美晴「ああ、バイオレットゴーレムって言う使い魔でとあるお店が指輪を作ってくれていてね、ゴーレムがそれを取りに行ってくれたんだ」

そう海末に説明し、俺は新しい指輪を見た

海末「どんな魔法なのでしょうか？」

美晴「うくん見た感じ眠そうな見た目してるから相手を眠らす魔法かな」

海末「試すのですか？」

美晴「ああ、だけど海末です実験する訳にも行かないからな、アイ

ツで実験してみるか」

海末「？」

海末・美晴「ごちそうさま」

美晴「さあ、神田明神に行くんだろ？」

海末「そうですね、行きましよう」

あその後、俺は穂乃果に穂乃果達がやっているスクールアイドル、μsのマネージャーになるよう頼まれたから、引き受けたのだ

く神田明神く

凜「あつおーい美晴先輩、海末先輩！」

俺達が神田明神に着くと1年組が来ていた

美晴「おはよう、早いね」

真姫「まあ、遅刻はしないからね」

海末「穂乃果とことりはいないのでですか？」

花陽「お2人でしたら、あつちに…」

ことり「穂乃果ちゃん、もっと行くよ♪」

穂乃果「ま、待って!?!ことりちゃん私体がていテテテテテ」

ことり「あつごめん♪」

美晴「何してんの?あいつら」

凜「柔軟するって言ったけど」

花陽「だけど、穂乃果先輩体硬いからそれでことり先輩が手伝うってことになって」

海末「それが今の現状ですか」

真姫「でも、無理矢理したら体を変な風に痛める辞めさしたほうがいいんだけどね」

うくん確かに体を柔らかくするのはいいけど、無理矢理したら真姫の言う通り体を痛めるから止めさせるか

海末「そういえば、矢澤さんは？」

凜「にこ先輩は、現在委員会の仕事してるにや」

美晴「へえーあの何委員なの？」

花陽・凜・真姫「さあー？」

穂乃果「痛い、いたい」

美晴「ことりいい加減止めたらどうだ？」

ことり「体が固い穂乃果ちゃんがいけないんだよ」

うーんと俺達が悩んでいる時に

「キヤーキヤーキヤー」

全員「!？」

まさか、フアントム!?でも使い魔が来ない？

と思つてたらガルーダがやってきた

美晴「フアントムか」小声

コクコクと頷くガルーダ

美晴は海未と穂乃果とことり視線を合わせると理解したのかうなづく

美晴「悪い、俺ちよつと今日日直だったわ」

海未「そ、そうでしたね、早く言つてきてください」

美晴「悪い、じゃ」

音ノ木坂学院通り道

グール「ぐおー」

希「なんやん!?こいつら」

絵里「早く行きましょう」

???「悪いですが、あなた達には、絶望して頂きます」

絵里「誰!？」

???「私の名前はー」

バアーン

???「、グハア」

絵里視点

怪物が私達に名乗ろうとした瞬間怪物はなにかに撃たれたような感じで、吹き飛ばされ私たちは弾が来た方向を見ると顔が赤くて、綺麗な色をしていたまるで宝石のようにそして手には銀の銃が

???「あなたですか、ウイザード」

ウイザード「お前か☒ヘルハウンド☒」

ヘルハウンド……恐らくこの怪物の名前だろそれに彼はウイザードと怪物に言われていた

そして、ウィザードは銀の銃を剣に変えて
ウィザード「さあ、シヨータムだ」

美晴視点

ヘルハウンド「悪いですが、今日はあなたとやるために来たのではないので、それでは」

ウィザード「っ!? 待て!」

追いかけてしようとしたがグール達が邪魔する

ウィザード「邪魔するな」

ウィザード「はっ、ふっ、やっ、仕方ない一気に行くか」

☒ シャバドウビタツチヘンシーン・シャバドウビタツチヘンシーン

☒

☒ ウォーター・プリーズ☒

☒ スイー!、スイー!、スイー!、スイー!、スイー!☒

☒ キャモン・スラツシュ・シエイクハンド☒

☒ ウォーター・スラツシュストライク☒

☒ スイ、スイ、スイ☒

ウィザード「オラアア」

ウィザードは回転して、周りのグール全員を斬り、そして爆散した
ウィザード「ふいー」

絵里「あの、あなたは?」

ウィザード「ん? 俺はウィザード お節介な魔法使いさ」

希「ま、魔法使い!」

絵里・希「は、ハラシヨ…」

ウィザード「んじや」

☒ テレポルト・プリーズ☒

そう言いウィザードはその場から消えた

く昼休みく

美晴「悪い、遅れた」

にこ「大丈夫よ」

穂乃果「よし、美晴くんも来たことだし、いただきまー」

花陽「た、助けて!」

食べようとした瞬間、扉が思いっきり開き花陽さんが出てきた。た、助けて？

穂乃果「たすけて？」

花陽「あつ間違えた、じゃなくて大変ですうー」
ドンツ

花陽は自分が持つてるPCを机に置き、スクールアイドル公式ページを開いた

花陽「ラブライブ！開催ですう！」

ラブライブ？

穂乃果「ラブライブ!?って何？」

ズコー

穂乃果の発言に全員ずっこけた

花陽「スクールアイドルの甲子園。それがラブライブ！です。全スクールアイドルの中でランキングで上位20組までがライブに出場できるんです。

その20組の中からナンバーワンを決めるんです。

噂には聞いていたけど、今日来るなんてえ…」

海末「まあ、スクールアイドルは全国的に人気ですからね」

凜「絶対盛り上がるニヤン」

花陽「現トップアイドルであるA—RISEは当然出場として、2位、3位は…ま、正に夢にまで見たイベント…チケット販売は何時でしょう!?!、初日特典は…」

真姫「また始まった…」

美晴「え?どゆこと花陽さん人変わりすぎじゃない!?!」

穂乃果「うん、実はね花陽ちゃんアイドル好きでアイドル関係になると」

凜「凜は、こっちのかよちんも好きにや」

穂乃果「花陽ちゃん、見に行く気なの？」

花陽「当たり前です!、これはアイドル史に残る一大イベントです

…見逃せません」

なんだろう、うん凄いつてことは伝わった

穂乃果「なーんだ、私てつきり出場目指して頑張ろうって言うのか
と思っただー」

花陽「ええええええ!? 私達が出場なんて恐れお多いですう」

穂乃果「ええー? だってほら穂乃果達の順位上がってるよ」

どれどれ……ファツ!?

美晴「…海末前までの順位は?」

海末「はい、確か100位だった気がします」

美晴「……で今の順位は?」

海末「……は、80位……」

全員「上がってるー!?!」

いやお前らもきずいてなかったのか、それと穂乃果なぜお前まで驚
いている

→理事長室前へ

あの後、結局出場するってなったが出場するには学校側の許可が必
要らしい

真姫「…どう見ても結果見えてるわね」

部の申請は生徒会に通る決まりらしいが理事長に許可を取っては
ダメというルールはないので、理事長室に来たわけだが……

穂乃果「あの人がO☒? K☒? 出すとはお前ないね」

美晴「まあまあ、行くぞ」

俺がノックしようとした瞬間ドアが開いて、俺は変な声が出てし
まった

美晴「へ?」

絵里「美晴くん? そして……あなた達、部の申請は生徒会に通す決
まりでは?」

真姫「ま、まだ申請とは一言も言ってないは!」

美晴「真姫さん落ち着いて、絵里さんは上級生だよ」

真姫「ぐっ!」

理事長「……美晴くん?」

美晴「理事長!」

理事長「何してるのとりあえず中に入って」

とりあえず、中に入る事になったが人数が多いから1年は待機と言
うことになった

理事長「…ラブライブねえ」

穂乃果「はい、出場すれば、廃校を阻止できるかもです」

絵里「……まさか美晴くんまで手を貸しているとはねえ」

事情を話していると絵里さんに失望された様に言われた

美晴「助けて欲しい人を見逃せないのは僕の悪いくせですから」

理事長「んー、エントリーするくらいならいいかしら」

絵里「私は反対です、こんな希望のない事をやるより生徒会の活動
を」

理事長「それは無理ね」

絵里「意味がわかりません」

そう言い絵里さんは理事長室を出っていた、それは当然だラブライ
ブがOKで生徒会の活動がダメなのはよく分からも

理事長「だけど、条件があるわ」

美晴「条件？」

理事長「ええー、次のテストで1人でも赤点がいればラブライブの
出場は認められません」

ことり「赤点か…それなら大丈夫だよー…ね」

ことりがそう言い俺たちの方を向いたが2人そして、扉越しから絶
望の声が聞こえた

く 部室

穂乃果「申し訳ございません」

凛「ません」

美晴「……海末、真姫2人の成績は？」

海末「穂乃果はお世辞でもテストの点がいいとは言えません」

真姫「凛もね」

穂乃果「ほら、私は数学だけだから」

凛「凛は、英語だけにや、あれだけはどーしても肌に合わなくて」

英語か…俺も好きではないな

凛「何で日本人が英語を覚えなきゃいけないにや!？」

真姫「屁理屈はいいの」

にこ「そ、そうよあんた達勉強が出来ないなんてだらしないわよ」

花陽「にこさん、教科書逆です」

おい、あんたもかよ

海末「穂乃果は私とことりが教えます」

真姫「じゃあ凜は私と花陽ね」

美晴「じゃあおれは2人とも見るよ」

凜「えっ!?先輩そんなに頭いいのかにゃ」

ことり「そうだよ♪美晴くんテストいつも1位なんだよ」

美晴「だけどにこさんはどうするの?」

???「にこっちはうちがやるよ」

美晴「副会長…」

副会長…東條希さんだ

にこ「いい、いいわよにこは勉強できるし　　ひっ」

まてまてまて希さんその手の形はなんだ!?

希「正直に言わないとワシワシMAXやで?」

にこ「……………はい、教えてください」

次回仮面ライダーウィザード

「もうーわかんない」

「ハァーハッハッハッハッハッハッハッハ!!」

「パレード!」

「心が踊るなあ」

次回第4話再開のゲーム

第4話再開のゲーム

穂乃果「もうーわかんない」

海末「文句言ってるしないで、早くやって下さい」

穂乃果「海末ちゃん、美晴くん教えてよー」

海末「ダメでs」

美晴「いいよ」

穂乃果「やったー!」

海末「美晴!」

美晴「流石にわかんないのに、やらせても内容が頭に入らないからね、やり方を教えるくらいいいじゃん」

海末「……………そうですね、わかりました」

凜「美晴先輩凜にも教えてほしいにやー」

花陽「凜ちゃんダメだよ」

美晴「大丈夫大丈夫何処が分からないの?」

凜「えつとー、ここにや」

美晴「えつとね、そこは」

真姫「美晴って少し甘いんじゃないかしら?」

海末「真姫も思いますか」

ことり「まあ、いいじゃない?」

『Stage select』

全員「!」

にこ「ええー、どこよここ!」

美晴「…やはり来たか」

海末「美晴?」

美晴「……………伏せろ!」

美晴が声を掛けると奥から弾幕が打たれてきた

黒いライダー「……………」

美晴「お前は誰だ?」

黒いライダー「……………ふっ」

謎の黒いライダーが手をあげるとファントムやバグスターが現れ

た

凜「にやにや!?何こいつら」

真姫「ちよつと美晴何よこれ」

花陽「……美晴さん？」

美晴「……」

美晴は何かを待つかのように黙る

穂乃果「美晴くん？」

ことり「どうしちゃったの?急に」

その時、ファントムやバグスターの集団の奥からバイクで1人の青年がやってくる

「久しぶりだな美晴」

美晴「…遅いぞ、『パラド』さつさと終わらせるぞ」

パラド「ああ!」

☒ドライバーオン・プリーズ☒

『パーフェクト・パズル』

俺はドライバーのシフトレバーを上下に動かし、パラドはギアデュアルガシヤットを取り出し下に回転させる

☒シャバドウビタッチヘンシーン・シャバドウビタッチヘンシーン

☒

『What's the next stage?』

美晴・パラド「変身!」

☒フレイム・プリーズ☒

☒ヒーヒー、ヒーヒー☒

『get the glory in the chain PERFECT PAZZLE』

μ's「ええええー!?!」

海末「美晴は分かりますが、そちらの方は?」

花陽「美晴さん?」

にこ「あんた達知ってるの?美晴のあの姿」

2年組「はい」

真姫「後で教えてね」

ウィザード「さあ、シヨータムだ」

パラドックス「俺の心を滾らせるなよ」

俺とパラドは変身して、フアントムとバグスターの群れに走っていった
ウィザード「はあー、ふっ、オラア」

ヘルハウンド「お久しぶりですね、ウィザード」

ウィザード「お前、あの黒いライダーと手を結んでいたのだった」

ヘルハウンド「ええ、この世界を絶望させるにはねっ！」

ウィザード「はっ、グツ数が多いな」

パラド側へ

パラドックス「倒しても、倒しても切りがない 心が踊るなあ！」

黒いライダー「はあー！」

パラドックス「なっ!?!ゲナム！なんでお前がここに！」

ゲナム「私はお前を削除する」

パラドックス「されるかっちゅうの」

『キメワザ・PEFFECTクリティカルCONBMO』

パラドは腰からギアデュアルガシャットを取りだし、1周させて、右足に力を込める。そして回し蹴りをし、周りにいたバグスターが爆散した

パラドックス「あとは、お前だけだ！」

ウィザード側へ

☒コピー・プリーズ☒

☒キャモン・スラッシュ・シエイクハンド☒

☒フレイム・スラッシュストライク☒

ウィザード1234「だアアア」

ウィザードは4人に分身し、周りにいたグルを一掃し、ヘルハウンドの元に走っていった

ウィザード「はあ！」

ヘルハウンド「無駄ですよ、あなたの魔法は私には聞かない」

ウィザード「なら、同時攻撃だ！」

ヘルハウンド「何!?!」

☒キックストライク・サイコー☒

ウィザード1234「だアーー」

ヘルハウンド「そんな、なぜお前ごと…きー!」

ヘルハウンドはウィザード4人のキックストライクウィザードを
くらい、爆散した

シユン、シユン、シユン

ウィザードは1人に戻った

ウィザード「パラド!」

パラドックス「美晴!」

ゲムム「…ウィザード君の魔法の力…回収する」

ウィザード「パラド、あいつ誰だ?」

パラドックス「あいつは不死身のライダー、

仮面ライダーゲムム」

ウィザード「不死身!?!じゃあどうすれば」

パラドックス「不死身でも同時攻撃なら防げないだろ」

『キメワザ・PEFFECTクリティカルCONBMO』

ウィザード「不死身だから、意味ないと思うけど」

☒キックストライク・サイコー☒

ウィザード「パラド「はぁーーー!」

ゲムム「ぐはっ!」

G A M E O B A E R

ウィザード「消えた!?!」

パラドックス「違う、足元くるぞ」

ゲムム「はっはっはー!私こそ神だア!」

ウィザード「海未たち俺の近くにいろよ」

全員「は、はい」

☒テレポート・プリーズ☒

ゲムム「…逃がしたか」

く部室く

パラド「へえーここが部室ねえー」

ゲムムから逃げたあと、パラドに今の俺がスクールアイドルのマ
ネージャーであることを伝えるとどうやらパラドも試験生として明

日転入するらしい

凜「そんな事より！」 バアン

美晴「な、何」

真姫「何じゃないわよ！あれはなんなの!？」

海末「美晴、そろそろ説明した方が」

美晴「……………だな」

く説明中ナウく

にこ「……………よくあんたそんな事してるのに、マネージャー引き受けたわね」

美晴「まあ、いいじゃん」

パラド「……………あつそうだ美晴、ほい」

パラドは思い出したかのように、俺に指輪を投げてきた

美晴「やつと出来たか」

パラド「ああ！心が踊るな！」

次回仮面ライダーウィザード

「試験生として、きたパラドです」

「遅いよー」

「誰だお前は」

「ここがμ, sの世界か」

次回第5話通りすがりの仮面ライダー

第5話通りすがりの仮面ライダー

あの戦いが終わった、簡単に俺の事やパラドの事を教えた
〜翌日〜

海末「美晴、起きてください」

美晴「ううくん、おはようー」

海末「おはようございます、今日は私が作りましたから食べてください」

美晴「はい」

俺は海末に起こされ、リビングに向かう。

俺って朝弱かったっけ？

海末・美晴『ごちそうさま』

美晴「んじゃ、行くか」

海末「はい!…キヤツ!」

美晴「海末!」キヤツチ

海末「す、すみません:!?」

何が起きてるかと言うと美晴が海末をお姫様抱っこしているからだ

海末「み、美晴降ろしてください!男の人が女の人をお姫様抱っこするなんて破廉恥です」カァー

美晴「わ、悪かったて」アセアセ

海末「いっいきますよ!」

美晴（全くそう言っただけで転んだのは何処のどいつだよ）

ことり「海末ちゃん、美晴くん!」

海末「おはようございます、ことり」

ことり「おはよう、二人共」

美晴「そういや、今日パラドが音ノ木坂に来る日だったな」

ことり「そうだね、お母さんも言ってたし」

海末「今思ったんですけど、パラドさんって苗字あるんですか?」

美晴「……………あっ」

ことり「……………どうなの?美晴くん」

美晴「え〜つと」

☒テレポルト・プリーズ☒

海末「逃げるのですか!？」

美晴「ごめんな!」

ことり「海末ちゃん、走ってあの魔法陣の中入ろう!」

海末「そうですね」

ことりと海末は全力疾走で美晴の魔法陣に飛び込んだ

〜音ノ木坂学院前〜

美晴「ふうー、すまんな二人とも」

ガシ

美晴「?」

海末「美〜晴?」

美晴「oh my」

ことり「美晴くん?放課後ことりのおやつね」

海末「いいですね」キラキラ

美晴「……………終わった」

〜教室〜

穂乃果「遅いよ、3人共!」

教室のドアを開けると既に来ていた穂乃果が話しかける。

ことり・海末・美晴「……………」

穂乃果「??」

ことり「穂乃果ちゃんが……………」

海末「寝坊しないで……………」

美晴「学校に……………」

ことり・海末・美晴「来た……………」

穂乃果「ちよつとどう言う意味!私だって頑張れば寝坊しないよ」
プリン

海末「!そうですか、穂乃果は早く勉強したくて仕方がないんです
ね」キラキラ

穂乃果「えっいや違」

海末「では、やる気のある穂乃果に敬意を示して、全力でいきます」

こと・美晴（教えるのに、全力つてあるの?）

海末はやる気満々、穂乃果は予想外のことで焦っている。ことりと美晴はそんな事を思いつつ、席に着いた

時は変わってホームルーム

先生「今日から新しい生徒が来ます」

美晴（新しい生徒……ああ、パラドの事か）

先生「氷海君、入ってきて」

美晴「……………えっ!？」

ガラガラ

パラド「初めまして、今日から試験生として転入する氷海パラドです、よろしく」

先生「じゃあ、氷海君に質問ある人」

そう聞くと海末が真っ先に手を挙げた

先生「おっ早いね、園田さん」

海末「あの一、美晴とはどういった関係でしょうか?」

パラド「ああ、彼とは双子だよ」

美晴「!？」

パラドが変な事を言うと、美晴は飲んでいたお茶を喉に浸かつさえさせた

海末「ふっ双子!？」

「確かに…、ちょっと美晴さんと顔似てるしね、イケメンな所とか似てない」ヒソヒソ

というヒソヒソ声が聞こえた

先生「じゃあ、氷海君の席は高坂さんの後ろね」

テクテク

先生「じゃあこれでホームルームを終わりにします」

く昼休み、部室く

美晴「パラド!どう言うつもりだ!」

俺は、昼休みになって、部室で皆でご飯食べようと穂乃果が言ってきたので、ついでにパラドに問い詰めていた

パラド「いいじゃないか、心が踊るだろ?」

美晴「踊らねえーよ！脈が止まるかと思ったぞ！」

希「美晴くん何怒ってるの？」

何も知らない希やにこ、1年組が穂乃果たちに質問している

穂乃果「実はね、パラド君美晴くんと双子だったんだって」

希・にこ・花・凜・真「ええー！？」

凜「でも、だとしたら美晴先輩は何であそこまで怒ってるにや？」

ことり「それがわかんないだよね、多分双子であることをばらされたからじゃないかな…あっそうだ皆美晴くんが放課後々sのおやつになったからね♪」

美・パ・海・希除く全員「!?ほんと!？」

ことり「うん♪」

美晴「もういいや」

パラド「いいだろ、ここでは双子の設定で」ヒソヒソ

美晴「……今回だけだぞ」

また時は流れ、放課後

く部室く

ことり「美晴くん、出てきて♪」

ガチャ

全員「おおく」

そこに、現れたのはメイド姿の美晴だった

美晴「……もうヤダ、帰りたい」

ことり「今日は、そのまま勉強教えてもらおうからね♪」

美晴「ダニイ!？」

穂乃果・凜「やったく!!!」

美晴「コノヤロー、覚えとけよことり」

ことり「うん、覚えてたらね♪」

キヤーーーーー

全員「!？」

美晴「パラド行くぞ！皆はここに残ってて」

パラド「うごんじゃねーぞ？」

く外

??? 「ここがμsの世界か……」

俺とパラドが外に出ると、謎の壁から1人の青年が出てきた。だが俺には見覚えがある

美晴 「門矢……士」

士 「久しぶりだな、ウイザード」

パラド 「美晴、誰だあいつ」

美晴 「門矢士……世界の破壊者」

仮面ライダーディケイド

士 「さて、久しぶりに遊んでやる」

士はそう言い、ディケイドドライバーを取り出した

美晴 「ドライバーの色が…違う」

士 「俺様も常に進化しているからな

変身！」

『仮面ライダーライドー』

『ディケイド！』

美晴 「パラド行くぞ！」

パラド 「ああ」

☒ドライバーオン・プリーズ☒

『パーフェクトパズル』

『シャバドゥビタッチヘンシーン・シャバドゥビタッチヘンシーン』

『What's the next stage?』

美晴・パラド 「変身！」

☒フレイム・プリーズ☒

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

『get the glory in the chain PERFECT PAZZL』

ウイザード 「さあ、ショータイムだ」

パラドクス 「俺の心を滾らせるなよ？」

『アタックライダー・スラッシュ！』

デイケイド「はあ！」
キーン

ウィザード「ふっ、デイケイドお前はここに何しに来た?!」
デイケイド「お前に言う必要などないっ！」

ウィザード「ぐはっ！」

パラドクス「美晴!てめえ」

デイケイド「お前とやるならこいつだ」

そう言い、デイケイドはライドブツカーからエグゼイドのカードを
取り出した

パラドクス「?エグゼイド?」

『仮面ライダー・エグゼイド!』

『マイティジャンプ、マイティキック、マイティマイティアクションX
!』

デイケイドはエグゼイドに変身した

ウィザード「……嘘だろ」

Dエグゼイド「はっ、！」

『HIT、HIT、HIT』

パラドクス「ぐっ!こいつ何時ものエグゼイドより強い」

Dエグゼイド「これで終わりだ！」

『ファイナルアタックライダー・エ、エ、エグゼイド』

Dエグゼイド「ふん！」

『HIT、HIT、HIT、GLET、PERFECT!』

パラド「ぐわあ！」

ウィザード「パラド!…なんて言う力だ」

デイケイド「なら次はこれだ！」

またもやデイケイドはライダーブツカーからウィザードのカード
を取り出した

ウィザード「まさか、俺!?!」

デイケイド「そのまさかだ！」

『仮面ライダー・ウィザード!』

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー!』

ウィザード「嘘でしょ?!」

Dウィザード「どちらのウィザードが強いか勝負と行こう」

ウィザード「はっ、ふっ、やっ!」

Dウィザード「甘い!オラア!」

ウィザード「ぐっ!」

☒キャモン・シューティング・シェイクハンド☒

☒フレイム・シューティングストライク!☒

☒ヒーヒーヒー、ヒーヒーヒー☒

ウィザード「はっ!」

Dウィザード「はっ」

ウィザードが打った弾はデイケイドに斬られ、真つ二つになった

Dウィザード「おいおい、本家ウィザードはこんなもんか?」

ウィザード「……………だったら!」

☒キックストライク・サイコー☒

『ファイナルアタックライドー・ウィ、ウィ、ウィザード!』

ウィザード「はぁー!」

Dウィザード「ふん!」

ウィザードとデイケイドの蹴りが激しくぶつかって、爆発が起きた

美晴「ぐはっ!」

士「ぐっ!」

なんと引き分けだ

士「ここらが引き時だな、じゃあなまた会おう」

士の後ろから謎の壁が現れ、士が通り抜けると士は消えていた

美晴「パラド!大丈夫か?」

パラド「ああ、大丈夫だ」

美晴「……………そうだ!君、大丈夫?」

???「は、ハラシヨ!」

美晴「フエ?ハラシヨ?」

???「すみません、私絢瀬亜里沙と申します よろしくお願いします

美晴「よろしくね、亜里沙ちゃん俺の名前は」

亜里沙「氷海美晴さん:ですよね?」

美晴「えっ!？」

亜里沙「そちらが今日来た氷海パラドさんですよね?」
パラド「どうして俺たちの名前を?」

次回仮面ライダーウィザード

「お姉ちゃんがいつも学校の話をしているから」

「さあ、楽しませてもらうぜ!」

「変身!」

『クロックアップ』

次回第6話常に加速する

第6話常に加速する

パラド「どうしても、俺達の名前を？」

亜里沙「お姉ちゃんが音ノ木坂にいます。だから、いつも学校の事を聞いているんです」

美晴「じゃあ今はお姉ちゃんを待っているの？」

亜里沙「はい！」

「亜里沙、ごめんなさい遅れたわ」

美晴「……苗字の時点で察してましたが」

絵里「あなた達……」

く公園く

美晴「あなたがμ，sを嫌っているのは分かりますが」

パラド「人気があるんだから少しは認めてもいいんじゃないか？」

絵里「……じゃああなた達は何で彼女達に着くの？」

美晴「それは彼女達、μ，sが俺の希望だからです」

絵里「……希望？」

亜里沙「美晴さん、パラドさんどうぞ」

亜里沙はそう言い、美晴とパラドにおでん缶を渡した

パラド「……おでん？……」

絵里「ごめんなさいね、向こうの生活が多くて慣れてないのよ亜里沙それは飲み物じゃないから別の買ってきてくれる？」

亜里沙「はい」

パラド「じゃあ、俺も一緒に行つてあげるよ」

亜里沙「本当ですか！」

パラドは亜里沙を連れて自販機に行つた

絵里「パラド君は面倒見がいいのね」

美晴「そうですかね？」

「見つけたぞ！指輪の魔法使い」

美晴・絵里「!？」

美晴「……おまえは？」

フェニックス「俺様はフェニックスだ！」

美晴「絵里さん、離れてて」

絵里「え？」

美晴は、絵里に声のトーンを少し下げて忠告した

☒ドライバーオン・プリーズ☒

俺の腰にドライバーが現れ、シフトレバーを1回上下にさげた

☒シャバドウビタツチヘンシーン・シャバドウビタツチヘンシーン

☒

陽気な音楽と音声の流れ、左手にウィザードリングを装着して、サングラスを下に下げた

美晴「変身！」

☒フレイム・プリーズ☒

『ヒーヒー、ヒーヒー』

美晴はウィザードに変身したが、絵里には見覚えがあつた

絵里「ハラショー、美晴くんがああの時の」

ウィザード「さあ、ショータイムだ」

フェニックス「さあ、楽しませてもらうぜ！」

ウィザード「はぁー！ー！」

キーン

ウィザードの持っているウィザードソードガンとフェニックスの

大剣が火花を散らしている

フェニックス「ふっ、オラア！」

ウィザード「ぐはっ！」

だが、フェニックスの大剣の方が力があり、ウィザードを吹き飛ばした

絵里「……………」

絵里はウィザードから見えない場所にいた

カブトゼクター「助けに行くのか？」

絵里「…いえ、そういう訳では無いわ」

『変身ー！』

なんと、絵里は仮面ライダーカブトに変身した！

ウィザード「……流石にきついな」

フェニックス「終わりだな！」
キーン

ウィザード「……………え!？」

フェニックス「……………お前誰だ？指輪の魔法使いには見えねえーし」
カブト「……………ふん！」

フェニックス「ぐはっ！」

カブトはフェニックス吹き飛ばし、ゼクターホーンを1回曲げた
カブト「キャストオフ！」

『キャストオフ！チェンジビートル!』

カブトはゼクターホーンを一気に曲げて、カブトに着いていたアーマーが全部吹っ飛んで、シルバーだった身体が赤になっていた

ウィザード「姿が変わった!？」

フェニックス「☒なんなんだ！お前は!？」

カブト「……………クロックアップ」

『クロックアップ!』

フェニックスの問いにカブトは答えず、ベルトの右側のボタンを押し、加速した

フェニックス「ぐはっ!、がはあ!、ぐっ！」

ウィザード「速い……………」

クロックアップの中カブトはカブトゼクターの上を3回押した

『1…2…3…』

カブト「ライダー……………キック！」

『ライダーキック!』

カブトは、ゼクターホーンを元に戻し、また一気に曲げると回し蹴りをした

カブト「はあ！」

フェニックス「ぐわあー!ー!」

カブトの回し蹴りをくらい、フェニックスは爆散した

『クロックオーバー!』

ウィザード「いつの間に終わったんだ！」

ウィザードは変身を解こうとしたが、

カブト「はっ！」

ウィザード「ぐっ！何すんだよ!？」

カブトである絵里は急にウィザードに攻撃し始めた

『クロックアップ!』

ウィザード「ぐはっ!、がはあ!、ぐっ!、また加速した…」

カブト「ふん！」

ウィザード「ぐわあ」

『クロックオーバー』

ウィザード「今だ！」

☒キックストライク・サイコー☒

ウィザード「だアー!！」

カブト「クロックアップ！」

『クロックアップ!』

『1…2…3…』

カブト「ライダー…キック!（美晴くんごめん）」

『ライダーキック!』

カブト「ふん！」

フェニックス同様、クロックアップした世界で回し蹴りをウィザードにもお見舞いする

美晴「ぐはっ！」

カブトの回し蹴りを食らったウィザードは変身が解除される

カブト「…ふん！」

カブトは鼻で笑い、その場から去った

『クロックオーバー』

絵里「美晴くん、大丈夫?!」

美晴「絵里さんこそ大丈夫ですか？」

絵里「どういう意味?（やばい、バレた!?!）」

美晴「いえ、そちらに赤いカブトムシのライダーが行ったと思うんですけど……」

絵里「うくん、確か凄く速い赤いのが通り過ぎていたけど」
パレード「美晴」

亜里沙「お姉ちゃん」

絵里「じゃあ、そういう事でありさ帰りましょ」

亜里沙「うん！美晴さん、パラドさんさようなら」

パラド「じゃあね、亜里沙ちゃん」

美晴「……………」

「家に帰宅」

美晴「……………」

海末「あのくパラドさん、美晴どうしたんですか？」

パラド「わからん、生徒会長さんと別れてからずっと黙ってんの」

美晴はずっと急に現れた仮面ライダーの事で考えてる

美晴「……パラド」

パラド「どうした？」

美晴「仮面ライダーの中で加速できるライダーはいる？」

パラド「いるには居るぜ」

美晴「誰だ？」

パラド「仮面ライダーファイズ、仮面ライダーカブト、仮面ライダー

ドライブ、この3人だ！」

美晴「その3人は、加速するのにクロックアップは使うか」

パラド「？クロックアップを使うのは仮面ライダーカブトだ」

美晴「……つまりアイツはカブトか」

海末「美晴、話してください、生徒会長と会って何があったんです

か？」

美晴「…フロントムに襲われた、だけどそのフロントムはカブトは

に倒され、カブトも俺を襲ってきた」

パラド「フロントムは分かるが、何でカブトま

で」

絵里視点

私は、今日美晴くんを倒してしまった。何故そんなことしたかと言

うと、

「何、シケタ顔してるんだよ」

絵里「土……………」

士「そんなにウイザードを倒すのが嫌なのか」

絵里「……当たり前じゃない、私は生徒会長なのよ」

士「だが、 μ 、 s を消すためにお前はその力を取ったんじゃないのか？」

絵里「……それは」

士の言う通り私は μ 、 s を消したいが為に仮面ライダーになった。

次回仮面ライダーウイザード

「穂乃果、テストどうだった？」

「それが……」

「またお前か」

「ちようどいい、練習台になって貰うぜ」

次回第7話テストの結末カブトの正体

第7話テストの結末カブトの正体

いきなり時は進んで放課後

く部室く

穂乃果「二人とも、テストどうだった？」

今日はテスト返却日、そしてμ、sがラブライブ！に出場できるかが決まる日である

凜「凜は、英語大丈夫だったにや〜」

ここ「アイドルである、このにこが赤点なんて取るわけないでしょ」
どうやら、2人はセーフらしいが……

美晴「穂乃果、お前はとうだったの？」

ここ「あんた！ 私達の努力を水の泡にしないでよね!？」

『どうなの!?!』

美晴とパラド以外のメンバーが声を合わせて言う。穂乃果の顔が残念そうに見えた

パラド「穂乃果お前……まs」

穂乃果「もうちよつと、欲しかったんだけどね……ジャーン!」

パラドが発言する前に穂乃果は自分の答案用紙を見せた、気になる点は53点

『ふう〜……』

その得点を見て、μ、s全員が安心した

美晴「これで、μ、sは出場できるな」

パラド「だな!」

と言いながら、俺とパラドは部室から出た。え？何故かって？馬鹿野郎皆が着替えるからだろ!

穂乃果「よーし、練習だ!」

花陽「ら、ラブライブ……!」

真姫「まだ、出場できるとは限らないわよ?」

皆が結構早い時間で出てきた

パラド「練習の前に報告だろ」

理事長にμ、s全員赤点を回避した事を報告しなければいけない

〈理事長室前〉

俺達は理事長室前にきたがその瞬間良からぬ声が中から聞こえた

絵里「どういう事ですか!?理事長」

いずみ「ごめんなさい、でも決定事項なの音ノ木坂学院は来年度から生徒募集を終了し、廃校とします」

なんと廃校の宣告だった

穂乃果「そんな…今の話本当ですか!」

穂乃果はその宣告を聞いて、居ても経ってもいられなくなり、部屋の中へと入っていた

絵里「あなた達……………」

絵里さんは、穂乃果達の入室に驚いていた。そりやそうだ理事長と話してたら急に割り込んで来たのだから

いずみ「……残念ながら、本当よ」

ことり「お母さん、そんな話聞いてないよ!」

海末「お願いします、ちょっと待ってください!、後1週間いえ、2日でもいいので」

海末とことりがそう言っていると、絵里さんと理事長の目が点になっっていた。……ああ、なるほどね

美晴「お前ら、落ち着けどうやら今すぐっていう訳でも無いみたいだし」

穂・海・こ「え?」

理事長「美晴君の言った通り、今日という訳ではなくて、今度のオープンキャンパスで、結果が悪かったらの話よ?」

穂乃果「オープン……………キャンパス?」

穂乃果には、その言葉が理解出来ていならしく、頭の上に?を浮かばせる

美晴「要は、オープンキャンパスに来た、近隣の中学生達にアンケートを取って、結果がまずかったら、廃校っていう事だろ」

絵里「美晴くんの言った通りよ」

穂乃果「なあんだー良かったー」

美晴・絵里「安心してる「場合か!」「場合じゃないわよ」」

と俺と絵里さんの声が被る

絵里「……………オープンキャンパスは2週間後の日曜、それで結果を出さなければ決定なのよ?」

絵里さんがきよどりながら、言うていく……………2週間後に日曜…

絵里「理事長、オープンキャンパスにやる物は、生徒会が決めさせて頂きます」

いずみ「止めても、無駄そうね」

絵里さんは意見し、理事長があつさり折れた……………まあ、それくらいはねえ

絵里「では、失礼しました」

↳部室↳

凜「ええー!?!じゃあ凜達は下級生がいない状態で卒業するのかにや!?!」

部室に戻り、凜さん達の中で何があつたかの説明をした
にこ「まあ、そうなるわね」

真姫「まあ、私的にはそっちの方がいいんだけどね」

『Stage select』

全員「!?!」

皆で考えている時に、部室とは別の場所に飛ばされた

花陽「これって……………あの時の」

そうこれは俺たちとパラドが再開した場所であつて……………

パラド「ゲナム……………!」

ゲナム「ハアハッハッハッハッハッハッハッハ!!」

こいつと戦った場所だ

美晴「今度は何の用だ」

ゲナム「何を言っている、あの時にも言っただろパラドを削除し、
ウイザードの力を回収すると」

美晴「悪い、覚えてないわ」

パラド「穂乃果達は隠れてて」

パラドが穂乃果達に言うど、皆領いて物陰に隠れた

☒ドライブバーオン・プリーズ☒

『PERFECT PAZZL!』

パラドはギアデュアルを一回転させる、そして俺の腰にはドライバーが現れて、シフトレバーを上下に動かす

『シャバドウビタッチヘンシーン・シャバドウビタッチヘンシーン』

『What's next stage?』

パラド・美晴「変身!」

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー!』割愛

『get the glory in the chain PERFECT PAZZL!』

俺とパラドは変身した

ウィザード「さあ、シヨータムだ」

パラドクス「俺の心を滾らせるなよ?」

ゲンム「ふん!」

ゲンムは腕を上げると、バグスターとグールが沢山出てきた

ウィザード「俺はグールをパラドはバグスターをお願い」

パラドクス「おっけー」

くウィザード側く

ウィザード「はっ!フツ!おら!」

ウィザードは回し蹴りなどでグールを蹴り倒している

ウィザード「!ちようどいい、練習台になってもらうぜ」

ウィザードは何かを思い出した様に左手の指輪を変える

☒シャバドウビタッチヘンシーン☒

☒フリーズ・プリーズ☒

『カチコチ、カチコチカチコチ!』

ウィザードは新たなスタイル、ウィザードフリーズスタイルに変化した

海末「……なんですか?あの姿は」

穂乃果「見た事ないよねえ」

花陽「あれってパラドさんが、美晴さんに上げてた指輪ですね」

ウィザード「さあ、魔法の力見せてやるよ」

くパラドクス側く

パラドクス 「フッ！あら！おりや！」

パラドクスは、バグスターを倒していくが数が減らない

パラドクス 「数が減らないならこいつだ！」

『ノックアウトファイター！』

パラドクス 「大変身」

『デュアルアップ！』

『EXPLOSIONhit knockOUTFIGHTERS』

パラドクスはパズルゲーマーからファイターゲーマーに姿を変えた

真姫 「こつちも凄いことに……」

凜 「顔が後ろに行ったニヤン！」

パラドクス 「ノックアウトファイター…：相手がKOするまで叩きのめすゲーム、まさに今の状況にはピッタリのゲームだ、行くぜ！」

パラドクスF 「はっ！あら！アッパー！」

『HIT、HIT、HIT』

『キメワザ！』

『knockOUT クリティカルスマッシュ！』

パラドクスは右手に力を込めて、バグスターの大群にパンチをお見舞いし、

バグスターは爆散した

『gameclear』

〜ウイザード側〜

ウイザード 「はっ！ファイナーレだ！」

『キックストライク・サイコー！』

ウイザードは右足に力を込めると、右足に氷の力が溜まる

ウイザード 「はあ！だっ！はあー！はあー！はあー！」

ウイザードのキックを食らったグルルたちは爆散した。だが、

ウイザード 「ぐっ！ゲンム！」

ゲンム 「ハッハッハ！」

『クロックアップ！』

ゲンム「何?! うわっ!」

いきなりカブトが現れ、クロックアップの世界になった

『1…2…3…』

カブト「ライダー……………キック!」

『ライダーキック!』

カブトはあの時は違く、普通のキックをゲンムに食らわせた

『クロックオーバー』

ゲンム「ぐっ!」

『GAME OVER』

ゲンムは消えたが、下の土管から出てきた

ゲンム「ハツハツハ! ……残りライフ67 良くもまた私の貴重なラ

イフを……………」

また? っていう事はカブトとゲンムは何回も戦っているのか?

ウィザード「…カブトあんた何もんなんだ?」

カブト「……………」

カブトは無言のまま変身を解除した、そこに居たのは

美晴「絵里……………」

絵里「……………」

美晴「貴女がカブトだったんですか?」

絵里「…そうよ私が仮面ライダーカブトよ」

海末「生徒会長が……………」

ゲンム「貴様……………」

「ゲンム、戻れ」

ゲンム「!? し、しかし」

「戻れと言っている……………」

ゲンム「了解しました」

美晴「!? 待て」

ゲンムがその場から消えると、部室に戻っていた

次回仮面ライダーウィザード

「貴方がどうして……………」

「μ，sの踊りは初心者にはしか見えない」

「えりちが本当にやりたいことは？」

「私がやりたいことは……」

次回第8話9人の歌の女神

第8話9人の歌の女神

く部室く

美晴「……あなたがカブトだったなんて」

絵里「残念かしら？」

美晴「……でも、どうしてライダーに」

絵里「それは、μ'sを消す事が目的だったの」

海末「μ'sを!?!」

凜「いくら、嫌いだからって……」

絵里さんの言葉に皆動揺している。当然だ自分達を消す事が目的とか言われたら誰でも動揺する。

花陽「でも、どうして生徒会長さんが仮面ライダーライダーになれたんですか……?」

絵里「それは……」

「俺が手を貸したんだ」

美晴「!?!門矢……土」

絵里「……彼には、家が無かっただから家に泊まらせる代わりに、力を貰ったのよ」

パレード「でも、一体どうやって……」

力を貰った……パレードの言う通り一体どうやって、そう考えていると絵里が時計の様な物をだしてきた

土「こいつを使ったのさ」

穂乃果「それ何？」

土「仮面ライダーカブトの……ライドウオッチだ」

絵里「土、これ返すわ今の私にはもういらない」

そう言い、土にライドウオッチを渡すが……

海末「!花陽?!」

そう花陽が奪ったのだ

絵里「……花陽さん?何をしているのそれを返して」

花陽「い、嫌です!」

と珍しく反論していた

士「……まあいいくれてやる」

絵里「!?ちよつと士!」

そう言い残し、士と絵里は部室を出て行った

《絵里視点》

部室を出て行った後、士は帰っていた。何故ライドウオッチを返したのか。それはもう分かっているから、どうして亜里沙がそこまで好きなのか、どうしてあの子達が人気なのか。

希「もう、認めて一緒にやったらどうや?」

絵里「何よ…何とかしなくちゃいけないんだから、しょうがないじゃない!私だって、好きなことだけやってなんとかなるなら、そうしたいわよ!自分が不器用なのは分かってる…でも…今更アイドルを始めようとか私が言えると思う…?」

私は希にあたるような口調でその場から去った

《美晴視点》

美晴「……悪い、俺行ってくるわ」

海末「お願いします」

俺が廊下にでると、希先輩が困った表情で立っている。

美晴「希さん、どうしたんですか?」

希「…美晴くんそれが」

説明中

美晴「……なるほど、それがあの人の本音か」

希「美晴君、お願いや、絵里ち助けて!!」

美晴「最初からそのつもりです」

そう言い、俺は絵里さんがいると思われる教室へと走り出した

3年生教室

絵里「私の…やりたいこと…」

美晴「………絵里さん」

絵里「美晴くん、どうして」

俺は、疲れない範囲で走り、絵里さんがいる3年生の教室に来た

美晴「絵里さん、あなたはどうしてもやりたいことをやらないんですか?」

絵里「あなたに、何が分かるの!?!私だってやりたいことはやりたいわよ。だけど、おばあ様の母校だから、廃校にさせないようにしてるのよ」

絵里さんは、心からの自分の思いをぶつけてくれた。だから俺はギョツ

絵里「!?!」

美晴「…もう我慢しなくていいんです。もう過去は帰らないけど、未来は自分の手で何時でも変えられる…だから自分のやりたいことをしてください。あなたの人生や未来は誰のものでも無い、あなたのものです。」

俺はそつと、絵里さんを抱きしめて静かに言った。これで少しは落ち着いて欲しかった。

絵里「美晴くん……………」

美晴「それに、早速あなたの未来を決めるチャンスが来ましたよ」

絵里「???」

穂乃果「生徒会長……………いや、えり先輩^μsに入ってください!!」

絵里「えっ?!」

穂乃果「私たちは、絵里さんもアイドルとして、ステージの上で歌って、踊って欲しいんです」

絵里「いや、ちよつと待って。私は別にやるなんて一言も……………」

美晴「いいんですか?また、やりたいことをやるチャンス逃しますよ。……………別にいいんですよ、生徒会長がやったて」

絵里「美晴くん、皆」

穂乃果「絵里先輩!」

穂乃果はそつと絵里さんに手を差し伸べた。そして、絵里さんはその手を

取った

穂乃果「絵里先輩……………」

海末「これで8人!」

希「いや、9人やで?」

希を除く全員「……………え?」

希「そうや、占いで出てたんや。このグループは9人になった時、未
来が開けるって。だから、付けたん。9人の歌の女神。μsって。」

絵里「希…全く呆れるわ……」

そう言いながら、絵里さんは教室を出ようとした

絵里「さあ、練習しましょ」

次回仮面ライダーウィザード

「いらっしやいませ！」

「あれはダメなんです」

「これが新しい指輪だ」

「おかえりなませ、ご主人様」

次回第9話秘密のアルバイト

第9話秘密のアルバイト

絵里さんと希さんをメンバーに入れ、オープンキャンパスを無事終了し、掲示板には廃校延期のお知らせが貼られていた。

く中庭く

花陽「じゃあ、美晴先輩これはどういう魔法ですか?」

俺は皆に、使える魔法を見せてと言うわれたから今鑑賞会みたいなのをしている

美晴「ああ、これは……ちよつと凜来て」

凜「何にや?」

そう言いながら、凜の右手に指輪をはめる

☒スリープ・プリーズ☒

凜「ふんにやく」

花陽「凜ちゃん!」

真姫「相手を眠らせる魔法もあるのね」

美晴「まあ、後は……」

穂乃果「皆大変!ビックニュース」

穂乃果が慌てて、部室にやって来た

美晴「なんだ?居残りでもするのか?」

穂乃果「あっそうなんだよ……じゃなくて!」

パラド「おい、ほつといちやダメだろ?!」

穂乃果「とりあえず、着いてきて!」

穂乃果に誘導されながら、隣の部屋前まで来た

く部室く

穂乃果「ジャン!隣の部屋も部室になったの!しかも広いよー!」

全員「おおー!」

美晴・パラド「穂乃果の居残りよりビックニュースだな」

穂乃果「ちよつと、それどういう意味!」

絵里「でも、安心してる場合じゃないわ」

俺達が話していると、絵里さんが言った

絵里「生徒が沢山来ないと、廃校の可能性があるから、頑張りましょ」

絵里さんが、少し生き生きとした顔を見て、俺は少し口がニヤつてなつてしまった

そんな時、海末が急に泣き始めた

海末「嬉しいです！μ，sにやつとまともな人が来てくれて！」

ええー…それ俺らがまともじゃないみたいじゃん

絵里「ええー!？」

絵里さんもこれには驚愕らしい

希「ほな、練習しよか」

パレード「そうだな、おい凜起きろ」

パレードが凜の名前を呼びながら、体を揺らしている

凜「んにや？何にやー？」

花陽「凜ちゃん、練習するよ」

うーん、この指輪眠気が強すぎるのかな？

ことり「あ、ごめんなさい私用事があるので先帰ります」

穂乃果「最近ことりちゃん早く帰るよね？」

海末「はい、オープンキャンパスが終わったから、用事が溜まつてるのかもしれないね」

美晴「悪い、俺も用事があるから帰るわ」

絵里「ええ、気をつけてね」

〈面影堂〉

美晴「おつちゃん、来たよ」

「おお、来たかほれ」

今店の奥から出てきたこのおじさんはここで魔法石を指輪に変えてくれているおじさんだ、いつもゴーレムに向かわせてるが今日は俺が取りに来た

美晴「さーて、どんな魔法かなあー」

そう言いながら、俺は右手に新作の指輪を付けた

☒エラー☒

流れた音声はエラー………はい？

美晴「おい、おっちゃんこれ失敗作じゃないのか？」

「そんなはず、無いだろ俺の作る指輪は失敗なんてしない」

じゃあ一体何なんだ

美晴「まあいいや、指輪ありがとうな」

そう言い残し、俺は店を出た

ピピピ

美晴「??」

携帯が鳴ってると思い、見てみたら海未からメールだった

『今すぐ、秋葉原のメイド喫茶に来てください！』

美晴「め、メイド喫茶？あいつら何でそんなところに」

俺は思っていた事を口に出しながら秋葉原に向かった

↓秋葉原・メイド喫茶↓

ことり「おかえりなさいませ、ご主人……様？」

美晴「……………ことり？何してるの」

穂乃果「あつ！美晴くん」

後ろの席から穂乃果が来た

美晴「え？え？どういうこと？」

↓何があったのか説明中↓

なるほど、俺がいない間に、μ、sの順位が上がったり、アイドルシヨップにμ、sが並んだりそして、ことりがメイドをやっていたこと

海未「どうして、メイドなんかやっているんですか？」

ことり「私は、海未ちゃんや穂乃果ちゃんや美晴くんそして皆みたいに大したことやってないから」

海未の質問にことりが悲しそうに言った

海・穂・美「そんな事（ありません！）、（無いよ！）、（無いぞ）」

ことり「え？どうして」

美晴「お前はいつもμ、sの衣装を考えて、作ってる…それだけでも大したことをやってんだよ」

海未「ことりが今まで衣装を作ってきたからこそ、今にμ、sがあるんです」

ことり「うう………」

穂乃果「どうして？急に自信が持てなくなったの？」

たしかに、今までそんなことを1度もなかったのに

ことり「私は皆について行ってるだけだよ」

ことりはまた悲しそうに言った。これには何も言えない

パレード「………居座るのも店側に迷惑だから、帰るか」

美晴「だな」

そう言い、今日は解散となった

海末「そう言えば、美晴指輪は？」

美晴「ああ、失敗作だった」

そう海末に説明して、俺は再度失敗作を見た。

キラアーン

つと一瞬だけ指輪が輝いた

次回仮面ライダーウィザード

「路上ライブしよー！」

「ふえくくくん」

「大丈夫？」

「俺に力を貸せー！」

次回第10話炎の進化

第10話 炎の進化

誰もいない教室にて、1人で席に座り、作詞をしていることりがいた

ことり「チョコレートパフエ、おいしい。生地がパリパリのクレープ、食べたい。」

ハチワレの猫、可愛い。5本指ソックス、気持ちいい…ダメだあ…」
美晴「なあ、あれ大丈夫か？」

パルド「さ、さあ？穂乃果達が決めたことだからなあ…」

そもそもなぜ、こんなことになったかとうと…

く回想く

部室で穂乃果が放った一言から始まった

穂乃果『アキバでライブしょ！』

美晴『アキバで？』

花陽『そ、それって路上ライブ…ですか？』

ここ『秋葉原なんてA―R―I―S―Eの膝元よ！』

穂乃果『でも面白くない？』

絵里『確かに秋葉原はアイドルの聖地っていわれてるものね

そこで頑張れば大きいアピールになるわね』

花陽『い、いいと思います！』

凜『凜も賛成にやー！』

真姫『私はどっちでもいいわ…』

絵里の言葉に皆賛同していく

海未『し、しかしたくさん人がいるのでは…』

パルド『いなきや、ライブにならないだろ？』

希『じゃあ決定でいいん？』

穂乃果『そうだね、じゃあ日程を…』

絵里『ちよつと待ってほしいの！』

絵里が静止をかける

絵里『せっかく秋葉原でライブするんだから秋葉原に詳しい人に作詞をしてもらいたい。ことりさん、どう？』

ことり『えっ…でも…』

海未『確かに…ことりなら絶対いい歌詞をかけますよ!』

穂乃果『そうだよ!ことりちゃん、ファイトだよ!』

ことり『穂乃果ちゃん…海未ちゃん…うん!』

幼馴染の2人から背中を押してもらい、意気込んだ

く回想・終了く

ことり「フワフワしたもの可愛いな! はいっ! あとはマカロンたくさん並べたら、カラフルで幸せく、ルールーラーラー…もう無理い…」

あ、限界を迎えたな…

美晴「大丈夫か?」

ことり「ううん…全然思いつかないよ…」

穂乃果「ああ! いたいた!」

穂乃果が教室にやってきた

穂乃果「ことりちゃんが困ってるって思って、いい方法思いついたんだ!」

パラド「いい方法?」

なんだろう…嫌な予感しかしない

くメイド喫茶く

ことり「おかえりなさいませ! ご主人様!」

穂乃果「おかえりなさいませ! ご主人様!」

海未「お、おかえりなさいませ…ご主人様…/」

穂乃果が言っていたいい方法とは海未と穂乃果がメイドとして1日体験するということだった

んまあ穂乃果にしては考えた…のか?

あと…

美晴「なぜっ!?!」

何故か俺までメイド服を着せられた

海未「美晴! あなただけやらないのはずるいです!」

美晴「いや、俺、男！」

パレード「意外と似合ってるぞ」

美晴「なんでお前は着せられてないんだよ！」

パレード「だって今来たんだもん」

こいつ…絶対ぶっ飛ばす

するとトビラが開いた

凜「遊びに来たにやー！」

μs「みんなが来たのだ」

希「なんで美晴君までメイド服を着とんの？」

美晴「好きで着てるわけじゃないけどな」

花陽「で、でもいいと思います！」

美晴「あ、ありがとう…？」

ここ「そんなことより早く接客してちようだい」

ことり「いらっしやいませ！6名様ですわね！」

テーブルにご案内致します！」

ことりが完璧な接客で絵里達を連れてった

美晴「あれ？海未は？」

穂乃果「海未ちゃんなら…」

美晴「お前…嘘だろ？」

海未はメイド喫茶の厨房にいた

海未「別にいいじゃないですか、そもそもメイドというのは

こういうのがメインのはずです」

美晴「屁理屈を並べるなよ…」

ことり「海未ちゃん、ここでは笑顔を絶やしちやダメだよ！」

ことりが注意しながらやってきた

海未「ですがここは…」

ことり「例えお客さんに見えて無くても、心構えが大事なんだよ！」

へえ…そうなんだ

ことりに感心しているとガルーラが飛んできた

美晴「ガルーラ…まさか…」

ガルーラ「パイ、パイ！」

美晴「ことりこれ持ってて！」

俺はメイド服を脱いで、ことりに渡した

ことり「えっ…あっ…うん！」

海未「美晴…気をつけてください」

美晴「ああ、ガルーラ案内して！」

そして、俺はメイド喫茶を出た

↳路上↳

メイド喫茶を出て、しばらく走ると路上でファントムが女の子を襲っていた

美晴「はあ！でやあ！」

「ああん？てめえか、指輪の魔法使い」

美晴「お前は…フェニックス…！生きていたのか」

フェニックス「ちよつと違えな！俺様は不死身のファントム

『フェニックス』何度倒しても蘇るのさ！」

『ドライブバーON・プリーズ！』

美晴「だからと言って、見逃す訳には行かない」

『シャバドウビタツチヘンション！』

美晴「変身！」

『ウォーター！プリーズ！』

『スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜！』

俺は仮面ライダーウィザードに変身した

↳第三者視点↳

ウィザードはウィザードソードガンを持って、フェニックスに斬りかかる

ウィザードW「はあ！でやあ！はあ！」

フェニックス「ふん！おらあ！」

ウィザードW「ぐわあ！」

ウィザードはフェニックスの大剣に吹き飛ばされる

ウィザードW「この野郎…これならどうだ！」

『キャモナ・シユータイング・シエイクハンズ!』

『ウォーター! シユータイングストライク!』

ウィザード「喰らえ!」

そう言い、フェニックスめがけて、放つが

フェニックス「無駄だ!」

ジュワア…:

フェニックスの強い炎に蒸発してしまった

フェニックス「おらよ!」

ウィザードW「ぐはあ! クソ、どうすれば…」

スルトウィザードの元に襲われてた女の子が近づいてきた

「あの…」

ウィザードW「早く逃げて!」

「そうじゃなくて、これを」

そう言い、女の子は指輪をウィザードに渡した

ウィザードW「指輪…? なんで君が?」

「分かりません…気づいたら持っていました」

ウィザードW「とにかく借りるよ!」

そう言いながら、立ち上がり、貰った指輪をはめた

『エラー!』

ウィザードW「そんなどうして!」

『エラー!』

『エラー!』

何度ベルトにかざしてもエラー音しか返ってこなかった

フェニックス「来ねえならこっちから行くぞ!」

そう言い、フェニックスはウィザードを斬りつける

ウィザードW「うわあ! ぐはあ! 頼む!」

『エラー!』

ウィザード「俺に力を貸せー!」

そう叫ぶと美晴の意識は別の場所に写った

く美晴・アンダーワールドく

美晴「ここは？」

ドラゴン『全く危険知らずの男だ』

美晴「ドラゴン：なあ教えてくれ！

この指輪はなんなんだ！」

ドラゴン「その指輪は俺の力を現実世界でも使える指輪だ

だがその代償としてお前が俺に食われるかもしれないぞ？」

美晴「なるほどねえく：どうすれば力を使いこなせるの？」

ドラゴン『話を聞いていたのか!?使用したら自分が死ぬかもしれないぞ！』

美晴「分かってないな：お前の力も俺の希望なんだぜ？」

そう言い、指輪を突き出しながら答えた

ドラゴン『この俺が希望だと？：ふつはーはーはー！実に面白いならはどこまで耐えられるか試してみるか！』

ドラゴンが指輪の中に入った

く現実世界く

フェニックス「これで終わりだ！」

フェニックスが止まっているウィザードに剣を振りかざすが

『フ：イ：ゴン』

フェニックス「あん？」

『フレイム：ドラゴン！』

『ボー：ボーボー！』

ウィザードの前に赤い魔法陣とドラゴンが通り抜けた

ドラゴンの力を現実世界で使える姿

『仮面ライダーウィザード・フレイムドラゴンスタイル』

く2章破壊者の正義 第11話ワンダーゾーン

フェニックス「!?なんだその魔力は」

『キャモン・スラツシユ・シエイクハンド!』

『コピー・プリーズ!』

魔法陣からもうひとつのウィザードガンが出てきた。

ウィザード「ふっ!おら!」

フェニックス「ぐはあ!何故こんなにも力が……」

ウィザード「はあ!」

フェニックス「ぬわあ!」

ウィザードは、二刀流持ちにし、フェニックスをきりつづける

キラアーン

ウィザード「ん?こいつは……」

光った指輪は、以前貰った失敗作だ

ウィザード「なるほど、こいつがようやく使えるのか」

『スペシャル・サイコー!』

失敗作をベルトにかざすと、ウィザードの後ろから魔法陣が現れ通り過ぎると胸元にドラゴンの頭が出てきた

ウィザード「ファイナレだ」

フェニックス「何がファイナレだ!」

ウィザードの胸元のドラゴン頭が炎をはくと、フェニックスは自分の炎をぶつけてきたが、ウィザードの炎が強くフェニックスの炎はかき消された

フェニックス「そんな俺が……ぐわあああああああああ
あ」

フェニックスは灰になった

ウィザード「ふいー」

ウィザードは変身を解除して、少女の元に駆け寄った

美晴「大丈夫だった?」

「は、はいありがとうございます」

美晴「俺は、氷海美晴君は？」

曜「渡辺曜です」

美晴「曜ちゃんか、よろしくね」

曜「はい！」

美晴「曜ちゃんの学校って音ノ木坂？」

曜「いえ、浦の星女学院って言う高校です」

美晴「そうなんだ、後敬語じゃなくていいよ俺2年だし」

曜「そうなんだ、私と一緒にだね」

そんな会話を俺と曜ちゃんはしていた

美晴「じゃあ、もう帰りな」

曜「うん！じゃあね」

そして、俺と曜は別れた

く美晴の家く

美晴「……なんで、お前らまで……？」

海末「いいじゃないですか、今日は穂乃果の家が空いてないんですよ」

家に帰ったら、海末たちが家に居た

美晴「……随分歌詞作り捗ってるじゃん」

机で歌詞ノートをあの時とは違う具合にベンが進んでる

ことり「うん！なんかどんどん出てくるの」

パレード「所でゲートは大丈夫なのか？」

美晴「ああ、襲ってたフェニックスは倒した」

絵里「ええー!? アイツ倒したのになんで生きてるの？」

パレードの問いに俺が応えようと、絵里さんが驚いた

美晴「あいつは不死身のファントムなんですよ」

海末「では、また蘇るのでは？」

美晴「安心しろ、蘇えれない様倒し続けるさ」

ことり「出来たー！」

俺と海末が話していたら、小鳥が声を上げた

穂乃果「出来たの!? ことりちゃん！」

ことり「うん！ほら」

ことりはそう言いながら俺達にノートを見せつけてきた。曲名はワンダーゾーン

♪数日後♪

曲が完成してから、数日経ち夕方であるこの日に路上ライブをする事になった

そして、メイド姿のμsが現れ、センターにはことりが立ち歌い始める。

なんでメイド服？

《ワンダーゾーン♪》

♪ライブ終了♪

ライブが終わり、俺達2年は神田明神社に来て、夕日を眺めていた穂乃果「ライブが無事に出来て、良かったよー」

海末「はい、これもことりのおかげですね」

ことり「そ、そんな事ないよ…美晴君や皆がアイディアを出して出来た曲だから」

美晴「それでもあの曲を書いたのはことりだ、もうちよつと胸を貼ったていいんだぞ？」

ことり「美晴君…そうかな？」

ことりがネガティブ発言をし始めたから、みんなで慰めた

穂乃果「こうしてると、最初を思い出さない？」

海末「ああ、ファーストライブの時ですか？」

ファーストライブ…俺が居ない時か

ことり「あの時は3人しかいなかったもんね」

穂乃果「うん！その後から花陽ちゃんや凜ちゃん、真姫ちゃんも入ってきて、にこちゃんも美晴君も入ってくれたからね！」

ことり「……………私達っていつまで一緒なんだろうね」

海末「ことり？どうしたんですか急に？」

ことり「だって、高校生活も2年経たない内に終わっちゃう…そしてたら多分皆大学がバラバラになるかもだし…………」

美晴「そうかもな」

穂乃果「美晴君？」

ことりの発言に俺が返すと穂乃果が驚いてる顔した

美晴「でも、俺らが皆を思っていたら、いつかまた会えるかもな」

ことり「美晴君……」

穂乃果「そうだよ！これからも一緒だよ！」

海末「穂乃果……」

ことり「穂乃果ちゃん……」

穂乃果の言葉で元気が出たのか、2人元気になった

海末「はい！」

ことり「うん！」

だけど、俺はまだ知らなかった。この後の未来で大切な仲間を失うことになるなんて

次回仮面ライダーウィザード

「合宿しよ！」

「お願い！」

「せ、先生……」

「み、みはるくん」

次回第12話夏の合宿

第12話夏の合宿

路上ライブから数日経ち、俺達は夏休みに入った
にこ「あつ〜い……」

穂乃果「本当だね……」

俺達は練習の為に、屋上に来ていたが穂乃果とにこが扉の前で文句を言ってる

ちなみにパラドは熱中症になった

にこ「て言うか、馬鹿でしょ!?!こんな暑いのに外で練習なんて……」

穂乃果「美晴くん、涼しくする魔法無い?」

海末「はあく……そんなもんある訳……美晴?」

美晴「う〜ん……探してみるわ」

俺は穂乃果の質問に少し考え、答えた。おっちゃんに後で聞きに行
こ

絵里「さあ、練習しましょ」

花陽「は、はい……」

絵里さんの言葉に花陽さんは少し狼狽えてしまった。やっぱりま
だ怖いのか

絵里「……花陽?これからは先輩も後輩もないわよ?」

穂乃果「そうだ!合宿行こう!」

海末「……美晴」

美晴「おk」

『コネクト・プリーズ!』

俺は海末の合図に答え、魔法陣からハリセンを取り出した

美晴「ソイ!」

穂乃果「イッターイ……急に酷いよー」

美晴「はあー……暑いからって合宿は無いだろ……」

希「いいやん♪」

美晴「ほら、希さんだつて……えっ希さん?今なんて?」

希「面白いそうやし、いいやん」

なんと希さんが賛成した。

凜「面白そうにやー！」

花陽「私も賛成です……」

真姫「いいんじゃない？」

1年組も賛成の様だ

海末「行くとしてもどこに」

穂乃果「海だよ！夏と言えば海だよ！」

美晴「行くとしても、俺はパラドの看病しないと行けないから行けないぞ？」

穂乃果「ええー……！あつ美晴君がそんなこと言うから穂乃果絶望しそう……」

美晴「……わ、分かった」

穂乃果「やったー！」

穂乃果の絶望と言う言葉に反応して負けてしまった

美晴「でも、費用は？」

穂乃果「えと、ことりちゃんちよつと来て！」ヒソヒソ

ことり「何？穂乃果ちゃん」ヒソヒソ

穂乃果「バイト代いつ入る？」

ことり「ふえええー?!」

穂乃果とことりがコソコソ話で、ことりが驚いている

美晴「バイト代で行けるわけないだろ」

凜「真姫ちゃんなら、別荘の1つや2つあるんじゃないかにやー？」

穂乃果「本当?!」

美晴「いや、流石に……」

真姫「あるには、あるけど……」

美晴「マジすか？」

穂乃果「本当?!じゃあ真姫ちゃん所でいいじゃん」

真姫「え!?!いや……」

美晴「いきなり押しかけてもじゃあ真姫さんも迷惑だろ」

穂乃果「そう……だよね」シユン

俺が穂乃果にそう言うと、穂乃果はシユンとしてしまった

真姫「……聞いてみるわ」

穂乃果「…！やったー！」

あつ真姫さんもちよろいな

絵里「ふふ、これを機に『あれ』をやった方がいいわね」

穂乃果が喜んでいると、後ろから絵里さんが笑った

く駅前く

合宿が決定してから数日経った。

俺達は駅前に集合していた

絵里以外「ええー!?先輩後輩禁止!」

絵里「そう、やつぱりこれからやって行くには先輩も後輩も無くした方がいいと思うの」

海末「そうですね、私も上級生に合わせてしまう所があるので」

パラド「それであんな踊れんのかよ」

美晴「そうだよなーって…パラド!」

パラド「よっ!」

まじかよ、こいつ合宿の話聞いてすぐ治したのか…

にこ「話を戻すけど、そんな気遣い全く感じないんだけど」
にこさんが不満げにいう。

凜「だって、にこ先輩は先輩らしくないにやー」

にこ「じゃあ何に見えるのよ!」

凜「後輩!」

穂乃果「子供!」

希「っていうか、マスコット?」

それぞれにこさんに言う。てか希さんマスコットって…それに賛成だ!

絵里「まあ、そういう事でよろしくね、穂乃果」

穂乃果「!?えっあっうんえ、絵理ちゃんううー」

絵里「よし」

凜「じゃあ、凜もにやえと、ことりちゃん?」

ことり「うん♪」

美晴「もしかして、俺らも?」

絵里「そうよ!」

パラド「そうですか、絵里」

絵里「ええ、それでいいわ：美晴は花陽に言ってくれるかしら」

花陽「ええー!?」

美晴「どうした？花陽」

花陽「ううー／＼／＼／＼な、なんでもないよみ、美晴くん」

凜「あーかよちん顔真っ赤にやー」

花陽「凜ちゃん、やめてよ」

絵里「それじゃあさつさと行きましょ」

俺らは、先輩後輩禁止令を受けてしまい、駅の中へと入ってた

く新幹線く

じゃんけんの結果、席順はこうなった

海末　ことり

凜

美晴

花

陽

希　　ここに

絵里

真姫

穂乃果　　パラド

穂乃果「はあー、後ろかやだなあー」

パラド「だな」

花陽（やったー！、美晴くんの隣だ！）

凜「後ろが絵理ちゃんと真姫ちゃんにやー！」

クルっ

絵里・真姫「あら、不満かしら？」

凜「い、いえ」ガタガタ

ことり「皆、楽しそうだね」

海末「そうですね」

く別荘く

真姫以外「は、ハラショー……………」

真姫「普通でしょ？」

「それは真姫さんの感覚が変なだけですよ」

美晴「!?せ、先生……………」

「!?美晴くん……………」

次回仮面ライダーウィザード

「お久しぶりです」

「手合わせしてくれないかな？」

「貴様がウィザードか……」

「教え子に手は出させない！」

次回第13話運命の再開・王のバイオリン

第13話運命の再開・王のバイオリン

美晴「渡先生……」

渡「美晴くん」

穂乃果「美晴くん、この人だれ？」

美晴「この人は、俺にバイオリンを教えた紅渡先生だ」

そう渡先生の事を真姫以外に教えていた

渡「真姫さんから話は聞いてるから、上がって」

美晴「はい！」

↳別荘内↳

「よおー久しぶりだな、美晴ー」

美晴「久しぶり、キバット」

別荘に入ったら、俺に挨拶してきたコウモリはキバットバット三世

ちなみに皆はそれぞれ部屋の見学に行った

渡「ねえ、美晴くん少し手合わせしてくれないかな？」

美晴「それはどっちですか？」

渡「もちろん……」

ガシッ

そう言いながら、キバットを渡先生は掴んだ

渡「こつちさ！」

キバット「よっしゃー！キバって行くぜー！」

『ガブッ』

渡先生は自分の手にキバットを噛ませたら、顔に紋様が写り腰に赤いベルトが現れる

渡「変身ー！」

そう言い、渡先生はキバットをベルトにぶら下げて、仮面ライダーキバに変身した

「ドライバーオン・プリーズ」

美晴「変身ー！」

『フレイム・プリーズ！』

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

俺もウィザードに変身した！

キバ「あまり手加減無しで行くよ」

ウィザード「はい！」

ウィザードとキバの肉弾戦が始まる

キバ「はっ！ふっ！はあ！」

ウィザード「はっ！やっ！おら！」

ウィザードはキバを蹴り出す

キバ「やるね！…だったら」

そう言いながらキバはベルトの左側にある青いフェツスルをとりだした

『ガルルセイバー！』

そのフェツスルをキバットに吹かせたら、空から狼の像が降ってきた

キバG「うわあああ！はっ！」

キバがその像を手にとると、狼の像から剣へと変わった。そして、キバの左側が青になった

ウィザード「青か……だったら俺も」

『ウォーター・プリーズ！』

『スイースイー、スイースイースイー！』

ウィザードもウォータースタイルへと姿を変えた

キバG「はあー！ふっ！やっ！」

ウィザードW「はっ！ふっ！やあー！」

ガルルセイバーとウィザードソードガンがぶつかり合う

ウィザードW「ふっ！はあー！」

キバG「ぐわあー！」

ウィザードは剣モードから銃モードへ変化させ、キバを打ち始める
キバG「銃か……ガルルでは部が悪いな」

そう言いながらまた左側から今度は緑のフェツスルを取り出した

『バッシャーマグナム！』

キバットに吹かせると、また空から像が降ってきた。キバがそれを右手で取ると右側が緑になった

キバB「はっ！」

ウィザードW「バツシャーか…なら」

『キャモン・シユールティング・シエイクハンド!』

キバB「なるほど、終わらせに来たか！」

『ウォーター・シユールティングストライク!』

『バツシャバイト!』

『スイ、スイ、スイ!スイ、スイ、スイ!』

ウィザードW・キバB「はぁー!はっ!はっ!」

お互いの弾がぶつかり、お互いに当たり変身が解除された

渡「引き分けだね…」

美晴「はい、そうですね」

真姫「ちよつと!何やってんの!?!」

花陽「美晴くん?何やってんの?」

渡「えと、これには訳があつて…:ねっ!美晴くん」

美晴「は、はい花陽、これには訳が…:」

真姫「…:はぁー!とりあえず手当ね」

美晴・渡「!」

美晴「いや、真姫それはこいつを倒してからだ」

俺がそう言うと、影からゲンムと男の人が出てきた

そして、パラドも後ろから来た

パラド「ゲンム!」

美晴「隣の人は一体…:」

「久しぶりだね、キバの後継者」

渡「白峰さん…:」

白峰「話をしたいが、あの方の命令でね君たち3人を排除する

…:…:レイキバット」

レイキバット「行こう!華麗に激しく!」

白峰「変身!」

そう言い、白峰と言う男はレイキバットという物を腰に着けた

レイ「行こうか、ゲンム」

ゲンム「ああ、ダークキバの入った戦闘データで!」

そう言いながら、ゲンムはダークキバのガシヤットを見せつけてきた

パラド「なんだそのガシヤットは!？」

ゲンム「ハツハツハツハー」

『闇のメロディー!ダークキバ!』

『ガシヤット!』

ゲンム「グレード3!」

『ガツチャーン!レベルアップ!』

『ダークネス!闇の音楽!闇のメロディー!ダークキバ』

ゲンムはガシヤットをベルトに差し込み、仮面ライダーゲンムダークキバゲーマーとなった

『PERFECT PAZZL!』

『ガブツ』

『シャバドウビタッチヘンシーン』

渡・美晴・パラド「変身!」

『デュアルアップ!』

『get the glory in the chain!PERF

ECT PAZZL!』

『フレーム・プリーズ』

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー!』

キバ「俺が白峰さんを二人はあのらいだーを」

ウィザード「はい!」

パラドクス「おうよ!2人とも下がってる」

パラドの注意を受けると、二人はすぐ下がっていた

くパラドクス・ウィザード側へ

ウィザード「はっ!ふっ!…ぐわあ!」

パラドクス「はっ!おら!…ぬわあ!？」

ゲンムDK「ハツハツハツハーどうだ?!」

ウィザード「くっ!…:…まだまだ!」

ウィザードは左手の指輪を変えた

『フレーム・ドラゴン!』

『ボーボー！、ボーボーボー！』

ウィザードは荒々しい声とともにウィザードフレイムドラゴンスタイルへと変えた

パラドクス「その姿は!?!」

ゲナムDK「?!ぬわぁー!」

ウィザードFD「はっ!ふっ!おら!」

ウィザードはゲナムを蹴り返した

BGM《Just the Beginning》

ウィザードFD「はっ!ふっ!ふっ!はぁ!」

ゲナムDK「なぜだ!?!何故ここまで追い込まれる?!」

ウィザードFD「教えてやるよ、それはお前の弱さだ!...パラド、一緒に行くぞ」

パラドクス「あぁ!」

『キメワザ!』

『PERFECT クリティカルcombo』

『キックストライク・サイコー!』

ウィザード・パラドクス『はぁー!』

ゲナムDK「ぬっ!」

『キメワザ!』

『闇のメロディー!クリティカルミュージック!』

ゲナム・ウィザード・パラドクス「はぁ!」

ゲナムとウィザード、パラドクスの蹴りがぶつかり合う

くキバ側へ

キバ「はっ!ふっ!やっ!」

レイ「はぁー!」

キバ「ぐはぁ!...白峰さんどうして貴方が生きているんですか?あなたは名護さんに倒されたはずじゃ...」

レイ「そんなことはどうでもいい!」

『ウェイクアップ!』

レイの両手の鎖が消え、爪が展開された。

レイ「はぁ!はぁ!やー!」

第14話夏の地獄のレッスン

俺達はゲムとレイを倒したが……………

海末「何やってるんですか!!」

花陽「美晴くん、もう少し自分の身も考えて」

真姫「渡もよ!ほんと!イミワカナイ」

俺と渡先生は絶賛怒られてる。何故パラドに飛び散りが行かない

美晴「わ、分かったから早くレッスンしよ?」アセアセ

渡「そ、そうだよ!今日はその為に来たんでしょ?」アセアセ

俺と渡先生が焦りながら、話を変えた

海末「……………分かりました、では後でゆつくりお話ししましよ」

↳別荘前↳

海末「これらが今日と明日の練習メニューです!」

穂乃果「ええー!?海は?!」

海末「?私ですが?」

穂乃果「そうじゃなくて、海だよ!海水浴だよ!」

穂乃果がぐずると海末が練習メニューを指さした

海末「それならありますよ」

パラド「どれどれ:ダンスレッスン、発声練習:」

なんだいつもと変わらないじゃん

渡「:!?遠泳10km・ランニング10km…………」

美晴「ぶーーーー!」

渡さんの言葉に俺はお茶を吐いてしまった

花陽「美晴くん!?大丈夫?」

美晴「ああ、ゲホゲホツ海末お前いくらなんでもそれはやりすぎだ

ぞ

海末「いいえ、むしろこれぐらいがちょうどいいんです!」

パラド・美晴・渡「なんでやねん!」

海末の言葉に3人は同時にツッコんだ

美晴「と、とにかくこの練習メニューは無しだ!……………そうだなー、遊
びたい奴もいるらしいし、練習は明日にするか…」

海末「ちよ！美晴!」

穂乃果「本当!?!やったー!皆行こう!」

凜「かよちゃん!行つくにゃー!」

花陽「う、うん」

俺が練習は明日と宣言すると、皆海に向かって走ってた

海末「美晴!どういうことですか!?!」

美晴「悪いが、これは俺だけの意見じゃない、パラドと渡先生も同じ意見だ」

渡「海末ちゃん、あまり辛い練習をさせると皆倒れちゃうかもだよ?だからあまり無理をさせない練習がいいんじゃないかな?」

海末「……そうですね」

どうやら納得してくれたようだ

絵里「なら、海末行きましょ!」

海末「はい!絵里先輩……あ」

絵里「禁止って言ったでしょ?」

海末「すみません、絵里」

海末訂正し、絵里と一緒に皆方へ行つた

く海辺く

穂乃果「美晴くん!覚悟!」

美晴「甘い!」

『リキッド・プリーズ!』

穂乃果が水鉄砲を打ってきたが、俺は魔法でかわし、穂乃果の後ろへと回りこんだ

美晴「ファイナーレだ!」

パラド「お前がな!」

穂乃果にトドメをさそうとしたら、前に水が飛んできたので、反射的に後ろへと飛んでしまった

美晴「パラド……」

パラド「大丈夫か?穂乃果」

穂乃果「う、うんありがとう」

パラド「さあ、美晴1VS2だ!」

美晴「残念だけど……3VS2だ！」

俺がそう言うと、俺の後ろから花陽と絵里が飛び出し、2人に水鉄砲を打った

パラド「何?!ぐはあ！」

穂乃果「のわあ！」

絵里「ハラシヨー!やったわね」

美晴「ああ、そうだな……?」

花陽「美晴くん?どうかした？」

美晴が奥の森を見ていると、奥からガルーダがやって来た

美晴「そうか、ちよつと行ってくる」

絵里「あつ?!ちよつと！」

くダイビングシヨップく

「なんなの!?!こいつら」

「この人達はあの時の!?!」

「ええー!?!曜ちゃん知ってるの?!」

ダイビングシヨップの前でグールに襲われてる3人組を見つけたん?あれって曜ちゃん?

美晴「はあ！」

俺が变身しないまま、ウイザーソードガンをもって、グール達に斬り掛る

曜「美晴くん！」

「ええー!?!誰?知り合い?」

美晴「んー?まあ、話は後で、はあー!ふっ!とりや！」

俺は話しながら、グール達を相手をしてる

『キャモン・スラッシュ・シェイクハンド!』

『フレイム・スラッシュ・ストライク!』

美晴「でやあー!」

グールたちは爆散した

美晴「フィー……大丈夫？」

曜「うん!また助けられちゃったね」

美晴「仕方ないさ、ええーとそちらは?」

千歌「えと、た、高海千歌です！曜ちゃんとは幼馴染です」

果南「松浦果南です！二人は幼馴染です」

へえー3人とも幼馴染なんだ、なんか……

美晴「あいつらみたいだな」ボソツ

果南「あいつらみたい？」

曜「それよりなーんで美晴くんここに居るの？」

美晴「ああ、それは……………」

穂乃果「美晴くーん！」

千歌「!?この声は」

美晴「?どうした?穂乃果」

俺ら4人がはなしている、穂乃果がやって来た

穂乃果「どうした?じゃないよ!美晴くんが急にどっか行くから皆心配してるよ!」

ああ、それは申し訳ないな

千歌「あ、あの高坂穂乃果さんですか?μ sの……」

次回仮面ライダーウィザード

「私達もやってるんです」

「曜は好きなの?美晴くんの事」

「かよちゃんは大好きだよね、美晴くんのこと」

「パレード!」

次回第15話ゲームオーバー

「約束してくれ!必ずこの世界を希望で溢れさせてくれ」

第15話ゲームオーバー

穂乃果「そうだけど？」

千歌「私達もスクールアイドルなんです！」

穂乃果「ええー!? そうなの」

へえー、そうなんだちよつと意外かも…この会話終わりそうにないな

美晴「それじゃあ、2人共」

曜「うん！ バイバイ！」

果南「さよなら、気をつけてくださいね！」

2人と別れた後、別荘に戻ると花陽が抱きついてきた

穂乃果「あれ？ 皆居ない!？」

千歌「本当だー！」

《曜視点》

美晴くんが帰った後、私も帰ると行ったら果南ちゃんが見送りに来てくれた

果南「で？ 曜は美晴くんの事好きなの？」

曜「!? そ、そんな訳……」

一緒に帰っていたら、果南ちゃんがそんな事を言ってきた。何を急に……

曜「私じゃあ釣り合わないよオ……」

果南「そんな訳ないよ、もっと自信持って！」

曜「果南ちゃん……うん！」

私は果南ちゃんに元気づけられ、そのまま帰った

《美晴視点》

さあ、別荘に帰ってきた訳だが……今どういう状況？

凜「だから、ご飯食べた後は花火にや！」

海末「いいえ！ 練習です、昼にあんなに遊んだと言うのですから当然です」

凜と海末がリビングで口論している

パレード「まあまあ、2人共落ち着けて料理が置けないだろ？」

そう言いながら、カレーを持ってきたパラドが居た
美晴「なんだもう夕飯か？」

絵里「ええそうよ、それよりいつ帰ったの？」

美晴「今さつきさ……それより止めなくていいの？」

料理が来てもなお口論し続ける2人

2人を除く全員「はぁー……」

渡「2人とも、早く食べましょう？」

海末・凜「……はい」

結局渡さんが止めてくれた。

絵里「……なんで花陽だけお茶碗別なの？」

美晴「あつそれ俺も思った」

花陽「気にしないでください！」

えっいや凄く気になるんだけど……

穂乃果「それじゃあ、手を合わせて！」

全員「いただきます！」

いや小学生か！

美晴「……美味しいな」

パラド「ああ、確かに……」

渡「うん、そうだね……キバットは？」

キバット「ああ、こんな美味しいカレー久しぶりに食ったぜ」

そんな会話を俺たちはしていた

穂乃果「ええー!?キバットって普通のご飯食べるの?!」

渡「そう言えば、説明してなかったね」

説明中

全員「ごちそうさまでした」

渡さんの説明を聞きながら食べてたら、いつの間にか食べ終わって

いた

穂乃果「雪穂く、お茶」

ご飯を食べ終わったあと、すぐソファーに横になる穂乃果が居た……

雪穂ちゃんがどれだけ苦労してるか分かるよ

海末「穂乃果、太りますよ」

穂乃果「お母さんみたいな事言わないでよ」

穂乃果のぐーたらしている姿に海末が注意した。穂乃果あまり海末に家族って言うワードを出さない方が……

海末「……：貴方がそんなんだら言ってるんです！」

なんと！自分で克服したか

凜「じゃあ花火するにや〜！」

海末「凜！さっきも言ったでしょう！花火より練習です！」

はぁー……：まーた口論しているよ

「全く、夜だと言うのに随分賑やかだな」

2階から奴が降りてきた。待て待てな〜んでこいつが居る……：亜里沙ちゃんから話を聞く限り少しは警戒を緩めないとな

渡「……：久しぶりですね、デイケイド」

士「……：ああ、お前か」

絵里「士!?!なんでここに?!」

士「ああ、ただ単にウイザードに指輪を渡しに来た」

美晴「どんな指輪？」

俺がいつもとは違う雰囲気で言うと、士は少しきよどつた、……：そりやそうだ前に戦った相手が急に好戦的な喋り方をしているのだから

士「ほれ、これだ」

そう言われ、投げられた指輪をキャッチした

美晴「これは……：……」

士「じゃ、俺はこれで」

パラド「お前も泊まってけば？」

士「!?!」

絵里「そうね……：今帰っても亜里沙が居ないわ」

士「……：分かった」

士は渋々承諾した……：全く素直じゃないねえー

渡「皆さん、お風呂入ってきてください」

真姫「悪いわね、渡それじゃあお先に」

そう言いながら、女子たちはお風呂に行った

パラド「悪いちよつと外行ってくる」
そう言いながら、パラドは外へ走つてた。何があつたんだ

《女子視点》

〜女湯〜

希「ん〜…いい湯やな〜」

絵里「そうね」

ことり「…絵理ちゃんも中々あるね」

絵里の胸を見ながら、ことりは言った

絵里「ちよちよ!?!何言ってるのよ!?!」

穂乃果「そうだ!皆恋バナしよ」

穂乃果除く全員「恋バナ?」

穂乃果のその一言がμ、sの好意がバレてしまう

希「面白そうやん!…嘘ついたらワシワシやで」

凜「当然、かよちゃんは美晴くんが大好きだよね」

花陽「!?ちよちよ!凜ちゃん何言って／＼／＼!」

にこ「まあ、それは見てて分かるわ…そう言えば、穂乃果も最近

パラドを見てるよねえ?ついでに顔を赤くするし」

穂乃果「!?あちやくバレてた?」

ことり「…本当だつたんだ」

希「絵里ちは土君が大好きやんな?」

絵里「のの、希!?!何言ってるの?!」

希・絵里以外「ええー!?!絵里ちゃんが!?!」

絵里「…何よ悪い?」

真姫「開き直るんだ…」

海末「真姫は、渡さんですよね?」

真姫「…ええ、そうよ」

穂乃果「あつさり認めたら!?!」

こんな風にワイワイ騒いでた

《パラド視点》

パラド「…なんだお前は」

「悪いが死に行く人間に言う名は無い」

パラド「言ってくれるじゃねーか」

『ノックアウトファイター!』

パラド「変身!」

『デュアルアップ!』

『EXPLORATION HIT ノックアウトファイター!』

パラドは仮面ライダーパラドクスファイターゲーマーになった

そして、謎の男はドライバーの様な物を取り出した

『ジクウドライバー』

そして、ライドウォッチを取り出した

『ジオウ!』

ベルトに装填すると、後ろ時計の様な物が現れる

「変身……」

『ライダータイム!』

『仮面ライダー!ジオウ!』

そして、男はライダーになった

パラドクスF「はっ!ふっ!おら!」

ジオウ「ふん!甘い!」

パラドクスF「ぐはあ!つ、強い……」

そして、ジオウはライドウォッチを1回押した

『フィンニッシュタータイム!』

『タータイムブレイク!』

ジオウはキックをした

パラドクスF「ぐはあ!…不味いゲージが…」

パラドクスのライフゲージがもう1だけになってしまった

ジオウ「……さらばだ!」

ジオウが剣で斬るとゲージがゼロになってしまった

パラド「ぐは!」

ジオウはパラドの変身を解除したの見て、すぐ立ち去った

美晴「パラド!」

パラド「美晴……」

美晴「パラド!しっかりしろ!パラド!」

パラド「美晴、約束してくれ、俺が消えてもこの世界を希望で溢れさせてくれ…じゃあな俺の親友…」

『ゲームオーバー…』

次回仮面ライダーウィザード

「あいつなら帰ったよ」

「絶対優勝するよ！」

「怪人ライダー！」

「絵里！」

次回第16話怪人ライダー

第16話 怪人ライダー

『ゲームオーバー……』

音声が流れると共にパラドは粒子となり、消えてった

そして、すぐ近くには仮面ライダー。パラドクスのライドウオッチが置いてあった。俺はウオッチを拾い上げ

美晴「…ああ、任せろ…そして、俺が必ずおまえを救ってみせる！」

そう決意し、別荘へと戻る、皆には内緒にしとこう

く別荘く

美晴「ただいま」

別荘に戻ると既に布団などがひいてあった

穂乃果「おかえりー、あれ？パラド君は？」

美晴「…あいつなら帰ったよ、用事があったんだって心配掛けないようにだまって帰ろとしたんだって」

穂乃果「そうなんだ……」

嘘の事を言うと、穂乃果がシユンとした、これでいいんだあいつが死んだ事を言えばもつと悪くなる

絵里「さて、場所はどうする？」

海末「うくん」

希「じゃあくじは？」

希がそう言いながらクジの箱を持ってきた、準備良すぎだろ…
クジの結果

美晴

海末

花陽

にこ

凜

絵里

ことり

士

穂乃果

渡

こういう結果になった

真姫「じゃあ電気消すわよー」

真姫がそう言い、電気を消した

穂乃果「…ことりちゃん、起きてる？」コソコソ

ことり「何？穂乃果ちゃん」コソコソ

穂乃果「いやー、眠れなくてさ」コソコソ

絵里「早く寝なさいよ、海末や士、渡さんや美晴だって寝てるわよ

？」コソコソ

寝てるとそんな会話が聞こえる…早く寝ろよ

次に俺が目を覚ますと、目の前に枕が飛んできた、俺は慌てて布団

から出た

そこには枕投げをしている姿があった

美晴・寝てる人以外「あっ……………」

穂乃果の投げた枕がぐっすり寝てる海末へ当たった

海末「何事ですか？……………」

自分に当たった枕を掴みゆつくりと立ち上がる

穂乃果「いやー別にわざとじゃないんだよ？」

海末「…明日は朝早くから練習すると言いましたよね…………？」

あっそうなんだ

ことり「う、うん…」

海末「……………それなのに、こんな夜遅くに…ふ……………ふふふふふふ」

海末が狂ったように笑う。いや怖いんだけど、だけど次の瞬間に目

を疑った

シュンツ

にこ「ぐはあ！」

海末が投げた枕が高速枕となり、にこの顔面にクリティカルヒットした。いや、どう投げたらそうなるんだよ…

凜「ニコちゃん?!だ、だめにや手遅れにや」

花陽「ちよ、超音速枕」

絵里「は、ハラショー…」

海末「…覚悟はいいですか?…」

ことり「ど、どうしよう?穂乃果ちゃん」

穂乃果「くっ!生き残るには戦うしか、ふがア!」

穂乃果が喋ってる最中に枕が穂乃果の顔に当たった

絵里「ごめん!海末、うっ!」

絵里が後ろから奇襲を掛けるも、すぐにバレ逆に倒れてしまう

はぁー行くか

美晴・渡・士「お前らうるさいんだよ!」

俺と渡さんと士の枕が海末に当たり、何故か寝た

海末「……zzz」

美晴「……ふうーお前らも分かったらとっと寝ろ」

渡「明日は早いですからね」

μ, s「はーい」

そのまま皆眠りに着いた

翌朝

朝になって俺は案外早く起きたと思ったが真姫と希の姿が無かつ

た

く海辺く

俺が海を見に来たら、2人共海辺に居た。2人で何かを話してる様

だ:どうやら、皆起きた様だ

穂乃果「おーい!真姫ちゃん!希ちゃん!」

穂乃果に呼ばれ、2人は振り返る。全員海辺に来たら横一列に並ん

だ

穂乃果「よくし:ラブライブ!絶対優勝しよう!」

μ, s「おおー!」

皆気合入ってる……子の姿お前にも見せたかったよ……パラド……

そんな事を思っている矢先に

バァーン

近くが爆発した

μ, s 「キヤー」

美晴 「何?!」

「はぁーはっはっはっはっ」

士 「デイエンド?」

絵里 「士知ってるの?!」

士 「いや、あんなやつは…」

「怪人ライダー・アポロガイスト」

「怪人ライダー・フェニックス」

アポロガイスト 「H A H A H A !」

フェニックス 「さあ、楽しませて貰うぜ!」

美晴 「フェニックス……」

『仮面ライダー!』

『フレーム・プリーズ!』

『ガブツ』

渡・士・美晴 「変身!」

チノマノコデイエンドがアポロガイストとフェニックスを召喚したら、美晴達は変身した

デイケイド 「ふん!はっ!おりゃ!」

アポロガイスト 「甘い!はぁー!」

デイケイド 「ぐはぁー!」

『カメンライダー・ブレイド!』

チノマノコデイエンドはブレイドを召喚した

デイケイド 「!?こいつライダーも召喚出来るのかよ」

ウィザード 「は!ふっ!おら!」

キバ 「たあ!ふっ!とりゃ!」

フェニックス 「おいおい、こんの程度…か!」

ウィザード・キバ 「ぐはぁ!」

フェニックス 「つまんねえ…」

アポロガイスト 「フェニックス、奴を…」

フェニックス 「了解つと」

絵里「え?! キャー!」

士「絵里!」

次回仮面ライダーウイザード

「こいつを助けたきや、デイケイドだけで来い」

「俺が行かなきや、助けられない…」

「お前の正義を教えてください」

「これが俺とお前の力だ!」

次回第17話破壊者の正義

第17話破壊者の正義

士「くそ!」

フェニックスが絵里を攫うと、アポロガイストは消えていた

美晴「……奴はなんで絵里を……」

穂乃果「絵理ちゃん……」

俺らが考えていると赤い紙が落ちてきた

『金髪の女を助けたきや、デイケイドお前だけで明日の早朝山の上に来い!魔法使いやコウモリを連れてきたら女の命はないと思え!』

ことり「山?」

真姫「この近くの山って言ったら……」

渡「ゴーイング山……かつてそこでライダー同士の争いが起きた場所

……」

花陽「……え?」

士「……」

そのまま俺らは考えた、だが出てくる答えは何も無い

士「俺が行く……行かなければ助けられない……」

美晴「士……」

希「士君……」

士「作戦を練るからもう寝る……」

そう言い残し、士はリビングを後にした

《士視点》

士「早朝にゴーイング山か……」

俺は今絵里を助ける為の作戦を考えてた

士「あのデイエンド擬きは、怪人とライダーを召喚できる……困ったな」

コンコン

士「?入れ」

ことり「士さん……」

士「お前は確か……南ことりだったか」

何故俺の部屋にこいつが来る……希なら、まだ分かるが

ことり「作戦の案をあげようと……」

士「いや……」

帰れと言うとしたがこいつだって絵里の仲間……絵里を助けたいと言いたいと同じか

士「……聞かせてくれ」

ことり「うん、実はね……」

そこからは俺はこいつ……ことりの作戦を聞いていた。

数時間後

ことり「……どうかな？」

士「ありがとう、参考になる」

ことりの作戦は、案外悪くないと思った……普通、女子高校生から出る作戦とは思えないな

そこから俺は作戦立て、俺は眠りについた

朝・ゴーイング山前

士「よし……行くか！」

早朝の時間に俺はゴーイング山前に来た、あいつらはまだ寝てるから気づかれなかった……いやことりは知ってるんだった

そこから俺は登り続けた

ゴーイング山・山頂

フェニックス「……来たか」

アポロガイスト「……ふん」

絵里「士！」

山頂にはあの鳥擬きとアポロガイスト、そして縛られてる絵里がいた

士「約束通り、俺一人で来た……絵里を返してもらおう」

そう言いながら、俺はドライバーを腰につけた

士「変身！」

『カメンライダー・デイケイド！』

アポロガイスト「出合え、出合え！」

アポロガイストの合図で沢山の怪人がいる

デイケイド「はぁ……」

俺はその大軍に走ってつた

く美晴視点く

俺は士が1人で山を登るのを見た後、後をつけてつた。

くゴーイング山・山頂く

山頂に着くと、フェニックスと鎧野郎、縛られてる絵里がいた

『カメンライダー・デイケイド!』

アポロガイスト「出合え!」

士がデイケイドに変身し、怪人の軍団に走ってつた

視点は戻って

く士視点く

デイケイド「はあ!やあ!...グツ!どけ!」

『アタックライダー・クロックアップ!』

俺はカブトのクロックアップのカードを入れ、加速したが...

デイケイド「はあ!...ぐはあ!」

ワーム「デイケイドとは言え、カブトでも無いお前が使いこなせるわけが無い」

ワームにとめられた

アポロガイスト「はあー!」

フェニックス「オラア!」

士「うわあああ」

絵里「士ー!」

俺はアポロガイストと鳥擬きの攻撃で変身が解かれてしまい、ベルトが転がってしまった

士「くっ!くそ!」

「...よしよつと!」

俺は目を疑った

く美晴視点く

士「うわあああ」

士が負けてしまった、助けるか...俺はベルトを拾い上げた

美晴「...よしよつと!」

士「...なんで...お前が!」

美晴「こんなこともあろうかと、後をつけてったのさ……なあ士、お前の正義ってなんだ？」

士「…俺は破壊者だ、正義なんてあるわけない」

美晴「…じゃあベルトは渡せないよ」

『シャバドウビタツチヘンション』

美晴「変身」

『フレイム・プリーズ』

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』

俺は士にきつぱり言い離し、ウィザードへと変身した

ウィザード「はあ！ふっ！とりや！」

ワーム「ふん！所詮はクロックアップが使えない者だ！」

ウィザード「ぐはあ！………だったら動きを止めれば、良い話だ！」

『シャバドウビタツチヘンション』

『ウォーター・ドラゴン！』

『ザバザバシャーン、ザバンザバーン！』

ウィザードはさりげなく、新たなスタイルウォータードラゴンスタイルになった

士「あれは……俺が渡した……」

そうウォータードラゴリングは士が真姫の屋敷に来た時に渡した指輪である

ウィザードWD「さあ、ショータイムだ！」

く士視点く

『お前の正義ってなんだ？』

俺は未だにあの言葉を理解出来ていない。今まで破壊者と言われ続けた俺に正義なんて……

ウィザードWD「お前は……は！…どれだけ破壊者と言われ続けたか知らないけど……ふっ！」

フェニックス「ごちゃごちゃうるせえ！」

ウィザードは鳥擬きの攻撃をガードしながら俺に問いかけてきた

『スペシャル・プリザード！』

ウィザードの魔法陣を出し、魔法陣から吹雪が出てきた

フェニックス「な……………に……………!？」

ウィザード「お前は1度でも誰かの幸せや希望を守りたいって思わなかったのか?!

士「!？」

『スペシャル・サイコー!』

ウィザードの後ろから尻尾になった

ウィザードWD「はぁー! ……やぁー!」

フェニックス「ぬわぁ!？」

固まった鳥擬きをウィザードは尻尾で叩き割った

ウィザードWD「ふいぐ…どうだ? 答えは出た？」

士「……………ああ、やつとわかった」

アポロガイスト「はぁー!」

ドゴオ

美晴・士「うわぁぁぁ」

アポロガイスト「何を馬鹿な事を所詮破壊者は、破壊者、正義なんてあるわけが無い」

士「……………いや、ある人は言った俺達は人の自由の為に戦うライダーだ」

美晴「その心に破壊者も関係無い!」

絵里「士…美晴…」

アポロガイスト「貴様らは、なんなんだ!」

士「通りすがりの仮面ライダーだ! 覚えておけ!」

美晴「希望を守る魔法使いだ!」

『シャバドウビタツチヘンション』

『カメンライド』

美晴・士「変身!」

『フレイム・プリーズ!』

『ディケイド!』

『ヒーヒー、ヒーヒー!』

ウィザード「士、絵里を救出してくれ」

ディケイド「ああ、任せろ」

ウィザード「はあ！ふっ！はあ！おりや！」

アポロガイスト「ガイストカッター！はあ！」

ウィザード「ぐはあ！」

《《デイケイド側》》

デイケイド「絵里！今助けてやる」

スパア

絵里「土…ありがとう」

デイケイド「危ないから、隠れてろ」

デイケイドは絵里を助けると、絵里に隠れる様に言う。そして、アポロガイストと交戦中のウィザードの元に行く

ウィザード「くっ！…結構キツイな」

デイケイド「とりや！」

アポロガイスト「ふん！アポロショット！」

デイケイド「ぐはあ！…はあはあ何か手はないのか!？」

ウィザード「…諦めてたまるか、俺らは希望なんだから」

ウィザードがそう言うと、デイケイドのライドブツカーから1枚のブランクカードが出てくる。そして、何も無い絵柄がフォームカードとなる

デイケイド「そうだな、じゃあ試してみるか」

『ファイナルフォームライダー・ウィ、ウィ、ウィザード！』

デイケイド「ちよっとくすぐったいぞ」

そう言いながら、ウィザードの後ろに回り背中を開けた。

ウィザード「え!?!ちよ!?!うわあ」

ウィザードは姿を変え、ドラゴンになった

絵里「は、ハラショー……」

ウィザードドラゴン「な、なんなんだよ!?!これは……」

デイケイド「コレが…俺とお前の力だ！」

ウィザードドラゴン「はあー！」

アポロガイスト「くっ！はっ！アポロショット！」

アポロガイストは銃を打つが、ウィザードドラゴンの吐く炎で溶けてしまった

デイケイド「お前は…絵里を危険な目に合わせた、その罪を死んで償え！」

『ファイナルアタックライダー・ウイ、ウイ、ウイザード!』

デイケイド「はあ！」

デイケイドとウイザードラゴンパード飛び、ウイザードラゴンが変化しデイケイドがそれごと一緒に蹴る

コレがウイザードとデイケイドの技…ストライクデイケイド

アポロガイスト「ぐはあ!…ううお許してください魔王様ー!」

アポロガイストは爆散した

次回仮面ライダーウイザード

「俺もμ sに力を貸そう!」

「何だか、力が使いついな!」

「やったー!19位だよ!」

「続いてアイドル研究部」

次回第18話学園祭のライブの場所は

く3章歴史の変化

第18話学園祭のライブの場所は

俺と士は絵里を助け、別荘に戻った

穂乃果「絵里ちゃん！本当に良かった」

絵里「心配かけてごめんなさい」

希「ええねん…ああ、良かった♪えりちが無事で…」

花陽「…？美晴くんそんな事を指輪持ってた？」

絵里が無事な事を喜んでた中、花陽は俺の指輪を指さした

美晴「ああ、これ？士がくれたものさ…さあ、皆士から報告があるみたいだ」

穂乃果・ことり「なにになに？」

士「俺もμ、sに力を貸そう！…だから俺もマネージャーにしてくれないか？」

士はμ、s達にお願いした

ことり「うん！いいよ」

ことりが承諾する、どうやら他のメンバーも賛成の様だ

絵里「…変わったわね、士」

士「ああ、お前らと…アイツのお陰だな」

絵里と喋りながら、士は美晴を指していた

こうして…パラドを失ったけど士がマネージャーとして入ってきて、俺たちの合宿は幕を閉じる

翌朝

く学校・廊下く

穂乃果「やったね！ランキングが19位に上がったよー！」

穂乃果がランキングの事を伝えてきた。19位か…前まではお前もここに居たのにな

合宿でパラドは死んだ…その事を俺以外に知ってはいけない。だから理事長にはわるいが嘘を使わせてもらった

『パラドは海外に行ったので転校になりました』と…

海末「美晴…？まだ寂しいのですか？」

美晴「…ちよつとな、前までは一緒に居たから」

海末は悲しそうな顔をしていた俺に話しかけてきた。そんな時にクラスメートが話しかけてきた

「でも、穂乃果がここまでやって飽きないのは驚きだよね」

確かに…こいつの事だ、自分がハマった物は最後までやり遂げるんだろうな

「でもさ、そう考えると私たちが s の最初のライブを見れたってことだよね！」

「ああ、……………考え深いね！」

俺たちがそんな会話をしていると絵里がやって来た

絵里「美晴、穂乃果おはよう」

穂乃果「絵里ちゃん！おはよう」

美晴「おはよう絵里」

「穂乃果!?美晴君!?上級生だよ、」

穂乃果「絵里ちゃん学園祭これからは先輩も後輩も無いって言うから」

美晴「なんか知らんけど俺も巻き添いになった」

「へえーなんか芸能人みたいだね」

そうかな、芸能人は上下関係激しいと思うけど

そう思いながら、俺達は教室に入った

　　教室

穂乃果「え？サイン？」

「これから有名になるでしょ？サインを貰ってこうって思って…さっき園田さんにも貰ったんだけど…」

クラスメートが色紙を見せてきたけど、海末のサインがどこにもない

ことり「え？どこにあるの？」

「えっとねここに」

そう言いながら、色紙の右端を指さした。そこにな小さく園田と書かれていた

美・穂・こ「小つき！」

「恥ずかしいから、これが限界だつて言われちゃつて…」

美晴「それでアイドル出来る、あいつが凄いな」

「だから穂乃果はおおきく書いてね！」

穂乃果「うん！」

穂乃果は色紙を手に取り、大きく高坂穂乃果と書いた。だが、穂乃果の果の部分が大きくはみ出た。いや、それサインと言うより名前を書いているだけじゃね？

穂乃果「ごめん入りきれなかった！」

「本当穂乃果つて極端だよな」

まあ、確かに穂乃果は極端だな

その後ことりもサインを書いた。流石はミナリンスキー最後のはお手の物だな

「うーん…そうだ、美晴くんも書いてよ」

美晴「え？俺も？なんで？」

「実はねSNS上で、sに4人のイケメンマネージャー現るつて書かれてるの本当はパラド君のも貰いたかったけど転校しちやったから…」

なるほどなえー…あいつが生きていたなら……だけどな

美晴「いいよ、貸して色紙」

「はいどうぞ」

俺は、渡された色紙にサインを書いた

「おお、ことりちゃんと美晴くんはまともなサインだ」ホツ

美晴「いや、アイツらが酷いだけだろ」

時は変わり、放課後

く部室く

穂乃果「くうー、出場すればここでライブが出来るのかあー」

凜「すごいにやー！」

にこ「何うっとりしてるのよ！らっ、ラブライブ出場ぐらいで、ううっ…まだ、喜ぶのは早いわ！決定したわけじゃないんだから。気合い入れていくわよ！」

美晴「お前もうつとりしてるだろ…」

絵里「だけど、にこの言ってることは間違いでは無いわ」

そう言いながら、絵里はA―RISEのページを見せて来た

穂乃果「7日間連続ライブ!」

凜「そんなに!?!」

希「ラブライブの出場チームは2週間後の時点でも20位以内に入ったチーム。どのスクールアイドルも追い込みに必死なん」

にこ「つまりこれから本番って訳ね!」

美晴「だが今の話を聞いている限り喜んでいる暇も無いと思うぞ」

穂乃果「よし!もつと頑張ろ!」

絵里「今から特別な事をしてでも仕方ないわ、だから目の前の学園祭で精一杯ライブをすること!これが今の目標ね!」

にこ「そういうことなら、部長に仕事頂戴!」

絵里「ええ、にこにうってつけの仕事があるの」

部長にうってつけ?なんなんだ

く生徒会く

ガラガラ

「やったー!」

「茶道部は午後3時から1時間、講堂の使用を許可します」

俺達は絵里についていき、生徒会に来た。茶道部って講堂いる?

美晴「なんで講堂の使用がくじ引きなわけ?」

絵里「どうやら伝統らしいの……」

美晴「どんな伝統だよ…」

「続いてアイドル研究部」

「見てなさい!」

「ひいー…が、頑張ってください!」

にこがくじ引きを回そうとする、気合い入れるのはいいけど生徒会の人達を怖がらせるなよ

穂乃果「にこちゃん!頼んだよ!」

絵里「講堂を使えるかでライブでのアピールは大きく変わるわ!」
ガラガラ

にこが回し、出てきた色は

白

「残念！アイドル研究部は学園祭で講堂は使えません」

μ s 皆一斉に崩れた

く屋上く

講堂が使えないと宣告された我々は練習着に着替えて屋上にやってきた

穂乃果「どうしよう！」

にこ「だって仕方ないじゃない！くじ引きで決まるなんて知らなかったんだもん！」

凜「開き直ったにやー！」

にこ「うるさい！」

くじ引きだからな…にこが悪いって言う訳じゃないからなー

花陽「うう、なんで外しちゃたの…」

花陽が泣き始める、希がめっちゃこつちを見てくる…俺に泣き止ませろと?!

美晴「な、泣くな？」ヨシヨシ

花陽「う、ふあー」

頭を撫でると花陽の顔がトロ顔になった。そんなに気持ちいいのか？

真姫「でも、予想されたオチじゃない？」

穂乃果「あはは…」

結局その後、色々議論し講堂がダメなら屋上でライブをしよう！ということになった。

次回仮面ライダーウィザード

「はあー…いつ言おうかな…」

「やーっぱり何かあたんだな」

「やっぱり同じね」

「なんで学校にこんな物が」

次回第19話迷い

第19話 迷い

翌日

↳部室↳

海末「え？新しい曲…ですか？」

俺達は部室に集まって屋上ライブする曲について話し合っていると、穂乃果が新しい曲がいいと言いつつ出す

穂乃果「うん！昨日真姫ちゃんの新曲を聴いたら良くて、1番最初に出したら盛り上がるんじゃないかな？」

絵里「いい案だと思うけど、これから振り付けや歌をやるのよ？間に合うかしら…」

海末「ですが、他の曲のおさらいもありますし…」

花陽「私自信ないなあ……………」

穂乃果の案に絵里、海末、花陽がやるのは難しいと言う。

穂乃果「*μ*sの集大成のライブにしなきゃ！ライブライブの出演もかかってるんだよ！」

美晴「それは一理あるな」

穂乃果「でしょ。ラブライブは今の私たちの目標だよ！そのためにここまで来たんだもん。このまま順位を落とさなければ、本当に出場できるんだよ。たくさんのお客さんの前で歌えるんだよ。私、頑張りたい！そのためにやれることは全部やりたい！ダメかな？」

絵里「反対の人は？」

絵里が聞くと誰一人手を挙げない

穂乃果「みんなありがとう！」

誰も反対せず、賛成してくれた事に穂乃果は嬉しそうにしている。だがことりだけ何故か浮かない顔をしている

絵里「だけど、練習は厳しくなるわよ！特に穂乃果、あなたはセンターボーカルなんだからね、皆より人一倍キツイわよ？わかってる？」

穂乃果「もちろん！全力で頑張るよ！」

こうして俺達は学園祭で行う屋上ライブの曲を決めて、いつもより

力が入った練習をした

く昇降口く

美晴「ことり、時間あるか？」

ことり「え？い、いいけど」

俺はどうしてもあの時のことりの表情が気になって、練習終わりにことりに聞いてみた

美晴「単刀直入聞く、何か隠してないか？」

ことり「ぴよ!？」

美晴「……当たり前なんだな、話してみる」

ことり「う、うん」

くワックく

俺は事情を聞くためにことりと一緒にワックに来た

ことり「ごめんね？奢ってもらっちゃって……」

美晴「いいんだ、それで何があつたんだ？穂乃果と喧嘩でもしたのか？」

ことり「ち、違うよ、喧嘩はしてないよ……」

美晴「……なかなか言えない秘密なら俺は聞かない。」

ことり「う、うんごめんね……」

美晴「大丈夫だつて、話の内容によるけど、親友である穂乃果と海末に1番、に話した方がいいと思うし。でも、1つだけ言っておきたいことがある。バイトの件から少し思っただけだが、ことりは少し自分の想いを心に留めすぎる所があると思う。まあ、ことりが話したいタイミングとか、話すべきタイミングもあるだろうから、俺はとやかく言わない。けど、これだけは覚えておいてほしい。重大なことによればよるほど、後からだと言はれにくくなるぞ?」

ことり「美晴くん……うん、そうする」

美晴「さあ、早く食おうぜ！」

そのまま俺とことりはワックでハンバーガーを食べて帰った

く住宅街く

俺はあの後ことりと別れて、帰路を辿っていた……が
グール「うおお……」

美晴 「はあー…俺今日疲れてんのに…!？」

俺はめんどくさいと思っただら、襲われている人に目をやるとそこには千歌さんと曜ちゃんど…誰だろう?あの子

千歌 「もう!本当にしつこい」

曜 「もう疲れてきた…」

「2人ともしつかりして」

美晴 「はいはい!どいたどいた」

千歌 「美晴さん!？」

「?誰?」

美晴 「ん?まあ自己紹介は後にして…」

「やあ!久しぶりだね!ウィザード」

「今あんたに用はない」

美晴 「それは俺も同じだ!グレムリン、メデューサ!

俺はグルルを従えていたファントム、緑色のファントムグレムリンと蛇の髪の毛のメデューサを前にして戦闘態勢に入った

『ドライバーオン・プリーズ!』

『シャバドウビタッチヘンシーン』

美晴 「変身」

『フリーズ・プリーズ!』

『カチコチ、カチコチカチコチ!』

俺は仮面ライダーウィザードフリーズスタイルになった

グレムリン 「いやいや今日は戦いに来たんじゃないから、それじゃ

あねー!」

そう言い残し、グレムリンとメデューサはその場から消えた

そのまま俺は曜ちゃんと千歌さんそして、2人と同じスクールアイドルの桜内さんと別れた

翌日

く理事長室く

美晴 「ええー!？」

いずみ 「ごめんなさいね?でも向こうがも男子生徒を入れたいとの事なの」

俺は次の日理事長に呼び出された。内容は曜ちゃん達がいる学校、浦の星女学院に少しの間転校して欲しいと言われた

美晴「μ，sはどうするンですか？」

「俺達を忘れてないか？」

美晴「土…渡さん…」

いずみ「2人もμ，sのマネージャーなんでしょ？土君が3年生に転校して、渡君が1年生に転校するの」

渡「美晴くんがいない間は任せて！僕達だってマネージャーなんだから」

土「そういう事だ」

美晴「……………分かったよ、皆にもちやんと伝えろよ」

そのまま俺は浦の星女学院に1ヶ月転校する事になった。

浦の星女学院へ

美晴「はえー音ノ木坂とは違う良さがあるな」

「あなたが鞠莉さんが言っていた美晴さんですか？」

美晴「え？は、はい！あのー…あなたは？」

ダイヤ「ゴホン、申し遅れました。私この学校の生徒会長を務めさせてもらってる黒澤ダイヤですね、以後お見知りおきを」

生徒会長さんだったか…なんか性格が絵里みたいだな

美晴「えと1ヶ月間浦の星女学院に転校する氷海美晴です」

ダイヤ「では理事長室に連れていくのでついてきてください」

そのまま俺はダイヤさんに連れていかれた

理事長室へ

ダイヤ「ここですわ」

コンコン

美晴「し、失礼します」

「おお、ユウーが音ノ木坂学院から美晴ね！」

美晴「そうですね…ってええー!？」

理事長室に入ると椅子がぐるりと回り、そこにいたのはどこからどう見ても女子高校生の人がいた

ダイヤ「鞠莉さん、説明してください」

鞠莉「OK！私が浦の星女学院の理事長兼女子高校生の小原鞠莉です！」

いや、普通の学生が理事長って凄いなんだけど……ん？小原……？

鞠莉「oh！その通りねー、マリーはオハラホテルの娘ねー！」

美晴「いや、さらつと心を読まないでください」

鞠莉「ごめんなさいね……！その時計って……」

鞠莉さんは俺のポケットに入ってたパラドのライドウォッチを指さした

美晴「？これがどうしたんですか？」

鞠莉「えーと、確か……あつた！」

鞠莉さんは引き出しから小さいアタッシユケースを出して、その中からライドウォッチを出してきた

鞠莉「やつぱり、同じね」

美晴「ライドウォッチ……」

鞠莉さんが出てきたライドウォッチは仮面ライダー鎧武のウォッチだった

美晴「なんで学校にこんな物が……」

次回仮面ライダーウィザード

「どうしてウォッチがここに？」

「とある人に渡されたの」

「これから1ヶ月間浦の星女学院に転校する氷海美晴です」

「お前がウィザードか……」

次回第20話浦の星女学院に転校

第20話 浦の星女学院に転校

美晴「なんでウォッチを持ってるんですか？」

鞠莉「よくわかんない人が1ヶ月後にこの時計を取りに来る人が来るって置いてったの」

ある人？1ヶ月に取りに来る人が来るって……俺？

鞠莉「取りに来る人ってあなたの事だったのね」

美晴「いや…俺は」

鞠莉「はい！どうぞ」

俺は違うと主張しようとしたが鎧武ライドウォッチを押し付けられた

鞠莉「あなたのクラスは2-1ね」

美晴「えっあいやちよ……分かりました」

はあ…2-1か、音ノ木坂と同じだな

2-1教室

先生「今日は1ヶ月間この学校に転校して来た子が来ます」

ざわざわ

先生「じゃあ入ってきて」

ガラガラ

曜・千歌・梨子「え!？」

美晴「はじめまして、音ノ木坂学院から1ヶ月間この学校に転校して来た氷海美晴です、よろしくお願いします」

先生「じゃあ美晴君の席は桜内さんの隣ね」

へえー桜内さんこの学校のひとだったんだあ

昼休み

千歌「美晴君！お昼一緒に食べよ」

美晴「ん？いいよ」

曜「じゃあ部室で食べよ、皆にも紹介したいし」

部室ねえ……待てよ、この展開どこかで

曜「じゃあレッツゴー！」

部室前

美晴「へえーここが部室なんだ」

曜「そうだよ」

ガラガラ

千歌「ごめん！遅れちゃった」

「遅いぞら〜」

「だ、大丈夫です」

「全くこのヨハネを待たせるなんていい度胸ね」

桜内「実は皆に紹介したい人がいるの」

曜「…ルビイちゃん気をつけてね」

「？」

千歌さんが部室に入ると桜内さん、曜ちゃんが入っていった。気をつけてねって危険人物扱いかよ

千歌「じゃあ入ってきて」

ガラガラ

美晴「メンバーに気をつけてねって言うんだったら連れてこなくてもいいんじゃない……」

「ピギイ!?男の人!」

「ルビイちゃんしつかりするぞら〜」

千歌「まあとりあえず自己紹介していい」

美晴「はあー……今日から1ヶ月間浦の星女学院に転校して来た氷海美晴です、よろしくお願いします」

花丸「おらは国木田花丸です。よろしくお願いします」

ルビイ「く、黒澤ルビイです……よろしくお願いします」

善子「漆黒の堕天使ヨハネよ」

3人とも自己紹介をしてくれた。赤髪の女の子……確かルビイさんだっけ?なんだか怯えているような……

鞠莉「ohその通りねー」

美晴「!」

千歌「あ!遅いよー3人とも」

この声は……まさか

美晴「鞠莉さん……ダイヤさんに……果南さん?まさか……」

果南「そうだよ、私達もスクールアイドルなの」

ダイヤ「後ルビイは男性恐怖症なので気をつけてください」
あつそうなんだ、じゃあルビイさんには丁寧と話さないと

梨子「そう言えば、美晴さんは音ノ木坂学院から来たんですよね?」

美晴「うえ?そうだけど……」

ルビイ・ダイヤ「!?本当ですか!」

美晴「え?そ、そうだけど……」

ルビイ「じ、じゃあ花陽さん達と知り合いなんですか?!」

曜「美晴くんはね、μ'sのマネージャーなんだって」

いや、そんな珍しい事か?

そう思っていたら電話が鳴った

ピロロロロロロロロロロ

美晴「あつすいません…もしもし」

絵里『美晴?どう元気にやってる?』

美晴「当たり前だろ、そっちは大丈夫か?」

絵里『ええ、大丈夫よって言いたいんだけど…花陽が…』

美晴「?花陽になんかあったの?」

絵里『いやそれが……「絵里ちゃん誰と話してるの」美晴だけどつ

てちよつと花陽!、』

花陽『もしもし!美晴くん?!黙ってしちゃったの?!』

美晴「あー…いや…ごめん、また今度遊びに行くからな」

花陽『いや、待ってくだー』

ガチャ

ダイヤ「美晴さん?誰と電話してたのですか?」

美晴「いや、少し…ね?」

ダイヤさん達には言わなくていいか面倒だし

ルビイ「そ、そう言えばみ、美晴さんって音ノ木坂学院から転校し

て来たんですね…?」

ルビイさんが恐る恐る聞いてくる。無理しなくてもいいのに

美晴「そうだよ、ルビイさん?無理して会話しなくてもいいよ?」

ルビイ「は、はい」

千歌「でも、いいなあ音ノ木坂学院に居たなんて」

曜「そうだよねえ」

美晴「??なんかいい事あるの?」

正直言つてなにがいいのかわからん

ダイヤ「そうですね、なぜなら音ノ木坂学院には、sがいるんですの」

美晴「ふうくん…てか千歌さんと曜ちゃんと果南さんは穂乃果とあつたじゃん」

千歌・曜・果南「あ……………」

ルビィ「!?本当ですか?!」

さつきまで怖がってたルビィさんが興奮して喋って来た。いや、人変わりすぎだろ…:花陽みたいだ

鞠莉「oh…ルビィ人が変わってるわ」

善子「全くね」

ドゴおーん

全員「!?」

美晴「…ちよつと行ってくる」

今の爆発音はなんだ!?もしかしてただけどファントム?いや、ファントムは空から爆発なんてしない、じゃあなんだ

→校庭→

「来たか……………」

美晴「お前は……………」

爆発音が鳴った校庭に行くと1人の青年が立っていた。年齢は俺と同じくらいだ

「…………俺は如月蒼…………またの名を」

そう言いながら、ベルトとライドウオッチを取り出した

『ジクウドライバー!』

蒼「仮面ライダージオウ……………」

『ジオウ!』

蒼「変身……………」

『ライダータイム!』

『仮面ライダージオウ!』

ジオウ「ふん!」

美晴「危ね!」

蒼一と名乗った男はライダーになり、俺を襲ってきた

美晴「何だか分からないけど」

『ドライバード・プリーズ』

『シャバドゥビタッチヘンシーン』

美晴「変身」

『フレイム・プリーズ!』

俺は攻撃を躲しながら変身した

ウイザード「はあー!ふ!」

ジオウ「なるほど、お前がウイザードか…ならばお前の力貰うぞ!」

ウイザード「渡すかよ」

ジオウ「ふん!おらア!」

ウイザード「はっ!フツ!…ぐはあ!」

ジオウと激しい剣のぶつかり合いがあつたが俺が負け!転がつてしまった

ジオウ「終わりだ…!?!」

ジオウの足に銃弾が来て、ジオウがかわす為に後ろに下がった

「全く、なにが元気にやってるだ…」

「でも、そういうのも美晴くんぽいけどね」

ウイザード「士…:…渡さんどうして…」

千歌「美晴くん!」

ウイザード「千歌さん…」

士「あいつが高坂の携帯に電話してきたんだ」

あの時に交換していたのか…:…今回は穂乃果と千歌さんに助けられたな

ジオウ「キバ、ディケイド…」

士「まずはあいつを片付けてからだ」

『ガブツ』

『仮面ライダー』

士・渡「変身！」

『ディケイド！』

キバ「ここから逆転と行こうか」

ジオウ「そいつはどうかな？」

ジオウは右手からライドウォッチを取り出した

『ビルド！』

ジオウはライドウォッチをベルトの左側に装填し、ベルトを回転させた

『アーマータイム！』

『ベストマッチ！ビルド！』

ジオウはビルドアーマーにフォームチェンジした

ジオウB「さあ、行くぜ」

ディケイド「ビルドか……ならこつちもビルドだ」

『仮面ライダー・ビルド！』

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！いえーい』

ビルドD「行くぞー！」

ジオウB「はっフツやつおりや！」

ビルドD「ふん！はっ！はあー！ふん！」

ジオウB「…やはり1人はキツいか、仕方ない来てくれ」

「仕方ないね」

ビルドD「!?海東…」

海東「久しぶりだね、士ここからは僕もやらせてもらうよ」

『仮面ライダー』

海東「変身！」

『ディエンド！』

海東と呼ばれた男は仮面ライダーディエンドに変身した

次回仮面ライダーウィザード

「何故そいつに着く?!」

「お前の力を貰うぞー！」

「美晴くん！」

「これを代わりにやるよ」

第21話消える力

デイケイド「海東……」

ウイザード「誰？」

キバ「彼は海東大樹…仮面ライダーデイエンドだ」

海東大樹か…あいつは如月蒼一の仲間なのか？

デイエンド「正直言って僕は戦う気はないんだけどね」

『アタックライダー・ブラスト！』

デイケイド「なら、答えろ何故そいつに着く?!」

デイエンド「僕も君と同じくあたらしい力を手に入れたんだ」

『仮面ライダー・イクサ！』

『仮面ライダー・メテオ！』

デイエンド「どうぞ」

デイエンドはデイエンドドライバーにふたつのカードを入れて、俺達に向かって銃を打ってきた

イクサ「その命…神に返しなさい！」

メテオ「俺は仮面ライダーメテオ…お前の定めは俺が決める」

ウイザード「俺と渡さんがあの2人のライダーを、士はデイエンドを頼む！」

デイエンド・キバ「了解！」

くウイザード・キバ側へ

メテオ「ふううーわちや！」

ウイザード「はあー！ふん！」

イクサ「待ちなさい！」

キバ「ぐはあ…！来い！バツシヤー！」

『バツシヤーマグナム！』

キバB「ふん！はあー！そこだ！」

イクサ「甘いです！はあー！」

メテオ「ふおおー！わちや！はあー！」

ウイザード「くっ！こいつ、ぱんちが早い…ならー！」

『ウォーター・ドラゴン！』

『ザバザババシャーン、ザバンザバーン』

ウィザード「これで！」

『スペシャル・ブリザード！』

ウィザード「ファイナーレだ！」

『ウエイクアップ』

『メテオ・リミットブレイク』

『バツシャバイト！』

『スペシャル・サイコー！』

4人が同時に必殺技を放った

メテオ・ウィザード「ふわあちゃ！」「でやあー！」

イクサ・キバ「はあー！」

ライダー同士の必殺技のぶつかり合いを制したのは

キバとウィザードだった

く〜デイクイド側く

『アタックライダー！クロスアタック！』

デイクイド「ぐはあ！くっ！…海東！何故そいつに着く?!」

デイクイド「彼は非常に面白い計画を立ててるからね、それに彼と

居れば君と戦えるしね」

デイクイド「計画…だど？ふざけるな！」

『アタックライダー・ブラスト！』

デイクイド「甘いんだよ」

『アタックライダー・バリアー！』

デイクイドはデイクイドの弾を防いだ

デイクイド「今回のターゲットは君じゃない…ウィザードだ」

デイクイド「!?まずい！美晴！」

デイクイド「行かせないよ」

『ファイナルアタックライダー・デイ、デイ、デイエンド！』

デイクイドが美晴に逃げる様言おうとした瞬間、デイクイドの前に

カードのトンネルがデイクイドまで続き、デイクイドが光線を放った

土「ぐはあああー！」

デイクイド「それじゃあ、後は任せたよジオウ」

『アタックライダー・インビジブル!』

ディエンド はディケイドが変身解除されたのを確認し、消え去った

「ウイザード・キバ側」

ジオウB 「ふん!」

ウイザード・キバ 「うわあ!」

ジオウB 「ビルドでもいいが、別のやつも使うか」

そう言いながら、ジオウは右腕からライドウォッチを取り出した

『エグゼイド!』

ジオウはビルドウォッチを取り外し、エグゼイドウォッチをジクウドライバーの左側に装填し、ドライバーを回転させた

『アーマータイム!』

『レベルアップ!エグゼイド!』

ジオウは仮面ライダージオウエグゼイドアーマーに姿を変えた

ジオウE 「はあ!、はあ!」

キバ 「くっ!ぐはあ!」

ウイザード 「グッ!...こうなったら一気に片をつける!」

キバ 「美晴くん!危険だ!」

『キックストライク!サイコー!』

ジオウE 「かかったな!」

ジオウはウイザードにブランクライドウォッチをかざした

美晴 「でやあー!?!うわあ!」

『ウイザード!』

美晴は変身解除をされた、そして、ブランクライドウォッチが変化した、ウイザードライドウォッチになった

美晴 「そんな!?!」

ジオウ 「ふん!おらア!」

ジオウは倒れている美晴の腹に蹴りを入れた

美晴 「うっ!」

ジオウ 「:代わりにこいつをやる」

美晴は朦朧とする意識のなか、ジオウに投げ渡されたウォッチを手

につかんだら倒れてしまった

く西木野総合病院く

美晴「……………?ここは?…」

俺が目を覚ますと、見知らぬ場所にいた

真姫「私の病院よ」

俺の寝ているベッドの隣に、全員がいた

美晴「みんな…どうして」

絵里「士達から急いで、浦の星女学院に救急車を呼んでくれて
言つてたからね」

そうだったのか…千歌さんたちは大丈夫かな?

海末「渡さんから話を聞きました…仮面ライダーの力が盗られた、
と」

美晴「…夢じゃなかったのか」

俺の自分の手にビルドウォッチが握っていた

士「夢だったら、俺達もここまでしないさ」

ことり「士君…」

渡「ごめん美晴君…あの後あのライダーを追ったけど見失っちゃつ
た」

美晴「大丈夫です…渡さんと士のせいじゃありません」

花陽「でも、仮面ライダーの力を失っちゃたけど、これから美晴君
はどうするの?」

確かに……ライドウォッチを代わりに渡されてもなあ

希「そう言えば、美晴くんは力を盗られた代わりにウォッチを渡さ
れたやんな?」

美晴「そうだが…」

希「なら、絵里ちがライダーになってた時みたいにウォッチを使え
ば、いいやん」

そうか!その手があったか

渡「いや、そうにもいかない」

真姫「…どういうこと?渡」

士「そもそもライドウォッチは仮面ライダーの力がウォッチの中に

入った事のこと」

渡「ウオツチを使えるのは、資格者かそのライダー本人にしか使えないんだ…美晴くんの場合はウィザードだったから、他のライダーになる事は出来ないと思う……」

……くそ！どうすりゃいいんだよ……

美晴「……少し風に当たってくる」

俺はそう言い残し！自分の病室を出て行った

次回仮面ライダーウィザード

「ウィザードの力が消えたと同時に俺のウィザードのカード、そして、フアントムも消えていたんだ」

「希望を守る力も無くなった俺にお前らを守る事は出来ない」

「そんな事……言わないで……」

「兄さん……」

次回第22話消えた闘志

第22話消えた闘志

く西木野総合病院・屋上く

美晴「……、はあー……」

どうすりゃいいんだ……仮面ライダーでも無くなってただの一般市民……

美晴「……あいつなら、どうしていたかな？」

俺はポッケから、ビルドウォッチとパラドクスウォッチを取り出し、眺めていた

美晴「パラド……俺が必ず助けてみせる」

俺がそう誓っていた

同時刻病院の待ち合い室で

く西木野総合病院・待ち合い室く

士「少し不可解な事が起きた」

穂乃果「不可解な事？」

士「ああ、美晴のウイザードの力が消えたと同時に俺のウイザードのカードと美晴が戦ってきた相手ファントムが消えたんだ」

士はそう言いながら、ウイザードのブランクカードを皆に見せつけた

絵里「そんな……」

渡「つまり、ウイザードの歴史が消えたと言いたいのか？」

士「……そうとしか考えられない」

希「ウイザードの歴史が消えたってどういうこと？」

渡「なら、ここじゃない方がいいかな」

渡がそう言いながら、片手を上げると、今まで病院にいたのに急に宇宙に来た

凜「にやにや!?宇宙に来ちゃったにや!？」

渡「じゃあ説明を始めよう」

渡がそう言うと、地球が20個出てきた

渡「まず、20の世界に20人の仮面ライダーが生まれました、それはそれぞれが独立した物語……この世界も20個の世界の1つ

……ですが突然20の世界が1つに融合してしまいましたそして、この世界には存在しないはずの仮面ライダーが生まれてしまった、原因は想定外の事が起き、別世界にいるはずだった僕や美晴くんディケイド、そしてパラドクスまでもがこの世界に来てしまった」

「ここちよつと待ちなさい、じゃああなた達はどうやって来たのよ！」

士「世界が融合すると、20の世界にいたライダー達が1つの世界に生まれて来た歴史になる」

パチン

渡が指パッチンをすると、宇宙にいたはずが待ち合い室に戻ってきてる

渡「すぐに理解しなくてもいいよ、少しずつ信用してくれれば」

絵里「質問いいかしら？」

士「なんだ？」

絵里「20の世界にライダーが生まれたの分かったけど、美晴の力を奪ったライダーはなんなの？」

士「……あいつは仮面ライダージオウ、ライドウォッチで戦う仮面ライダーだ」

花陽「ライドウォッチで戦う？」

士「ああ、ライダーのウォッチにはそのライダーの歴史全てが詰まっている…例えば小泉が持っているカブトのライドウォッチ、それには仮面ライダーカブトの歴史が詰まっている」

花陽はポケットからウォッチを取り出した

花陽「じゃあもしかしたら、このウォッチを……」

「ここ狙ってくる可能性あるって事ね」

穂乃果「でも、なんで美晴くんにウォッチをあげたりなんかしたんだろ？」

渡「そうなんだよ、それが妙に突っかかって……」

士「……………」

士は黙りながら、待ち合い室を去った

く西木野総合病院・屋上く

《美晴視点》

美晴「パラド……」

士「やはり、パラドは転校なんかじゃなかったんだな」

美晴「!?士……」

士「教える、パラドになにがあった?」

美晴「……実は」

く説明中く

士「……なるほど、お前と希望の約束をし、ウォッチを残してこの世を去ったのか……恐らく」

美晴「パラドの歴史は消えたって言いたいんだろ?」

士「……知っていたのか」

俺は士が言おうとした言葉を俺が繋げた、理解はしなくなかったがしてしまった

美晴「このウォッチと今の俺の現状が点と点を繋いでくれた……俺はμsやAquoursを守りたかった……だけどそれはもう出来ない……ウィザードでも無くなつてただの力を持たない人間

俺はもう誰の希望も守れない……」

パシーン

美晴「痛って……」

士「お前はそんなに弱かったのか?!?俺に守る物を見つけさせてくれたお前はそんなにも弱かったのか!?!」

左頬がじんわり痛い……士は俺を左頬を殴っていた

美晴「こんなんさ……人間は力を失えばどんな人だつて弱くなる……例えばそれがライダーだとしても……」

士「てめえ……!」

ドごおーん

突然街の方から爆発音がした……恐らくなにが暴れているのだろう

士「!?……っ」

士は爆発した場所を見て、屋上を後にした

美晴「……」

俺は周りを見渡したら、懐かしい森林があった……俺はそこには行き

たかった…だから

俺は屋上から飛び降り、森の方へとも向かった

《花陽視点》

私は聞いてしまった…パラド君が死んでしまった事を…そして、あの美晴くんが弱音を吐いてるところを

花陽「誰の希望も守れないなんて言わないで…」

ドゴーン

そんな時に街の方から爆発音がした

バーン

屋上のドアがいきよよく開き、中から土君が出てきた

花陽「土君…」

土「小泉…あいつの傍にいてくれ」

花陽「うん…」

そう言い残し、土君は渡君を連れて、病院を出ていった

ガチャ

私が屋上のドアを開けると、そこには美晴くんの姿がなかった

花陽「…え？どこ…行つたの？」

「あの人の事は私に任せてください」

花陽「え？」

屋上に私と同じぐらいの女の子が立っていた

《美晴視点》

俺は森林が大好きだ…風で揺れる林たちの音…そして、木々の匂い
何もかもが俺は好きだ

そして何よりも俺が好きなのは

美晴「やっぱり…変わんないな」

小さい時俺とパラドと…俺の妹とよく一緒に来た湖である

美晴『パラド、咲あぶないよ』

パラド『だいじょうぶだいじょうぶ、ね？咲ちゃん』

咲『そうだよ、おにいちゃんもおいでよ』

美晴『はあ…ふくがぬれちゃうよ…』

俺はふと思いついた…懐かしい9年前位の話思い出した

美晴「パラドも死んで……咲もない……」

咲「というのは俺の1つ下の妹、氷海咲の事だ」

咲は5年前俺がこの世界に来る前に家の火事で死んだ

美晴「俺に関わる人はみんな死ぬ……そんな奴に希望は守れないよな」

「兄さん……」

美晴「?……!?!」

後ろから聞き覚えのある声がして、後ろをむくとそこにはいないはずの人物がいた

美晴「咲……!なんで」

咲「私ね、あの時死んだ後神様がこの世界で新しく暮らせて言われたんだ」

美晴「そう……なのか……良かったもう一度お前に会えて」

咲「……兄さん自分に関わった人が死んでいくなんて思わないで」

美晴「何言ってるんだよ……事実だろ?」

咲「じゃあ高校で出会った人達は死んでった?」

俺は自分の中で当たり前だと思ってた答えが咲に打ち破られた

美晴「死んで……ない」

咲「それはなんでだと思う?」

皆が死んでない理由?……分らないいくら答えを探そうとも答えは見つからない

咲「それは兄さんが皆を守ってきたからだよ」

美晴「俺が……皆を?」

咲「そうだよ兄さん、今まで使ってた力が使えなくても今ある力で皆の希望を守ればいいじゃん」

今ある……力、フフ何迷ってたんだよ、答えはすぐ近くにあったんじゃない

美晴「ありがとう咲、目が覚めたよ」

咲「うん!」

その時俺のポケットが光った

光っていたものはビルドウォッチだった、もしかしてと思い、俺は

ウォッチを起動する

『ビルド！』

起動した瞬間、俺は白い空間にいた。そこには1人の男の人が立っていた

美晴「あなたは？」

戦兎「俺の名前は桐生戦兎、仮面ライダービルドだ」

美晴「ビルド…どうしてウォッチがあるからビルドの歴史は消えたはずじゃ…」

戦兎「—ああ、俺は確かに蒼一にウォッチを託した、それはただ単にあいつが気に入ったとかそういう理由じゃない…：あいつには誰よりも優しさがあった」

あのジオウに…

戦兎「お前の力を奪ったのも、この世界を救う為だと思っゾ」

美晴「世界を…：救う？」

戦兎「ああ、俺も世界を救いたい…：だけど今の俺じゃもう無理だ…：だから前に託したい、この天才物理学者、桐生戦兎のいや、仮面ライダービルドの力をお前に託したい」

戦兎さんは俺にビルドドライバを渡した

美晴「ビルドの力を…：はい！必ず歴史を紡いで見せます」

ドライバを受け取ると、戦兎さんはドアを指さした

戦兎「さあ、行け！お前の守る物を守る為に」

美晴「はい！」

俺はドアに走り出し、ドアを抜けた

戦兎「…頼んだぞ氷海…：美晴」

戦兎は美晴の名前を言い、光となって消えた

美晴「咲…：行こうみんな所へ」

咲「うん！」

《土・渡視点》

キバ「ぐはあ！」

デイケイド「くっ！ぐわはあ！」

チノマノコデイエンド「ふん！」

『怪人ライダー・アナザービルド!』

チノマノコディエンドは仮面ライダービルドのは偽物、アナザービルドを召喚した

アナザービルド「ベーストマーチ」

キバ「ビルド? いや違う」

アナザービルド「ふん! はあー!」

ディケイド「うわあ!」

アナザービルド「はあ! はあー!」

渡・士「うわあああー!」

アナザービルドはビルドの必殺技ボルテックスファイニッシュをし、士と渡を变身解除させた

渡「くっ! 強い………」

アナザービルド「はあー!……うわあ!」

士「?」

「大丈夫か? 士、渡さん」

俺たちは目を疑った

《美晴視点》

俺はあの後咲を皆のいる病院に送り、士と渡さんを助けに行った

美晴「士、渡さん遅れてごめん」

渡「美晴くんなんで、なんで」

士・渡「ビルドのベルトを!」

美晴「まあ話は後で! まずはあいつを」

俺は2本のボトルを取り出した

シヤカ、シヤカ、シヤカ、シヤカ

『ラビット! タンク! ベストマッチ!』

俺はボトルを振り、ベルトに入れて、レバーを回した

『Are you ready?』

美晴「变身!」

『鋼のムーンサールト! ラビットタンク! いえーい』

俺は仮面ライダービルドに変身した

ビルド「勝利の法則は……決まった!」

アナザービルド「うわあー！」
ビルド「はっ！ふっ！やあ！」

アナザービルド「ぐう！…ふん！」

アナザービルドは2人のボトルを口に入れて、レバーを回した
『バード！ガンマン！ベストマツチ！』

アナザービルドの背中から羽が生えて、手には拳銃を持っている
アナザービルド「は！は！はあ！」

ビルド「うっ！ふっ！ぐはあ！…やるな相手が飛ぶなら」

『タカ！ガトリング！ベストマツチ！』

ビルドは2つのボトルを入れ替え、レバーを回した

『Are you ready?』

ビルド「ビルドアップ！」

『天空の暴れん坊！ホークガトリング！いえーい』

ビルドHG「はあー！は！そこだ！」

アナザービルド「ふん！はあー！は！」

ビルドHG「終わりだ！」

ビルドはホークガトリングのスリンガーを回した

『10…20…30…40…50…60…70…80…90…100
！』

回していく事に数字の英語を喋っている

回し終わると、ビルドとアナザービルドは丸い球体の中にいた

ビルド「ふうー！はあー！」

ビルドが打つと沢山のタカが球体を駆け巡りアナザービルドを攻
撃する

アナザービルド「うっ！ぐっ！うわあー！」

アナザービルドは爆散した

次回仮面ライダービルド

「μ,sとAqoursの合同練習がしたいんだが」

「もう1ヶ月経ったし、帰るか音ノ木坂に」

「その誰？」

「また、一緒に練習しましょう！」

次回第23話 μ s と A q o u r s の合同練習

第23話 μ、sとAqoursの合同練習

く浦の星女学院・部室く

昼休み

美晴「今日で1ヶ月か…」

アナザービルドを倒してから、今日で1ヶ月を迎える。つまり、俺が音ノ木坂学院に戻るにである

千歌「寂しくなるなあ…」

美晴「…!じゃあ明日に音ノ木坂に行く?練習も兼ねて」

梨子「いいんですか?急に行つては迷惑じゃ…」

美晴「じゃあ、電話しようか?」

そう言つて俺は絵里に電話をする
ぷるるるるる

ガチャ

絵里『あら美晴、どうしたのかしら?』

美晴「あー絵里?明日Aqoursを連れてそつちに行つていいか??」

絵里『え?どうして』

美晴「μ、sとAqoursの合同練習がしたくてな」

絵里『ううくん:ちよつと穂乃果に聞いてみるわ』

そう言つて絵里は通話を保留状態にした

ダイヤ「どうでした?」

美晴「今穂乃果に聞いてるつて:あつ帰つてきた」

絵里『皆は良いって言ってるわ』

美晴「了解、じゃあ明日行くわ」

絵里『分かったわ、花陽と海末も待っているわよ?』

ガチャ

美晴「よーし!皆さん許可が降りたから明日駅に集合してください」

Aqours「はい!」

く住宅街く

俺は今Aqoursの皆と帰宅している

千歌「それにしても楽しみだね！μ'sと合同練習なんて！」

果南「ええ、明日が待ち遠しいわ」

鞠莉「そうね」

美晴「じゃあ俺はここで、気をつけろよ」

曜「うん！また明日」

く自宅く

美晴「ただいま」

咲「兄さん、おかえりなさい」

俺が帰ると、咲が出迎えてくれた

美晴「咲、明日東京に帰るからな」

咲「そうなの？じゃあ荷物まとめるね」

美晴「ああ、後浦の星女学院のスクールアイドルも一緒だからな？」

咲「Aqoursの人が？なんで」

美晴「μ'sとAqoursの合同練習を明日するからだ、明日俺

らは東京に帰るんだしちようどいいだろ」

咲「そうなんだ、あつご飯出来てるよ」

美晴「ありがとうな」

俺はリビングに行き、咲が作ってくれた料理を食べて、荷物をまとめ眠りについた

《翌朝》

美晴「咲、忘れ物ないな？」

咲「うん！大丈夫」

美晴「よし、じゃあ駅に行くぞ皆駅で待ってるから」

俺と咲は駅まで歩いてった

ギョツ

美晴「!?ど、どうしたんだよ」

咲「いいじゃん、久しぶりに手繋いだって」ぷくー

子供の様に両頬を膨らませる、可愛いな

美晴「ハイハイ、分かったよ」

俺はその手を振りほどかずに、そのまま駅に向かった

く沼津駅く

ダイヤ「遅いですわよ」

美晴「ごめんなさい、ダイヤさん」

果南「美晴くん、その子誰？」

遅いとダイヤさんに言われ、謝っていると果南さんは咲を指さした

鞠莉「…まさか美晴が誘拐を……!」

千歌「そうなの!」

美晴「違うから!鞠莉さんも余計な事言わないで、この子は俺の妹だから!」

Aqours「い、妹!」

咲の事を妹と言うと、皆驚いている…そんなに驚く?

咲「妹の氷海咲です、今日は東京に帰るので皆さんとご一緒させていただきます」

梨子「凄い…美晴さんの妹とは思えないくらい礼儀が正しい…」

美晴「いや、何勝手に俺が礼儀悪いみたいな事言ってるの!」

弁解しようとする、みんなの顔がおかしくなっていくから俺はあきらめた

美晴「はあああ…行きますよ」

Aqours「はい」

そのまま俺達は駅で東京まで行った

く東京駅く

穂乃果「あー!来た!おーい」

東京駅に降りると、穂乃果達が出迎えてくれた

美晴「出迎え無くていいのに……」

海末・花陽「私が早く会いたかったの!『です!』」

美晴「お、おおわ、分かった……」

ルビィ「ふわあ〜!これが生のμ's……!」

いや、ルビィさん…落ち着いて

ダイヤ「う、嬉しいです」

ダイヤさんあなたもですか……

絵里「まあここで話していても仕方ないし、音ノ木坂に行きましょう」

千歌「は、はい！」

く音ノ木坂学院・部室く

士「ん？おお来たか」

渡「おかえりなさい」

部室に入ったら、士と渡さんが出迎えてくれた

美晴「俺がいない間大丈夫でしたか？」

士「ああ問題無い」

穂乃果「ずっと気になってたんだけどその子誰？」

花陽「あー！確か真姫ちゃんの病院の屋上にいた……………」

穂乃果と花陽が俺の後ろにいる咲を見て言った…花陽と咲って面識あったの？

美晴「ん？ああお前達には紹介してなかったな…ほら、咲自己紹介して？」

咲「え、えと妹の氷海咲です、よろしくお願いします」

穂乃果「咲ちゃんか、よろしくね私は高坂穂乃果」

海末「園田海未です」

ことり「南ことりだよ♪」

凜「星空凜だにゃ♪」

花陽「小泉花陽です」

真姫「西木野真姫よ」

絵里「綾瀬絵里よ」

希「うちは東條希」

にこ「宇宙No.1アイドル、矢澤にこよ」

μ's 皆が自己紹介をし始めた

千歌「穂乃果さん、いいんですか？私達と合同練習なんて…………」

穂乃果「うん！千歌ちゃんあの時言ってたよね？『私達もスクールアイドルやってるんです』つてあの後見たんだけど凄かったから一緒に練習したいなーって」

千歌「あ、ありがとうございます」

美晴「ほんじゃま、屋上行くか」

士「だな、久しぶりにμ'sの練習を見るんじゃないか？」

美晴「そうだな」

そう言つて俺達は部室を出て、屋上に向かった

音ノ木坂学院・屋上

海末「では、始めましょう」

ダイヤ「そうですね」

千歌「緊張するな……」

希「まあ、気楽に行こう？」

千歌「は、はい」

こうして、μ'sとAqoursの合同練習が始まった

20分後

美晴「5分休憩です」

穂乃果「ふうー」

咲「どうぞ、穂乃果さん」

咲は穂乃果にタオルと水を渡す

穂乃果「ありがとうございます」

咲「いえ、頑張ってください」

穂乃果「うん」

美晴「はいよ海末、花陽」

美晴は海末と花陽にタオルと水を渡す

花陽「ありがとうございます、美晴くん」

海末「ありがとうございます、美晴」

美晴「どう？Aqoursは」

海末「かなり良い動きでした」

花陽「うん、凄いいね」

美晴「そっか……」

俺はそう言い、花陽と海末から離れ、千歌さん達の方に行った

美晴「どう？μ'sとの練習は」

千歌「うん凄いいよ！」

曜「私たちとは違う練習の厳しさがあるね」

千歌さんと曜ちゃんは真面目な感想をしていた……だが

ダイヤ「素晴らしいですわ」

ルビィ「感激……!」

果南・梨子・美晴「はあああー!」

あの姉妹はもう駄目だな

美晴「よし、皆さん!休憩終了です」

俺は腕時計を見て、休憩終了の合図をして皆練習を再開した

美晴「あつ!そうだ咲お前、高校どうするんだ?」

咲「私は音ノ木坂学院に転校するよ??」

美晴「でも何年生に来るんだ?」

咲「私と兄さん花陽1歳差だよ?1年生に決まってるじゃん」

そうか:咲も音ノ木坂学院に来るのか

〜30分後〜

渡「皆さん、練習終了です!」

穂乃果「いやー、今日は楽しかったよ」

千歌「はい!私達もです」

美晴「向こうまで気をつけろよ?」

曜「うん!もちろん」

海末「また、一緒に練習しましょう」

ダイヤ「はい!」

Aqours「ありがとうございます!」

そう言つて、Aqoursは屋上を去つてた

次回仮面ライダービルド

「昨日は朝までライブの事考えてて……」

「穂乃果、お前は休め」

「やめて!来ないで!」

「お前は……」

次回第24話学園祭ライブ

『よお、新しいビルド。学園祭を盛り上げてやるよ!』

第24話学園祭ライブ

《翌朝》

♪音ノ木坂学院・教室♪

A q o u r s と μ s の合同練習をしてから、5日経ち、いよいよ明日が学園祭：前なのにしつかりと授業はある。普通、準備で無くて？

穂乃果「ふわあああ」

次の授業の準備をしていると、穂乃果が凄くあくびをしている

海末「ちゃんと寝ているのですか？」

穂乃果「あはは、昨日はライブの事をずっと考えてて寝れなかったんだ」

美晴「張り切るのはいいけど、当日に寝不足で体調不良を起こすなよ？そんな事が起きたらライブ所じゃないぞ」

穂乃果「うん、気をつける！」

そこから時は流れに流れ、放課後

にこ「子供ね」

穂乃果「にこちゃんには言われたくない！」

にこの発言に穂乃果が反論する

にこ「どういう意味？」

士「はあああー……どっちもどっちだろ」

穂乃果「そうだ！」

何を思ったのか穂乃果突然踊りはじめた

穂乃果「どうどう？昨日徹夜して考えたんだ！」

にこ「ちよつと振り付けを変えるつもり!？」

海末「それはちよつと……」

穂乃果「絶対、こつちの方が盛り上がるよ！昨日思いついた時、これだ！って思ったんだ！はあ……私って天才！」

駄目だな自分の世界に入ってやがる

ことり「い、いいんじゃないかな？」

何故かことりだけ賛成した

穂乃果「だよね、だよね！」

美晴「ことり、隠し事をしてる罪悪感があるのは分かるけど、ダメなものはダメってしっかり言わないと、流石に今から振り付けを変えらるって言うのは無理があるし、時間も無い」

ことり「う、うん：そう：だよね」

俺達は練習する為に屋上に来た

く音ノ木坂学院・屋上く

花陽「も、もう足が動かないよ」

穂乃果「まだまだ！もう1回」

にこ「えくまた：？」

花陽とにこ、それに皆ももう息が上がってる

渡「穂乃果さん、流石に休んでください」

穂乃果「大丈夫！私今燃えてるから」

どこの熱血教師だよ：お前は

美晴「ダメだ穂乃果、休め」

絵里「穂乃果の事だし、夜遅くにも練習しているんでしょ？」

士「お前：当日に体を壊しても知らないぞ？」

海末「はあ：ことりからも言ってください」

士と海末の説得でもダメだったからことりにも言う様に海末が頼む

ことり「私は：穂乃果ちゃんがやりたい事をやれば：：：いいと思うよ：：：：？」

流石に無理か：：：

穂乃果「ほら！ことりちゃんだって言ってるじゃん！」

これじゃあもう埒が明かない

結局その後練習は終わり、校門の前で待ってた咲と海末と一緒に帰る

く美晴の家く

俺達は家に帰ってきた。夕飯を食べ、お風呂に入った、咲はもう寝てしまった

海末「美晴：どう思いますか？」

美晴「…穂乃果の表情から察するに、あいつは焦っている」

海末「焦り…ですか？」

美晴「ああ、音ノ木坂学院を守るといふプレッシャー、明日の学園祭ライブで失敗したら音ノ木坂学院はなくなってしまうんじゃないかという不安感、それらがあの時の穂乃果の表情が出ていた」

海末「そうですか…?!もし、そうだとしたら穂乃果は今…」

美晴「!?そうか!海末!急ぐぞ」

海末「はい!」

頼む…間に合ってくれ!今外は雨が降っている。パラパラ雨じゃなく、真逆の土砂降り…あの時の絵里の発言が本当だとしたら…あいつは今外でランニングをしている…!!

く住宅街く

穂乃果「はあ、はア、はあ」

美晴「穂乃果!」

家を出て、傘をさしながら探していると、案の定ランニングをしている穂乃果がいた

穂乃果「美晴くん…海末ちゃん…どうしたの?」

海末「どうしたじゃありません!あなたはなんで雨が降っている中で傘もささずに歩いているのですか!」

穂乃果「ごめん…でも、落ち着かなくてちよつとだけ練習しようかなって思っ…」

美晴「明日は大切な日なんだから、前日に無茶をしないでくれ…」

穂乃果「ごめん…」

穂乃果は本当に自分を心配してくれた、美晴の表情を見てシヨンポリした

海末「それでは帰りましょう…穂乃果傘はありますか?」

穂乃果「無い…」

海末「では、私の傘の中にー」

海末が穂乃果に傘に入る様言うとした時、後ろから声に変換されるであろう超えがする。後ろを向くと、仮面ライダーらしき物がたっている

『よお、はじめましてかな？新しいビルド』

美晴「お前は誰だ」

スターク「俺の名前は仮面ライダースタークだ、よろしくな」

美晴「…じゃれ合うつもりは無い…」

スターク「まあまあそう言うなよ、今日は戦いに来たんじゃない。これを渡しに来たんだよ」

そう言いながらスタークは俺に赤いのを渡してきた

美晴「これは…確か…」

前に士が言っていた、ビルドの世界に行った時に見掛けた物…確か名前は…

美晴「ハザードトリガー…」

スターク「おや？しっていたのか…まあいいそれだけだ、チャオー！」

そう言いながら、スタークは煙に包まれて消えた

海末「今のは…一体」

美晴「……とりあえず帰ろう、穂乃果の両親も心配している」

そのまま穂乃果を家まで送ってた。親に怒られている穂乃果を見て、俺と海末は家に帰った

海末「また、お風呂に入らなきゃいけませんね」

美晴「だな」

俺らはそんな会話をしながら、家にかえった

く美晴の家・美晴の部屋く

あの後、家に帰ってお風呂に入った。今俺は自分の部屋でスタークに渡されたハザードトリガーの事を渡さんにメールで聞いてみた。ハザードトリガーとは、仮面ライダービルドの強化アイテム…ハザードトリガーをベルトのレバーの上に差し込むと、ハザードフォームになるらしい…しかしこの機能は変身者に多大な負担をかけるため、脳が刺激に耐え切れなくなると理性を失い破壊衝動に支配され暴走する危険が伴う。一度暴走してしまうと意識を失い敵味方の判別なく全てを破壊しようとする。過去に戦兎さんもなったらしい

美晴「なんでスタークはこんな物を俺に…」

俺はずつと考えた：だけど一向に答えは出ない：
美晴「まあ、いつか：使わなければいい話だし」

俺はそう言つて眠りについた

次の日

《学園祭当日》

今日は学園祭当日：だけど、想定外の出来事があつた

凜「雨が止まないにやー……」

希「土砂降りやんね」

そう昨日夜からずっと雨が降っている：しかも土砂降り：穂乃果の奴は大丈夫だろうか：一向に穂乃果だけが屋上前の扉に来ていない。しかもお客さんもない

ことり「お客さん：居ないね」

士「仕方ないさ、こんな土砂降りの日に屋上でライブをすることも誰も来ないだろ」

しばらくして、皆は部室で着替え終えた。皆で穂乃果を待つとようやくやってきた

穂乃果「ごめん、寝坊しちゃった」

にこ「遅いわよ！」

海末「全くダカラあなたは」

遅れてきた穂乃果を海末とにこが怒る：まあ仕方ないか、だけど穂乃果の奴少し顔が赤い気がする

穂乃果「ごめんごめん：うう」

穂乃果が謝ると、近くにいたことりにもたれ掛かる

美晴「穂乃果大丈夫なのか？少し声も酷いし……」

穂乃果「大丈夫だよ、ごめんね？ことりちゃん急にもたれかかちやつて……」

ことり「だ、大丈夫だよ、それより声、本当に大丈夫？」

穂乃果「大丈夫だよ、のど飴舐めとくから」

渡「ですけど、雨が弱りませんか？」

穂乃果「大丈夫だよ、私達なら」

μ, s「うん！」

そうして、雨が弱まらなくても彼女達は屋上で、新曲を披露した
No brand girls / μs

μsの新曲にどどん人集まってきた。だけどそんな最中に
事件が起きた。

バアーン

「キャーーーーー！！！」

美晴「!?……スターク！」

スターク「よお、新しいビルド、学園祭を盛り上げてやるよ！」

そう言つて、スタークはスマッシュを10体出して来た

士「アイツらのライブの邪魔はさせない」

渡「僕達がここで止める……」

美晴「皆！歌え、こいつらは俺らに任せろ」

『ガブっ！』

『仮面ライダー』

『ラビット、タンク、ベストマッチ！』 『Are you read

y?』

『変身！』

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ』

『デイケイド！』

ビルド「勝利の法則は決まった」

俺達はスタークとスマッシュ10体を連れて、屋上から飛び降りた

次回仮面ライダービルド

「穂乃果！」

「これを使うしか……！」

「なんの真似だ？」

「みんなの責任よ」

次回第25話現れる仮面ライダー

『私達、ラブライブには出場しません』

第25話現れる仮面ライダー

く校庭くー

ビルド「はっ！ふっ！はあ！」

スターク「ふん！おいおい、そんなに、よつと！怒らなくてもいい
だろ？」

ビルド「はあ！ふっ！…お前は何がしたい！」

スターク「さあ、はあ！なんだろね？」

ビルド「ふぎけんな！」

ビルドはベルトからボトルを抜き、別のボトルを入れた

『忍者！』『コミック！』『ベストマッチ！』

ビルドはレバーはを回す

『Are you ready?』

ビルド「ビルドアップ！」

『忍びのエンターティナー！』

『ニンニンコミック！』

ビルドはニンニンコミックフォームに変化した

ビルドNK「はあー！オラ！」

スターク「ふん！甘い！」

キバ「美晴くん！」

ディケイド「大丈夫か？」

渡さんと土がやってきた…スマッシュは倒したのか？

μ, s側

昨日の仮面ライダーが現れて、美晴君達が屋上から飛び降りた…美
晴君達が下で戦ってくれてるんだ！絶対に成功させる！

穂乃果「皆！歌う！踊ろ！」

海末「穂乃果…：はい！」

ことり「うん♪」

花陽「うん！」

凜「うん！」

真姫「ええ！」

にこ「当たり前よ！」

希「いいやん」

絵里「ハラショー！」

μ's「μ's、ミュージックスタート！」

そう言つて、曲が流れ私たちは新曲の途中だったのを終わらせ、2
曲目に入るとした瞬間目眩がして……そこで記憶が消えた

海未「穂乃果！しっかりしてください！」

真姫「凄い熱……とりあえず保健室に運びましょ！」

そう言つて、真姫と海未は穂乃果を連れて、保健室に向かった
ライダー側

ビルドNK「ぐはあ……くっ！これでどうだ！」

『分身の術！』

『アタックライダー、イリユージュオン！』

ビルドは四コマ分身刀を使って、デイケイドはイリユージュオンの
カードで分身した

スターク「おいおい、数が多ければいいって言う訳じゃ無いぜ？」

スタークはビルドとデイケイドの分身を一向に倒した

ビルドNK・キバ・デイケイド「ぐはあ！」

スターク「終わりだな」

スタークが俺達に剣を振りかざすと、後ろからスタークがなにかに
斬られた

スターク「ぐっ……なんの真似だ？」

スタークが目を向けると、そこにいたのは

エグゼイド「……………」

デイケイド「仮面ライダー……エグゼイド」

エグゼイド「スターク……あの方からだ、ここは俺に任せろ」

スターク「…命令ならしよがねえな、ビルドそれじゃあチャオー！」

スタークは煙に包まれて消えた

エグゼイド「…はあー！」

ビルドNK「うわあ!?ぬっ！ふっ！ぐはあ！」

エグゼイドはビルドに斬りつける、ビルドは突然過ぎて身動きが取

れなかった

ビルド「ぐはあ…はあ、はあ…スタークとのダメージが効いてるな
…こうなったら使うしか…」

キバ「…!?ダメだ!美晴君!」

デイケイド「よせ!」

ごめん、2人共…

『ハザード・ON』

ビルドはハザードトリガーを起動し、ベルトの上に付けた
シヤカ、シヤカ、シヤカ、シヤカ

『海賊!』『電車!』

『スーパ…ベストマッチ!』

ビルドはレバーを回した

『ガタガタゴツトンスツダンスダン!』

『Are you ready?』

ビルド「……………ビルドアツプ」

『アンコントロールスイッチ

ブラックハザード!

ヤベー!』

ビルドは海賊レッシャーハザードフォームになった

ビルドHKR「ふん!はっ!ふっ!うらア!」

エグゼイド「!?!」

ビルドは猛激な攻撃をエグゼイドにしている。エグゼイドは声は
上げていないがどうやらダメージは通っている

ビルドHKR「はあー!…うっ!ぐっ!うう…うわあー!」

ビルドの脳はハザードトリガーの刺激に耐えられなくなり、暴走を
した

ビルドHKR「……………」

エグゼイド「……………!?!」

キバ「美晴君!落ち着いて」

デイケイド「全く…言わんこつちやない」

ビルドは止めに来るキバに向けてレバーを回す

『MAX!ハザードON』

『ガタガタゴットンズツダンズダン』

『ready go!』

『やべーい、オーバフロー!』

キバ「うっ!あああああ…」

ビルドはキバの顔を掴み、持ち上げた

『ガタガタゴットンズツダンズダン』

『ready go!』

『ハザードフィンッシュ!!』

渡「うわあー!」

渡は変身解消された

デイケイド「キバ……!これで……どうだ!」

デイケイドはビルドドライバー刺さってるハザードトリガーに向かった。弾は見事命中し、ベストからハザードトリガーは抜けた

美晴「うっ!……はあ、はあ、はあ……」

エグゼイド「……………」

エグゼイドは苦しむ美晴の姿を見て、黙って消えた

士「大丈夫か?」

美晴「ああ、……悪い」

士は変身を解消し、俺に手を差し伸ばした、俺はその手を掴んで立ち上がった

ことり「士君!美晴君!渡君!」

昇降口からことりがやってきた、何やら焦っている様だ

士「南?どうした?」

ことり「穂乃果ちゃんが……穂乃果ちゃんが……」

美晴「!?あんのバカ!

渡「今穂乃果さんはどこに?」

ことり「さつき、海未ちゃんが家まで送ってたけど……」

美晴「よし、じゃあ穂乃果の家に行くぞ!」

そう言っつて、俺達は穂乃果の家に向かった

く穂乃果の家く

「本当にすいませんでした!」

俺達は穂乃果の家に来て、すぐに穂乃果の母親に謝罪をしている
穂乃果母「あなた達……………」

俺達は叱責を覚悟した、だけど穂乃果のお母さんはそんな事をしな
かった

穂乃果母「何言ってるの、どうせまたあの子が出来る、出来るって
言ってる、背負いこんだんでしょ?」

穂乃果のお母さんは笑っていた、なんで?自分の娘があんなつたの
に……………」

穂乃果母「さあ、今海末ちゃんと絵里ちゃんが穂乃果の部屋にいる
から上がって」

俺達は穂乃果のお母さんに乗せられるがまま、穂乃果の部屋に来た
く穂乃果の家く

穂乃果「あー!来た!」

美晴「穂乃果……………」

ことり「元気そうだね…」

海末「はい、先ほど熱が下がったので明後日ぐらいには学校に行け
るか」と

美晴「海末、絵里看病ありがとな」

絵里「気にしないで、仲間の為よ」

そうだよな……………仲間…だよな

ここ「あんた……………どれだけプリン食べてるのよ……………」

穂乃果「だってお母さんが風邪だから3個食べていいって…」

士「いや…風邪でも3個は多いだろ…」

ははは……………穂乃果らしい……………それよりあのエグゼイドは誰なんだ

穂乃果「たくさん食べて、学校に行って練習しないとライブにも
も出場出来ないしね!」

穂乃果のその一言で、s達の顔が曇った…え?何があったの?

俺と士と渡さん、そして、穂乃果は次の海末の発言に耳を疑った

海末「穂乃果、私達ライブには出場しません」

……………は？

穂乃果「え？…どういう…：事？」

海末「穂乃果が倒れて、保健室に運び終わった後、理事長がやって来ました」

無理しすぎたんじゃないかって。こういう結果を招くために、アイドル活動をしていたのかって…：それで、みんなで相談してエントリーを辞めたんです…：もうランキングに、μsの名前はないです」

美晴「そんな事が…あつたのか…!？」

俺は海未たちの判断は正しいと思った…：そんな中俺のポツケのある物が皆にはバレないように光つた

美晴「士、ちよつと」コソコソ

士「悪い、ちよつと何か買つてくるわ」

美晴「あつ、俺も行く」

穂乃果「じゃあプリン！」

美晴「はいよ」

くコンビ二道中く

士「どうしたんだ？」

美晴「士…：パラドのウオッチが…：」

俺はポツケからパラドのウオッチを取り出して、士に見せた

士「!?!これは…：」

士は驚いていた…：俺だつて驚いた、だつて、だつて…：パラドのウオッチに

ヒビが入っていたのだから

次回仮面ライダービルド

「コレ見て！」

「来年度入学者受付？」

「あのね…：私…：」

「そんな…：!！」

次回第26話海外留学

『私、海外留学する事になったの』

第26話 海外留学

士「歴史が消えたか……」

美晴「歴史が…消えた？」

士「ああ、仮面ライダーパラドクスのライドウオツチにヒビが入ったという事はパラドクスの歴史がこの世界から消えたんだ」

美晴「そんな……」

士「こればかり、どうすることも出来ない」

そう言つて、士はコンビニでプリンを買つた

士「さっ戻るぞ」

美晴「……………ああ」

俺らは穂乃果の家へと戻つた

く穂乃果の家へ

士「おくい、買つてきたぞ」

穂乃果「ありがとう！」

士「ついでにお前らの分もあるぞ」

絵里「私たちはついでなのね」

美晴「……………」

歴史が消える……いつか俺も士も渡さんも歴史が消える…ライダーの歴史が消える

海末「美晴……………？」

美晴「どうした？」

海末「いえ、何か考え込んでいるようなので」

いや、今は今の時間を生きていくか

美晴「大丈夫だよ」

絵里「そろそろ帰りました」

希「せやな」

そう言つて、俺達は穂乃果の家を出た

翌日

穂乃果の体調が治り、学校でアイドルを再開した。そして、今穂乃果の復帰を願つて部室でパーティをしている。だけどまだことりは

来ていない

美晴「こういうの普通学校でしちやだめだろ」

ワイワイ

花陽「みなさん、見てください！」

花陽が紙を持ってきた

穂乃果「えーと、来年度入学者受付？」

全員「これって！」

真姫「中学生の希望校アンケートが結果が出ただけど！」

花陽「去年より多いらしくて！」

穂乃果「つまり、」

にこ「学校は」

希「存続するってことやん！」

μ, s「やったー！」

穂乃果「ことりちゃん！」

ことり「うえ!?どうしたの？」

穂乃果「聞いて！音ノ木坂来年も存続するって！」

ことり「じゃあ……私達……やったんだ」

まあ皆嬉しがっている、これで良かった

そう思っていた、ただ

あの告白がなければ

海末「皆さんに伝えたい事があります」

みんなの視線が海末に集まる

海末「実はことりが海外留学する事になりました」

……え？は？

穂乃果「え？……」

真姫「何？……」

凜「嘘……」

ことり「前から、服飾の勉強したいって思ってた……そしたら、お母さんの知り合いの学校の人が来てみないかって……ごめんね、もっと早く話そうって思っていたんだけど」

穂乃果「いつ……行くの？」

ことり「……………2週間後」

穂乃果「何で…言ってくれなかったの？」

海末「学園祭でまとまっている時に言うのはムードを壊すと言い、ことりは気を使ってくれていたのです」

穂乃果「海末ちゃんは知ってたの？」

海末「……………はい」

絵里「行つたきり…戻ってこないのね？」

ことり「高校を卒業するまで……………多分」

そう言うのと穂乃果は立ち上がり、ことりの方へ歩いた

穂乃果「なんで言ってくれなかったの？」

ことり「だって、学園祭があったから…」

穂乃果「じゃあなんで海末ちゃんには言ったの？」

ことり「それは…」

希「穂乃果ちゃん、ことりちゃんはどうち達に気を使ってくれたんやから、ことりちゃんの気持ちも考えー」

穂乃果「分からないよ！だって、いなくなっちゃうんだよ！ずっと一緒だったのに、離れ離れになっちゃうんだよ…なのに…」

ことり「何度も……………いおうとしたよ…何度も何度も!!!」

穂乃果「え？」

ことり「でも…穂乃果ちゃん…ライブやるのに夢中で、ラブライブに夢中で…だから、ライブが終わったら、すぐ言おうと思ってた…相談に乗ってもらおうと思ってた…けど、穂乃果ちゃんが倒れて、聞いて欲しかったよ！穂乃果ちゃんには、1番に相談したかった。だって、穂乃果ちゃんは初めて出来た友達だよ！ずっとそばに居た友達だよ！そんなの…そんなの、当たり前だよ!!!」

そう言つて、ことりは涙を流しながら部室を出て行った

そして、この瞬間からμ'sの心は少しだけバラバラになった

翌日

現在、ことりを除いた11人が集まっていた

穂乃果「ライブ？」

絵里「そうよ、ことりが海外に行く前に全員でライブをやりましょ」

穂乃果「ことりちゃんにも言うつもり？」

凜「思いつきり賑わして、門出を祝うにや！」

凜がそう言うところにこがチョップをした

にこ「はしやぎ過ぎ！」

穂乃果「……………」

美晴「まだ落ち込んでいるのか？」

穂乃果「私をもっと周りを見ていけば……………こんな事には」

真姫「穂乃果のせいじゃないわ……………」

絵里「そ、そうよ、だからあんまり自分を責めないで？」

穂乃果「私が自分勝手な事をしなければ、こんな事にはならなかった！」

にこ「あんたねえ！」

美晴「……………傲慢だな、鼻鼻高々しい……………」

花陽「え？……………美晴…君？」

美晴が言うはずの無い言葉を言って皆驚いてる

穂乃果「でも！」

美晴「今更変えてなんになる？その時に何も出来なかった者が何を
変える？笑止千万！」

絵里「美晴！言い過ぎよ」

美晴「お前らは引っ込んでろ！」

全員「!？」

いつもとは違う、美晴のオーラ、殺気に μ 、sやライダーである士
達が震える

美晴「そんな生半可気持ちで今まで、そしてこれからもスクールア
イドルをやるつもりなら」

美晴の次の言葉で皆、固まった

美晴「辞めろ、スクールアイドルをやめろ！」

バン

そうやって、美晴は屋上のドアを思いつきり閉じ、学校を後にした
絵里「穂乃果？気にしなくていいわよ？」
にこ「そうよ、あいつの言うことなんて」

真姫「そうよ、それよりライブ、しましょ？」

穂乃果「……でも、美晴君の言うことは否定出来ない……私はもしかしたら生半可な気持ちでやってたのかもしれない」

希「穂乃果ちゃん……？何考えてるの？」

穂乃果「私は……やめます……スクールアイドルをやめます」

皆また固まった、そして、次の瞬間思いの寄らないことが起きた
バシーン

穂乃果「ッ！」

皆「!？」

海末「……！あなたは……最低です！」

海未が穂乃果をピンタしていた

そして、この瞬間にμ'sの心は完全にバラバラになった

次回仮面ライダービルド

「活動休止!？」

「スクールアイドル、もうやらないの？」

「ことりも一緒に！」

「さあ行こう？ことりちゃん！」

次回第27話バラバラの心

『穂乃果はどうしたいんだ?』

日常編 誰の水着がよかった？

く美晴の家く

俺達は合宿をおえ、今俺の家で遊んでいる、平和だったはずだ……あの発言が無ければ

希「そう言えば、美晴君、渡君誰の水着が1番よかった？」

美晴・渡「ぶーぶー！」

士「水着？何の話だ」

絵里「あの時は士はいなかったわね、合宿1日目のお昼に皆で海で遊んだの」

海末「の、希が聞きたいのあの時の私達の水着は誰が1番よかった？と聞きたいんです…」

おい、希お前のせいで変な空気になったぞ

美晴「ま、まてもう俺忘れちゃったし、ね？」

そうだ、あれから日は経ってる…こうしたら納得するはず…なんだあの時の希の勝ち誇った顔は!?

希「甘いで、美晴君うちがなんの対策も無しに言うと思ってるん？」

渡「いや、でも手段なんて…まさか」

渡さんが何かを思い出したようにいう、そうしたら、希がビデオカメラを取り出した

美晴「ビデオカメラ？」

希「あの時に皆の水着を撮ってたんよ
なにい!？」

希「美晴君と渡君が怯んでる！、今がチャンスやでにこっち、凜ちゃん」

俺と渡さんの後ろからにこと凜が出てきて、俺と渡さんを縛った

美晴「おい、離せよ」

渡「そうですよ、僕達は変態になりたくありません」

俺たちの声を聞かないフリして、希がテレビ2ビデオカメラを繋いだ

希「さっ、準備は出来たで」

希がスタートしようとする……こうなったらあいつも

美晴「待つんだ、希」

希「なんや？ 往生際が悪いで」

美晴「違う、男である俺たちに聞くんだつたら士にも聞いて方がいいんじゃないか？ ビデオカメラなら見てない士でも言えるだろ？」

俺の訴えが届いたのか穂乃果が士に縄を持って近寄る

穂乃果「確かに……そうだね」ニヤリ

士「!? 何、美晴！ お前」

美晴「死なば諸共！」

そう言つて、士も捕まった

5分後

希「ほな、始めるで」

ポチ

希がスタートボタンを押した

始まる、悪夢の時間が

テレビに映し始まったのは……花陽と凜だ

えーつと……何も言えねえ

だけど、花陽と凜がトップバッテリーで助かった……

花陽の水着は恥ずかしいのだろう、服のような水着で隠している

凜の水着は運動馬鹿の事だ、恐らく泳ぎ易そうなのと黄色を選んだ
んだろう

美晴は心の中で2人がキツくなくてよかった

次に来たのは穂乃果と海末とことりだ

ことりの水着は緑色が多く使われている物だ、緑色が好きなのか？

穂乃果の水着は、白と少し黒がかつた青のシマシマだ、オレンジ
じゃないんだ

海末の水着は正直言つて、意外だった……あんなに破廉恥、破廉恥
と言つていた本人が花陽の様に画してる水着じゃなく、白色のちゃん
とした水着であった、案外海末が破廉恥？

次は希、絵里、にこだ

お願いします、これでラストであつてください、お願いします！ 涙

目

にこの水着は、ピンク色のフリフリの付いた水着だった、なんだろう海末を見た後だと安心する？

絵里の水着は、海末よりやばかった白色は海末と同じだが、下手したら……出てしまうかもしれない……なんでこんな着てるんだよ……

希の水着は少し薄い水色だ、なんだろう今までの中で……でかいテレビが暗くなった……やったー！終わったんだ！

穂乃果「なんか早くない？」

美晴「そんな訳ないだろ！見ろ士と渡さんなんて」

士「」

渡「」

絵里「し、失神してる……」

美晴「あ、後え、絵里」

絵里「？どうしたのかしら、美晴？」ニヤニヤ

こいつ……この顔はわかってやがるのか？

美晴「おおお前のみみみ水着はへへ下手したら」顔真っ赤

穂乃果「あれあれあれ？美晴くん？どうしたのかなー？」

こいつ俺の反応を見て、楽しんでやがる

美晴「…出ちやうだろ」

絵里「ハラショー！美晴がそんな反応するなんてね！」

希「じゃあ聞くで」

μ, s「誰の水着がよかった？」

美晴「えーっと、

は、花陽かな……」

花陽「」

凜「かよちゃん？」

花陽「はううう……」

花陽が顔真っ赤にして、倒れた

この後俺はしばらくの間海末と絵里が見れなくなった

第27話バラバラの心

3日後

絵里視点

く音ノ木坂学院・生徒会室く

希「どうして、美晴君あんなこと言うたんやろ？」

士「何かあったんだろ？」

絵里「……これでよかったのかしら……」

回想

花陽「活動休止!？」

絵里「ええ、少し見つめ直す必要があるわ」

真姫「ラブライブにも出場出来ない上で活動も休止……」

絵里「穂乃果が居ないんじや解散も同じでしょ？」

にこ「……………」

にこは何も言わないまま静かに拳を握っていた

回想終了

士「まつ、1年と3年はいいけど2年は全員アウトだからな」

士の言う通り、穂乃果は脱退宣言して、海未は穂乃果にビンタして、

ことりは海外留学

美晴は穂乃果にキレている

希「…そや、美晴君の事やら、妹の咲ちゃんに聞いた方がええやん」

絵里「そうね、美晴の事なら誰よりも知ってるし」

よし、そうと決まれば

絵里「…この沢山の資料を片付けてからね」

山積みの資料を見ながら呟いた

2時間後

絵里「よし、片付いたし、1年のクラスに行きましょう?」

希「せやな……」

士「はあ…ほら希マツサージしてやるから行くぞ」

士は希の肩を揉んでいる

希「おお!そこそこ」

正直言って……羨ましい……………

絵里「……行くわよ？」

士「ハイハイ」

♪音ノ木坂学院・1年教室♪

絵里「失礼します」

花陽「絵里ちゃん？どうしたの？」

希「花陽ちゃん、咲ちゃん居らへん？」

凜「咲ちゃんならもう帰ったにや」

あら、帰っちゃたのね……

花陽「何かあったの？」

凜「もしかして、美晴君の事？」

士「そうだ、折角だしお前らも来い」

そう言って、花陽と凜も連れて美晴の家に向かった

♪美晴の家♪

ピンポーン

咲「はい」

私達は美晴の家に着き、インターホンを慣らすと咲が出てきた

絵里「咲、美晴の事で聞きたいことがあるんだけど……………」

咲「分かりました……………中へ」

そう言われ、私達は上がった

咲「何故兄さんが高坂さんにあんな事を言ったのか…それは兄さんが中学時代の話になります」

咲「兄さんは中学では、バスケット部をされていて、その実力、チームワークはNBA選手もが認めるほど…だけどあることをきっかけにチームの心はバラバラになりました。」

凜「バラバラに…？」

咲「…バスケット部の部長は兄さんが中学になってから出来た仲の良い友達…：兄さんは副部長でした…：部長は『チームが悪くなったのは自分のせい』だっつてずっと攻め続けたんです、兄さんは必死に説得しました『お前のせいじゃない…：気づけなかつた俺も悪い』っただけど次の日のできごとで部長希心は完全に割れました、次の日バスケット部の兄

さんを除く部員が全員退部したんです、それにより部活は廃部……それきり兄さんは責任は全て自分が持つようになりました」

絵里「そんな……事が」

希「？待って、ある事ってなんなの？」

咲「ある出来事……それはその部長の幼馴染であり、部のACE出ある人が海外留学する事になったんです」

士「…待て、その話と今の俺らの現状って……」

花陽「幼馴染が海外留学……部長は自分を攻め続ける……部長退部……それってまるで」

絵里「まるで……今の私達……」

絵里視点END

〜穂乃果の家〜

穂乃果視点

穂乃果「はぁー……」

これで良かったんだよね？……でも、美晴君を怒らせちゃったな……海末ちゃんに叩かれてどこも痛いし

穂乃果「……どうしょ」

「お前が悩むなんてらしくないなあ」

穂乃果「!?……嘘……なんで……」

私は驚いた……だって、転校生したはずのパラド君が目の前にいるのだから

パラド「？どうした？」

穂乃果「なんで……パラド君が……？」

パラド「ああ、帰って来たただだよ、音ノ木坂に戻れるかは知れねえけど」

穂乃果「そう……なんだ」

パラド「なあ穂乃果、お前は美晴に叱られ、海末にピンタされた……辛いのは分かる、そして、ことりはが海外に行ってしまうのが嫌なのも分かる……だけだな

お前がやりたい事は自分で決めろ」

穂乃果「え？」

第28話μ S再結成

穂乃果視点

↳音ノ木坂学院・講堂↳

私は今、海末ちゃんを音ノ木坂学院の講堂に呼び出している

穂乃果「ごめんね、急に呼び出して」

海末「いえ、大丈夫です」

穂乃果「…ことりちゃんは？」

海末「今日日本を経つそうです」

穂乃果「そっか……」

言わなきゃ、もう一度スクールアイドルをやる事を

穂乃果「私さ、ここで初めて海末ちゃんとことりちゃんと3人でライブした時、思ってたんだ、ライブは楽しいってそう思ってた内には陽ちゃん、凜ちゃん、真姫ちゃん、にこちゃんとどんどんメンバーは増えてって、美晴君やパード君がマネージャーになって嬉しかったんだ本当のアイドルになった気分になったから……だからもつと歌いたい！皆とこの場所でもつと！私、やめるなんて言ったけど……もう一度スクールスクールアイドルをやりたいの！だからごめんなさい！」

私は今海末ちゃんに頭を下げながら謝った。海末ちゃんは少し驚いていた

海末「ぷ、ぶふふふ」

海末ちゃんが笑い始めた

穂乃果「なんで笑うの?!私真剣なんだけど！」

海末「いえ、今までをよく思い出したら、穂乃果には迷惑かけられてばかりだと思ってます」

穂乃果「ええー!？」

海末「その事でよくことりと話してました……だけど、どれだけ迷惑かけられ用とあなたは私達のリーダーです、だから私の方こそごめんなさい」

海末ちゃんも頭を下げ、謝ってきた

一方美晴は

美晴視点

美晴「……よし、後もう少し…ラビットと成分…タンクの成分…ベストマッチの組み合わせであるふたつを単体で仕えるボトルに……」

美晴はラビットボトル、タンクボトルを持って、机の上で何かを作っていた

美晴「ハザードトリガーを使っても、暴走しないボトルに……」

20分後

美晴「よし、出来た！」

美晴は作り上げたボトル、フルフルラビットタンクボトルを掲げながら言った

美晴「……穂乃果にも謝れなきやな……いくら状況が似ててもあいつと穂乃果は違う」

そう言いながら、美晴は机の上にある写真、美晴と水色髪の少年とバスケットボールとトロフィーを掲げている写真を見ながら呟いた

視点は戻って、穂乃果視点

海末「穂乃果、ことりの所に行ってください！」

穂乃果「ええ!?!でもことりちゃんは……」

海末「ことりも引つ張て欲しいんです!わがまま言つて欲しいんです!」

穂乃果「わがまま!?!」

海末「そうですよ、有名なデザイナーに見込まれたのに残れだなんて……でもそんなわがまま言えるのは……」

私は全速疾走で空港に向かった、空港に着くとことりちゃんは搭乗口に向かうとしていた

セーフ…と思いつながら、ことりちゃんの腕をつかんだ。

→空港

穂乃果「ことりちゃん!ことりちゃん、ごめん!私、スクールアイドルをやりたいの!ことりちゃんと……皆と……だから他の夢に行こうとしても…行かないで!」

私はことりちゃんを抱きしめた

ことり「ううん……私の方こそごめんね……自分の気持ちに気づいていたのに……」

穂乃果「さっ、行こう！皆の元に」

ことり「うん！」

そう言つて、空港を出ようとしたら

『熱い感動の最中に悪いねえ』

穂乃果「あなたは……あの時の」

そう目の前に私たちのライブを邪魔したライダーとなんだろう？

あのライダー？

どうしよと悩んでいた時に後ろからバイクがやってきた

美晴視点

美晴「……はあ！」

スターク「おいおい邪魔するなよ」

穂乃果「美晴君……」

美晴「穂乃果……ことりを連れて皆の元に行け……やるんだろ？ライブ」

穂乃果「え？」

そう言いながら、俺はベルトを付けた

美晴「μ，sは……今のメンバーが居てこそそのμ，sだ、誰かが欠けたり、誰かが交代されたらそれはもうμ，sじゃないんだ……だから……ことりを連れて早く行け！」

スターク「カッコいいねえ！でもよー勝てるのか？俺らに」

美晴「勿論、俺の発明品で！」

『MAX ハザードON！』

ハザードトリガーを起動し、ベルトに付けたあと、俺は作ったフルフルラビットタンクボトルを取り出し、5回振った

『ラビット！』

5回振ったら、ボトルをたたみ、ベルトに入れた

『ラビットandラビット！』

『ガタガタゴットンズダンスダン！』

ベルトのレバーを回した

『Are you ready?』

美晴「変身！」

『オーバーフロー』

『紅のスピーディジャンパー！ラビットラビット！やべえーい、はやーい』

俺は仮面ライダービルドラビットラビットフォームに変身した

ビルドRR「勝利の法則は決まった！」

そう言っつて、俺はスタークとエグゼイド、そして、スマッシュとバグスターの大群に走った

ビルドRR「ふっ！はあ！オラア」

スターク「ハザードレベルが上昇している…いいぞ」

エグゼイド「……！」

エグゼイドは黙りながら、ビルドを斬りつけた

ビルドRR「ぐはあ……くっ来いフルボトルバスター！」

ビルドのベルトから武器が出てきた

穂乃果「きゃ！」

ビルドRR「穂乃果!?!くっ」

『ラビット！』

『フルボトルブレイク！』

ビルドRR「早く行け！」

穂乃果「うん！」

穂乃果はことりを連れて、空港を去った

ビルドRR「は！ふっ！せい！…数が多し…なら！」

ビルドはフルボトルバスターを縦にした

『ラビット！フェニックス！』

『ジャストマッチブレイク！』

フルボトルバスターの刃先にエネルギーが溜まり、ビルドは回転斬りをした

ビルドRR「よし、あとは……」

そう言っつてみると、いなかったはずの怪物が出てきた

ビルドRR「…え?…こんなことあるうー!?!」

スターク「アンデット……ということは如月はウォッチを手に入れたって事か…」

ビルドRR「アンデット?…それってブレイドの怪人じゃ……まさか」

俺が油断していると、アンデットは俺を切りつけてきて、俺は変身を解除された

美晴「しまった!」

どうするればいい……どうすれば

「あの……」

!?まだ逃げたれてない人がいたか…

美晴「何してるんですか!?早く逃げてください」

「そうしたいんですけど……これが私の手に」

そう言っただけ彼女は俺にフルボトルを渡してきた

美晴「ボトル…?」

そのボトルはカブトムシのボトルと剣のボトルだった

美晴「カブトムシ……剣……アンデット……そうか!ありがとう使わせてもらうよ」

シャカ、シャカ、シャカ、シャカ

『カブトムシ、剣!』

『ベルトマッチ!』

美晴「やっぱり……て事は!」

俺は興奮しながらレバーを回した

『Are you ready?』

美晴「変身」

『ブレイド!』

『ターンアップ』

俺は仮面ライダービルドブレイドフォームに変身した

ブレイドB「すげえ!ブレイドになれるのか」

スターク「なに!？」

ビルドはブレイドライザーとフルボトルバスターを持って、アンデットと戦っていた

ブレイドB 「はあ！ふっ！せい！…こいつも使ってみるか」

『スラッシュ！サンダー！』

『ライトニングスラッシュ！』

ビルドはブレイラウザーに2枚のカードを読み込んだ

ブレイドB 「すげえ！伸びた！じゃあこれで最後だ」

スターク 「させるか！」

『キック！サンダー！』

『ライトニングブラスト！』

ブレイドB 「はあー！」

スターク 「ぐはあ…ここは撤退だな」

ビルドのキックがスタークに当たるとスタークは煙に包まれて消えた

次回仮面ライダービルド

「なんでこのボトルを？」

「わ、私は上原歩夢って言います」

「ごめんな？穂乃果」

「今日この日、お前達からウォッチを取り戻す」

次回第29話ミュージックスタート！

『μ's、ミュージックスタート！』

第29話 ミュージックスタート!

穂乃果がこたりを連れ、空港から逃げた後、何とかスタークを退ける事が出来た。今俺はボトルを渡してきた女の子と話している

美晴 「俺は氷海美晴、よろしく」

歩夢 「上原歩夢って言います、よろしくお願いします美晴さん」

美晴 「上原さんはどうして、このボトルを？」

歩夢 「私の幼馴染がこれを私に渡したんです、何でも世界を救う為だとか」

世界を救う……よくまあそんな事信じたのな

美晴 「でも、よく信じれたね？」

歩夢 「最初は半信半疑でした、だけど彼の目が嘘をついていなかったのだから私は信じました」

美晴 「仲がいいんですね、その人と」

俺がそう言っていると、電話が鳴った

美晴 「すいません、もしもし？」

海末 『美晴、今すぐ音ノ木坂学院の講堂に来てください』

美晴 「講堂に？何で」

海末 『ライブをするからに決まっています』

美晴 「わかった……ついでに穂乃果にも謝れなきゃな」
ピッ

そう言って、俺は電話を切った

美晴 「じゃあ俺はかえりますね」

歩夢 「はい、お気をつけて」

音ノ木坂学院へ

土 「来たか」

渡 「遅かったですね」

美晴 「土……渡さん……」

音ノ木坂学院に着いた時、使うなんてと渡さんが出迎えていた
土 「行くぞ、皆待ってる」

そう言って、俺は講堂に連れられた

く音ノ木坂学院・講堂く

ガチャ

穂乃果「あつ来た!」

美晴「穂乃果……」

にこ「遅いわよ」

希「どこで道草食ってたん?」

講堂に入ると、μ's全員がいた

穂乃果「美晴君……ごめんね」

美晴「穂乃果……お前は悪くない、謝りたいのはこっちだ、ゴメンな」

花陽「よかったね、穂乃果ちゃんと美晴君仲直り出来て」

絵里「本当ね」

穂乃果「よーし、じゃあライブ始めよ」

μ's「うん!」

穂乃果「いち!」

ことり「に!」

海末「さん!」

真姫「し!」

凜「ぎ!」

花陽「ろく!」

にこ「なな!」

希「はち!」

絵里「きゆう!」

μ's「μ's、ミュージックスタート!」

其の瞬間

どごおーん

外で爆発が起きた

美晴「皆、俺たちが見てくる今はライブをしてくれ」

そうやって俺はたくさんの観客の指さして言った

穂乃果「うん」

美晴「行こう」

そう言つて、俺達は外に出た

く校庭く

蒼一「久しぶりだな、元ウィザード」

美晴「ジオウ……」

校庭に出ると、ジオウとアンデットが待ち構えていた

蒼一「俺がここでお前の息の根を止める」

『ジオウ!』

蒼一「変身」

『ライダータイム』

『仮面ライダージオウ!』

美晴「行こう、2人とも」

『ガブっ』

『仮面ライダー』

『MAX・ハザードON!』

『ラビットandラビット!』

美晴・土・渡「変身!」

『ディケイド!』

『紅のスピーディジャンパー、ラビットラビット!やべえーい!は
やーい』

ビルドRR「行くぞ!」

そう言つて、俺達はジオウ達とぶつかりあつた

ビルドRR「ふっ!はっ!おりや!」

イーグルアンデット「はあ!」

ビルドRR「危ね!これでもくらえ!」

『ラビット!タカ!フェニックス!』

俺はフルボトルバスターに3つのボトルを入れた

『ミラクルマッチでーす』

ビルドRR「はあー!」

『ミラクルマッチブレイク!』

イーグルアンデット「ぬわあー!」

イーグルアンデットは、フルボトルバスターの攻撃をくらい、倒れ

たが：

イーグルアンデット「うう…」

なんと、アンデッドは立ち直った

ビルドRR「何!?!」

ジオウ「ラウズカードが無ければ、アンデッドは不死身だ、何度でも蘇る」

ビルドRR「くっ……」

デイケイド「美晴、アンデッドは俺に任せろ」

ビルドRR「土、でもアンデッドは……」

デイケイド「ラウズカードなら、ある」

デイケイドはビルドにラウズカードを見せつけた

ビルドRR「わかった、頼む」

ジオウ「ふん！」

ビルドRR「!?!うわぁ！」

コロコロ

ジオウ「ほおー、まさかウオッチを持っていたとはな」

ビルドRR「!?!しまった！」

ジオウからの攻撃を受けたせいでビルドから鎧武ライドウオッチが転がり落ちた

ジオウ「せっかくだし、使ってみるから……」

そう言って、ジオウはウオッチを起動した

『鎧武!』

『アーマータイム!ソイヤツ!鎧武!』

ジオウは鎧武アーマーに姿を変えた

ジオウG「はぁ！」

ビルドRR「うっ!…今日ここでウイザードウオッチを取り戻す!」

そう言って、ビルドはベルトからフルフルラビットタンクボトルを取り出した

『タンク!』

ボトルを更に5回振った

『タンク and タンク』

もう一度、ベルトに差し込んだ

『ガタガタゴットン！ズツタンズタン！』

『Are you ready?』

ビルドRR「ビルドアップ」

『鋼鉄のブルーウオーリア！タンクタンク、やべえーい！ツエーイ』

ジオウG「何!？」

ビルドTT「勝利の法則は決まった!」

ビルドはラビットラビットフォームからタンクタンクフォームへと姿を変えた

ビルドTT「はあー！オラア!」

ジオウG「ぐはあ!」

くデイケイド・キバ側く

キバ「はあー!」

デイケイド「ふん!…数が多いな」

キバ「そうですね」

キバット「渡、ならタツロットだ!」

キバ「そうか、来いタツロット!」

キバがキバットにフェッスルを吹かせると、空からタツロットがやってきた

タツロット「渡さーん!ドラマティックに行きましょう!」

supar nova♪μs 真姫

タツロット「変・身!」

タツロットはキバのカテナを全て打ち破り、キバの左手に身につけた

キバE「はあ!」

キバはキバエンペラーに姿を変えた

キバE「ザンバット!」

タツロットの口からザンバットソードが出てきた

キバE「はあ!ふっ!とりゃあ!」

ザンバットソードは研ぐ度に威力を上げている

キバE「ふっ！はあ！」

キバット「渡！キバって行くぜえ！」

『ウエイクアーツプー！』

キバE「ふっ！…はあー…！」

ザンバット『1匹、2匹、3、4、5、6、ラスト！』

キバは真つ赤に染まったザンバットソードでアンデッドを切りつけた

デイケイド「俺も負けられない」

そう言つて、デイケイドはケータツチを取り出した

『クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、W、ooo、フォーゼ、ウイザード、鎧武、ドライブ、ゴースト、エグゼイド、ビルド、ジオウ！』

『ファイナルカメンライダー・デイケイド！』

Ride the wind♪μ's 絵里

デイケイドはコンプリートフォームへと姿を変えた

デイケイドK「ふん！はあ！オラア！」

デイケイドはケータツチを取り出した

『W、仮面ライダー・エクストリーム』

デイケイドがWのボタンを押すと、エクストリームフォームのWが現れた

『ファイナルアタックライダー・だ、だ、W』

デイケイドK「はあ！…はあー…！」

Wエクストリーム「はあ！…はあー…！」

アンデッド「ぐはあ！」

『ウイザード、カメンライダー・インフィニティ』

デイケイドがウイザードのボタンを押すと、インフィニティスタイルのウイザードが現れた

『ファイナルアタックライダー・ウイ、ウイ、ウイザード！』

デイケイドK「はあー…！」

ウイザードI「はあー…！」

デイケイド・ウイザード「でやあー…！」

アンデッド「ぐはあ！」

デイケイド・キバ「シユツ」

デイケイドとキバはたおしたアンデッドにラウズカードを投げ、アンデッドを封印した

視点は戻って、ビルド

ビルドTT「ふん！はあ！」

ジオウG「ぐう…はあ！」

『タンク！ジェット！ガトリング！ロケット！』

『アルティメットマッチです』

ビルドTT「はあ…ふん！」

『アルティメットマッチブレイク！』

ジオウ「ぐはあー！」

コロコロ

ジオウは攻撃を食らったせいで鎧武とウィザードのウォッチを落としてしまった

ビルドTT「こいつは返してもらおうぜ」

ジオウ「くっ……」

ジオウは煙に包まれて消えた

次回仮面ライダービルド

「それでは新生徒会長」

「皆さん！こんにちは」

「なんでこいつが……」

「もう一度……あるわよ」

次回第30話ラブライブ再び

《テレビ本編》2期

第30話ラブライブ再び

いずみ「音ノ木坂学院は、入学希望者が予想を上回る結果となったため、来年度も生徒を募集することになりました。3年生は残りの学園生活を悔いのないように過ごし、実りのある毎日を送っていつでもええたらと思います。そして1年生、2年生はこれから入学してくる後輩達のお手本となるよう、新たに前進して言ってください。」

ジオウからウオツチを取り出してから、1週間経った、今は音ノ木坂学院の講堂に集まって、理事長の話聞いてる

「理事長、ありがとうございます、では次新生徒会長挨拶」

理事長が話を終え、司会が進行すると、絵里が立ち上がり拍手をした、何？あいつ馬鹿なの？

そして、出てきた生徒会長は……

穂乃果「皆さん！こんにちは」

きやあー！

穂乃果が挨拶すると、講堂歓声が巻き起こる

穂乃果「この度、新生徒会長に成りました、スクールアイドルでお

馴染み、私……」

穂乃果がそう言つて、マイクを投げた……投げた!?!あいつ何してるの!?!

穂乃果「高坂穂乃果と申します！」

投げたマイクをなんとかキャッチし、穂乃果は名乗った……なんでしょ？こいつが……

く音ノ木坂学院・生徒会室く

穂乃果「はあー……疲れた……」

生徒会長の話が終わり、俺と穂乃果とことりと海未は生徒会室に来ていた

ことり「お疲れ様、穂乃果ちゃん♪」

穂乃果「凄つく緊張した……」

美晴「緊張していた人が普通マイク投げけるか？」

本当に……なんでこいつが生徒会長に……

ことり「でも、穂乃果ちゃん挨拶よかったじゃん♪」

海末「よくありません！、折角美晴と咲さんが、協力してくれて考えた挨拶文を……」

あらあら、これはかなりご立腹の様子だな……

何故海末がこんなに怒っているか、それは、新生徒会長の挨拶の時だ

回想

穂乃果「皆さん！こんにちは高坂穂乃果です」

穂乃果が名乗った後、数秒の沈黙が続いた

穂乃果「ああ……えーと……」

美晴「はあー……海末これ終わったら穂乃果お説教5時間ね」

海末「はい、分かりました」

そう言つて、俺は穂乃果の所に行き、マイクで代わりに挨拶をした
美晴「皆さんすいません、生徒会長はスクールアイドルとして前で話すのは得意なんです、こういった堅苦しいのは不得意なので申し訳ありません、こんな頼りない新生徒会長ですがよろしくお願いします」

そう言つて、俺は穂乃果を連れて、舞台袖まで連行した

回想終了

穂乃果「結局その先は真っ白……はあ、せっかく練習したのになあ」

海末「とにかく、穂乃果は今日これを処理してください」

そう言つて、海末は机の上に分厚いファイルを4つ、そして1つの紙を置いた

穂乃果「どれどれ、学校の学食が不味い、アルパカが私に懐いてくれない、文化祭に有名人を連れてきて欲しい……何これ？」

海末「一般生徒からの要望です」

美晴「いや、最後に關しては無理だし、2個目は自分で何とかできるし、最初に至つては愚痴じゃねーか」

ことり「あはは……」

本当に大丈夫か？……

穂乃果「うー、海末ちゃんもやってよー、副会長なんだからなーんで駄々をこねるかなあー？」

海末「私はもう目を通してあります」

穂乃果「じゃあやってよー」

海末「仕事はそれだけじゃないんです！あっちには校内に溜まった忘れ傘の放置！各クラブの活動記録のまとめも放ったらかし！そのロッカーの中にも、3年生からの引継ぎのファイルがまるごと残っています！生徒会長である以上、この学校のことは誰よりも詳しくないといけません！」

美晴「正論だな」

ことり「でも4人いるんだから、手分けしてやった方が早いんじゃない？」

美晴「ことり、穂乃果を人形にしている……」ボソツ

ことり「穂乃果ちゃん、生徒会長なんだから、ちゃんとやらなきゃ計画通り……ニヤ

穂乃果「美晴君、悪い笑みをしている……」

おい、悪い笑みってなんだ、悪い笑みって

穂乃果「生徒会長も大変なんだねえー」

絵里「あら、やっとわかってくれたかしら」

穂乃果がそう言っていると、生徒会のドアが開き、絵里と希と土がやってきた

穂乃果「あつ、絵里ちゃん、希ちゃん、土君」

土「大丈夫だったか？挨拶がたどたどしくて、心配になったぞ？」

穂乃果「あはは……」

海末「今日はどうしたんですか？」

絵里「特に用事はないわ、ただ自分が推薦した手前だし、心配で……」

まあそう思うのも無理はないな

希「明日からまたみっちりダンスレッスンもあるしね、カードによれば穂乃果ちゃんは生徒会長としてかなり苦労するぽいっで」

穂乃果「ええ!？」

希「だから、3人ともフォローしたってね」

希は俺と海未とことりの方を向きながら、言ってきた

穂乃果「気にしてくれてありがとう!」

絵里「わからない事があつたらいつでも言つてね、なんでも手伝うから」

美晴「そりゃ頼もしい」

凛視点

今、凛とかよちんと真姫ちゃんと渡君とにこちやんで屋上にいる

にこ「いい? 特訓成果を見せてあげるわ!」

凛「何の特訓の成果?」

にこ「にっこにっこにっ! あなたのハートににっこにっこにっ! 笑顔届ける矢澤にこにこあぁ、どわめえどわめえどわめえにこにこは、みんなのもっ、のっ!」

…ええ? これに特訓してたの?

真姫「キモチワルイ」

にこ「なぁんでよ!」

いやーでも、確かに寒いにや……

花陽「なんで私達ここに來てるの?」

にこ「あんた達は、これからは1年生が頑張らなきゃいけないのよ! いい? 私はあんた達だけじゃどうすればいいか分からないと思つて、手助けに來たの! 先輩として!」

そう言いながら、にこちゃんは三脚に立てて、ビデオを撮り始める

渡「そのビデオ: 何に使うの?」

渡君が聞くと、

にこ「ネットにアップするために決まってるでしょ! 今やスクールアイドルもグローバル! 全世界へとアピールしていく時代なのよ! ライブ中だけじゃなく、日々レッスンしている様子もアピールに繋がるわ。ぐふっ、いっひっひっ…」

と、とてもつもなくて悪い笑みをしているにや……

にこ「こうやって1年生を甲斐甲斐しく見ているところをアピール

すれば、それを見たフアンの間になこにーこそセンターにふさわしいとの声が上がりに始めて…ウツヒツヒツヒツ…」

凜「全部丸聞こえにやー」
にこ「にこ!？」

その時、かよちんのスマホからバイブ音が流れ、かよちんがスマホを見ると、

花陽「えっ……ええ!?ちよっ……え?え?ええ!？」

凜「かよちんどうしたにや?」

真姫「そうよ、そんな芸人みたいなリアクション取って……」

花陽「嘘……ありえないです」

そう言いながら、かよちんは屋上から飛び出した

渡「ええ!?花陽さん!」

真姫「追うわよ」

そう言つて、凜達はかよちんを追いかけた

く音ノ木坂学院・部室く

かよちんを追いかけて、着いた場所は部室、中に入るとかよちんはパソコンで何かを検索している

真姫「いきなり飛び出して、どうしたのよ?」

凜「こういうかよちんはご飯の話かアイドルの話ぐらいだにや」

花陽「これは夢?夢なら覚めて欲しいです」

真姫「だから、どうしたのよ?」

にこ「早く教えなさいよ」

クルツ

かよちんがこつちにパソコンを向けて、画面を見せてきた……信じられない

にこまきりんわた「ええ!？」

渡「美晴君達にも伝えよう!」

凜「うん」

そう言つて、凜たちは部室を飛び出た

美晴視点

く音ノ木坂学院・中庭く

俺は今、生徒会長 の仕事を終わらせ、休憩がてら中庭に来ていた。
美晴「ふい〜ん？穂乃果？」

穂乃果「ハムハム……あ！美晴君」

なんと、中庭には穂乃果がパンを食べていた

美晴「こんな所でサボってたら、海未に怒られるぞ？」

穂乃果「ち、ちがうもん休憩してただけだもん」

美晴「はは、そういう事にしといてやる」

穂乃果「むー…そう言う、美晴君こそサボりに来たんじゃないの？」

穂乃果が不満そうに俺を見てくる

美晴「俺はお前とちがって、ちゃん終わらせきた」

穂乃果「え!?!嘘でしょ!?!」

美晴「嘘じゃない、ついでに退屈だったからお前のも終わらせとい
た」

穂乃果「ええ!?!」

穂乃果とそんな会話をしていると、渡さん達がやってきた

真姫「はあ…はあ…やつと…見つけた……」

美晴「真姫？」

渡「穂乃果さん…はあ…色んなところ…周りすぎ……」

穂乃果「渡君？」

にこ「穂乃果……もう一度…あるわよ」

穂乃果「何が？」

もう一度？何言ってるんだこいつ

花陽「ラブライブがもう1度あるんです！」

穂乃果・美晴「……………え？」

次回仮面ライダービルド

「出なくてもいいんじゃない？」

「これを逃したら…もう」

「私達、絶対にラブライブでμ'sとA—RISEに勝ちます」

「千歌さん達だって、ここまで何度も壁にぶつかって、メンバー内で喧嘩も起きただろう…だけど、A q o u r sはそんな壁をメンバーで力を合わせ、壁を蹴破った……μ'sとA q o u r sの団結力は俺は分

かってる…それは、リーダーであるお前も分かってるはず、……それに千歌さん達はμ'sに憧れて、Aquoursを結成した、お前達だってそう、ARISEをみてμ'sを結成した。もはやこれは運命なんだよ」

「もし、μ'sでも壊せない壁、絶望があったら俺がお前達、μ'sの希望になってやる！」

次回第31話ラブライブの出場とドラゴン乱舞

『さあ、久しぶりのショータイムだ』

第3-1話ラブライブ出場とドラゴン乱舞

く音ノ木坂学院・部室く

美晴「えーつと……花陽さんもう一度言ってくださいあなた様はなんとおっしゃいましたか？」

花陽「もう一度ラブライブが開催されるんです！」

穂乃果「なーんだ……え!?ラブライブ!？」

花陽「そう、A—RISEの優勝と大会の成功とともに終わった第1回ラブライブ!、それがなんと!!第2回大会が行われることが早くも決定したのです!」

花陽の説明なら、二回目の大会はどうやら一回目の大会の比じゃないらしい、会場の広さも広くなってるようだ、システムは各地区で予選が行われ、各地区の代表に選ばれたチームがラブライブに出場出来るらしい

海末「では、以前の様に人気投票は関係無いのですね？」

にこ「その通り!これはアイドル下克上!ランキング下位のもので、予選のパフォーマンスによれば本戦に出場出来るんです!」

絵里「それって私たちにも出場出来るチャンスがあるって事よね?」

花陽「そうなんです」

凛「凄いにゃー!」

皆喜んでるけど、忘れてるなコイツら

美晴「皆、水を差す様で悪いんだけど、地区ごとならここは東京地区、つまりA—RISEと当たるのは避けては通れない、まあ結論から言うと、俺達が出場するにはA—RISEに勝たなければいけないという事だ」

μ, s「あつ………」

渡「はあー……」

士「全員忘れてたのかよ……」

A—RISEと戦うという現実にも、sは次々とたおれた

花陽「ああ、終わりました……」

にこ「ダメだあ…」

ことり「A—RISEに勝たなきゃいけないなんて」

希「それはいくら何でも」

真姫「無理よ」

全く、なーんですぐにダメですよムードにさせるよ…まあ無理もな
いか

凜「いつそのこと、皆で転校するにやー！」
ベシッ

凜「痛いにやー」

美晴「やる前から諦めるなよ、A—RISEは強いけどそんな奴ら
の負け顔、見たいだろ？」

絵里「腹黒ね…」ボソッ

美晴「だーれが腹黒だ」

花陽・海末「なんでそう言うのは敏感なの…」ボソッ

士「ま、まあエントリーは自由だ、やれるだけやってみるのも悪く
ないぞ」

真姫「そうね」

μ, sの皆は笑顔になった…ただ一人を除いて

絵里「じゃあ決まりね、早速…」

渡「ちよつと待つてください」

μ, s「え？」

美晴「どうした？穂乃果、さつきからずっとだまって」

穂乃果はさつきから何も意見せず、優雅にお茶を飲んでいた

穂乃果「出なくてもいいんじゃない？」

……………はい？

μ, s+マネージャー「ええー!?」

そつかそつか、穂乃果は出なくてもいいと…じゃなくて！

にこ「ほーのーかー！」

にこがすごい勢いで穂乃果に近寄る

海末「穂乃果、自分の顔が見えますか？」

穂乃果「見え…ます」

海末が穂乃果を鏡の前に誘導し、聞いている。いや、穂乃果とまどつてるやん

海末「では、鏡の中の自分は何とおっしゃいましたか？」

穂乃果「なにそれ!？」

絵里「だって、穂乃果!」

希「ラブライブ出ないって……」

にこ「ラブライブよ!ラブライブ、スクールアイドルの憧れよ!あなたなら真っ先に出ようって言いそうなもんじゃない!」

なにこれ?俺たちは何を見せられてるの?

穂乃果「そうかな……」

絵里「何かあったの?」

穂乃果「いや…別に……」

にこ「だったら何で!」

海末「何故、出なくてもいいと思っただんですか?」

穂乃果「私は歌って、踊って、皆が幸せなら、それで……」

皆が幸せ……か、今までの穂乃果なら、そんな言葉出てこないな、つまり……

にこ「今まで、ラブライブを目標にしてやってきたんじゃないの!違うの!」

穂乃果「い、いやあ……」

花陽「穂乃果ちゃんらしくないよ!」

凜「挑戦してもいいんじゃないかな?」

花陽と凜が穂乃果にそう聞くと、
ぐうぐ

穂乃果のお腹がなった

穂乃果「そうだ、明日からレッスン大変になるし、今日は寄り道してかない?」

絵里「でも……」

にこ「はあ!？」

花陽「穂乃果ちゃん?」

μ, s 皆、目をまん丸としている

美晴「寄り道するなら、俺は今日パス」

ことり「え？どうして？」

美晴「寄り道すると、咲の夕飯作るの遅れるからな」

ことり「そっか」

美晴「んじやあ、寄り道するのはいいけど、夜遅くに帰るんじやないぞ」

そう言っつて、俺は部室を出て、家に帰った

家に帰ったら、遅いと言われ、咲のわがままをずっと聞いたのはまた別の話

翌日の放課後

にこ「いい？今からこの石段を競走よ！」

穂乃果「なんで競走？」

今、神田明神社の前で競走宣言しているのをにこと穂乃果以外のメンバーは見守っていた

士「怪我すんなよ」

美晴「石段だからかなり痛いな、転んだら…」

実際、前の世界では咲とパラドが転んでいたな

渡「それより、なんでこうなったんですか？」

ことり「穂乃果ちゃんをやる気にさせたらしいけど……」

海末「強引ですな」

まあ、強引っつて言えば、強引だな

穂乃果「また今度にしようよ？今日からダンスレッスンだよ？」

どうやら、穂乃果は乗り切ったでは無いようだ

にこ「ラブライブよ！私は出たいの！私が勝ったらラブライブに出る！負けたら諦める！いいわね」

その条件で穂乃果の表情が明るくなった

穂乃果「分かった！」

穂乃果とにこがクラウチングスタートの体制を取る、いやこれ…

美晴「クラウチングスタートの意味ある？」

そんな事をつぶやいていると、

にこ「行くわよ！よい……ドン！」

穂乃果「ええ!？」

にこがドンと言う前に走ってた、いやズルは無しやろ

穂乃果「にこちゃんずるい!」

にこ「フンっ!悔しかったら追い抜いて見なさいよ!…はあ、ハア
ハア…キヤ!？」

にこが石段で転んだ、ほら言わんこつちやない

穂乃果「にこちゃん!にこちゃん大丈夫?」

にこ「へ、平気…」

いや、絶対平気じゃ無いだろ…膝から血出とるやないか

結局、そのあとは雨が降り、中止になり俺たちは神田明神社の鳥居
の下で雨宿りし、俺はこの怪我を治療している

美晴「染みるぞ」

にこ「うわあ!…つく、うう…」

美晴「全く、ずるなんかするからだぞ、出たいのは分かるが…」

にこ「…うるさいわね」

そんな会話をしながら、膝に包帯を巻いた

美晴「ほらよ」

にこ「ありがとう…」

今、穂乃果に説明中のみんなの元に駆け寄る

絵里「そうよ、3月になったら私達は卒業…みんなと一緒に居れ
るのも後半年…」

希「それに、sでいられるのも在学中だけ」

絵里と希が説明している

穂乃果「そんな…」

絵里「別にすぐ卒業する訳では無いわ、でもラブライブに出れるの
は今回の、ラストチャンス…」

希「これを逃したら…もう…」

にこ「本当はもっと続けたいと思う、実際に卒業してもプロを目指
す人はいるわ、だけどこの9人でラブライブに出れるのは今回が最後
…」

穂乃果「やっぱり…皆…」

穂乃果の表情が迷ってるいるようになった、そんな時だ

ピロロロロロロロロロ

ピッ

美晴「もしもし」

千歌『あつ、美晴君！私達、次のラブライブ出るの！』

美晴「そうか、そうなると俺はどっちに着けばいいのやら……」

千歌『あはは……それで穂乃果さん達に伝えておいて欲しいんだけど』

美晴「いま、皆いるから言いなよ」

そう言つて、おれは電話をスピーカーにした

千歌『穂乃果さん、そして、μ'sの皆さん……』

Aqours『私達！絶対に本選に出場して、μ'sを倒します！』
μ's「!?!」

ピッ

美晴「あらら、早速言われちゃったね、さあどうする？お前ら、いや穂乃果」

穂乃果「……………」

穂乃果が余計顔を暗くしたから、俺は穂乃果の両肩を掴んだ

美晴「いいかよく聞け、千歌さん達だって、ここまで何度も壁にぶつかつて、メンバー内で喧嘩も起きただろう……だけど、Aqoursはそんな壁をメンバーで力を合わせ、壁を蹴破つた……μ'sとAqoursの団結力は俺は分かつてる……それは、リーダーであるお前も分かつてるはず、今倒します宣言されているのに、μ'sは『私達を出ないのでAqoursの勝ちです』なんて言ってみろ、Aqoursは悲しむ……それに千歌さん達はμ'sに憧れて、Aqoursを結成した、お前達だってそう、A-RISEをみてμ'sを結成した。もはやこれは運命なんだよ」

穂乃果「運命……」

美晴『運命よ……お前が命運を決めるのでは無い、俺が命運を決める』

士『俺は運命と戦う！そして、勝つて見せる！』

美晴「俺と士が知っている人の言葉だ」

μ s「……………」

渡「俯かないで顔を上げて、μ sも壁を破りましょう」

美晴「それに、μ s全員でも壊せない壁、絶望という壁があったら、その時は俺がいや、俺達が希望になってやる！」

μ s「!!!」

μ s、特に穂乃果の顔が1番明るくなった、そんな時だ
ドゴオン

μ s「きやあー！」

士「みんな！」

美晴「……フェニックス、メデューサ、ベルゼバブ……」

フェニックス「よお、久しぶりだな、指輪の魔法使い！」

メデューサ「ワイズマンの指示に従い、お前を抹殺する」

美晴「望むとこだ！」

俺はそう言つて、ポケットからウイザードウォッチを取り出した

花陽「え!?美晴君取られたんじゃ……」

士「まさか……あの時か！」

美晴「ああ、海末これ持つててくれ」

そう言つて、俺は海末にビルドウォッチを投げ渡す

『ウイザード!』

ウォッチを起動すると、俺の腰にウイザードドライバが現れる

『シャバドウビタッチヘンシーン、シャバドウビタッチヘンシーン』

美晴「変身！」

『フレイム・プリーズ!』

『ヒーヒー、ヒーヒーヒー!』

俺は久しぶりに仮面ライダーウイザードに変身した

穂乃果「美晴君が……」

希「ウイザードに……」

凜「なった……」

ウイザード「さあ、久しぶりのショータイムだ!」

『ガブツ』

『カメンライダー!』

士・渡「変身！」

『ディケイド！』

士と渡さんも変身した

ウィザード「行くぞ！」

そう言つて、俺達は雨の中、フロントム達と戦い始めた

キバ「ディケイド」

キバ「はあ！ふっ！はっ！」

ディケイド「ふん！はあ！はあ！」

メデューサ「仮面ライダーキバ、仮面ライダーディケイド、お前達を抹殺する」

メデューサは髪の毛の蛇をキバとディケイドに伸ばした

キバ「うわあ！」

ディケイド「くっ！」

メデューサの髪の毛にディケイドとキバは捕まった

メデューサ「はあ！」

キバ・ディケイド「ぐわあー！」

メデューサの髪の毛から電気が流れ、それがキバとディケイドに直撃する

キバツト「渡、しっかりしろ！…仕方ないこういう相手には」

そう言つて、キバツトがガルルフエツスルを自分で吹く

『ガルルセイバー！』

空からガルルの像が降ってきて、メデューサの髪の毛を斬る

メデューサ「うわあ！」

キバがガルルの像を手に持つとガルルフォームになった

キバG「はあー！はあー！」

メデューサ「ぐはあ！」

ディケイド「全く、一人で活躍するとは酷いねえ」

『カメンライダー・鎧武！』

『オレンジアームズ！花道オン・ステージ！』

ディケイドは鎧武のカードを使って、仮面ライダー鎧武になった
D 鎧武「はあ！」

絵里「え？オレンジ？鎧武者？どっち？」

D 鎧武「両方だ」

絵里の質問にデイケイドは戦いながら答える

キバG「はあ！ふっ！うらあ！」

D 鎧武「はあ！ふん！オラア！」

メデューサ「はあ！」

『フォームライダー・鎧武イチゴアームズ！』

『いちごアームズ！シュツシュつとスパーク！』

デイケイドは鎧武イチゴアームズになった

穂乃果「いちご！」

D 鎧武i「はあ！とりや！そいつ！」

メデューサ「うわあ！…うっ！うう」

デイケイド「トドメだ」

デイケイドは鎧武から通常に戻りケータッチを取り出した

『クウガ！アギト！龍騎！ファイズ！ブレイド！響鬼！カブト！電王！キバ！』

ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武！ドライブ！ゴースト！エグゼイド！ビルド！ジオウ！』

『ファイナルカメンライダー・デイケイド！』

デイケイドはcompleteフォームになった

キバット「渡！俺達も」

キバ「タツロット！」

キバットにタツロットの笛を吹かすと空からやってきた

タツロット『変・身！』

キバもエンペラーフォームになった

デイケイドK「渡、一緒に行くぞ」

キバE「はい」

キバはそう返事し、タツロットの顔を動かし、ルーレットをする

『バツシャーフィーバー！』

『ファイズ！カメンライダー・ブラスタ』

タツロットをバツシャーにつけ、デイケイドはケータッチでファイ

ズのボタンを押したら、隣にブラスターフォームのファイズが現れた
『ファイナルアタックライドー・ファ、ファ、ファイズ！』

キバ・ディケイド「はぁー……はぁー！」

メデューサ「うわぁー……！」

キバの攻撃とディケイドとファイズの攻撃を喰らい、メデューサは
爆散した

くワイザードく

ワイザード「ふっ！はぁ！はっ！」

フェニックス「オラァ！ふん！」

ワイザード「うわぁ！」

ベルゼバブ「はぁ！」

ワイザード「ぐはぁ！」

ワイザードはフェニックスとベルゼバブの攻撃を喰らい、地面に倒
れる

フェニックス「おいおい、この程度か？」

ワイザードはマスク越しに目を瞑る、瞑ると今までの *u*、*s*や*Aq*
*ours*との日常が目に浮かぶ

ワイザード「まだだ！」

『シャバドウビタッチヘンシーン』

『フレイム・ドラゴン！』

『ボーボー、ボーボー……！』

ワイザードはフレイムドラゴンスタイルになった

『コネクト・プリーズ！』

ワイザードは魔法陣からルーレットのようなものを取りだした

『ドラゴタイム！セットアップ！』

ワイザードの魔力の結晶体、ドラゴタイムだ

ワイザードFD「さぁ、ショータイムだ！」

『スタート！』

ワイザードはドラゴタイムの親指部分を押し、ワイザードソー
ドガンを持ってフェニックスとベルゼバブの元に走り出した

ワイザードFD「はぁ！ふっ！おりゃ！」

フェニックス「オラア！てめえは俺には勝てねーよ」

ウィザードはドラゴタイマーの針が青色に行つたのを見た

ウィザードFD「それは、どうかな？」

『ウォータードラゴン！』

青色の魔法陣からウィザードウォータードラゴンスタイルが出てきた

フェニックス「何!？」

花陽「美晴君がフェチャツタノ!？」

ベルゼバブ「どんな魔法だか知らんが、二人なつたところで同じ事だ」

ウィザードWD「はあ！ふっ！おりや！」

ウィザードFD・ウィザードWD「さあーて2人かな？」

『ハリケーンドラゴン！』

今度は緑色の魔法陣からハリケーンドラゴンスタイルのウィザードが現れた

ベルゼバブ「三人だと!？」

ウィザードHD「はあ！ふっ！おりや！」

ウィザードFD「とりあ！はあ！うらア！」

ウィザードWD「ふん！はあ！」

ベルゼバブ「ぐはあ!…ぐっ」

フェニックス「…ここは任せたぜ、ベルゼバブ」

そう言つて、フェニックスは消えた

ウィザードFD「もう一人いたりして」

『ランドドラゴン！』

ベルゼバブ「何だ？はあー!！」

ベルゼバブがウィザード達に針を投げたが、黄色の魔法陣からランドドラゴンスタイルのウィザードが現れ、針を魔法で防いだ

ウィザードRD「俺もいるよ？」

『ファイナルタイム！』

ウィザードFD「はあ！とりあ！」

ベルゼバブ「はあ！オラア！」

ウィザードWD「ふん！はあ！」

ベルゼバブ「ぐはあ！……くっ」

ウォータードラゴンの攻撃を受け、ベルゼバブはワープホールへ逃げた

ウィザードWD「……そこ！」

ベルゼバブ「何!？」

ベルゼバブが別のワープホールから現れたが、ウォータードラゴンに見つかり、攻撃を喰らい、また逃げた

ウィザードHD「……はあ！」

ベルゼバブ「うわあ！」

また別のワープホールから現れたが、ハリケーンドラゴンに見つかり、撃ち落とされる

ウィザードFD「はあ！はあ！」

『ドラゴンフォーメーション!』

フレイムドラゴンがもう一度、親指部分を押しすと、ウィザード達にドラゴンのパーツが着く

ウィザードFD「でやあー！」

ウィザードWD「足元がお留守だぜ？はあ！」

ウィザードHD「はあ！」

ウィザードRD「オラア！」

ベルゼバブ「ぐはあ！」

『カモンスラッシュシエイクハンド!』

ウィザード「ファイナーレだ！」

『フレイム!』『ウォーター!』『ハリケーン!』『ランド!』

『スラッシュストライク!』

『ポーボーボー!』『ザブザブバシャー!』『ピューピューピュー』

ウィザード「でやあー！」

ベルゼバブ「うわあー！」

ベルゼバブは爆散した

次回仮面ライダーウィザード

「次のラブライブは未発表の曲に限るみたいです」

「あれやるか」

「今日で美晴くんとの距離を縮める」

第32話二度目の合宿

第32話二度目の合宿

凜「かよちゃん！見てみて！山がたくさんあるよー！」

花陽「ふあく本当だね」（今日で美晴君との距離を縮める！）

士「…絵里？南？もう少し離れてくれないか？」

絵里・ことり「やだ！」

美晴「両手に花で嬉しいだろ？士」

士「ええ……」

現在俺らは列車でとある場所に向かっている。

何故こんなことになったかと言うと数日前に遡る

〜数日前〜

「ええー!?!」

美晴「花陽マジ？」

花陽「はい、間違いありません！」

あららー困ったな

スイッチが入ってる花陽が言うには第二回ライブでは、今まで

出したことの無い曲でエントリーしないといけないとか…

ことり「未発表……」

穂乃果「ていう事は今までの曲は使えないの!?!」

にこ「なんで急に!?!」

花陽「今回は参加メンバーが多く、中にはプロのアイドルをコピー

してるアイドルも参加するそうです」

うーん、困ったな、プロのアイドルをコピーしてるんだろ？

渡「この段階でふるいにかけるということですか」

凜「そんなあ……!」

希「あと1ヶ月も無いのに……」

凜はともかくあの希が焦るなんてな

凜「…今美晴君に馬鹿にされた気がするにや……」

美晴「き、気のせいだ！」

なんでこういう時に勘が冴えるんだ?!

穂乃果「どうするの？美晴君」

美晴「真姫と海末とことりが急ピッチで作詞、作曲、衣装作りをするとしても、直ぐには案は浮かばないはずだ」

海末「と言うと？」

美晴「やるしか…ないだろ…3日間合宿だ！」

μ's「……………え？」

ええー！ー！ー！

少しの間はなんだ!?

にこ「どうして急に合宿なのよ！」

美晴「これしか方法が無い…と言ってもこれは賭けだな」

花陽「賭け？」

美晴「ああ、いつも三人がアイデアを思い付くのが90%だとして

今回は三日間合宿に行くから、思い付く確率は30%ぐらいだな」

穂乃果「うう…美晴君が難しいこと言ってる……」

海末「そんなに難しい事言ってますよ！」

まあ、こんな事があり、合宿が決定した

〜回想終了〜

そして、今合宿所に到着した

ことり「ふあ〜綺麗♪」

美晴「ん〜！着いた〜…」

希「でかいあくびやね」

美晴「…うるせ」

本当に希は痛いとのついてくるな

凜「やつぱり真姫ちゃんは凄いにやー！こんなところにも別荘があるなんて！」

花陽「歌も上手いし完璧だよね！」

渡「そして、可愛いですしね」

真姫「う、うるさいわよ！特に渡！／／／」

渡「ええー!?!僕?!」

凜と花陽と渡さんが褒めると真姫は 顔を赤くした

渡さんは自分だけ指摘されて、驚いてる

大丈夫だよ渡さん、真姫は大好きな渡さんに褒められて照れてるだ

けですから

絵里「さ、皆早く別荘に行くわよ、今日は本当に時間が無いんだから」

やっぱりμ、sのまとめ役は絵里だな、…とても列車の中で士に甘えていたとは思えんな

そんなことを思っていたら、海末がでかいリュックをしょい始めた
美晴「お前それマジで持ってきたのかよ……」

海末「何を言ってるんですか？」

花陽「海末ちゃん!?何そのリュック？」

海末「山に行くんですよ?!これくらいは当たり前です!行きますよ山が私達を呼んでいます!」

そう言い、海末はさきに駅を出た

美晴「…すまん、前夜に止められなかった」

士「いいって…それより園田を追いかけるぞ」

そうだね、と皆頷き、駅を出た

ことり「あれ?何か忘れてる様な……」

ただ一人を除いて

同時刻μ、sが乗っていた列車

穂乃果「すやあ…すやあ…うん?」

穂乃果が目を覚ますと、メンバーが誰もおらず、隣に老人が一人座っていた

そして、とあるバス停で

海末「全く…穂乃果はたるみ過ぎです!」

穂乃果「だって皆起こしてくれると思っただもん!皆ひどいよオ」

列車の揺れが心地よく居眠りしてしまい、穂乃果は目的の駅に出遅れたらしく、俺が魔法で穂乃果を連れてきた、連れてくると海末に怒られ、涙目になる

ことり「ご、ごめんね?…忘れ物がないか確認するまで…きずかなくて」

穂乃果「…ううっ!」

士「ごめんな、高坂」

ことりと士が穂乃果の機嫌を直そうとしているが穂乃果の機嫌は直らない

穂乃果「…甘いของ食べたい……」

美晴「…はあー…ほらよ」

穂乃果が小さく眩き、俺がチョコレートをあげると穂乃果の機嫌は直った

真姫「そんなことより早く行くわよ、別荘はここを登ってすぐだから」

真姫が指さした場所は大きい山へと続く道があった

く別荘く

花陽「ひゃあゝ…！」

絵里「相変わらず凄いわね…」

渡「ここにもあったんですか…」

別荘に着くやいなや、皆驚いてる

俺だつて今、冷静を着飾っているが、内心めっちゃ興奮している

穂乃果「よし！私イチバーン！」

凜「あー！穂乃果ちゃん待つにやー！」

そう言い、穂乃果と凜が走り出した

絵里「ちよつと2人共！」

希「まだまだ元気やねえ」

美晴「希もまだ元気だろ……」

絵里が凜と穂乃果を止めるが二人は聞かずに真姫の別荘の中に入つてた、その状況に希が言ったので俺がツツコんだ

士「俺達も中に入るか」

士がそう言つて、皆中に入った

にこ「ぐぬぬぬぬ」

ただにこだけは何故か悔しがっていた

く別荘内く

美晴「…ワァーオ…」

穂乃果「ピアノ！お金持ちが持つてるやつ！」

凜「そして、暖炉！」

別荘に入ると夏休みの時とは広さが違うというところに俺は驚いてた、おバカ姉妹は別荘内を探索している

渡「あっ！このバイオリンここにあっただ」

真姫「執事が『渡さんも来るなら移しときます』って言ってたわへえーそんなことあったんだ

凜「初めて、暖炉みたにやー！」

穂乃果「だよね、だよね！ここに火をつけて……」

真姫「つけないわよ？」

「!?」

美晴「えっと、…理由をお聞きしても？」

真姫「だってまだそんなに寒くないでしょ？それに暖炉を汚すとサントさんが入りにくくなるってパパが言ってたわ」

美晴「まあ、最近寒くな……え？」

士「サント……さん？」

真姫の言葉に俺達は疑問を抱き、士が首を傾げる

にこ「ぷ…ぷぷぷ…！ま、真姫が…！サント…信g」

『マインド・プリーズ！』

にこが笑いだし、今の真姫に言っではいけない事を言おうとしたので俺が魔法で止めた

絵里「美晴ナイスよ」

にこ「ちよ！何するのよ!？」

穂乃果「にこちゃん！それはダメだよ！」

またもやにこが言っではいけない事を言おうとした、穂乃果が大急ぎでにこの口を塞いだ

にこ「痛い、痛いわよ！何するのよ!？」

花陽「にこちゃん、流星にそれはダメだよ」

凜「そうにや！真姫ちゃんのこれからの人生を左右するにや！」

花陽と凜が説得しようとする、流星に人生は左右しないだろ

にこ「だって真姫よ!？あの真姫がサントをしn…」

美晴「希…」

希「にこちゃん、それ以上言うとアグレッシブなのいくよ？」
にこ「ひいいい…すみません」

にこが納得しないようで抗議してくる、俺は魔力消費を考え、魔法を使わずに希を使ったら、効果的代だった、ワシワシ…恐るべし

次回仮面ライダーウィザード

「じゃあ三人は作詞、作曲、衣装作りをしてくれ」

「何も思いつきません……」

「三人に任せつきりも良くないわ」

「酷いじゃー!」

次回第33話助け合い

『μ，sはチームだ、助け合って行こう!』

日常編 美晴と花陽のデート

とある日、俺は駅でとある人を待ってた

花陽「おーい、美晴君！」

そう、花陽だ

花陽「…ねえ、似合ってる…かな？」

美晴「あ、ああ、似合ってるよ／＼／＼」

やばい、なんだろう、メイド服の時とか学生服の時とは別の可愛
さがあるな

俺は少し花陽から視線をずらした

美晴「じ、じゃあ行こうか」

花陽「うん」

何故、こうなったかと言うと

…数日前

俺の家でμ、sのみんなはまったりと過ごしていた

穂乃果「退屈だねえ」

ことり「そうだねえ」

真姫「怠けすぎじゃない？」

美晴「ははは…」

こんな豊かな空気は一瞬にして消えた

美晴「？希、手に持ってるの何？」

希「あつこれ？実はねさつきくじ引きで一等当たったんよ」

美晴「す、スピリチュアル…」

希「せやろ？」

スピリチュアルってこんなに強いのか？

海末「それで一等はなんですか？」

希「一等は、遊園地のチケット！しかも二つ！」

は、はあ？

美晴「まあ、誰かと行ってくれば？」

希「いや、うち行く相手おらんし、これは花陽ちゃんにあげる」

花陽「え、ええー!？」

そう言いながら、希は花陽に遊園地のチケットを手渡した
絵里「あら、もうこんな時間かえらなきや」

穂乃果「美晴君、お邪魔しました」

美晴「ああ、また来い」

そう言つて、μ、sみんなは帰つたが、花陽だけ残つた

花陽「……………」

美晴「花陽？帰らないのか？」

花陽「帰るけど、美晴君聞いて」

美晴「なに？」

花陽「えつと……こ、今度……わ、私と一緒に……遊園地……行かない？」
：え？待て待て俺が花陽と？いや、考えろ、どうみたつてデートになる。いや、付き合つてないからデートじゃないのか

美晴「いいよ」

花陽「ほ、本当？じゃあ駅集合ね」

回想終了

とまあ、こんなことが起きた

く遊園地く

美晴「いやく久しぶりだな、遊園地来るの」

花陽「私も幼稚園ぶりかな」

美晴「よし、じゃあどこ行く？」

花陽「じゃあ……あれ」

花陽が指さしたのは、

美晴「コーヒーカップ？」

花陽「うん、あまり絶叫系は得意じゃないから」

美晴「そうか、じゃあ行く」

花陽「うん」

ギョッ

美晴「!？」

花陽「どうしたの？」

美晴「あついや……」

なんだ!?!花陽のやつ急に手なんて握ってきて……あでもよくよく考えれば、逸れるかもだし、別にいいか

一方美晴達を追う女神たち

希「あらら、花陽ちゃんも大胆やんね」

穂乃果「いやー、きょうで花陽ちゃん達どこまで進むかな?」

海末「絶対に阻止します!!」

凛「海末ちゃんだけ、目的が違うにやー」

真姫「仕方ないわよ、海末だって美晴の事好きなんだから」

ことり「美晴君モテモテだねえ」

美晴と花陽のデートを追跡する女神たち

視点は戻って、美晴と花陽

美晴「花陽? 回しすぎじゃないか?」

花陽「え? 大丈夫だよ?」

美晴「回しすぎて、酔うなよ」

花陽「美晴君の顔を見てるから大丈夫だよ」ニコツ

美晴「ツ! : : : そうかよ」

花陽「あっ! 照れてる」

美晴「う、うるさい!」

その笑顔は反則だろ／／／

俺は、花陽に恥ずかしさを覚えながら、コーヒーカップを楽しんだ

美晴「ふうー : : : 次はどこ行く?」

花陽「 : : : えと、あ、あれ」

花陽が恐る恐る指さしたのは

美晴「お化け屋敷 : : : ?」

花陽「美晴君と一緒になら、大丈夫だと思うから」

花陽は少し涙目になっている

美晴「無理すんなよ」

一方ストーリーカー女神たち

にこ「花陽大丈夫なの?」

ことり「大丈夫だと思うよ、美晴君もいるし : : :」

希「入るみたいやし、うちらも行こや」

絵里「わ、私は待ってるわ…みんなで行ってきて」

士「何やってるんだ？お前ら」

亜里沙「お姉ちゃん？」

絵里「つ、士!? 亜里沙!? どうして」

亜里沙「もう、お姉ちゃん言ったじゃない！ 今日士お兄ちゃんと一緒に遊園地行ってくるって」

士「それで何やってるんだ？」

く説明中く

亜里沙「な、なるほど、美晴さんが」

士「だいたい分かった、じゃあ行くぞ」

穂乃果「行くってどこに？」

士「美晴と小泉が行ってるお化け屋敷だろ」

絵里「え？」

またまた戻って、美晴と花陽

花陽「うっ…うう」涙目

美晴「花陽？大丈夫か？」

花陽「う、うん…」

『キャーキャー！』

花陽「うう…」

美晴「!? 大丈夫だ花陽、俺がついてるから」

花陽「うん／＼／＼」

そのまま何とか、お化け屋敷を脱出したが

美晴「…花陽？そろそろ離れてくれないか？」

花陽「嫌です、絶対に離れません」

ずっと俺の右腕にしがみついている

美晴「よし、花陽お昼にしよう、食べたら恐怖も消えるかもだぞ」

花陽「う、うん」

そう言っつて、俺と花陽はフードコートへと向かった

く遊園地・フードコートく

美晴「花陽はやっぱり定食か」

俺と花陽はフードコートに来て、食べてる最中、花陽は定食みたい

だが、普通遊園地に定食なんてあるのか？まあ、親子丼食べてる俺が
言えないけど

花陽「はい、ここに定食があつて助かりました」

まあ、本人はご満足みたいだしいいか……

美晴「花陽こっち向いて」

花陽「はい？」クルっ

美晴「落ち着いて食えよ、ご飯粒がほっぺについてたぞ」

花陽「!?」カアアア

俺は花陽のほっぺについてたご飯粒を取ると、花陽の顔が赤くなつ
た

花陽「…美晴君」

美晴「うん？どうし…」

花陽「あ、あくん」

……ふあっ!?えっ?ちよ待つて、考えろ、え?え?え?

花陽に呼ばれたから振り向くと、花陽があくんしてきた

美晴「ど、どうしたんだよ花陽…」

花陽「いいから」

美晴「あ、あくん……」

……

美晴・花陽「は、恥ずかしい……」ボソツ

またまた登場ストーリーカー女神+マネージャー

絵里「うう…」

亜里沙「よしよし、辛かったね」

士「どつちが姉なんだ」

絵里はお化け屋敷でダウンしてしまた

凜「それにしても、かよちん大胆だにやー」

穂乃果「だよね、まさか腕に抱きつくなんてね」

希「……あっ」

にこ「どうしたのよ、希……あっ」

ことり「2人ともどうしたの?」

希「い、今花陽ちゃんが……」

にこ「み、美晴に……」

穂乃果「なにになに！まさかキス?!」

希・にこ「いや、あくんしてた☒……」

亜里沙・絵里除く「……え？」

また戻り、美晴と花陽

美晴「今日は楽しかったな」

花陽「うん、希ちゃんに感謝だね」

美晴「ああ、それはそうとお前らいつまで見てるんだよ……」

穂乃果「やばいバレた」

美晴「最初から分かったさ」

にこ「そんなに前から!？」

美晴「まさかお前らがストーカーするとはねえ」

ことり「ち、違うんだよ！」

美晴「……まあ、希のおかげで楽しかったし、今日は許してやる」

μ s『ふうく……』

凜「でも、凄かったにやー」

花陽「何が？」

凜「まさかかよちんが美晴君にあくんするなんて……」

美晴・花陽「……」

美晴「やっぱお前ら許さないわ!!!」

穂乃果「逃げろー!」

そう言つて、美晴は追跡してきたμ sを追いかけた。

花陽「美晴君、許してあげなよ」

美晴「いやでも……」

ギョツ

花陽「許さないと今日泊まりに行くよ？」

美晴「よーし、ごめんなお前ら」

μ s「花陽ちゃん『かよちん』ナイス！」

花陽「でも、今日泊まりに行くよ！」

美晴「ええー!？」

花陽「凜ちゃんたちに恥ずかしいところを見られたけど、これで一

歩リードかな？負けないよ、海未ちゃん！」

そう花陽は決意した。だが、この時の花陽や海未はまだ知らない

この先の未来で美晴に……いや、μ sに大変な未来が起きるとい
事に………

第33話助け合い

美晴「よし、それじゃあ練習しよっか」

絵里「そうね、いつまでもゆっくりはできないわ」

美晴「真姫と海末とことりは作詞、作曲、衣装作りをしてくれ」

真姫「分かったわ2人共着いてきて」

真姫はそう言い、海末とことりを連れて、部屋に行った

く別荘・外く

渡「1、2、3、4」

美晴「5、6、7、8」

士「ラストー！」

俺達の掛け声に合わせて皆決めポーズをする

美晴「5分休憩したら、もう一度練習するよー！」

μ, s「はーい！」

凜「んく…気持ちいいね！」

希「山はスピリチュアルパワー全開やねく」

花陽「うん、眠たくなっちゃうね」

美晴「そうだな、お前もそう思うよな？穂乃…」

穂乃果「ぐうく…」

美晴・花陽「寝てる!？」

マジかよ…：…こいつ電車の中でも寝てたよね…：…？

絵里「ちよつと休憩は5分よ？」

にこ「わかってるわよ…：…ん？」

にこが横を向くとリスがいた、だがそのリスが口に啜えてるのはに

このリストバンドだった

にこはそれに気づき、驚愕する

にこ「ああ!?!私のリストバンド！」

士「?シマリス?珍しいな」

凜「可愛いにやー！」

にこ「そうね…：じゃなくて!返しなさい！」

リス「キュイ!?!キュイ！」

にこがそう言うのと、リスが驚き、俺の後ろにかくれた
美晴「おお？どうした？」

リス「キュイ……」

俺がリスに聞くと、リスは俺の肩の後ろに隠れた
希「そのリス、美晴君に懐いとるなあ」

渡「そうですね、…あつ！練習再開しまーす！」

μ, s「はーい！」

渡さんが腕時計を見て、練習再開の合図を出す

俺はまだ寝てる穂乃果を起こす

美晴「穂乃果起きろ！練習再開するゾ」

穂乃果「うーん…練習…？」

穂乃果を起こすと、リスが俺の手に何かを置いた

リス「キュイ！」

美晴「ん？これって……」

にこのリストバンド…と魔法石だ

美晴「ありがとうな」なでなで

リス「キュイ！」

俺がリスの頭を撫でると、満足した様にリスは森へ帰った

美晴「ほらよにこ、リストバンド」

にこ「ありがとう」

俺はリスから渡されたリストバンドをにこに返した

士「俺は少し南達の様子を見てくる」

絵里「ええ、お願い」

絵里がそう言うのと、士は別荘へ戻った

士視点

く別荘・中

コンコン

士「西木野？いるか？」

ピアノ部屋の扉をノックすると、反応が無かった

士「？入るぞ」

ガチャ

部屋に入ると、そこには誰もいなかった

士「え?…うーん、トイレかもしれないし、園田のほうに行くか」
そう言い、俺はピアノ部屋を後にした

士「えくと、園田のいる部屋は…ここか」

コンコン

士「園田? 士だ、いるか?」

シーーン

ガチャ

士「なんで居ないんだ?…ん?これは…えー!?!」

園田の部屋に入ると、机の上に『探さないでください』という置き手紙があり、そして、窓が開いており、下に続く様にタオルが紐のようにつながっている

そして、見おろすと……

海末「はあ…」

ことり「はあ…」

真姫「はあ…」

木の下で三人が溜息をついていた

士「……はい?」

美晴視点

士が大急ぎで俺らを呼んだから、1度練習を中断し、別荘に戻ると

……

全員「スランプ!?!」

海末「はい……」

ことり「上手くいなくて、予選敗退になっちゃったらって思うと……」

真姫「まあ、私は関係無いんだけどね」

士「西木野、これなーんだ?」

真姫「……」

真姫はそう言うが、士が二階から持ってきた楽譜には真っ白だった渡「だけど、三人に任せっきりは良くないね」

絵里「そうね責任も掛かるし、負担も大きいわ」

美晴「そうだな、μsはチームだ、助け合って行こう！」

希「…じゃあ皆で意見を出し合って、話しながら曲を作っていけばいいんじゃない？」

にこ「そうね、折角13人いるんだし、話し合って決めるのもいいんじゃない？」

穂乃果「じゃあさじやあさ！グループに別れて、ことりちゃん達のお手伝いしようよ！」

グループに別れる…穂乃果にしてはいいから意見だけど…

美晴「だったら、俺達は入らない方がいいか？」

花陽「え？どうして？」

士「どうして？…つて13人だぞ？一人余るなら俺達マネージャーが入らなければ3チーム作れる」

絵里「確かにそうね…一人にするのは可哀想だし…その方がいいかもね」

渡「まあ、皆さんの場所を周るくらいはしますよ？もしここにジオウとかがいたら危ないですし」

海末「そうですね」

やつと話がまとまった…よし

美晴「それじゃあ、この海末とことりと真姫以外はこの割り箸を引いてくれ、青色が出たら海末と、灰色が出たらことりと、赤色が出たら、真姫とっていう感じで」

そう言っただけ、割り箸をひいた

穂乃果「私ことりちゃんのだ！」

花陽「私もことりちゃんだ」

ことり「二人共よろしくね」

希「うちは海末ちゃんやね」

凜「凜もだニャー！」

海末「二人共よろしくお願ひします」

絵里「じゃあ私とにこが真姫とね」

士「それじゃあ各自班に別れて、解散！」

そう言い、皆一度別荘に戻った

《真姫班》

士視点

士「……ほいっと、こんなもんか」

絵里「ごめんなさいね士、任せちゃって」

士「こういうもんだろ？マネージャーは」

俺は今、西木野達の班のテントを建てている

にこ「なんで別荘が近くにあるのに外でテントを張らなきゃいけないの!？」

まあ、矢澤の言い分も分からなくもない、なんせ俺達がテントを建てた場所は別荘から10mにも満たないくらいの距離だ

絵里「少し距離取らないと、3班に別れた意味が無いじゃない？ちようど別荘にテントがいくつかあつたし……」

にこ「…こんなので本当に曲を作れるのく…?」

真姫「まあ、私はピアノノ部屋に戻るんだけどね」

《ことり班》

美晴視点

穂乃果「すう…すう…」

美晴「こいつの睡眠欲は無限大かよ……」

ことり「穂乃果ちゃん、気持ちよかったからすぐ寝ちゃうからね」俺がことり班のテントを建てると穂乃果はテントの中でもう寝ていた

渡「ことりさん何か思いつきましたか？」

ことり「ううん、なんにも…二人共何かいい案ある？」

美晴「うーん、と言つても歌詞がなきや衣装作りなんて出来なくね？」

渡「イメージぐらいしかねえ」

花陽「どう？進みそう？」

俺達が悩んでると、花陽が奥から筒を運びながら帰ってきた

美晴「花陽それ何？」

花陽「これ?。綺麗だなって思つて…。同じ花なのに、一つ一つ色が違つたりみんなそれぞれ個性があるの。この花も今回の曲のピン

トになるといいな。」

渡「そうですか」

ことり「ありがとう！花陽ちゃん♪」

花陽「穂乃果ちゃんは？」

「花陽が穂乃果の居場所を聞きたいらしく、俺が頭でそこにいるという風にふると、花陽はテントの中で寝てる穂乃果に苦笑する、そして、ことりと花陽は欠伸をした」

花陽「ふわあ〜…」

ことり「穂乃果ちゃんを見てると…眠くなってくるね」

渡「それじゃあ、休憩って言うことでお昼寝でもしてください」

ことり「うんそうするね♪」

そう言い、ことりと花陽はテントの中で穂乃果と一緒にお昼寝をした

《海末班》

凜視点

凜「いやあああああー！」

海末「凜！絶対にこの手を離しては行けませんよ！」

なんでこんな目に……

今凜は最悪な目に会ってるにや……海末ちゃんが急に『山が私を呼んでいます！』なんて言ってきた、本格的に山登りを始めたにや……

希「凜ちゃん、ファイトが足りんよー！」

希ちゃんはそう言いながら、後ろに寄りかかっている凜の背中を支えてくれるにや……でも、支えられても怖いにや……

ズルツ

凜「いやあああああー！」

海末「凜！」

ああ…お母さん、凜二回目のラブライブに出る前に死んじやうにや……

凜がそう思っていると体がフワフワしてる感じがするにや

「全く……何してるんだよ」

凜「美晴君！」

そうウィザードハリケーンドラゴンスタイルに変身してる美晴君が凜を助けてくれたにや

ウィザードHG「よつと……凜大丈夫か？」

凜「美晴君！ありがとにや！」

美晴君は登って山の上に凜を置いてくれたにや……凜は助けられた事に感謝して美晴君に抱きついてるにや

海末「凜！大丈夫ですか?！」

海末ちゃんと希ちゃんが後から登ってきたにや

希「…海末ちゃん、大変や…雲がかかってきた、頂上まで行くのは無理や」

海末「そんな……ここまで来たのに……！」

美晴「おい、元凶二人、何言ってるんだよ……！」

うう……よかったにや、美晴君がまでもよかったにや……

凜「ひどいにや！凜は全然こんなところ来たくなかったのにい！」

海末「今日はここで明け方まで天候を待って、翌日アタックをかせましよう。」

山頂アタックです！」

凜「まだ行くのお!?……うう、美晴く……！」

美晴「えーつと……よしよし、怖かったな」

凜は海末ちゃんの無慈悲な事に泣いて、美晴君に抱きついたらにや、そしたら美晴君が頭を撫でてくれたにや

海末「当たり前です！ここに何しに来たんですか！」

凜「作詞のほにやー！」

海末「はっ!……！」

凜「まさか忘れてたの!？」

海末「そ、そんなことはありません！山を制覇し、成し遂げたという充実感が！創作の源になると私は思うのです！」

美晴「おいおい、嘘だろ？」

希「まあまあ、海末ちゃん。今日はここまでにしよ?山で一番重要なんは

諦める勇氣やし」

海末「……分かりました」

美晴「じゃあ俺は別荘に戻るな」

美晴君はそう言つて、別荘に戻つたにや…お願いだから戻つてきて欲しいにや…海末ちゃんがまたなにかしそうにや…

次回仮面ライダーウィザード

「二人共何かいいの浮かんた？」

「あれえ!?美晴君!？」

「大変にや!海末ちゃんと希ちゃんと曜ちゃんと果南ちゃんが……」

「ドラゴン…お前の全部…俺に委ねろー！ー！ー！」

第34話 ドラゴン集結

『お前に…フィナーレはない!!』

第34話ドラゴン集結

↳別荘内・ピアノ部屋↳

真姫「……………」

海末「やはり、真姫でしたか」

ことり「順調に進んでる真姫ちゃん♪」

真姫「ヴェエエエ!?…海末にことり…もう、脅かさないでよ…」

海末「す、すみません…驚かす気はなかったんですけど」

真姫「それで2人共この時間に来たって言うことはいい案は浮かんだ?」

ことり「うん♪実はね……………」

ことりと海末は自分達の案を真姫に伝え、一緒に作曲作りをした

美晴視点

美晴「ううくん…ふういい朝だ」

俺は早く起き、部屋の窓を開け、そう呟いていた

呟いていると見回りをさせてたガルードダがやってきた

ガルードダ「パイ!パイ!」

美晴「?何かあったのか?とりあえずそこに連れてってくれ」

俺は別荘から出て、誘導してくれているガルードダの後をおっている

美晴「ここ?…え?」

ガルードダの誘導した場所はなんと崖の下、俺は上を見上げるといかにも落ちそうな場所で寝ている穂乃果がいた

俺はそれを見た時しばらく脳が提示した

美晴「……………はっ!なんであいつあそこで寝てるの!」

ズルッ

そんなことを言っていると穂乃果は崖から落ちた

美晴「あーもう、考えるのは後だ!まずは」

『スペシャル・グラビティーパーリーズ』

俺は大急ぎでグラビティリングをつけ、発動した

穂乃果の下に魔法陣が出てきて、重力で穂乃果を持ち上げている

美晴「穂乃果！起きろー！」

穂乃果「ふわあく…あれ？美晴君？なんでく？」

美晴「…逆に聞くぞ？なんであそこで寝てた？」

穂乃果「ええくと…確か、朝早く目が覚めて、それで朝日を見てたら、眠くなつちやつて…」

美晴「……………歯食いしばれ…」

く別荘内く

穂乃果「酷いよおく美晴君…」

美晴「自業自得だ、それにガルーダの体当たりで済んでありがたいと思え」

ことり「あははは……………」

士「高坂は朝からヒヤヒヤされるんだな……………」

あの後、俺はガルーダに穂乃果に体当たりするように命令した

その後、花陽やことり、凜と希と渡さんと士と絵里とにこと合流した、海末とことりの姿が無く、別荘にいとだと思ひ、別荘まで帰ってきた所だ

渡「絵里さん、真姫さん達は？」

絵里「あそこよ」

絵里は人差し指でシーーとする素振りをし、ピアノ部屋を指さした、ドアを開けると、そこには真姫と海末とことりが寝ていた

にこ「全く、しょうがないわね」

希「ゆっくりと寝かせておこうか」

美晴「だな、3人共今回は疲れたと思うしな……………ん？」

俺は机の上にある、スケッチブック、そしてノートを見た、そこに書いてあったのは新曲の名前だった

曲名はユメノトビラ……………夢への扉……………青春……………希望の行方……………sらしいな

俺達が見ていると海末達が起きた

海末「ふわあく…」

美晴「おはよう、海末」

海末「美晴…皆来ていたのですか」

絵里「ええ、…完成したのね」

真姫「…何とかね」

海末「それでは早速……」

美晴「ああ、待ってくれ海末」

海末が早速練習をしようと言った瞬間、俺がとめた

理由は簡単さ

美晴「今日は自由行動にしよう、頑張った三人に……ね」

ことり「だけど…予選までの時間が……」

渡「確かに時間はありませんが焦って練習して、注意力散漫で怪我などをしたら元もこうもないので、リラックスという形で」

海末「分かりました、ここはお言葉に甘えておきます」

士「そうしてくれ」

俺達マネージャー達の提案を承諾してくれた、珍しいな海末が簡単に引き下がるなんて

俺がそんなことを思っている時だ

「あれえ!?美晴君!」

美晴「この声は……」

俺はもしやと思い、別荘から出た、俺の予想は間違ってた

美晴「千歌さん……それに皆も……」

そう、千歌さんたちAqoursがいた

梨子「どうして美晴さんがここに?」

美晴「俺はμ'sの合宿で来てるんだ、そっちは?」

曜「実は私達も合宿に来てるんだー!」

果南「μ'sは今から練習?」

美晴「いや、今日はリラックスがたら自由行動だ」

俺がAqoursと会話してる別荘からμ's全員がやってきた

穂乃果「あー!千歌ちゃん!」

千歌「穂乃果さん!」

海末「Aqoursも合宿ですか?」

ダイヤ「はい、そうです」

美晴「……!そうだAqoursもよかつたらμ'sと一緒にリ

ラックスすれば？」

花丸「どういう事ズラ？」

美晴「今からμ，sは自由行動だから本人たちの自由にさせるんだけど、良かったらでいいから

A q o u r sもμ，sと一緒に自由行動を過ごしてみたら？」

ルビィ「い、いいんですか?!」

美晴「皆ー!どう思う?」

花陽「私は大丈夫だよ、A q o u r sの人達とも話したいし」

俺がμ，sに聞くと、皆承諾してくれた

美晴「だって、大丈夫だよ」

そういうことになり、グループ決めをする事になり、全部くじを引いた

結果は

第1グループ 穂乃果、ことり、千歌、花丸、俺

第2グループ 花陽、真姫、梨子、ルビィ、渡さん

第3グループ 絵里、にこ、鞠莉、ダイヤ、善子、士

第4グループ 海末、凜、希、果南、曜

という事になった

士「それじゃあ班に分かれて行動してくれ、解散!」

士がそう言うと、皆班になって行動した

《美晴班》

穂乃果「美晴くーん!もつとおー」

美晴「ハイハイ、分かったよ」

花丸「これ美味しいぞら!」

千歌「花丸ちゃんこれも美味しいよ!」

美晴「お口に合ったようで助かったよ」

俺の班は穂乃果と千歌さんがお腹空いたとこのことで俺が料理をしている

ことり「それにしても、美晴君凄いね」

美晴「まあ、咲と交代交代で晩御飯作ってるからな、千歌さんどうぞ」

俺はそう言い、千歌さんにみかんのアイスを渡した
千歌「みかん！」

パクっ！

千歌「おおおいしいー！」

美晴「それはよかった」

結局この後、満足するまで料理を作らされた

《渡班》

渡視点

渡「さて、僕達は何をしようか」

梨子「私、渡さんのバイオリンを聞いてみたいです」

真姫「そうね、私も久しぶりに聞いて見たいわ」

花陽「私も聞いてみたいな」

ルビィ「わ、私も…」

渡「わかったよ」

僕はそう言うって、バイオリンケースから父さんが作ったバイオリン、ブラッティローズを取りだし、弦を調整した

渡「それでは聞いてください、音也」

音也／♪

《土班》

土視点

土「くそ…まさか俺達が負けるとは…」

絵里「まあまあ」

鞠莉「いいじゃない、今日ぐらいしか一緒にいけないんだし」

俺達の班は今、街で買い物に行ってる、こうなったのは4グループでジャンケンをして、俺たちの班がまけ、買い出しという事だ

*書くことが無いので土視点終わり

《海末班》

海末「希、曜、果南！今日こそ登って見せますよ！」

希・曜・果南「おぉー！」

凜「嫌にやー！」

海末の班は前の無念を晴らすべく、山登りをしている、謎に果南と

曜と希は乗り気である

だが、そんな時

「あんた達ちよつといいか?」

海末「はい?……!?!」

曜「あなたは……あの時の!」

声を掛けられ、振り向くとそこにはフロントム、フェニックスがいた

フェニックス「着いてきてもらうぜ!はあー!」

フェニックスが魔法石を投げると、ゴールを湧き出た

希「凜ちゃん!今からダツシユで美晴君達に伝えてきて!!」

凜「でも、希ちゃんたちが……」

希「いいから!!!」

凜「……わかったにや!」

凜はそう言い、ダツシユで下山した

美晴視点

美晴「ううくん……疲れた……」

渡「そうだね」

俺は今、やつと穂乃果達から解放され、休憩している

渡さんは演奏をしていた様で少し休憩してるみたいだ

そんな時

凜「美晴くーん!大変にや!」

美晴「凜、どうした?」

凜「大変にや!海末ちゃんと希ちゃんと果南ちゃんと曜ちゃんが……」

フロントムに……!」

渡「美晴君……」

美晴「はい……凜中に入ってる」

凜「うん……」

美晴「必ず俺達が助けてみせる……」

俺はそう言い、渡さんと一緒に山へ走り出した

く山く

美晴「はあ……はあ……海末ー!曜ちゃーん!」

渡「希さーん！はあ…はあ…果南さーん！」

俺と渡さんは山に入り、四人の名前を呼んでいる

渡「！美晴君！」

美晴「なにか見つけましたか？」

渡さんが何かを見つけた様だ

美晴「これは…」

落ちていたものは…青色の数珠と切れている紫のブレスレットだ

美晴「これは…確か…俺が、s全員にお土産としてあげた…」

渡「数珠が数個見えるし、このブレスレットは切れている……それに所々焼けてる…って事は」

美晴「あいつしか…いない」

炎を使えるファントムなんて俺が知ってる限りあいつだ

美晴「ん？この数珠…あの洞窟に続いています」

渡「本当だ…行ってみよう！」

地面に落ちていた数珠は近くの洞窟まで続いていた、俺と渡さんは洞窟の中に入った

く洞窟内く

美晴「…！海末！曜ちゃん！」

渡「希さん！果南さん！」

洞窟の中には縛られてる海末と曜ちゃんと果南さんと希がいた、そして、近くには

美晴「フェニックス…」

フェニックス「待ちくたびれぞ、指輪の魔法使い！」

渡「フェニックス…何故君が彼女達を…」

フェニックス「あ？こいつらに用はねえーよ、用があるのはお前だ、指輪の魔法使い！」

フェニックスはそう言いながら、俺に刃先を向けて来た

『シャバドゥビタッチヘンシーン』

『ガブツ！』

美晴・渡「変身！」

『フレイム・プリーズ！』

『ヒーヒー！・ヒーヒーヒー！』

俺と渡さんは変身した

ウィザード「さあ、ショータイムだ！」

フェニックス「オラア！」

ウィザード「はあ！渡さんはグールをお願いします！」

キバ「任せて！」

そう言い、俺はフェニックスを連れて、洞窟の外に出た

キバ「はあ！フツ！やあ！」

グール「くくくく！」

キバ「うわあ！」

キバツト「渡ー！こういう時はこいつだ」

そう言い、キバツトは青色のフェッスルを吹いた

『ガルルセイバー！』

キハG「はあ！やあ！はあー！」

グール「ー！ー！」

キバG「ふっ！はあ！とりやア！」

キバツト「決めろ！渡！」

キバはガルルセイバーをキバツトに噛ませた

『ガルルバイト！』

キバG「はあー！ー！……ふっ！はあー！」

グール「!!!」

グールは爆散した

キバG「皆さん、今助けます！」

そう言い、キバは海末達の縄を斬った

希「ありがとう、渡くん」

キバ「いえ、危ないので早く逃げてください！」

くウィザード側へ

『フレイム・ドラゴン！』

ウィザードFD「はあ！やあ！でやあ！」

フェニックス「ふん！オラア！」

ウィザードFD「ぐはあ！……だったら！」

『スペシャル・サイコー!』

ウィザードの前に魔法陣が現れ、猛烈な炎がフェニックスを襲う……が

フェニックス「ふん! 同じ手が2度も通用すると思うなよ! オラア!」

ウィザードFD「うわあ!」

『ウォーター! ドラゴン!』

ウィザードは倒れながらウォータードラゴンスタイルに変化した

ウィザードWD「これで……!」

『スペシャル・プリザード! サイコー!』

ウィザードの前に魔法陣が現れ、吹雪が出てきてフェニックスを押しすが

フェニックス「無駄……だ!」

フェニックスの炎で押し負けそうになるがウィザードは何とか押し切った

『キヤモン・スラツシュ・シエイクハンド!』

『ウォーター! スラツシュストライク!』

『ザブザブバシャー!』

水の斬撃が吹雪が吹いてる魔法陣を通ると氷の塊になり、フェニックスを止めた

『スペシャル・サイコー!』

ウィザードWD「でやあー!」

ウィザードの後ろがしっぽになり、フェニックスを叩き割るが

フェニックス「ふん! オラア! はあ!」

ウィザードWD「ぐはあ! ……こうなったら……あれだ」

『フレイム! ドラゴン!』

ウィザードはもう一度フレイムドラゴンスタイルに変化し、右手の甲にドラゴタイマーをセットした

『ドラゴタイマー!』

『セットアップ! スタート!』

『ウォータードラゴン! ハリケンドラゴン! ランドドラゴン!』

一気に3人の分身を出した

フェニックス「数が増えても雑魚は雑魚だ！」

ウィザードLD「はあ！でやあ！」

ウィザードFD「はあ！はっ！オラア！」

フェニックス「はあ！ふっ！はあー！」

ウィザードWD「はあ！やあ！はあー！」

ウィザードHD「やっ！ふっ！とりやあ！」

フェニックス「オラア！邪魔だ！」

ウィザード『うわあー！』

ウィザード全員、フェニックスの攻撃に転がってしまっ

フェニックス「ファイナーレと行こうか！もう諦めろ！」

ウィザードFD「俺は…諦めが悪くてね！」

『セットアップ！スタート！』

ウィザードFD「はあ！」

再スタートしたドラゴタイマーをウィザードドライバーにかざすと、美晴は自分のアンダーワールドに入った

く氷海美晴アンダーワールドく

ドラゴン「ほおくここまで耐えるとは凄いやつだ」

美晴「ドラゴン、どうやったたらお前の力を全部引き出せる？」

ドラゴン「あるにはあるが…いいのか？その方法は俺を現実世界に出す事になるかもだぞ？」

美晴「…構わない！俺はみんな希望が見ればそれでいい！」

ドラゴン「…ふふ！面白い！お前は俺のゲートではなく、今日から俺の相棒だ！」

美晴「今更か？…ドラゴン！お前の全部！俺に委ねろー！ー！ー！」

く現実世界く

『オールドラゴン！プリーズ！』

ウィザード『はあ！』

ウィザード全員、宙に浮き、ウォーター、ハリケーン、ランドのドラゴンスタイルがドラゴンになり、フレイルムドラゴンスタイルに集ま

「上位4位が最終予選へ行けるわ」

「セクシーなドレスとか？」

「む、無理です！」

「やあ、久しぶりだね」

「守られ続けるのももうんざりよ！」

第35話 地区予選への向けて

『私だって仮面ライダーの資格者よ！』

番外編 天使と仮面ライダー
第一話 変身出来ない!?

美晴 「おはよう、海未」

海未 「おはようございます、美晴」

互いに挨拶を終え、学校に向かった

美晴 「今日の一時間は体育だっけか？」

海未 「はい、覗かないでくださいよ？」

美晴 「覗かねえよ!!」

俺が前を向くと見た子も無い緑色が人を襲っていた

海未 「美晴！」

美晴 「ああ助けよう！」

俺達はその場にダツシユで駆け寄った

美晴 「オラァ! 離れろ！」

海未 「はあ! ふっ! とりゃ！」

『シャバドウビタツチヘンション』

美晴・海未 「変身！」

『フレイム! プリーズ!』

『ターンアップ!』

『ヒーヒー! ヒーヒー!』

ウイザード 「さあ、ショータイムだ」

ブレイド 「参ります！」

ウイザード 「はあ! ふっ! はあ！」

ブレイド 「ふっ! はあ！」

『ウォーター! プリーズ!』

『スイー、スイー、スイー、スイー!』

ウイザード W 「はあ! ふっ! はあ! とりァ！」

『スラツシユ! サンダー!』

『ライトニングスラツシユ!』

パラボクスF 「はあ！」

ウイザードW「なんだこいつら…はあ…減る所か増えてる…オ
ラァ！」

ブレイド「でしたら…はあ！これで決めましょう！」
パラドクスの提案にウイザードは頷く

『キック！サンダー！マツハ！』

『ライトニングソニック！』

『ウォーター！スラッシュストライク！』

ウイザード「でやあ！」

ブレイド「はあー！」

ビービ「ビー！」

同時に必殺技を放つと緑色の敵は爆散した

美晴「なんだんだ？」

海未「とりあえず学校に急ぎましょう！」

そう言い、俺達は学校に向かった

♪音ノ木坂学院・2年教室♪

ことり「遅かったね、海未ちゃん、美晴君」

美晴「なあ、ことり達は学校に向かう途中緑色の敵と戦った？」

穂乃果「戦った！倒しても倒してもきりが無いんだよね」

海未「穂乃果たちもって事は」

美晴「もしかしたら全員戦ってるかもな」

そのまま時間は流れ、放課後に

♪音ノ木坂学院・部室♪

士「ああ、俺と絵里も家を出た時にな」

真姫「私も渡と向かってる時に」

花陽「私は凜ちゃんと一緒の時に…」

希「うちらも向かって時にね」

美晴「全員戦ってるのか…」

部室に来て全員に聞くと、皆戦った様だ

そんな時だ

ピピピッ！

美晴「?…雪穂さん?もしもし?」

雪穂 『美晴さん！今からうちの学校に来てください！』

美晴 「何かあったんですか?！」

雪穂 「なんか緑色の土偶?みたいなのが…」

美晴 「…!分かりました、今すぐ行きます!それまで何とか逃げてください!!」

穂乃果 「美晴君どうしたの?」

美晴 「…皆、今から音ノ木坂中学校に行くぞ…」

ことり 「え?どうして?」

美晴 「雪穂さんから電話があった、俺達が戦った緑色の奴がいるつて」

絵里 「!?亜里沙…!」

海末 「行きましょう!美晴!」

美晴 「任せろ!」

『テレポート!プリーズ!』

魔法陣がみんな包むと俺たちは音ノ木坂中学校前にいた

音ノ木坂中学校・校内

ビービ 「ビー!」

雪穂 「キャ!」

追いかけてくるビービから逃げてる雪穂は転んでしまい、追いつかれ、ビービが振りかぶった瞬間に目をつぶった

美晴 「はあ!…大丈夫?」

雪穂 「…美晴さん!」

美晴 「離れてて」

『……………』

美晴 「え?なんで」

ドライブONリングをかざしても、ベルトは現れない

ビービ 「ビー!」

美晴 「くっ!…はあ!」

緑色は俺に襲いかかってきて、俺はウィザードソードガンを取りだし、変身できないまま応戦した

美晴 「はあ!ふっ!とりゃ!雪穂さんこっち!」

雪穂「はい！」

美晴「なんで学校に……こいつらが雪穂さん、しっかり俺に掴ま
て！」

雪穂「え？…はい！」ギユツ

美晴「はあ！ふっ！オラア！はあ！でやあー！」

俺はなんとか目の前にいる緑色達をたおした

美晴「とりあえずみんな所に行かなくちゃ…「雪穂！」穂乃果！」

穂乃果「雪穂大丈夫…夫？」

雪穂「どうしたの？お姉ちゃん？」

穂乃果「なんで雪穂がそんなガッツリ美晴くんを抱きついてるの
？」

美晴「これは抱きついてるんじゃないやなくて…！穂乃果うしろ！」

穂乃果「え？あわわ！…はあ！」

美晴「はっ！ふっ！穂乃果！みんなは？」

穂乃果「はあ！皆もう脱出してよ！とりや！」

美晴「よし、俺らも脱出しよう！」

そう言い、俺と穂乃果は緑色を倒れながら学校から脱出した

ただどこここからだと思げ込める場所が無く、仕方なく浦の星女学院
に向かった

第二話 天使降臨

く浦の星女学院・部室く

美晴「すみません、急に押しかけて……」

俺達は浦の星女学院の部室に逃げ込んだ

千歌「ううん、大丈夫だよ！それより何があったの？」

美晴「実は……………」

く説明中く

曜「ええ!?ライダーの力が使えないの!?!」

絵里「そうなのよ」

美晴「俺は魔法は使えるのにな」

善子「だけど私たちは使えるのよ?」

美晴「俺達が変わ身出来なくなったのはあの緑色の敵と戦った後だ、

恐らく戦ってないA q o u r sのみんなは影響が無いんだろう」

ダイヤ「そうですね」

俺達が変わ身出来なくなった理由を探っていると電話がなった

ピピピッ!

ことり「ごめんね、もしもし?…え!?お母さん嘘でしょ!?お母さん

は大丈夫なの!?!ねえ!……………」

士「南どうした?」

ことり「大変!学校が…………音ノ木坂学院が…………!」

ことりは涙目で学校の事を伝えようとする

海末「とりあえず一度学校に戻ってみましょう」

海末の提案でA q o u r sの人達と一緒に音ノ木坂学院に戻った

く音ノ木坂学院く

穂乃果「そんな……………」

希「嘘やろ……………」

俺たちの目に映ったのは燃え上がる音ノ木坂学院だった

美晴「咲……!くっ!……………」

俺は燃えてる音ノ木坂学院に走った

果南「美晴君!危ないよ!」

美晴「咲……！咲……！」

『スペシャル！プリザード！サイコー！』

俺の目の前に水色の魔法陣が現れ、俺は手で前に押すと魔法陣から吹雪が出てきて、音ノ木坂学院の家事が収まる

美晴「咲……！?!」

そこに居たのは咲を抱え持つ一人の男だった

「君はこの子のお兄ちゃんかな？」

美晴「……そうですけど……あなたは？」

アラタ「俺の名前はアラタ、宜しく」

アラタさん……なんだろうこのひと、ただの男性ではない気がする
アラタ「安心して、この子は気絶してるだけだから」

そう言い、アラタさんは俺に咲を手渡した

美晴「よかった……」

アラタ「妹思いなんだね」

そうかな？

花丸「美晴くん！大丈夫ズラか？」

美晴「皆……」

花丸さんの声がし、振り向くとみんなかけよって来た

梨子「あれ？その人は？」

桜内さんがアラタさんの存在にきずき、疑問を抱く

アラタ「俺の名前はアラタ、よろしくね」

アラタさんがみんなに自己紹介をして、皆も自己紹介をする
そんな時だ

ビービ「ビー！」

アラタ「！ビービ！」

美晴「え!?アラタさん知ってるんですか!?!」

アラタ「ああ、みんなは離れてて」

ダイヤ「いいえ、私達も戦います」

アラタ「え？」

A q o u r sのみんながベルトを巻きながら、前に出た

『サイクロン！ジョーカー！』

『3…2…1!』

『シャバドウビタッチヘンシーン』

『オレンジ!』

『ウルバツチリミナー!』

『マイティアクションX!』

『ラビット!タンク!ベストマッチ!』

Aqours「変身!」

『タ・ト・バ!!タトバ、タトバ!』

『フレイルム!プリーズ!』

『花道オンステージ!』

『ドライブ!ターイプスピード!』

『レッツゴー!覚悟!ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

『マイティアクションX!』

『鋼のムーンサルト!ラビットタンク!イエーイ!』

Aqours皆が平成2期ライダーに変身した

アラタ「ええー!?!」

鎧武「さあ、行くよ!」

そう言い、Aqoursのみんなはビービと言われてた物と戦いだした

く鎧武&ドライブ&エグゼイドく

鎧武「はあ!ふっ!はあ!」

ドライブ「はあ!ふっ!やあ!」

エグゼイド「やあ!はあ!とりや!」

ビービ「ビー!」

鎧武「ふっ!やあ!」

ドライブ「はあ!ふっ!やあ!」

『スピ、スピ、スピード!』

ドライブはシフトカーを前に傾け、加速した

ドライブ「はあ!ふっ!はあ!やあ!とりや!」

くダブル&オーズ&ビルドく

ダブル「さあ、あなた達の罪を数えなさい!」

『ヒート！メタル！』

ダブルはメモリを変え、ヒートメタルになった

ダブルHM「はあ！ふっ！はあ！やあ！」

『ルナー・トリガー！』

またメモリを変え、今度はルナトリガーになった

ダブルRT「はあ！ふっ！はあ！」

オーズ「oh！ヨハネだけにいい格好はさせませーん！」

『ラトラター！ラトラター！』

オーズはメダルを変え、ラトラターコンボになった

オーズLC「はあ！やあ！セイヤー！」

ビービ「ビー！」

オーズ・ダブル「しまっ！」

バンツ

『天空の暴れん坊、ホークガトリング！』

ビルドHG「二人共気をつけてね」

オーズLC「リリー！」

フオーゼ&ウイザード&ゴースト

フオーゼ「はあ！やあ！はあ！やあ！」

ウイザード「はあ！ふっ！やあ！とりや！」

『開眼！ムサシ！』

『決闘！ズバツと！超剣豪！』

ゴーストはアイコンを変え、武蔵魂になった

ゴーストM「はあ！ふっ！やあ！はあ！」

『ランチャーON！』

フオーゼ「はあー！」

ウイザード「ふっ！はあ！やあー！」

鎧武「皆決めるよ！」

Aqours「うん！」

『オレンジスカッシュ！』

『フルスロットル！』

『・クリティカルストライク！』

『トリガー！マキシマムドライブ！』

『スキヤニングチャージ！』

『ボルテックスファイニッシュ！』

『リミットブレイク！』

『フレイム！スラッシュユストライク！』

『大開眼！ムサシ！オメガブレイク！』

Aqours『はあー！』

ビービ「ビー！」

Aqours 全員の必殺技が決まり、ビービ達は爆散した
だが

「はあー！」

Aqours「うわあー！」

美晴「みんな！」

何者かの攻撃でAqoursの変身が解除される

全員その攻撃の方向を見ると

アラタ「お前は……！」

アラタさんの表情が変わる

「久しぶりだな、ゴセイレッド」

アラタ「ブラジラ……なぜ生きいてる?！」

穂乃果「アラタさん、あれは？」

アラタ「あれは……僕が一度たおした相手、救世主のブラジラ」

え？一度倒した？アラタさんが？

ブラジラ「私はもうただの救世主では無い、今は不死身の救世主ブラジラだ」

アラタ「そんなことはどうでもいい！チェンジカード！天装！」

『チェンジ！ゴセイジャー！』

全員「ええー!?!」

ゴセイレッド「ブラジラ……！」

ゴセイレッドは自分の武器、スカイツクソードを装備した

ブラジラ「今の私はお前如きには倒されん！はあー！」

ゴセイレッド「はあ！ふっ！はあ！」

ブラジラ「はあ！ふん！はあ！」

ゴセイレッド「うわあ！…ドラゴンヘッダーカード！天装！」

『サモン！ドラゴンヘッダー！』

ゴセイレッドはカードをテンソウダーに入れるとテンソウダーからドラゴンヘッダーがでてくる

ゴセイレッド「はあ！ふっ！はあ！ドラゴンバレット！」

ブラジラ「無駄だ！はあ！」

ゴセイレッド「うわあー！…だったらこれで！」

ゴセイレッドはスカイツクソードにスカイツク族の紋章のカードを置き、空をとんだ

ゴセイレッド「レッドダイナミック！」

ゴセイレッドは縦一閃を決める……が

ブラジラ「わたしが同じ技で倒れるとでも！はあー！」

ブラジラに刃先を受け止められ、弾き返され反撃を食らう

アラタ「うわあ！がはっ！」

美晴「アラタさん！」

ブラジラ「着いてきてもらうぞ！」

ブラジラの反撃で変身を解除されたアラタさんの元に駆け寄ろうとしたが俺の後ろにブラジラがいた

美晴「誰がお前なんかと！……がはっ！」

ブラジラ「お前に拒否権は無い」

美晴は腹を殴られ、気絶し、そのままブラジラに連れていかれた

第三話 絶望の魔法使い

く浦の星女学院・部室く

海末「美晴……………」

美晴が連れ去られた後、海末たちは浦の星女学院に戻った

そして、部室について、アラタは皆に天使であることを話した

士「なるほど、あのビービとかいう奴は戦ったから俺達の変身能力は失ったのか…」

そうビービの体にライダーである士達の力が染み込んでしまい、ライダーの力が失われたのだ

アラタ「分からないけど…諦めなったらきつと何とかなるよ!」

渡「…天使かなんだか知らないけど、余計なお世話です」

アラタ「え?」

真姫「渡?何言ってるの?」

士「何が諦めなつたら、何とかなるだ!こっちは仲間が一人連れていかれたんだぞ!お前らもなんでそんな冷静に居られるんだ!」

絵里「士……………」

渡「僕らは僕らのやり方で美晴君を助け出す」

そう言い、渡と士は部室をでてった

絵里「ごめんなさいね、普段はあんな感じじゃないんだけど……………」

美晴「いや、俺が勝手なことを言ったからだよ」

「何やってるんだよ、アラタ」

アラタ「!!皆!」

誰かの声がし、部室のドアが開くとアラタが喜んだ

穂乃果「その人達は?」

アラタ「俺と一緒にブラジラを倒した仲間だよ」

エリ「エリです」

アグリ「アグリだ」

モネ「モネです」

ハイド「ハイドだ、宜しく頼む」

μ, s + A q o u r s 「よ、宜しくお願いします!」

アグリ「そういえばアラタ、俺達が来る前に誰かがここから出て、廃倉庫の方に向かったけど…」

ことり「土君たちだ！」

アラタ「アグリ、その場所に案内して」

アグリ「ああ、こつちだ」

アラタ達はアグリの手導で廃倉庫に向かった

〜廃倉庫付近〜

土「どうやって、助けるか……」

渡「あのブラジラとか言うやつはなんで美晴君を連れてったんだろ
う？魔法使いだからだとしても、ダイヤさんだってウィザードだから
魔法は使えるし……」

土「魔力の多さ……とか？それとも戦闘の慣れ？」

土と渡が海を見ながら美晴を助ける方法と何故美晴が連れていか
れた理由を探っていた

アラタ「君達がどれだけ美晴君を助けたいかわかったよ」

土「お前か……」

アラタ「美晴君を助け出すなら、人手は多い方がいいでしょ？」

渡「……………」

絵里「協力しましょう？土」

土「…………」

アラタ「…!!避けろ！」

アラタ達が土と渡を説得していると倉庫から吹雪と炎が向かってた
来た

海末「氷と炎……まさか！」

炎と氷の中から美晴がでてきた

曜「美晴くん！」

鞠莉「無事だったのね！」

美晴「……………」

穂乃果「美晴君、なんか様子変じやない？」

『シャバドゥビタッチヘンション！』

美晴「…………変身」

『フレイム！ドラゴン！』

『ボーボー！ボーボー！』

赤黒い魔法陣が皆を取り抜けると美晴は仮面ライダーウィザードに変身した

希「どうして…変身できてるん？」

『フレイム！スラッシュストライク！』

ウィザードFD「はあー！」

アラ・エリ・アグ・モネ・ハイ「天装！」

『チェンジ！ゴセイジャー！』

ゴセイジャー「うわあ！」

ウィザードFD「はあー！はあ！」

ゴセイレッド「うわあ！」

花丸「美晴君どうしちゃったずら?!」

ゴセイイエロー「うわあ！」

ゴセイブラック「ぐはあ！」

曜「でも、あの戦い方は美晴君そのもの」

ゴセイブルー「うわあ！」

ゴセイピンク「うわあ！」

ゴセイジャーが吹き飛ばされた

すると美晴の後ろからブラジラが出てきた

ブラジラ「その目に焼き付けたか、絶望したウィザードの姿を」

海末「美晴が…：絶望？」

ゴセイレッド「やっぱりお前の仕業か！」

『スペシャル！サイコー！』

ウィザードFD「はあ！」

μ s + A q o u r s 「う…：…？」

ウィザードはμ s と A q o u r s にむけて炎を放った筈だが痛みが来ない、恐る恐る目を開けるとそこには

ゴセイレッド「うわあ…：くっ！…あぁ…：ぐはあ！」

ゴセイレッドが盾となり、炎を受け止めていた

盾になっていたゴセイレッドは変身を解除された

穂乃果「アラタさん！」

士「おい！しつかりしろ！」

ゴセイピンク「アラタ！」

士達は倒れたアラタの元に駆け寄った

だが目の前にウィザードがやって来て、自分達にウィザードソード
ガンを振りかぶった

その瞬間

「レオンレーザーソード！」

ウィザードFD「!?はあ！」

「ここからは私のターンだ」

ゴセイブラック「ゴセイナイト！」

ゴセイナイト「はあ！ふっ！はあ！」

ウィザードFD「ふん！はあ！」

ゴセイナイト「うわ！…くっ！一度退却するぞ」

『スペシャル・サイコー！』

ウィザードFD「はあ！」

ゴセイナイト「デیفュンスストームカード天装！」

ウィザードが炎を放ったとどうじにゴセイナイトは天装術で炎を
防いだ

ゴセイナイト「今の内に！」

煙が晴れるとそこには誰もいなかった

ブラジラ「逃げたか…：…まあいい、はじめるぞ」

そう言い、ブラジラとウィザードは消えた

く浦の星女学院・部室く

にこ「どうするのよ？変身は出来ない、美晴は敵になる、アラタに
至っては私たちのせいだ…：…」

ハイド「だがまずは君達の変身能力を復元させるのが先決だ」

海末「どうして私たちの？」

アグリ「ウィザードが敵になった今俺達の力じゃ助け出すことすら
出来ない、だからお前達の力が必要なんだ」

士「…だがどうやって復元する？」

士が聞くとハイドはアラタのポケットからカードを取り出した
ハイド「このアラタのカードを使えば失った君達の力を取り戻せる
はずだ」

穂乃果「なら早く使おうよ」

モネ「そうしたいんだけどこのカードはアラタにしか使えないの」
ことり「じゃあアラタ君が起きるまでは……」

エリ「うん無理だと思う、ごめんね？」

そんな会話をしているとハイドはカードを取り出した

ハイド「だが俺のこのカードなら君らの力なら元に戻せる」

ハイドはそう言い、Aqoursと士と渡に視線を向けた

千歌「え!?! 私たち!?!」

ハイド「恐らく君たちもビービとの戦いのせいで変身出来ないはず
だ」

果南「だけどどうして私たちは元に戻せるの?」

ハイド「君達のアイドル名は確かAqours…だったね? Aqoursとは水を表わす、つまりシーイツク族である俺なら元に戻せる」

士「どういう理屈だよ……」

ハイド「……まあ、そういうことだ、行くぞ!」

梨子「え!?! いきなり!?!」

Aqoursと士と渡の有無を言わせないまま、ハイドはカードを
テンソウダーに装填した

ハイド「シーイツクライダーカード、天装!」

『スペシャル!ライダーパワー!』

テンソウダーから光が出て、Aqoursと士と渡がその光を浴び
る

Aqours「うう……」

士「!?!」

光を浴びた後士の手にはライダーカードがあった、浦の星女学院に
行く前はブランクカードだったのに光を浴びたあとはデイケイドの
ライダーカードに変化していた

善子「これが…天使の力…」

アグリ「天使もやるだろ？」

こうしてA q o u r sと土と渡は変身能力を取り戻した

一方ブラジラは

ブラジラ「かつてこの真上に天の塔があつた…：2000年に1度太陽フレアが規模が最大になった時、そのエネルギーとゴセイパワーを合わせれば、ゴセイ界への道は開ける…：しかし、ゴセイパワーが無くともウィザードの持つ4大エレメントを使えばゴセイ界への道は通ずる…始める！」

『セットアップ！スタート！』

『ウォータードラゴン！』

ハリケーンドラゴン！

ランドドラゴン！

ファイナルタイム！』

『セットアップ！スタート！』

『オールドラゴン！リリース！』

ブラジラの声でウィザードはオールドラゴンへとへとなり、魔力を集中させた

ウィザードOD「はぁー…はぁー…：はぁ！」

ウィザードのエレメントが天にまで届き、ゴセイ界への道が開けた

第四話決戦！絶望の魔法使い

エリ「皆！見てあれ！」

ハイド「あれはゴセイ界への道が……！」

アグリだ「ブラジラのやつ……もう仕掛けて来たか……！」

穂乃果「そんな……まだアラタさんも起きてないのに……！」

穂乃果がそう言うと士達がドアに手をかけた

士「俺達が行ってくる」

海末「そんな危険です！」

千歌「穂乃果さん達は変身能力が元に戻ってから来てください」

千歌がそう言うと、ハイド達も士達の方に向かった

ハイド「確かにそうだな……俺たちも行こう」

渡「ではそういうことなので」

そう言つて、皆部室を出た

士視点

デイケイド「はあ……はあ……この辺りか」

俺達は浦の星女学院を出た後、すぐに変身し、ブラジラをいるであ

ろう場所に向かっている

ゴセイナイト「ぐおお！」

ゴセイピンク「ゴセイナイト！」

ゴセイナイト「うわあ！」

ゴセイナイトがゴセイ界への道に向かおうとしたら、撃ち落とされ

た

ドライブ「美晴君……」

ウィザードFD「……」

ゴセイブルー「やるしかない！」

ゴセイジャーはそれぞれの武器を持ち、美晴と戦い始めた

ゴセイピンク「はあ！ふっ！はあ！」

ゴセイブラック「はあ！ふっ！オラア！」

ウィザードFD「はあー！」

ゴセイイエロー「うわあ！」

ゴセイブルー「ぐはあ！」

鎧武「土君…どうする？」

デイケイド「……やることはひとつ」

そう言い、俺はライドブツカーソードモードを取り出した
デイケイド「美晴を……止めるぞ！」

Aqours「うん！」

「はぁー……！」

そして、俺達も美晴に向かって走り出した

鎧武「はあ！やあ！はあ！」

ウイザードFD「ふん！はあ！」

『ハリケーン！ドラゴン！』

ウイザードHD「はぁー……！」

仮面ライダー「うわあ！」

ゴセイブルー「くっ！……ブルーチェック！」

ゴセイブラック「ブラックアタック！」

ゴセイイエロー「イエローショック！」

ゴセイピンク「ピンクトリック！」

ゴセイジャー全員が必殺技を放った……が

ウイザードHD「はあ！」

粉碎された

ゴセイジャー「うわあー！」

フォーゼ「大丈夫？」

ゴセイブルー「くっ……こうなったら！」

キバ「待つて！」

ゴセイピンク「美晴君を倒したくないのはわかるけど」

キバ「違う……そうじゃない！」

デイケイド「アイツらが……アラタとμsが来るまで耐えるんだ
！」

鎧武「うん！」

ドライブ「うん！」

エグゼイド「うゆ！」

ゴースト「ズラ！」

ダブル「えええ！」

オーズ「OKよ！」

ワイザード「はい！」

ビルド「うん！」

ゴセイブルー「ああ」

ゴセイピンク「うん！」

ゴセイブラック「ああ」

ゴセイイエロー「うん」

デイケイド「行くぞ！」

『キャモン・スラッシュ・シェイクハンド！』

『コピー・プリーズ！』

ワイザードはもう1つのワイザードソードガンを取り出し、ソードモード、ガンモードにした

ワイザードHD「はあ！ふっ！はあ！」

ゴセイピンク「うわあ！」

デイケイド「ぐはあ！」

絶対絶命だと思ったその時

「ドラゴンバレット！」

ワイザードHD「うわあ！」

ゴセイレッド「皆！遅くなってごめん」

アギト「大丈夫？」

鎧武「穂乃果さん……」

ゴセイレッド「あとは俺に任せて」

そう言つてアラタはスカイツクソードを手にし、美晴と戦い始めた

ゴセイレッド「はあ！やあ！はあ！」

ワイザードHD「はあ！ふっ！はあ！」

ゴセイレッド「はあー！」

ワイザードHD「ふっ！はあ！でやあ！」

ゴセイレッド「はあー！」

ゴセイレッドは腰に着けてるゴセイブラスターを乱射している

ゴセイレッド「はあー！」

ウィザードHD「はあ！」

ゴセイレッド「うわあ！」

ゴセイレッドはウィザードにぶっ飛ばされた

ゴセイレッド「まだだ！あきらめてたまるか！」

デイケイド「…天使はあきらめが悪いんだな」

ドライブ「美晴君みたい」

キバ「僕達もでしょ？」

デイケイド「ああ……」

ゴセイレッド「はあ！」

ウィザードHD「はあ！ふっ！はあ！でやあ！」

ゴセイレッド「うわあー！」

『フレイム！ドラゴン！』

『スペシャル！サイコー！』

ウィザードFD「はあー…はあ！」

ゴセイレッド「うっ……」

ウィザードはゴセイレッドに向けて炎を を放ったが……

『ディフェンド！プリーズ！』

『アタックライダー！バリアー！』

目の前に光の壁と岩の壁が現れ、炎を防いだ

デイケイド「あの時のお返しだ」

ゴセイレッド「ありがとう！今だ！凜ちゃん、海末ちゃん」

龍騎「了解にや」

響鬼「はい！」

ゴセイレッドの声と共に海末と凜が後ろから現れた

何故こうなったと言うと

く回想く

アラタ「スカイツクライダーカード、天装！」

『スペシャル！ライダーパワー！』

穂乃果「すごい！本当に元に戻った！」

希「ありがとう、アラタくん」

アラタ「大丈夫だよ、それより早くみんなのところに」

絵里「そうね、皆行きましょう」

絵里がそう言うとき、sは士達の所に向かったが二人だけ残った

海末「アラタさん、お願いがあります」

アラタ「何？」

凧「アラタさんが怪我をしてるのは分かってるにや……だけど美晴くんを助けるにはアラタさんの風の力が必要にや」

アラタ「どういうこと？」

海末「あなたが眠っている間、皆と話し合っただんです、美晴を救うにはウィザードの炎の力を上回らなければいけないのではないかと、μ、sの中で炎を得意とするのは私と凧だけ、私と凧の炎の力にアラタさんのさんの風の力が加われば、美晴を救い出せるのではないかと……」

凧・海末「お願いします！アラタさん！美晴君を助けてください！」

凧と海末は深く頭を下げる

アラタ「わかった……美晴君を助け出すよ！」

海末「本当ですか!？」

アラタ「うん！」

〽回想終了〽

龍騎「行つくにやー！」

『ストライクベント!』

響鬼「はぁー……！」

ゴセイレッド「天装！」

『エクスプロージョン!スカイツクパワー!』

龍騎・響鬼「はぁ！」

ゴセイレッドが出した竜巻に龍騎と響鬼は炎を放つ、ゴセイレッドは炎の竜巻を身に纏う

ゴセイレッド「はぁー……!……はぁ!行くぞ!はぁ！」

ウィザードFD「はぁ！」

ゴセイレッドはウィザードに向かって剣を突き出す、ウィザードは防御をする為にウィザードソードガンで防御をする

最終話 最終決戦

ブラジラ「さあ、計画の第二段階と行こうか」

アラタ「そこまでだ！ブラジラ！」

ブラジラ「何!?!」

ブラジラが声が出た方に視線を向けると崖の上にアラタ達と美晴達が並んでいた

美晴「よくも俺を利用したな！」

ハイド「お前の計画もここまでだ！」

ブラジラ「ふん！笑わせる！ここで葬ってくれるわ！出逢え！」

ブラジラがそう言うのとグルとビービーが大量に出てきた

アラタ「皆：行くぞ！」

「ああ！」「うん！」

『スタネバイ！』

『ガブツ』

『サイクロン！ジョーカー！』

『3：2：1！』

『シャバドウビタツチヘンシーン』

『オレンジ！』

『ウルバツチミナー！』

『マイティアクションX！』

『Are you ready?』

全員「変身！」

『コンプリート！』

『ターンアップ！』

『チェンジ！ビートル！』

『ソードフォーム！』

『カメンライダーディケイド！』

『タトバ！タ・ト・バ！』

『フレイム！プリーズ！』

『オレンジアームズ！花道オンステージ！』

『ドライブ！ターイプスピード！』

『開眼！オレ！レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

『マイティアクシヨーンXー！』

『鋼のムーンサルト！ラビットタンク！イエーイ！』

アラ・エリ・アグ・モネ・ハイ「チェンジカード！天装！

『チェンジ！ゴセイジャー！』

ゴセイレッド「嵐のスカイツクパワー！ゴセイレッド！」

ゴセイピンク「伊吹のスカイツクパワー！ゴセイピンク！」

ゴセイブラック「巖のランディクパワー！ゴセイブラック！」

ゴセイイエロー「恵のランディクパワー！ゴセイイエロー！」

ゴセイブルー「怒濤のシーイツクパワー！ゴセイブルー！」

ゴセイジャー「天装戦隊：ゴセイジャー！」

ゴセイレッド「降臨！」

ウィザード「さあ、ショータイムだ！」

「はあー！」

全員崖を飛び降りた

ウィザード「はあー！」

ゴセイレッド「はあー！」

ウィザード「はあ！ふっ！やあ！でやあ！」

ゴセイレッド「はあ！ふっ！はあ！はあ！」

ゴセイブルー&ビルド&ファイズ&キバ 《こ》&オーズ

ゴセイブルー「はあ！ふっ！はあ！」

ビルド「やあ！はあ！ふっ！はあ！」

ファイズ「ふっ！やあ！はあ！」

キバ「やあ！はあ！ふっ！はあ！」

オーズ「はあ！ふっ！やあ！はあ！」

ゴセイピンク&アギト&クウガ&ダブル&エグゼイド

ゴセイピンク・クウガ「ピンクダブルアタック！」

アギト「いや、クウガはピンクじゃないでしょ!？」

クウガ「私のイメージカラーがピンクだからいいのよ！」

ダブル「はあ！ふっ！それよりはあ！戦いなさいよ！」

クウガ「はあ！ふっ！はあ！」

アギト「はあ！ふっ！おりや！はあ！」

エグゼイド「はあ！ふっ！やあ！はあ！」

くゴセイイエロー&龍騎&響鬼&フオーゼ&ウイザード&ドライブ
ブ

『ソードベントー！』
ゴセイイエロー「はあ！はあ！やあ！ランデイククロー！やあ！」

龍騎「はあ！ふっ！やあ！」

響鬼「はあ！でやあー！」

『エレキON！』

フオーゼE「はあ！やあ！はあ！」

ウイザード「はあ！やあ！はあ！ふっ！」

ドライブ「はあ！ふっ！はあ！やあ！」

くゴセイブラック&ブレイド&カブト&電王&鎧武&ゴーストく

ゴセイブラック「ランデイクアックス！はあ！ふっ！オラア！」

ブレイド「はあ！ふっ！やあ！」

『クロックアップ！』

カブト「はあ！やあ！はあ！」

電王「いくぜ！行くぜ！行くぜー！はあ！ふっ！オラア！」

鎧武「はあ！やあ！はあ！おりや！」

『オメガブレイク！』

ゴースト「ズラー〜！」

くゴセイナイト&ディケイド&キバく

ゴセイナイト「ここからは私たちのターンだ！」

ディケイド「はあ！ふっ！はあ！オラア！」

キバ「はあ！やあ！はあ！ふっ！はあー！」

ゴセイナイト「はあ！ふっ！はあ！」

くゴセイブルー&ビルド&ファイズ&キバ《こ》&オーズく

ゴセイブルー「ブルーチェック！」

『ボルテックフィニッシュー！』

ビルドHG「はあー！」

『プラスターモード!』

ファイズ「はあ!」

『バツシャーバイト!』

キバB「はあーはあー!」

『ギガスキャン!』

オーズTJ「はあー!」

くゴセイピンク&アギト&クウガ&ダブル&エグゼイドく

ゴセイピンク「ピンクトリック!」

『トリガー!マキシマムドライブ!』

ダブルLT「はあ!」

アギト「はあ……」

クウガ「ふっ!はあー!」

『マイティクリティカルストライク!』

アギト・クウガ・エグゼイド「はあー!」

くゴセイイエロー&龍騎&響鬼&フォーゼ&ウイザード&ドライブく

ゴセイイエロー「タイガーバレット!」

『ストライクベント!』

龍騎「はあー!」

響鬼「はあー…:はあー!」

『ファイヤー!リミットブレイク!』

フォーゼF「はあー!」

『フレーム!シューティングストライク!』

ウイザード「やあー!」

『フルスロットル!』

ドライブ「はあー!」

くゴセイブラック&ブレイド&カブト&電王&鎧武く

『オレンジスカッシュ!』

鎧武・ゴセイブラック「はあー!」

ゴセイブラック「やるな!」

鎧武「そっちこそ!」

『スラッシュユ！サンダー！ライトニングスラッシュユ！』
ブレイド「はぁー！」

『1…2…3！ライダーキック！』

カブト「はぁー！」

『フルチャージ！』

電王「俺の必殺技！パート2！」

くゴセイナイト&ディケイド&キバくく

『ファイナルアタックライドー！デイ、デイ、ディケイド！』

『ウエイクアップ！』

ディケイド・キバ「はぁー！」

ゴセイナイト「はぁー！」

くゴセイレッド&ウィザード《美》く

ゴセイレッド「はぁ！ふっ！はぁ！」

ウィザード「はぁ！ふっ！オラア！」

ブラジラ「舐めるな！はぁ！」

ゴセイレッド「うわぁ！」

ウィザード「ぐはぁ！」

響鬼「美晴！大丈夫ですか？」

ゴセイピンク「アラタ！」

ブラジラ「本当の恐怖を味わうがいい！はぁ！」

ブラジラが手を前に出すとブラジラの分身が出てきた

ブレドラン「彗星のブレドラン！」

ブレドランチュ「チュパカブラの武レドラン！」

ブレドランサイ「サイボーグのブレドRUN！」

救ブラジラ「救世主のブラジラ！」

ブラジラ「行け！」

ゴセイレッド「うわぁ！」

ウィザード「ぐはぁ！」

響鬼「うわぁ！」

ゴセイピンク「あぁー！」

ディケイド「恐らく本体を倒せば分身も消えるはずだ！」

ゴセイブルー「よし、なら俺たちに任せろ！」

ゴセイジャー「アセンブル！ゴセイバスター！」

ウィザード「皆！不死身のブラジラ以外の相手をしろ！」

ライダー「了解！」

そう言い、ウィザード達は不死身のブラジラ以外を弾道から除けた

ゴセイレッド「今だ！」

ゴセイジャー「ファニッシュ！」

ブラジラ「うわあー！」

ブラジラは吹っ飛んだ

ゴセイレッド「一気にいこう！」

『サモン！スカイツクパワー！』

『サモン！ランデイクパワー！』

『サモン！シーイツクパワー！』

ゴセイジャー『超天装！』

ウィザード「よし！皆ファイナーだ！」

Sゴセイレッド「ちよつと待つて！」

フォーゼ「何よ」

Sゴセイレッド「スペシャループレゼント！」

そう言い、スーパーゴセイジャーはカードを取り出した

カードにはライダーの顔が書かれてる

スーパーゴセイジャー「天装！はあ！」

光に包まれると仮面ライダーは最終フォームになっていた

オーズPT「ワアオー！」

響鬼アームド「天使にしてはやりすぎでは？」

ウィザードI「いいから行くぞ！」

クウガアルティメット「はあー！」

アギトシャイニング「はあー！」

カブトH「ハイパーキック！」

『ハイパーキック！』

電王ライナー『電車斬り！』

『ウェイクアップファイバー！』

キバE 《こ》「はあー！」

『ウエイクアップ!』

キバE 「はあー!」

『ファイナルアタックライドー! デイ、デイ、デイケイド!』

デイケイドC 「はあー!」

『プリズムマキシマムドライブ!』

Wエクストリーム 『ピッカー! プリズムブレイク!』

『コズミック! リミットブレイク!』

フォーゼC 「はあー!」

ウィザードI 「ダイヤさん」

ウィザードI 《ダ》「はい!」

『ハイタッチ! シャイニングストライク!』

『キックストライク! サイコー!』

ウィザードI 「でやあー!」

ウィザードI 《ダ》「はあー!」

『極スカッシュ!』

鎧武極 「はあー!」

『フルスロットル!』

ドライブトライドロン 「はあー!」

『大開眼! ヨロコビストリーム!』

ゴースト無限 「はあー!」

『ハイパー! クリテイカルスパーク!』

エグゼイド無敵 「はあー!」

『ジーニアスフィニッシュ!』

ビルドG 「はあー!」

ブラジラ 「うわあ!」

ウィザードI 「今だ皆!」

接近戦で必殺技を放つたライダーはすぐにどくと後方でゴセイジャーと遠距離班がいた

スーパードゴセイジャー 『ミラクルゴセイダイナミック!』

ゴセイナイト 『ナイトダイナミック!』

ゴセイジャー・ゴセイナイト「フアニツシュ！」

『シュートベント!』

龍騎サバイブ「はあー!」

『ブラスタモード!』

ファイズブラスター「はあー!」

『ロイヤルストレートフラッシュ!』

ブレイドキング「はあー!」

響鬼アームド「はあー……はあー!」

『ブットテイルノ必殺〜!』

オーズPT「はあー!」

ブラジラ「うわあー!」

ブラジラは爆散した……が

ブラジラ「このままでは終わらんぞー!」

ウィザードI「えー!?でっかくなりましたわ?!」

Sゴセイレッド「後は僕達にまかせて……アグリとモネとゴセイナイトはグランドゴセイグレイトでハイドとエリはアルティメットゴセイグレイトで俺はワンダーゴセイグレイトで行こう!」

「了解!」

ブラック・モネ・ゴセイナイト「グランドゴセイグレイト!降臨!」

ブルー・ピンク「アルティメットゴセイグレイト!降臨!」

レッド「ワンダフルゴセイグレイト!降臨!」

レッド「行くぞー!はあー!ふっ!はあー!」

ブラジラ「はあー!ふっ!はあー!」

ブルー「はあー!ふっ!はあー!」

ブラジラ「うわあ!ぐはあ!」

ブラック「これでも喰らえ!」

ブラジラ「ぐわあー!」

全員「ビクトリーチャージカード!天装!」

『ビクトリーチャージ!』

全員「はあー!」

ブラジラ「うわあー!」

3つの巨大ロボの攻撃で倒れたかとも思ったが

ブラジラ「ぐっ!」

イエロー「しつこいな!」

ブラジラ「はあー!はあ!」

全員「うわあー!」

ブラジラの攻撃でゴセイナイトが落とされてしまい、グランドゴセイグレイトがゴセイグレイトに戻ってしまった

アギトシャイニング「ゴセイナイトさん、大丈夫?」

ゴセイナイト「ああ大丈夫だ」

ブラジラ「はあー!」

レッド「うわあー!!」

ブルー・ピンク「うわあー!」

ブラック・イエロー「うわあー!」

絶対絶命だと思った時アラタのカードが浮かびだした

そのカードをアラタは手にした

手にすると絵が浮かびだした

レッド「……まだだ!アルティメットコンバインカード!天装!」

『アルティメットコンバイン!』

ゴセイナイト「なんだ!」

ゴセイナイトがヘッダーとなり、ウイザード達を連れてつた

ゴセイグレイトがスーパーゴセイグレイトとなり、そこにアルティメットゴセイグレイトとワンダフルゴセイグレイトとが、合体する

レッド「アルティメットワンダフルゴセイグレイト!降臨!」

操縦席にウイザードたちが来た

ドライブトライドロン「ええー!」

鎧武極「どうなってるの!?奇跡だよー!」

Sゴセイレッド「諦めない力が強さを生んだんだ!」

Sゴセイピンク「はあ!」

ブラジラ「うわあー!なんだ!?その力は!」

Sゴセイブラック「オラア!」

ブラジラ「ぐはあ!」

Sゴセイブルー「はあー！」

、ブラジラ「うわあー！」

Sゴセイイエロー「やあ！」

ブラジラ「うわあー！」

Sゴセイレッド「今こそ仮面ライダーとスーパー戦隊、力を合わせる時だ！」

ウィザードI「はい！はあー！」

ライダー「はあー！はあー！」

ライダー達の力がカードに移った

全員「ライダービクトリーチャージカード！天装！」

『ライダー・ビクトリーチャージ！』

ゴセイジャー「星を傷つけ、汚す魂に！」

ゴセイナイト「ゴセイの使命が！」

ゴセイジャー・ゴセイナイト「天罰を下す！」

ライダー「ライダー！」

ゴセイジャー「ヘッダー！」

ゴセイレッド・ウィザード「ストライク！」

「はあー！」

ブラジラ「ぐわあ！馬鹿な……この私が……！うわあー！」

ブラジラは爆散した

全員「ふいー！」

アラタ「美晴君、ありがとう！」

美晴「いえいえ……！あれっ!？」

アラタ「気づいちやった？」

穂乃果「あれ!？穂乃果達透けてる!？」

千歌「本当だ！」

アラタ「みんなはブラジラのせいでこの世界に来てしまったんだ……だからブラジラが倒されたからみんなは元の世界に帰るんだ」

美晴「そうですか、色々ありがとうございました」

アラタ「ううん！こちらこそ！」

美晴「アラタさん、そして、皆さん本当にご迷惑をおかけしました

！」

μ, s + A q o u r s 「さようなら！」

そう言つて、俺たちは元の世界に戻つた

アラタ「行つちやつたね……」

アグリ「ああ、面白い奴らだったな！」

アラタ「またどこかで会おう、仮面ライダー」

くエンディングく

穂乃果「皆今日はμ, sとA q o u r sの合同ライブに来てくれてありがとう！」

千歌「今日はそんな皆さんのために一生懸命歌います！聞いてください！」

μ, s + A q o u r s 「ガツチャ！ゴセイジャー！」

穂乃果「空に輝くレインボー！」

μ, s 「レインボー！」

千歌「正義の仲間集合！」

A q o u r s 「集合！」

全員「未来の救世主！天装戦隊ゴセイジャー！」

全員「ガツチャ！ガツチャ！ガツチャ！」

ゴセイジャーダッシュ！」

穂乃果「五人の天使！」

千歌「五人の天使！」

海末・ことり「ガンガン・バルバル・ミラクル！」

花陽「今すぐ変身！」

真姫「今すぐ変身！」

絵里・にこ「だんだん勇気みなぎる！」

凜「地球の涙のカード！」

希「祈りを届け！ゴセイカード！」

千歌「空に輝くレインボー！」

μ, s 「レインボー！」

曜「正義の仲間集合！」

μ, s「集合！」

梨子「地球の仲間天装！」

μ, s「天装！」

善子「無敵の強さ！ファイブスター！」

花丸「五人の光レインボー！」

μ, s「レインボー！」

ルビィ「綺麗な世界ずっと！」

μ, s「ずっと！」

Aqours「未来の救世主！天装戦隊ゴセイジャー！」

全員「ガツチャ！ガツチャ！ガツチャ！ゴセイジャーダツシユ！」

果南「めげない精神！」

穂乃果「めげない精神！」

ダイヤ「はっ！はっ！するするポジティブ！」

鞠莉「弱気はNG！」

絵里「弱気はNG！」

花陽・穂乃果・ことり「明るい明日信じる！」

千歌「いのちの輝き！カード！」

穂乃果「きせきを起こせ！ゴセイカード！」

海末「空を駆け抜けレインボー！」

Aqours「レインボー！」

ことり「未来のために集合！」

Aqours「集合！」

花陽「地球のパワー天装！」

Aqours「天装！」

真姫「天使の技は五つ星（ファイブスター！」

Aqours「スター！」

凛「5色のちからレインボー！」

Aqours「レインボー！」

にこ「護り続けるずっと！」

Aqours「ずっと！」

希・絵里「未来の救世主！天装戦隊ゴセイジャー！」
海末「母なる地球をカード！」
ダイヤ「君も一緒にゴー！セイ！カード！」
穂乃果・千歌「空に輝くレインボー！」
ことり・曜「レインボー！」
海末・梨子「正義の仲間集合！」
花陽・ルビィ「集合！」
凜・花丸「地球のパワー！天装！」
真姫・善子「天装！」
にこ・果南「無敵の力！ファイブスター！」
希・ダイヤ「スター！」
絵里・鞠莉「5人の光レインボー！」
ゴセイジャー「レインボー！」
士・渡「綺麗な世界ずっと！」
美晴・アラタ「ずっと！」
μ's「未来の救世主！」
Aqours「天装戦隊ゴセイジャー！」
全員「ガツチャ！ガツチャ！ガツチャ！ゴセイジャーダツシユ！」

番外編 天使と仮面ライダー
〜完〜

く4章 偽物のライダーと新たなライダー

登場人物紹介

主人公軍

仮面ライダーウィザード／氷海 美晴

少し薄い青髪

ちよつと薄い紫の目

・プロフィール

年齢 16歳

誕生日 3月16日

血液型 AB型

身長 175cm

特技 バイオリン

得意料理 世界に存在している料理はほぼほぼ作れる

この物語の一人目の主人公、とある日に車に轢かれ、神の手によってラブライブ！の世界に転生したが本人が言うには前までの記憶が無く、ラブライブ！の世界に前までいたような…と言っている

仮面ライダーキバ／紅渡

瀬戸 康史

・プロフィール

年齢 19歳

誕生日 5月18日

血液型 B型

身長 174cm

特技 バイオリン、バイオリン作り

得意料理 カレー

この物語の二人目の主人公、何らかの原因で世界が融合してしまい、ラブライブ！の世界に迷い込んだ所を西木野真姫に助けられ、真姫の家に居候している、過去に美晴にバイオリンを教えた

仮面ライダーディケイド／門矢 士

井上 正広

年齢 19歳

誕生日 3月20日

血液型 B型

身長 182cm

特技 写真を撮る、あとは……ライダーの破壊

得意料理 基本的なんでもできる

この物語の三人目の主人公、オーロラの壁で移動しているとラブライブ！の世界に来てしまい、家が無い時に絵里と出逢い、絵里の家に居候している、亜里沙にもものすごく懐かれてる

原作キャラ

高速 穂乃果 (CV新田恵海)

年齢 16歳

誕生日 8月3日

血液型 O型

身長 157cm

特技 あるのだろうか？

得意料理 あげまんじゅう

仮面ライダーカブト／綾瀬 絵里

(CV南條愛乃)

年齢 17歳

誕生日 11月17日

血液型 B型

身長 162cm

特技 ロシア語

得意料理 ゴロゴロ野菜のポリシチ

南 ことり (CV内田彩)

年齢 16歳

誕生日 9月12日

血液型 O型

身長 159cm

特技 裁縫、柔軟？士への愛情

得意料理 肉じゃが

園田 海末 (CV三森すずこ)

年齢 16歳

誕生日 3月15日

血液型 A型

身長 159cm

特技 弓道

得意料理 チャーハン、餃子

星空 凜 (CV飯田里穂)

年齢 15歳

誕生日 11月1日

血液型 A型

身長 155cm

特技 運動神経抜群!

得意料理 カップラーメン

西木野 真姫 (CVPile)

年齢 15歳

誕生日 4月19日

血液型 AB型

身長 161cm

特技 ピアノ

得意料理 パスタ

東條 希 (CV楠田亜衣奈)

年齢 17歳

誕生日 6月9日

血液型 O型

身長 159cm

特技 タロット占い

得意料理 うどん

小泉 花陽 (CV久保ユリカ)

年齢 15歳

誕生日 1月17日

血液型 B型

身長 156cm

特技 ご飯への愛、美晴への愛情

得意料理 おでん

矢澤 にく (CV徳井青空)

年齢 17歳

誕生日 7月22日

血液型 A型

身長 154cm

特技 アイドルおたく

得意料理 チーズハンバーグ

オリキャラ

氷海 咲

イメージCV水瀬いのり

年齢 14歳

誕生日 5月10日

血液型 AB型

身長 143cm

特技 美晴に甘える事

得意料理 だいたいなんでも作れる

氷海美晴の妹、美晴がライダーの力が取られた時に再開し、今は美晴と同居している

美晴と2人きりになるとかなり甘えん坊になる

仮面ライダージオウ／如月 蒼一

イメージCV・河西健吾

年齢 20歳

誕生日 5月1日

血液型 A型

身長 180cm

特技 不明

得意料理 不明

浦の星女学院に襲撃してきた仮面ライダー。

彼が戦う理由や目的などは不明、時に海東大樹と行動している如月が美晴にビルドウォッチを渡すなど変な行動をしたりする

第35話地区予選に向けて

く音ノ木坂学院・部室く

フェニックスをたおして2回目の合宿も無事終了した
それから3日経ち俺達は放課後に部室に来ていた

海末「各グループの持ち時間は5分、エントリーしたチームは出演
時間が来たら自分達のパフォーマンスを披露、このパソコンの画面か
ら全国に配信されそれを見たお客様が、よかつたならそのグループに
好評、そして順位が決まるのです。」

絵里「その中の上位4組が最終予選に決まるわけね」

真姫「4組…狭き門ね」

希「特に東京地区は一番の激戦区や」

今は予選に向けてミーティングをしている

4組かあ…千歌さん達大丈夫かな？

花陽「それになんと言つてもA―RISEです」

美晴「ああ、恐らくそこが1番きついな…4組の内1つの枠がA―
RISE、そして、もうひとつの枠が千歌さん達だとすると、俺達は
残り2つの枠に入らなければいけない」

凜「ええー!?凜達2つの枠に入れかな?…」

渡「それって会場以外でも歌は歌つていいんですか?」

にこ「…ええ、特に指定はないみたい」

穂乃果「だったら!学校をステージにしようよ!ここなら恥ずかし
い思いをしないし、私達らしいライブが出来ると思うの!」

士「:そこまで甘かつたらいいけどな」

穂乃果が大きな声で言うのと真逆に士が冷徹な声で反論した

にこ「士の言う通りよ!穂乃果、あんた甘いわ!」

花陽「にこちゃんの言う通りです!」

にこ「中継の配信は1回きりの真剣勝負!やり直しはきかないの!
失敗すればそれがそのまま全世界の目に晒されて…」

花陽「それに他のグループより目立たないといけないので、目新し
さも必要です!」

中庭に移動し、花陽がカメラをセッティングして、穂乃果を撮影している

まあ確かに普通に踊って歌ってはじゃ、4組所か2桁も怪しいな凜「奇抜な歌とかかにヤー？」

ことり「可愛い衣装とか？」

希「ふふ、例えばセクシーな衣装とか？」

希の意見を聞くと海末が俺の背中に隠れて背中に顔を埋め込む

美晴「ちよつと海末……」

海末「セクシードレス……」

穂乃果「海末ちゃん!？」

ことり「こうなるのも久しぶりだね……」

希「士君、絵里ちのセクシードレスが見られるかもだよ？」

絵里「の、希!／／／／／／／／／／／／」

海末「……セクシー……ドレス……」

『みんなのハート撃ち抜くぞー!バーン!』

海末「無理です!」

美晴「お前は一体何を想像した……?」

く音ノ木坂学院・放送室く

穂乃果「皆さん!こんにちは……だ!?!いい、イッタアアア!」

俺達は移動して放送室に来ている

何故放送室に来たのかと言うと真姫の提案で放送を使ってアピールをすれば恥ずかしがる必要なく、増して学校の人達を応援してもらい、勧誘することができる。仮にさつきみたいに失敗しても外に漏れる心配もないのでかなりいい手段だと思っている。

穂乃果「イエーイ!そんなわけで皆!μ'sをよろしく!!!」

美晴「ぐはあ!ちよつ!?!穂乃果音量でかすぎだろ……!」

く音ノ木坂学院・屋上く

『ヒール!プリーズ!』

美晴「皆大丈夫?」

花陽「うん、ありがとう美晴君」

にこ「でも少しガンガンするわ……」

渡「穂乃果さんこれからはおみやみに大きな声を出してはいけませんよ」

穂乃果「うん、気をつけるね」

美晴「…後輩に注意される先輩」ボソツ

渡さんに注意されてる穂乃果を見て、俺はそう呟いた

絵里「さあ、後は場所ね」

花陽「カメラで中継出来るところがあれば場所は自由なんですけど……」

士「そもそももう音ノ木坂学院で中継してない場所なんて無いだろう」

確かに…もうほとんどの場所は撮ってしまった

結局そのあと答えは出ず、そのまま帰ることになった

、帰り道、

士「中継する場所…そんな簡単に見つけられてたら、皆苦労しねえーか」

絵里「そうね……」

「士にしては珍しい顔してるじゃん」

声が出た方に視線を向けるとそこには青の銃を持った男がいた

俺と士と渡さんは知っていた…この男を

美晴「お前は…海東大樹！」

穂乃果「え？誰？この人」

海東「やあウィザード、蒼一からウオッチは取り戻せたかい？」

士「黙れ、美晴の力が取られたのもおまえが協力してたんだろ？」

海末「!?この人が！」

海東「まあね」

『カメンライダー』

海東「変身！」

『デイエンド！』

海東大樹は仮面ライダーデイエンドに変身した

『シャバドゥビタッチヘンシーン！』

『ガブツ！』

美晴・土・渡「変身！」

『フレイム！プリーズ！』

『カメンライダー・ディケイド！』

俺たちは変身した

ウィザード「さあ、ショータイムだ！」

ディケイド「はあ！ふっ！はあ！」

ディエンド・はあ！ふっ！ふん！

キバ「はあ！ふっ！はあ！とやあ！」

ディエンド「うわあ！…3対1は分が悪いね」

そう言い、ディエンドは五枚のカードを取り出した

ディエンド「こいつらで遊んであげるよ」

『カメンライダー！』

『ギャレン！』『ライオトルーパー！』『バロン！』『クローズ！』『ガタツク！』

ディケイド「どうぞ」

そう言い、ディエンドはカードをディエンドドライバーにカードを差し込み、ウィザード達に向けて放つ

ギャレン「はあ！ふっ！はあ！」

ディケイド「くっ！海東の奴！面倒なことしやがって」

ガタツク「はあ！ふっ！はあ！オラア！」

キバ「うわあ！…数が多いな！」

*ちなみにライオトルーパーは5人います

ウィザード「10人を相手にするならこいつで行くか！」

『フレイム！ドラゴン！』

『ボーボー！ボーボー！』

『セットアップ！スタート！』

『ウォータードラゴン！ハリケーンドラゴン！ランドドラゴン！』

ウィザードFD「行くぞ！はあ！ふっ！はあ！」

ライオトルーパー1「はあ！ふっ！オラア！」

ウィザードWD「はあ！ふっ！でやあ！」

ライオトルーパー2「はあ！はあ！ふっ！はあ！」

ウイザードHD「うわあ！くっ！はあ！ふっ！はあ！」

ライオトルーパー3「はあ！ふん！はあ！」

ウイザードLD「はあ！ふっ！はあ！やあ！」

ライオトルーパー4「ふん！はあ！オラア！」

ライオトルーパー5「はあ！ふん！はあ！ふっ！オラア！」

ことり「凄い：美晴君10人の内の5人を相手にしてる：！」

絵里「大丈夫かしら？士……」

キバ「はあー！はあ！ふっ！やあ！」

バロン「ふん！はあ！お前の強さを見せてみる！」

キバ「うわあ！こうなったら」

そう言い、キバは紫色のフェツスルを手にし、キバットに吹かせた

『ドツカハンマー！』

キバD「はあ！ふっ！はあ！」

バロン「面白い！ハンマーならこいつだ！」

『マンガー！』

『マンガーアームズ！ファイトオブハンマー！』

バロンはパイニアームズになった

バロンM「はあ！ふん！はあ！オラア！」

キバD「うわあ！くっ！はあ！ふっ！やあ！はあ！」

デイケイド「はあ！ふっ！はあ！」

ギャレン「ふん！はあ！はあ！」

クローズ「オラア！はあ！」

ガタツク「はあ！ふっ！オラア！」

デイケイド「うわあ！ぐはあ！」

絵里「士！」

デイケイド「まだまだ！」

『アタックライダー！ブラスト！』

デイケイド「はあ！」

『ファイヤー！バレット！』

『バーニングショット！』

ギャレン「はあー！」

デイケイド「うわあー！」

絵里「…花陽カブトのライドウオッチ出して」

花陽「え？でもこれは……………」

絵里「あの海東大樹っていう男がもし本当に仮面ライダージオウの仲間だとしても、仲間が苦戦してるのを見てると心が苦しくなるの」

花陽「絵里ちゃん……………」

絵里「私だって仮面ライダーの資格者よ！」

花陽「…分かったよ、はい」

花陽はそう言い、ポケットからカブトウオッチを取りだし、絵里に渡した

『カブト！』

ライドウオッチを起動した

起動すると空からカブトゼクターが飛んできた

絵里「カブトゼクター……………変身！」

『変身！』

絵里は仮面ライダーカブトマスクドフォームに変身した

カブトM「士！」

デイケイド「絵里?!お前なんで……………！」

カブトM「いいから戦いましょ」

デイケイド「お前は高校生なんだぞ？またライダーとして戦ったらお前の身が……………」

カブトM「わかってるよ……………ただもう守られ続けるのはもううんざりよ！」

カブトはデイケイドを見つめた

デイケイドもマスク越しでも絵里の強い気持ちが伝わってくる

デイケイド「…よし、一緒に行くぞ絵里！」

カブトM「えええ！」

ガタツク「クロックアップ！」

『クロックアップ』

デイケイド「うわあ！クロックアップか」

カブトM「なら私の出番ね、キャストオフ！」

『キャストオフ！チェンジ！ビートル！』

カブトはゼクターホーンを後ろに曲げると銀色のアーマーが剥がれライダーフォームになった

カブト「クロックアップ！」

『クロックアップ！』

カブト「はあ！ふっ！はあ！やあ！」

ガタツク「ふん！はあ！ふっ！オラア！」

カブト「はあ！ふっ！やあ！はあ！」

ガタツク「うわあ！」

『1…2…3！』

カブト「ライダーキック！」

『ライダーキック！』

カブト「はあー！」

ガタツク「うわあ！」

カブトのライダーキックを食らったガタツクは消えた

デイケイド「やったか…！」

ギャレン「はあ！」

デイケイド「うわあ！こっちもよそ見してらんねえーな」

そう言い、デイケイドはケータツチを取りだした

『クウガ！アギト！龍騎！ファイズ！ブレイド！響鬼！カブト！電王！キバ！ダブル！』

オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武！ドライブ！ゴースト！

エグゼイド！ビルド！

ジオウ！』

『ファイナルカメンライダー！デイケイド！』

デイケイドはコンプリートフォームになった

デイケイドC「行くぞ！はあ！ふっ！はあ！」

ギャレン「はあ！ふっ！はあ！」

デイケイドC「はあ！ふっ！はあ！オラア！」

ギャレン「うわあ！」

『ブレイド！カメンライダー！キング！』

デイケイドはケータッチでブレイドキングフォームを呼び出した
『ファイナルアタックライダー！ブ、ブ、ブレイド！』

デイケイド・ブレイド「はあー！」

ギャレン「うわあー！」

クローズ「うおー！オラア！はあ！」

デイケイドC「ふっ！はあ！はあ！」

クローズ「はあ！オラア！」

『ビルド！カメンライダー！ジーニアス！』

デイケイドは再びケータッチを取りだして、今度はビルドジーニアスフォームを呼び出した

『ファイナルアタックライダー！ビ、ビ、ビルド！』

デイケイド・ビルド「はあー！」

クローズ「ぐわあ！」

デイエンド「やるじゃないか」

デイケイド「海東お前は本当に何がしたい！」

デイケイドがそう言うのとデイエンドは変身を解除した

海東「うーん、いつもならお宝がほしいって言いたいけど今回は違うんだ」

海東はそう言い、花陽に近寄る

花陽「な、なんですか…？」

花陽は怯えていた

海東は花陽にしか聞こえないぐらいの声で話した

海東「ジオウを倒すにはジオウを含めた20のライドウォッチが必要だよ」

花陽「!？」

海東「じゃーねー！」

『アタックライダー！インビブル！』

海東は消えた

次回仮面ライダーウィザード

「秋葉原はA-RISEの膝元よ!？」

「高坂穂乃果さんよね？」

「ここがUTX学園…」

「!?あなたは!」

次回第36話ユメノトビラ

第36話ユメノトビラ

く秋葉原く

穂乃果「ここは？」

美晴「ここは流石に……」

次の日俺達は放課後、撮影する場所について悩んでいると穂乃果がついてこいと言うから、着いて行ったら秋葉原だった

にこ「しかもここ秋葉原はA—RISEの膝元よ!？」

絵里「しかも前にここを使ったし、下手に使うと喧嘩を売ってるように思えるわよ?」

穂乃果「そっか……」

絵里の言葉に穂乃果はシユンとなつてしまった

そんな時秋葉原にある巨大モニターにA—RISEの映像が流れる

ことり「凄いねA—RISE」

海末「堂々としています……」

穂乃果「……でも、負けられない!」

μ、s全員が巨大モニターに注目していると後ろからコツコツと足音が聞こえた

「高坂穂乃果さんよね?」

一人の少女……綺羅ツバサが穂乃果の名を呼ぶ

穂乃果「え?……!あー!A—RISE……」

ツバサ「シート!ついてきて」

穂乃果「うわ!ちよちよちよ!」

美晴「穂乃果!」

その少女は穂乃果の手を引っ張り、穂乃果を連れていく
俺達も穂乃果を追いかけた

くUTX学園く

穂乃果「はあ……はあ……ふう……」

ツバサ「初めまして、そしてようこそUTX学園へ、高坂穂乃果さんそして、μ、sの皆さん」

穂乃果を追いかけ着的場所が名門校UTX学園

穂乃果「は、初めまして！」

士「ここがUTX学園……」

花陽「はうううう！」

美晴「ちよ!?!花陽！」

花陽の大好きなA―RISEが居るUTX学園を見て、花陽は興奮してる美晴にもたれかかった

ツバサ「立ち話もなんだし、中に入って」

渡「……………（なんだ？この感じこの人達何かある？）」

美晴『ドラゴン』

ドラゴン『お前も感じるか、このとてつもなく邪悪な気配を』

美晴『ああ、だけどここはUTX学園…名門校に裏があるとは思えない』

ドラゴン『確かにそうだな……………とりあえず注意をしといてくれ』

俺はドラゴンとかいわを終え、皆のあとを着いてった

→UTX学園・食堂→

美晴「……………なんだろう、言っちゃいけないと思いますですがなんか疲れた……………」

士「確かにな……………音ノ木坂でも無いのに」

俺たちが食堂に来ると女子生徒が俺達マネージャー陣のサインを求めている

花陽「あ、あの…先ほどは騒いでしまって…すいません……………」

花陽がたどたどしく謝罪をした

「いいのいいの、気にしないでえ。貴方達、同じ地区のスクールアイドルでしょう？」

優木あんじゆが髪のをいじりながら答えた

ツバサ「一度挨拶したいと思っていたの、高坂穂乃果さん」

穂乃果「え？」

ツバサ「やつぱり映像で見るより直で見た方が遥かに魅力的ね、したで見た時にすぐに気づいたわ」

穂乃果「そ、そんなこと……………」

英玲奈「恥ずかしがることは無い、素直に喜べはいいだろう？」

あんじゅ「前回のラブライブ！の時、もしかしたらμ'sとAqoursが強敵となって私達の壁となるんじゃないかって…」

穂乃果「え？…そうなんですか？」

ツバサ「そして、そこにいるマネージャー…いや、仮面ライダー、がμ'sを進化させている」

美晴・渡・士「!？」

おかしい…！俺たちがライダーであるのを知っているのはμ'sやAqours、アラタさん達ぐらいだ

ツバサ「言いたかったのはそれだけ。今日はありがとう。μ'sの皆さん。ラブライブ！予選、お互い悔いのないよう全力で頑張りますよ！」

穂乃果「あ、あの…：…：ラブライブ予選絶対に負けません！絶対に勝ってみせます！」

あんじゅ「ふふ、やっぱり面白いわ…：…ねえ？ツバサ」

ツバサ「…ええ、μ'sの皆さん提案があるの」

予選当日

日は流れるに流れ、予選当日になった

↓UTX学園・屋上↓

凜「うわぁー！かよちゃん！見てみて！すごい綺麗にやー！」

希「うちの高校とは大違いだわ」

何故俺たちがUTX学園の屋上にいるかと言うとあの後、ツバサさんにここで歌を披露してくれないかと提案されたのだ。プロアイドルと同じ場所でやるのは圧倒的に不利な予感がしたのだが、それを了承してくれやがったのがまあ、うちのリーダー穂乃果だったわけ。

俺達は励まし皆の不安な気持ちを吹っ飛ばし、皆練習に取り組んだ
また穂乃果が前日に走らなくてよかった…

絵里「ほくら凜、希今日は観光目当てで来たんじゃないわよ？早く衣装に着替えないと」

希「ええ〜いいやんえりち〜」

凜「そうにや、少しだけお願いにや！」

絵里「はあく士からも言ってる……」
カシャツ

士「…東條、星空この景色の写真後でやるから、絵里の言うことを聞いてくれ」

希「まあ、写真でも…」

渋々写真で承諾してくれた

それから数十分経ち、μ、sは衣装に着替えに別室に行った

今俺達マネージャー陣はこの学園に来てからの気配について話してた

美晴「…って、ドラゴンも言ってるんだよ」

渡「美晴君たちも感じたんだ」

士「だが不自然だ、A—RISEやμ、sを狙ってつけていたのなら秋葉原で気配を感じたはずだが、学園に来てから感じたから恐らくこの学園には何かある」

渡「疑いたくないけどA—RISEの人達が何かやってるのかな？」

美晴「…裏でジオウや海東大樹、スタークやエグゼイドが関わってるのか？」

士「可能性は切り捨てられないな」

渡「でも今は心にとどませておこう」

美晴・士「了解！」

こうして俺達の話は終わった

美晴「そろそろ時間だな行こう」

そう言い、俺達は部屋を出た

スターク「ふうくさあ、始めるか」

そう言い、スタークは士のベルト、正確にはブレイドのカードにblankライドウォッチをかざした

くUTX学園・屋上く

俺たちが屋上に行くとA—RISEの曲が始まっていた

A—RISEの歌や踊りに会場にいるほとんどの人が魅力されて

いる

そして、A | R I S Eの歌は終わった

終わると同時にA | R I S Eへの歓声があがる

ことり「やっぱりA | R I S Eには……」

凜「敵わない……」

海末「認めざるを得ませんね……」

力の差に絶望するμ, s、それを見て俺達は皆の方に向かった

美晴「そんなことは無い、お前らがしてきたことは無駄じゃない！」

士「努力は積む事に必ず実る！お前らは死ね程努力したんだ、ここ
まで来てあっさり引き下がるのか？」

渡「戦いは分からない、勝利の女神はどっちに微笑むかなんてそん
なはだらにもわからない」

美晴・士・渡「だからみせてくれ！お前らの

希望を！」

穂乃果「…うん！皆行こう！」

μ, s「うん！」

「穂乃果ー！私達も応援してるよー！」

咲「頑張ってくださいー！」

美晴「咲！」

気がつけば屋上には音ノ木坂の生徒が沢山いた

そして、μ, sは舞台に立った

『ユメノトビラ！』

『ずっと探し続けた』

『君と僕とのつながりを探してた』

♪ユメノトビラ♪

曲は始まり、A | R I S EでもA q o u r sでも無い、μ, sのパ
フォーマンスを披露し、曲は終了した

結果は…予選突破だ

次回仮面ライダーウィザード

「レギオンが脱獄した?！」

「人を守るその心…美しい」

「こいつ…俺のアンダーワールドに……！」

「美晴君……！」

次回第37話魔法が消える日

『うわあああ……！』

第37話 魔法が消える日

???

薄暗い場所で一人の男が玉座に座っていた

そして、その男の目の前にメデューサがひれ伏している

「何？レギオンが脱獄した?！」

メデューサ「はい、何者かがレギオンを封じていた鎖を破りました」

「……………」

メデューサ「すぐに追っ手を出して排除しますか？」

「いや、その必要は無い」

メデューサ「はい？どういうことですか？」

「レギオンの能力は人間のアンダーワールドに侵入できる…その能力を使い、ウィザードのアンダーワールドに侵入出来れば、奴は魔法が使えなくなる」

く美晴の家く

美晴視点

ラブライブ！予選突破から3日経った

俺は朝早く起き、朝食を作っている

海末「おはようございます」

咲「おはよう、兄さん」

美晴「おはよう、咲、海末」

朝食を作っていると咲と海末がリビングに顔を出した

そして、朝食を作り終わり、机の上に並べた

美晴・咲・海末「いただきます」

テレビ『次のニュースです、住宅地周辺の川の近くで20代の女性が意識不明の状態で見られました』

海末「最近多いですね」

咲「はい、早く原因が分かればいいんですけど」

そうココ最近、多くの人が意識不明の状態で見られる事件が多く
続いている

美晴「咲、学校に行く時気をつけろよ」

咲「うん、でも兄さんと海末さんも気をつけてね」
分かってるよと俺は頷く

美晴・海末・咲「ごちそうさまでした」

美晴「ほんじゃま、行きますか」

そう言い、俺達は家を出た

く音ノ木坂学院・部室く

いきなり時は飛び、放課後俺達は部室に帰ってきた……んだけど

千歌「それでですね〜」

穂乃果「そうなんだー!」

美晴「……なぜいる」

部室に行くとは穂乃果とAqoursがいた

士「高坂、どういうことだ?」

穂乃果「千歌ちゃん達が今からそっち行っている? って言うからOKしたの!」

美晴「OKしたの!じゃねーよ!お前生徒会にも来ないで何やっているんだ!」

穂乃果「……あ」

ダイヤ「穂乃果さん……」

俺が生徒会に来ないことに怒るとダイヤさんが呆れた

海末「穂乃果はほつとくとして、そちらはどうでしたか? 予選は」

曜「それがね私達も突破したの!」

美晴「確か昨日やったんだだけ?」

梨子「うん、大変だったよ」

穂乃果を置いてけぼりにして、μ'sメンバー皆Aqoursと話している

渡「果南さん、合宿が終わってから怪我は大丈夫ですか?」

果南「ええ、大丈夫よ」

渡「そうですか、それは良かったです」

士「これでいいのか?」

花丸「これでいいなら……これが夜の秋葉原……」

士「気に入ってくれてよかった」

穂乃果「もおー！私を置いてけぼりにしないでー！」

美晴「うるさいぞ、穂乃果」

穂乃果「むうー！……！そうだ！今日皆で美晴くんの家行こ」

美晴「……………は？」

μ, s + A q o u r s 「ええー！ー！？」

美晴「お前俺の家をなんだと思ってる…20人も入んねーよ、それに咲だつているんだから」

絵里「え？咲なら亜里沙と一緒に雪穂の家に泊まりに行くつて言つてたわよ」

美晴「え!?!俺聞いてないし、承諾してないんだけど!？」

海末「それなら私がしました」

お前かー！

美晴「はあ…皆まだ話してる？話してるなら先に帰るぞ」

鞠莉「えー…なんでよ」

美晴「俺の家に来るんだろう？掃除しとかないといけないからな」

花陽・曜「なら、私も一緒に「帰ります」「帰るよ」

美晴「……………はい？」

花陽「曜ちゃん？どうしたの？帰るつて言っても家は遠いでしょ？」

曜「美晴君が帰つて掃除するつて言つてたから、手伝おうと思つただけだよ？」

花陽と曜が喧嘩？をし始め、2人を除くメンバーは美晴も大変だなという同情と哀れみの目を向けていた

美晴「わかつたわかつた、じゃあ2人共掃除を手伝つてくれ」

花陽「…美晴くんが言うなら……………」

俺がそう言つと渋々承諾してくれた

く帰宅路く

美晴「……………」

曜「美晴くん？どうしたの？」

音ノ木坂学院から出て、帰宅を辿っていると俺は考え事をしていて、それを心配して曜ちゃんが顔を覗き込んできた

美晴「…ゆえ？なんでもないよ、ただ考え事をね」

俺が今考えていたこと…それは合宿のときのシマリスが何故魔法石を持っていたかという事

そんな事を再び考えていると

「きゃー……」

美晴・曜・花陽「!？」

突如女の人ノ叫び声が聞こえ、俺達は顔を見合い、頷き走り出した
〜住宅街〜

「美しい…刻みがいがある」

俺たちが現場に着くと怪人が女の人を襲っていた

美晴「やめろ！はあ！」

「ぐっ……」

花陽「大丈夫ですか？」

曜「こつちに！」

曜ちゃんと花陽が女の人の手を引き、安全な場所に避難させた

美晴「お前…ファントムか？」

レギオン「我が名はレギオン…美しい者の心を刻む為に生きている
ファントムだ」

美晴「美しい者の心？」

レギオン「ああ、お前のように人を助けたその美しい心を切り込
むのがな！」

そう言いレギオンは薙刀を俺に向けて攻撃してきた

美晴「あぶね！」

『ドライバーON！プリーズ！』

『シャバドゥビタッチヘンション』

美晴「変身！」

『フレーム！プリーズ！』

『ヒーヒー！ヒーヒー！』

俺はウィザードに変身した

ウィザード「さあ、ショータイムだ！」

レギオン「お前がウィザードか…エキサイティング！」

ウィザード「はあ！ふっ！はあ！おらあ！」

レギオン「ふん！はあ！はあ！」

ウィザード「うわあ！…だったらこいつで！」

『シャバドウビタツチヘンション！』

『ランド！ドラゴン！』

『ダン、デン、ドン、ズツドッゴーン！ダン、デン、ドッゴーン！』

ウィザードはランドドラゴンスタイルに変化した

ウィザードLD「はあ！ふっ！はあ！でやあ！」

レギオン「ふん！実に素晴らしい！はあ！」

ウィザードLD「うわあ！…こいつ…！」

レギオンが薙刀で切りつけるとウィザードはふつとび地面に転がってしまふ

ウィザードLD「だったら…こいつで！」

『セットアップ！スタート！』

『フレイムドラゴン！ウォータードラゴン！ハリケーンドラゴン！』

『ファイナルタイム！』

ウィザードFD「はあ！ふっ！はあ！」

ウィザードWD「はあ！おらあ！はあ！」

レギオン「ふん！はあ！ふっ！はあ！」

ウィザードHD「うっ…はあ！とりやあ！」

ウィザードLD「はあ！おらあ！」

レギオン「無駄だ！はあ！」

ウィザード『うわあー！』

レギオンの攻撃で分身が消えた

ウィザード「うっ…がはあ…」

レギオン「では、お前の心を刻ましてもらおう…ふん！」

ウィザード「うわあ！」

レギオンが薙刀を でウィザードに切り付けると切込みのようなものがウィザードの前に現れ、レギオンはウィザードの切込みに入ってしまった

く 氷海美晴・アンダーワールドく

ドラゴン「誰だ！」

レギオン「お前がこいつの世界か…刻ましてもらおう」

レギオンがそう言うとういざードラゴンは美晴の姿になった
美晴D「美晴の中でそんなことはさせぬ！」

そう言い、ウイザードラゴンはとあるウオッチを取り出した

『ビースト！』

そうビーストライドウオッチだ、それを取り出し、起動した

美晴D「変く身！」

『セットオープン！』

『L・I・O・N！ライオン！』

そして、ウイザードラゴンは仮面ライダービーストに変身した

ビースト「はあ！おらあ！はあ！」

レギオン「ふん！はあ！…自分のなかまの為に戦う…実にエキサイ
ティング！」

ビースト「うるせえ！」

「ファルコ！」

「ファ、ファ、ファルコ！」

ビーストF「はあ！ふっ！はあ！おらあ！」

レギオン「無駄だ！ふん！はあ！」

ビースト「うわあ！」

レギオン「トドメだ！はあ…はあ！」

レギオンの薙刀に力が溜まるとビーストを切り付けた

ビースト「うわああ！」

そのままビーストは爆散した

パリンっ！

ビーストライドウオッチも割れていってしまった

～現実世界～

レギオン「ふう…：かなりいい戦いだった」

レギオンは現実世界に戻り、そのまま去った

花陽も曜は美晴に近づいた

パリンっ！

美晴「うわああああお！」

近づいた瞬間、ウィザードドライバーが砕け散り、美晴が苦しみ始めた

花陽「美晴君！大丈夫!?」

曜「美晴君！」

美晴「曜ちゃん……花陽……ドラゴンが……俺の……魔力……が……消え……た……」

そう言い、美晴は倒れた

次回仮面ライダーウィザード

「魔力が消えてる……!」

「美晴君のせいじゃないよ!」

「皆——!」

「俺は諦めない……命ある限り……みんなを守る!」

次回第38話 無限の命

『一人で抱えないで……何も出来ないけど私達も頼って』

第38話無限の命

く美晴の家く

美晴がレギオンに負けたあと、花陽と曜は美晴を美晴の家に入れ、寝かせた

そして、そのことをみんなに伝えると全員美晴の家に来た

花陽が士と渡に報告すると二人はそのフロントムを探しに行つた
ドタドタ

海末「花陽！美晴は!？」

海末がものすごい勢いでドアを開けて、入ってきた

花陽「海末ちゃん…今は寝てるよ」

穂乃果「何があつたの？」

花陽と曜はメンバー全員に何があつたのかを説明した

千歌「そんな…美晴君が…」

事情を説明するとメンバー全員の表情がものすごく曇つた

く氷海美晴の意識く

「美晴……氷海……美晴……」

心の底から俺の名を呼ぶ声がする

美晴「(誰だ?…ドラゴン…なのか…?)」

俺の意識ははつきりしておらず、耳を傾けてもウィザードラゴンらしき声が俺の名を呼び続けてるだけだった

「美…晴…美晴……」

美晴「(待ってくれ……!ドラゴン……!)」

俺が手を伸ばして掴もうとした瞬間俺は勢いよく飛び起きた

美晴「ここは…俺の部屋?…!」

俺は自分の部屋のベッドで寝ていた

俺の記憶が鮮明に思い出し、自分の腰についているドライバーにドライバーオンリングをかざした

だが、エラー音すら起きず、何も反応しなかった

俺は口にしたくも無い言葉を言った

美晴「魔力が消えてる……!クソっ!」

俺は強く拳をベッドに叩きつけた

梨子「……………」

ちようど替えのタオルを取りに部屋を出た、梨子だったが悔しがる美晴のすがたを見て、入るタイミングを見失った

く秋葉原く

士「はあ：はあ：！」

渡「ここにも居ない……………」

士と渡は壁に手を付きながら、休憩をしていた

士「：すまない美晴、レギオンは俺達がぶつ潰す：！」

そう言っているその後ろから声がした

ことり「士君ー！渡君ー！」

士「南：？それに……………」

渡「真姫さん：凜さん：果南さん……………」

振り向くことりと真姫と凜と果南がいた

士「何しに来た：？」

果南「探してるんでしょ？：ファントム」

凜「凜達にも手伝わせて欲しいにや！」

三人は真剣な眼差しを士達に向けた

女子高校生を巻き込むのは少々気が引ける……………が今の二人にそんな考えは出来なかった

渡「お願いします」

真姫「ええ、じゃあ私達はあっちを探してくるわ」

士「わかった、じゃあ俺と渡はこっちを探す」

そう言い士達は真姫達と別れた

く美晴の家く

穂乃果「あつ！美晴君！」

先ほど真姫達が出ていき、静まり返っていたが穂乃果の発言によりみんな視線をむける

そう千鳥足で階段を降りてる俺に

ルビィ「良かったです！目覚めたんですね！」

鞠莉「もう身体は大丈……………ってどこに行くのよ？」

美晴「ごめん心配かけた：フロントムを探しに行ってくる」

海末「え!？」

階段近くの椅子に腰を掛けていたルビィさんと鞠莉さんが俺の元に駆け寄ってきたが俺は二人の間を通り抜け、ドアに手を掛けると鞠莉さんが質問して来たから、返すと海末が驚いた

にこ「あんたその身体行けるわけないでしょ！」

善子「無茶よ、やめなさい！」

美晴「レギオンが倒したのドラゴンだ、俺の身体は問題無い」

穂乃果「美晴君が悪いわけじゃないんだよ？だからそこまで責任を感じなくても…」

ダイヤ「フロントムなら士さん達と真姫さん達が追っていますわ、なので美晴さんが行く必要は……」

美晴「レギオンは無差別で人を襲っている…！あいつらじゃ……」

花陽「美晴君……！」

俺はそう言い、家を出た

花陽は俺に何かを言っていたが聞こえていなかった

梨子「美晴君…混乱してる…」

全員「え?…」

海末「梨子…どういことですか?」

梨子「自分がやらなきゃやって言う気持ちと魔力が無くなった事で頭の整理が追いついてないんだと思う……」

千歌「……よし！わたし美晴君探してくる！」

穂乃果「私も行く！」

曜「私も！」

千歌の言葉に皆賛成して行き、みんな美晴を探しに外に出た
美晴「やっぱり使い魔も出せないか……はははっ、笑えるな」

自分の家を出てから、数分経ち、おれはもしかしたらと思ひ、右手にガルーラリングを付け、ベルトにかぎすがやはり音すらしない

美晴「……ダメだ！こんな所で止まってないで早くレギオンを探さないと今でも罪のない人が襲われているかもしれない……！」

そう言い、俺は再びよろよろな足を動かし、移動しようとしたが

花陽「いた！美晴君！」

花陽が俺の手を掴んだ

曜「美晴君落ち着いて？」

海末「美晴！止まってください！」

それに続くかのように海末と曜が俺の腕を掴む

花陽「美晴君…ごめんなさい！」

美晴「……え？」

突然花陽に謝れ、俺はポカンとしていた

海末「私達は貴方に頼りすぎました……」

千歌「だからファントム探しは私たちに任せて！」

続いて海末にも謝れ、後ろから千歌さん達も来た

美晴「……分かった、無茶しないでくれよ」

俺はそう言い、家の帰路を辿った

く展望台く

美晴「……どうしたもんかなあ〜」

梨子「美晴君…」

美晴「桜内さん…俺魔法が使えなくなっちゃったよ」

梨子「……………」

美晴「馬鹿だよな、余計に魔力を消費して負けるなんて」

そう言っている俺は溜めていた物がこぼれた

言葉では無く、目から

そして、桜内さんは黙りながら美晴に抱きついた

美晴「桜内さん……？」

梨子「私ね中学の時にイジメられてたの、ピアノで優秀な成績を残してくるからって言う理由でね、辛くて自殺しようと思った時もあった……美晴君で例えるなら絶望したかもしれないの」

美晴「……え？」

梨子「でもね、そう思ってた私はすぐに消えた…それは美晴君のバイオリンの音をテレビで聞いたからなの、美晴君のバイオリンはすぐ死にたかった私の心を癒してくれた……私は美晴君のバイオリンのおかげで生きる希望を持てたの……そのおかげで高校は千歌ちゃ

ん達と巡り会えたの……だから一人で抱えないで…何も出来ないけど私達も頼って……」

そう桜内さんが言った

桜内さんの言葉で自然と涙が出た

く街中・広場く

「うう……」

中代男性が胸を押さえつけながら苦しんで倒れている

そこにはレギオンがいた

レギオン「何故だ？何故エキサイティングしない？やはり奴を壊し損ねたからか？」

レギオンがそうやって悩んでいると

士「見つけたぞ！レギオン！」

渡「もうこれ以上被害は出させない！」

『ガブツ』

士・渡「変身！」

『カメンライドー！デイケイドー！』

キバ「はあー！はあー！ふっ！はあー！」

デイケイド「はあー！おらあー！はあー！」

絵里「；士！頑張っ！」

真姫「渡！負けたら承知しないわよ！」

『ドツカハンマーー！』

キバD「当然です！はあー！ふっ！はあー！おらあー！」

『カメンライドー！電王ー！』

『フォームライドー！アックスフォーム！』

D電王A「ふん！はあー！ふっ！はあー！ふっ！おらあー！」

レギオン「ふん！パワーに身を任せてるお前らは非常に美しくない…はあー！」

果南「皆、ここに居ても2人の邪魔になっちゃうし、ここは二人に任せて私たちはあそこに行くよ！」

穂乃果「あそこ？」

ダイヤ「穂乃果さんは鈍感ですわね、今私たちができることはただ

ひとつですわ」

鞠莉「一人で落ち込んでる私達のマネージャーを元氣付けに行くわよー！」

穂乃果「……うん！みんな行こう！」

μ, s「うん！」

キバD「皆さん早く行ってください！」

『ドツカバイト！』

キバD「はあ！」

レギオン「ふん！はあ！」

キバ「うわあ！」

真姫「くっ……行きましょ！」

そう言いμ, sとAquorsは美晴の元に向かった

デイケイド「渡！一気に行くぞ！」

キバ「はい！」

『ファイナルフォームライダー！キ、キ、キバ！』

デイケイド「ちよつとくすぐつたいぞ！」

キバ「え？うわあ！」

デイケイドはキバの背中を開き、キバを弓矢にした

レギオン「仲間を變形させるとはなんて下品な奴らだ」

デイケイド「うるせえ！」

『ファイナルアタックライダー！キ、キ、キバ！』

キバアロー「キバって行くぜー！」

デイケイド「はあ！」

く海辺く

美晴「ここは…確か」

桜内さんの言われた場所に行くところには俺がむかしバイオリンを弾いていた海辺だった

梨子「ここで美晴君のバイオリンを聞いたの…」

美晴「つまりここは桜内さんにとって、希望の場所なんだ」

梨子「…これからはさん付け無しで名前で呼んで」

美晴「え？なんで？」

「梨子「だって皆名前呼びで私だけ苗字なんだもん！」
美晴「わかったよ、梨子」

梨子「／／／／／／／／」
こんな風に話していると

穂乃果「美晴くーん！」

く 街中・広場く

デイケイドC「くっ…はあ！おらあ！はあ！ふっ！はあ！」
キバE「はあ！やあ！はあ！」

レギオン「ふん！はあ！はあ！はあー！はあ！」

デイケイド・キバ「うわあ！」

デイケイドC「これで…どうだ！」

『ファイナルアタッククライドー！デイ、デイ、デイケイド！』

『ガルルファイバー！』

デイケイドC「やあー！」

キバE「はあー！」

レギオン「ふん無駄だ！はあ！」

レギオンは薙刀を振り、亀裂を作った

デイケイドとキバはその亀裂に捕まった

デイケイド・キバ「何!？」

キバ「う、動けない…」

デイケイド「くっ…この野郎！」

レギオン「ふふ、さあ、エキサイティングの時間だ」

そう言いレギオンは美晴がいる方向へ向かった

く 海辺く

穂乃果「あっ！いた！おーい！」

千歌「美晴君ー！」

美晴「皆…どうして」

曜「美晴君を元気付けに来たの！」

鞠莉「あらら？リリーは抜け駆けしてみはっちと会っていたの？」

梨子「ち、ちち違うよ！美晴君が泣くほど落ち込んでいたから…」

／＼
顔を真つ赤にしながら言う梨子

だが、その『泣く』という言葉にみんな反応した

穂乃果「ええー!?美晴君泣いたの?!」

花陽「梨子ちゃん、泣いて時の美晴君の顔を詳しく」

善子「あんたでも泣くのね……ぷぷぷ」

美晴「や、止めくれ!梨子も余計な事言わなくていいから!」

俺の言葉に梨子は慌てて口を手で塞ぐ

美晴「そういえば士達は?」

真姫「今フアントムと戦ってるけど……二人だったら」

真姫がそう言った瞬間だった

レギオン「いい……!実にいい……!実にエキサイティング!」

全員「!?!」

レギオンが俺達の場所に現れ、薙刀を振り、凄い突風で全員吹き飛ばれ、皆は浜辺、俺は浅瀬の海に吹き飛んだ

美晴「皆ー!……!?!」

皆を呼んだが皆の手足は傷になっていた

俺はずぶ濡れになりながらもレギオンを睨んだ

美晴「てめえ……!士達はどうした!」

レギオン「随分と刻み損ねたからな……あの下品な奴らは私の力で動かせんよ」

美晴「お前……!」

レギオン「じゃあゆつくり、楽しませてもらう!」

レギオンは薙刀を構え、俺の方に接近する

俺はやむを得ない形でレギオンに生身で向かった

美晴「はあ!ふっ!はあ!」

レギオン「ふん!はあ!」

美晴「ぐはあ!」

だが、所詮は生身の為、避けるのが精一杯だった……レギオンに攻撃するも返り討ちにあい、されに海に浸かってしまい、体が重くなるそう考えているとレギオンが目の前に来ていて俺に向けて薙刀を

振りかざす…俺は避けれないと悟り、刃のついていない部分を受け止めた

千歌「美晴君！」

美晴「俺はまだ……まだやられる訳には…行かねええんだよ！」
「何!？」

前から声がし、チラ見すると、sとAqoursが怪我してぶぶわを手で押えながら、一箇所に集まっていた、それを見た俺は闘志が燃え上がった

だが、再びレギオンに吹き飛ばれ、傷が塩水に浸かる

美晴「くっ……はあああああ！」

喉が枯れるような声を出し、レギオンと戦いだした

海末「もうやめてください！」

花陽「これ以上は美晴君が……！」

果南「こうなったら私が……！」

ダイヤ「ダメです！とても私たちが勝てる相手ではありません」

レギオン「なんだ？悪あがきはもう終わりか？」

美晴「がはあ！」

レギオン「終わりだ！諦めろ！ふん！」

美晴「がはあ！ゲホゲホ」

レギオンに蹴り飛ばされ、俺は服から水色の魔法石が転がり落ちる俺はそれを手に取り、ポケットにしまい再び立ち上がった

レギオン「いい！実にいい！ポロポロになっても立ち上がるその意思！その心は実に魅力的だ！」

美晴「俺は諦めない……力が無くても手を伸ばしてつかみとる！」
レギオン「何が言いたい?!」

美晴「俺は……俺の中にある……無限の可能性を信じる……この命ある限り俺はみんなを守る！」

俺の言葉に反応する様にポケットが光り、ポケットに手を入れ、取り出すとそれは魔法石だった

美晴「指輪……?」

水色の魔法石はダイヤモンドの様な指輪に変化した

美晴「まさか！」

俺はもしやと思い、ドライバーオンリングをベルトにかぎした

『ドライバーON！プリーズ！』

魔力を失った美晴がベルトからウイザードドライバーに変化した

その時自分のアンダーワールドに意識が入った

く氷海美晴・、アンダーワールド、く

アンダーワールド内には咆哮が聞こえる

美晴「ドラゴン…どうして」

ドラゴン『心の強さで俺を蘇らせた』

美晴「心の…強さ」

光り輝くウイザードドラゴンは俺の周りを飛翔する

ドラゴン『やつぱりお前は面白い！もう一度お前の希望になってる

やるよ！相棒！』

そう言つて、ドラゴンは俺の中に入ってきた

く現実世界く

俺の意識は現実世界に戻ってきて、レギオンに強い眼差しをむける

その時俺の体から結晶化されたドラゴンが飛び出し、俺の頭上を咆

哮しながら飛翔している

『シャバドゥビタッチヘンシーン！』

俺はシフトレバーを上下に動かした

美晴「変身！」

俺は力強く言い、ベルトにかぎした

『インフィニティ！インフィニティ！インフィニティ！』

頭上を飛翔していたドラゴンが急降下して、俺の体内に入り込み、

その身体は結晶へと砕け散る。そして、その結晶は俺はの身体を包み

込むのだった！

『インフィニティ！プリーズ！』

ヒースイフドー！ボーズバビュードゴーン！』

そして、爆誕する

淡い水色の様な銀色の鎧

輝かしい宝石のエンプレム

覆うベゼルのフレームもダイヤモンドの指輪を思わせる王冠のよ
うな形状へと昇華した姿。

それこそが

「祝えー2019年に生まれし魔法ライダーの最終フォーム、

その名も仮面ライダーウィザードインフィニティスタイル！」

曜「え？あの人誰？」

花陽「それより戻たんだ！…美晴君の魔力が戻たんだ！」

希「綺麗……」

絵里「ハラショー！これはすごいわ！」

μ、sとAqoursが喜んでいるが喜んでいるの敵も同じだっ
た

ウィザード I「俺が最後の希望だ！」

レギオン「エキサイティング！その心、改めて切り刻ましてもら
う！はあ！」

レギオンは薙刀をウィザードに振りかざしたが甲高い音が鳴り響
く、まるで鋼鉄な物を切っているかのような音が

レギオン「なっ!?!:何!?!」

ウィザード I「ふっ！はあ！」

ウィザードはレギオンに蹴りを2発入れた、その時に実感したこの
スタイルはフレームドラゴンの時よりもパワーがあると

ウィザード I「来い！ドラゴン！」

『良からうー！』

ウィザードがドラゴンを呼ぶとドラゴンもそれに応え、ウィザード
の体から飛び出し、姿を変えながらウィザードの右手に移動した

紅蓮色の刃を宿した斧

『煌輝斧剣 アックスカリバー』となり、ウィザードはカリバーモード
にした

ウィザード I「はあ！ふっ！はあ！」

レギオン「うわあ！ぐはあ！」

『インフィニティ！』

シフトレバーを再び動かし、かざすとウィザードが加速した

♪ Missing Piece / 曜・海末・花陽・梨子

ウィザード I 「はあ!ふっ!はあ!はあ!」

レギオン 「うわあ!何!?!」

これがインフィニティスタイルの特徴、時間に干渉し、高速移動ができるということだ

そして、ウィザードはグラップリングギールから刃のついた持ち手へと切り替えた

『ターンオン!』

これぞ、煌輝斧剣 アックスカリバー、アックスモードである

ウィザード I 「おらあ!」

レギオン 「ぐわあ!」

ウィザード I 「ファイナーレだ!」

『ハイタッチ!シャイニングーストライク!』

ウィザードは煌輝斧剣 アックスカリバーについてるハンドオーサを軽くハイタッチした

『キラキラ!キラキラ!キラキラ!』

待機音と共にウィザードはアックスカリバーを振り回すとアックスカリバーを大きくなっていく、人間サイズを超えてるアックスカリバーを持ち、天高く飛んだ

ウィザード I 「でやあああ!」

ウィザードはレギオンを上空から叩き斬った、これぞ天空から叩き斬る技『ドラゴンシャイニング』である

次回仮面ライダーウィザード

「何故この時期にテレビ局の見学…」

「何ですか!?!あれは」

「その子に手を出すな」

「始……力を使つたな!」

次回第39話 トランプのライダー

コツ、コツ

美晴 「あんた誰だ」

猛「俺は本郷猛、お前のようなひよっこをライダーとして認める訳にはいかん！」

ライダー道…ここに極まれり…

猛「ライダー…変身！」

士「昭和ライダーは完全に平成ライダーを敵に回した…平成ライダーがアイドルであろうとな」

平成VS昭和！仁義なきライダーバトルが始まる！

敬介「お前さん平成ライダーだったのか…次は俺が相手だ」

ブラック「次はお前を倒す」

千歌「どうして？」

ブラックRX「許すまじ、平成ライダー！」

そして、現る仮面ライダーオーガとは!?

美晴「昭和ライダーと平成ライダーは所詮戦う定めなのね」

鳴滝「平成ライダー20人の力を結集せよ！」

千歌「…昭和ライダーが私達の前に立ちはだかるなら…やるしかない！変身！」

ヒーロージェネレーションバトル！勝つのはどっちだ!?

猛「問答無用！」

平成ライダーVS昭和ライダー！仮面ライダー大戦

君はどちらを応援する？

2020年4月公開予定!!

第39話 トランプのライダー

くハカランダく

カラシカラシ

「ありがとうございます」

とあるにカフェで1人で働く一人の少女、栗原天音はお客さんを入口まで見送り、店を閉店した

カラシカラシ

天音「?すみませんもう閉店してるんですけど……ってあなたは綺麗……!」

栗原が名前を呼ぼうとしたら鬱がれた

ツバサ「私はお客さんじゃないわ」

天音「え?」

突如カフェにやってきた者はアナザーウォッチを起動し、栗原天音の体内に埋め込んだ

ツバサ「貴方の本当の欲望を剥き出しにしなさい」

天音「うっ……うう、あー!」

『ブレイド……!』

栗原天音はアナザーブレイドになってしまった

アナザーブレイド「うっ……うう……始さーん!」

そして、アナザーブレイドは一人の人物の名を叫んだ

くバスの中く

美晴視点

俺達は今、バスに乗って、テレビ局に向かっている

なんでテレビ局に向かっているかって?そんなもん社会科見学だからだ

美晴「なんでこの時期にテレビ局の見学があるんだよ……」

穂乃果「ま、まあまあ」

俺がそんな言っていると隣に座ってる穂乃果が宥めてきた

美晴「あつそうだ、咲が前穂乃果の家に泊まりに行つたろ?迷惑かけてなかったか?」

穂乃果「ううん！そんなこと無かったよ、逆に雪穂が迷惑かけちゃったかな」

美晴「？雪穂さんが？なんで」

穂乃果「なんか雪穂が咲ちゃんにたくさん美晴君について質問してたらしいの」

美晴「は、はあー？…この話はやめよう」

そんな会話をしていると

担任「皆さん、着いたので降りてください」

美晴「もう着いたのか…さあ降りるぞ」

穂乃果「うん」

そう言い俺と穂乃果はバスをおりた

くテレビ局く

美晴「なあ海末、なんでそんな不機嫌なんだよ…」

テレビ局についてから班行動になったんだが、海末がさつきから不機嫌なのだ

海末「美晴なんて知りません！」

美晴「ええ…：…ことりなんであいつあんな不機嫌なの？」

ことり「海末ちゃんは美晴君が穂乃果ちゃんと楽しそう会話してるのを見て、嫉妬してるんだよ♪」

海末「ことりー！ー！ー！」顔真っ赤

穂乃果「なーんだそうなんだー」ニヤニヤ

海末「う、うう…：…」

美晴「えつちよ海末！なんだよ急に」

ことりの暴露で海末は顔真っ赤にした

それを聴き、穂乃果のS心に火がついてしまい、海末を弄ろうしていた

海末は涙目になりながら、俺の後ろに回り、袖を掴んできた

美晴「はあ…大丈夫だから、穂乃果もその辺にしときな」

穂乃果「はーい…：…」

その時だった

「キヤーーー！」

「化け物ー!」

こと穂乃海末美「!?!」

悲鳴が聞こえ、俺達はすぐ悲鳴が聞こえた場所に向かった、そこには

アナザーブレイド「はあ!」

アナザーブレイドが従業員の人を襲っていた

海末「なんですか!あれは!」

美晴「なんだアイツ?とりあえずまずは助けなきや、変身!」

『ウォーター!ドラゴン!』

『ザバザバシャーン、ザバンザバーン!』

俺は大急ぎでウォータードラゴンに変身した

ウイザードWD「この!離れろつて!はあ!大丈夫ですか?あつちに」

「は、はい!」

アナザーブレイド「うう……はあ!」

ウイザードWD「この!はあ!こいつ硬い……」

海末「ん?2019?」

その中海末はアナザーブレイドの背中に描かれている2019という数字が目に入った

アナザーブレイド「はあ……はあ!」

ウイザードWD「!?まずい!うわあ!」

アナザーブレイドは従業員の人たちに光線を放ったがウイザードが盾となり、従業員達は怪我をしなかった

ウイザードWD「ここだと危険だな……はあ!」

この場所で戦うのは危険だと予知したウイザードはアナザーブレイドを連れて、テレビ局から出た

〜駐車場〜

『スペシャル!プリザード!サイコー!』

ウイザードWD「はあ!」

アナザーブレイド「うっ……」

『スペシャル!サイコー!』

ウィザードは魔法でアナザーブレイドを凍らせ、さらに魔法である自分の後ろからしっぽを生やせ、アナザーブレイドを叩き割る

ウィザードWD「はあ！」

アナザーブレイド「うわあー！うう…ふん！」

ウィザードWD「効かない!？」

アナザーブレイドはブレイルラウザーのようなかい剣を装備し、ウィザードに斬りかかってきた

アナザーブレイド「はあ！ふっ！はあ！」

ウィザードWD「はあ！ふっ！うわあ！ぐはあ！…とりあえずあの剣に対抗しないと…！」

『ハリケーン！ドラゴン！』

『ビュ、ビュ、ビュビュビュビュビュ！』

『カモン・スラッシュ・シェイクハンドー！』

『コピー！プリーズ！』

ウィザードはハリケーンドラゴンスタイルになり、ウィザードソードガンを二つ装備した

ウィザードHD「はあー！はあ！ふっ！はあ！」

アナザーブレイド「うわあ！うう…はあ！」

ウィザードHD「はあー！はあ！」

アナザーブレイド「うわあー！」

剣のぶつかり合いの末、アナザーブレイドは吹き飛ばされたすると一人の男がウィザードに向かって歩み寄ってきた

アナザーブレイド「始さん…！」

始「その子に手を出すな」

始はそう言い、ラウズカードを取り出すと腰にベルトが出てきた始「変身！」

『チェンジ！』

始は仮面ライダーカリスに変身した

ウィザードHD「仮面ライダー!？」

カリス「うおー！はあ！」

カリスは醒弓カリスアローを装備し、ウィザードに襲いかかってき

た

カリス「はあ！おらあ！はあ！」

ウィザードHD「はあ！ふっ！はあ！はあ！はあ！」

ウィザードの攻撃をカリスはジャンプして回避し、後ろに下がり、3枚のカードを取りだした

『フロート！ドリル！トルネード！』

『スピニングダンス！』

カリス「ウオラアアアア！」

ウィザード「うわあー！」

カリスの攻撃をモロに食らって、スタイルが元に戻ってしまった

カリス「はあー！……！」

カリスはウィザードに追撃しようとしたがまた別の人物がこちらに歩み寄ってきた

カリス「剣崎！まさかお前まで……！」

剣崎「始…力を使ったな…おれはお前の為に自分の力を封印したつもりだったのに…お前が封印を破った！」

そう言うのと剣崎の周りにブレイバツクルが飛び回り、剣崎の腰に着いた

剣崎「どうしてだ！始！……変身！」

『ターンアップ！』

剣崎は仮面ライダーブレイドに変身した

ブレイド「俺達は再び出会ってしまった…運命は避けられないの

か…うおー！」

カリス「うっ！やめろ剣崎！」

ブレイド「はあ！ふっ！はあ！」

カリス「うわあ…！はあ！」

ブレイド「うっ…！はあ！」

カリス「はあ！」

ブレイド「うわあー！」

カリス「うわあー！」

次回仮面ライダーウィザード

「何があっただんですか?!」

「早く止めないとバトルファイトが終わってしまおう!」

「所詮俺達は戦う運命なのか…」

「私が貴方の歴史を紡ぎます!」

次回第40話 新たなブレイド

第40話 新たなブレイド

ブレイド「はあ！」

カリス「うっ…はあ！ふっ！はあ！」

ウィザード「なんだかよくわかんないけど今の内にアナザーライダーを」

ウィザードはそう言い、アナザーブレイドと戦い始める

ウィザード「はあ！ふっ！はあ！」

アナザーブレイド「うう…はあ！やあ！」

ウィザード「うわあ…！はあ！」

ウィザードはアナザーブレイドのかい剣に吹き飛ばされるが
ウィザードソードガン（銃）でアナザーブレイドを打つ

ブレイド「はあ！ふっ！はあ！おらあ！」

カリス「うわあ…！くっ！はあ！」

ブレイド「ふっ！はあ！」

ブレイドの攻撃をカリスはジャンプして回避した

そして、ブレイドはカードホルダーを展開し、3枚のカードを取り
だした

『キック！サンダー！マツハ！』

『ライトニングソニック！』

ブレイド「うおー！はあ…！はあー！」

ブレイドは剣を地面に刺し、ライダーキックをした

そして、カリスとカリスの後ろにいたアナザーブレイドに直撃する
カリス「ぐわあー！」

アナザーブレイド「うわあー！」

カリスは吹き飛ばされ、アナザーブレイドは変身が解除される
ブレイド「天音ちゃん!？」

天音「はあ…うっ」

ブレイド「……………」

苦しむ天音を見て、ブレイドは沈黙する

海末「美晴ー！」

美晴「みんな！」

後ろから穂乃果とことりと海末がやって来た

穂乃果「あの人は？」

ことり「仮面ライダーなの？」

美晴「…ねえ、あの二人について教えてほしいんだけど」

俺はブレイドに近づき、提案をした

剣崎「あれを見られたら君に…いや、君たちに知る権利はあるね
…ああ、教える」

そう答えてくれて、俺とブレイド、そして、穂乃果とことりと海末
は近くの公園のベンチに向かった

〈公園〉

美晴「まずは自己紹介だね、俺は氷海美晴よろしく」

穂乃果「高坂穂乃果だよ、よろしくね」

ことり「南ことりです、よろしく♪」

海末「園田海末と申します、よろしくお願いします」

剣崎「俺は剣崎一真、よろしく」

俺達は公園に来て、互いに自己紹介をした

美晴「じゃあまず、あのライダーと剣崎さんの関係を教えてください
い」

剣崎「…俺とカリスはどちらかが力を使うと引き寄せられてしま
うんだ」

穂乃果「え？どうして？」

剣崎「俺とカリスは史上最悪のアンデット、ジョーカーなんだ」

海末「ジョーカー？」

剣崎「アンデットが全て封印され、ジョーカーが最後の一人になっ
てしまったら、バトルファイトが終わって、世界のリセットが始まっ
てしまう…だけどジョーカーが二人いる今、どちらかが消えるまで世
界のリセットはおわれない…」

美晴「じゃあ次はあの怪人、あの女性は誰なの？」

剣崎「栗原天音、始が…仮面ライダーカリスが守り続けた少女だ」
ことり「だから美晴くんは襲われたんだね」

美晴「…つまりあの怪人がカリスに関係ある者を襲い、俺が戦ってしまうと、カリスが怪人を守る為に力を使ってしまう…そして、その力で剣崎は引き合ってしまった、戦ってしまう…そして、バトルファイトが終わったら世界は滅びる……」

美晴一同は頭を捻る

そして、剣崎が立ち上がった

剣崎「巻き込んでしまってもすまない…だがこれは俺たちの問題だ、俺と始の……！」

そう言い、剣崎さんは公園を出てった

ことり「ねえあの怪人ってなんなの？」

ことりがああ怪人のことを聞いてきた
すると

「それについては私が説明しましょう」

美晴「え?!…え?!誰?!」

おれの横に知らない人が現れた

ウオズ「私の名前はウオズ、しがない予言者さ」

海末「よ、予言者…ですか？」

ウオズ「まあそんなことより、アナザーライダーとは見出した人間をもとに勝手に創り出した仮面ライダーのこと。アナザーライダーが誕生した瞬間、その時代に活躍する正規のライダーは消滅、アナザーライダーにとって代わられてしまい、歴史そのものが変化してしまふのだ」

穂乃果「だけど剣崎さんは仮面ライダーになつてたよ?」

ウオズ「2019年にアナザーライダーが生まれたのなら、少々ズレが出てるのだと思う」

海末「あの時の2019は作られた年代を指していたのですね」

ウオズ「そう言うことになる」

穂乃果「でもなんで天音さんはテレビ局を襲ったんだらう?」

美晴「確かにカリスを求めてるなら、本人の元に行けばいいのに……」

ウオズ「…この本によると仮面ライダーカリスはジョーカーになつ

てから一人遠い山で一人で暮らしているようだ……そして、仮面ライダーカリスは写真家である為山を選んだと」

海末「そう言われれば私達が来た時、天音さんは写真スタジオを襲っていました！」

美晴「じゃあつまり、今天音さんがいる場所は……！」

第三者視点

く山奥の小屋く

始「……ごめんな、天音ちゃん」

始は机の上にある写真を見ながら、この場にいない天音に謝罪したその時ちようど外では

『剣崎一真、仮面ライダーカリス、相川始の元を訪れる……』

ある男がノートをそう記入していた
すると

剣崎「始！」

ノートに書いたどおりに剣崎一真が相川始の居る、山小屋を訪れた始「!?剣崎……お前どうして……?」

剣崎「……はあ……はあ……」

始「所詮俺達は戦う運命なのか……」

剣崎・始「変身！」

『ターンアップ!』

『チェンジ!』

ブレイド「はあ！」

カリス「ふっ!はあ!はあー!」

ブレイド「うわあ!うおー!」

カリス「ぐわあ!とおう!」

ブレイド「うわあ!はあー!」

ブレイド・カリス「はあー!」

ブレイドの武器とカリスの武器が激しく火花を散らしている

天音「やめて!二人共戦わないで!」

そこに栗原天音が静止に入った

カリス「天音ちゃん……!」

ブレイド「天音ちゃん…」

だがそこに綺羅ツバサが現れた

ツバサ「それが剥き出しの貴方の心かしら？」

天音「私が…私が始さんを追いかけたのが間違いだった」

ツバサ「チツ…だけでも遅いわ！」

ツバサはそう言い天音の体内にあるアナザーウォッチを取りだし、再度起動し、もう一度体内に埋め込んだ

天音「うう…うう…うわあー！」

『ブレイド…！』

天音は再びアナザーブレイドになってしまった

カリス「天音ちゃん！」

美晴「はあ…はあ…くそ！遅かったか！」

ブレイド「美晴君！それに君達も…！！」

アナザーブレイド「うわあ！はあ！」

ブレイド「うわあ！」

カリス「ぐわあ！」

穂乃果「美晴君！」

美晴「わかつてる」

『シャバドゥビタツチヘンシーン！』

美晴「こいつで行くか！変身！」

『インフィニティ！プリーズ！』

ヒー、スイー、フリー、ドー、ポー、ザバ、ビュー、ドゴーン！』

美晴は仮面ライダーウィザード、インフィニティストアイルになり、ブレイド達の援護をしようとしたが

デイエンド「おっと邪魔はさせないよ」

ウィザードI「海東大樹！お前が天音さんをアナザーライダーにしたのか!？」

デイエンド「ふふ、それは僕じゃないんだよねー、まあでもアナザーブレイドを守るには違くないけど！」

そう言い五枚のカードを取り出した

『カメンライダー！』

『ゼロノス!』

『マツハ!』

『アクセル!』

『バース!』

『ナイト!』

「デイエンド」どうぞ」

「デイエンドはそう言い、引き金を引くと5人の仮面ライダーが現れた

ナイト「はあ!」

マツハ「はあ!」

ウィザードI「くっ!はあ!ふっ!でやあ!」

ゼロノス「おらあ!」

アクセル「ふっ!はあ!」

バース「はあ!」

ウィザードI「ぐっ…はあ!ふっ!でりやあ!」

一方ブレイドとカリスは

ブレイド「はあ!ふっ!はあ!」

アナザーブレイド「うう…はあ!」

ブレイド「うわあ!」

カリス「天音ちゃん!やめるんだ!」

ブレイド「天音ちゃん!」

アナザーブレイド「私は…うわあ!」

アナザーブレイドはそう言い、ブレイドとカリスに光線をぶつけた

ブレイド・カリス「うわあ!」

ブレイドとカリスは崖から落ち、変身が解除された

剣崎「がは…うう…はあ…」

始「ぐわあ…はあ…」

ウィザードI「剣崎さん!始さん!」

アナザーブレイド「うう…はあ!」

アナザーブレイドがエネルギーを放射すると剣崎一真と相川始のアンデットの血がどんどん人間の血に戻っていく

ウイザードI「!?させるか!」

『ハイハイハイハイハイタッチ!』

『プラズマシャイニングストライク!』

ウイザードI「はあ!」

ウイザードはでかくなったアックスセイバーをブーメランのように投げ、アナザーブレイドに当てた

アナザーブレイド「うわあ!」

コロコロ

するとアナザーブレイドからブレイドウオッチが落ちる

だがそれに一同、いや、海末と剣崎以外は気づいていない

ウイザードI「うわあ!はあ!ふっ!うわあ!」

海末「……………」

海末はウイザードがやられてるのを見て、ブレイドウオッチの所に歩み始めた

海末はウオッチを拾いあげようとしたが

剣崎「待つてくれ…はあ…はあ…それは危険すぎる……」

剣崎一真が止めていた

海末「ですがあのままだと美晴が……」

剣崎「だからってそれに手を出していい理由にはならない……」

海末「……私はまだ恩返しが出来ていないんですよ」

海末はアナザライダーとディエンドが召喚したライダーとディエンドと戦っているウイザードを見ながらそう言った

剣崎「え?」

海末「私が危ない時にはいつも美晴が助けてくれました…だけど美晴が危ない時はあ!いつも私は助けれてません…それにアナザライダーの存在を知った今、私は恩返し出来るのはここしかないと思いました」

剣崎「……………」

海末「それに…それにアナザーブレイドがあなた達の力を吸収したと言う事はブレイドの歴史は消えたということ……ですから私があるあなた達の歴史を紡ぎます!」

剣崎「…分かった…それぐらいの覚悟ができてるのなら止めないよ」

海末「ありがとうございます」

海末はそう言い、ブレイドウオッチを起動した

『ブレイド！』

すると海末の腰にブレイバックルが巻かれた

海末「変身！」

『ターンアップ！』

海末は仮面ライダーブレイドに変身した

穂乃果「海末ちゃん!？」

ウオズ「…祝え！2004年に生まれし仮面ライダーの力を受け継いだアイドルの姿！その名も仮面ライダーブレイド！まさに生誕の瞬間である！」

ことり「その祝い方…美晴君の魔力が復活した時の！」

ウィザードI「海末!?!お前なんで…いや、話は後だ！アナザーブレイドを頼む！」

ブレイド「はい！」

くブレイドく

ブレイド「はあ！ふっ！はあ！」

アナザーブレイド「うわあ！はあ！ふっ！はあ！」

ブレイド「うわあ！…負けません！はあ！」

アナザーブレイド「うう……はあー！」

ブレイド「うわあー！くっ…まだ…まだ！はあ！」

ブレイドは倒れても何度も立ち上がる

アナザーブレイド「はあ！ふっ！はあ！」

ブレイド「ふっ！はあ！てやあ！はあ！」

アナザーブレイド「うう……はあ！はあー！」

ブレイド「うわあ！うう……このままでは…！」

剣崎「海末ちゃん！これを！」

そう言い剣崎はカテゴリーKのカードを投げ渡した
ブレイド「このカードは?!？」

始「劍崎！お前何を!？」

劍崎「始！お前のQのカードも渡すんだ！」

始「おい！いいのか！もしあの子もあのフォームを使ったら…俺達と同じになつてしまうぞ！」

劍崎「…いや、あの子なら別の運命に行ける気がする…：：：ジョーカーにならない運命…彼女はきつと斬りひらいてくれる…別の運命を…そんな気がする！」

始「…分かった、海末ちゃん！これも使え！」

そう言い、始はカテゴリーQのカードを投げ渡した

ブレイド「ですがどうやって…?!」

劍崎「左手首についてるラウズアブゾーバーにQのカードを入れるんだ」

ブレイドは劍崎の指示通りに行った

『アブゾーブクイーン!』

劍崎「次にKのカードをスライドさせるんだ！」

『エボリユーションキング!』

瞬間、ブレイドは黄金色の鎧をまとった

ウオズ「祝いたい…：：：祝え！2019年に生まれしトランプのライダーの最終フォーム、

その名も仮面ライダーブレイドキングフォーム、まさに生誕の瞬間である」

ことり「それいつもやるの?」

ブレイドK「凄い…力がみなぎってくる！」

ウィザードI「凄い…！」

ブレイドK「参ります!はあ！」

アナザーブレイド「うわあ!うう…、はあ！」

ブレイドK「ふっ!はあ!はあ…！」

アナザーブレイド「うわあ…！」

ブレイドはアナザーブレイドが怯んだ瞬間に五枚のカードを取り出し、重醒剣キングラウザーに収納した

ウィザードI「ファイナーレだ！」

『ハイタッチー！シャイニングー！ストライク！』

ウィザードI「はぁー！でやぁー！ー！」

ウィザードはでかくなったアックスセイバーを振り回し、召喚されたライダーを叩き潰した

『スピード10！スピードJ！スピードQ！スピードK！スピードA！』

『ロイヤルストレートフラッシュ！』

ブレイドK「はぁー！ー！」

アナザーブレイド「うわぁー！ー！ー！」

アナザーブレイドは爆散し、カリスのライドウオッチが転がり落ちる

始「天音ちゃん！」

始はすぐさま天音の元に駆けつけた

天音「始さん…ごめんなさい…私…」

始「大丈夫…これからは俺と一緒にいる」

天音「始さん…！」

海末「……………」

海末は、黙りながら変身を解除し、ブレイドのウオッチとカリスのウオッチを持ち、剣崎を歩み寄った

海末「剣崎さん、これはあなた達の力です、お返しします」

剣崎「…君が持っていてくれ、俺たちの力が移ったのなら、ジョーカーの力も封印できたのかもな…それに君には死んでほしくない人がいるんだろ？」

剣崎はそう言いながら、美晴を見つめた

剣崎「……俺もようやく未来に進める…始達も…！」

海末「はい！ありがとうございます！」

そう言い、海末は美晴たちの元に行き、帰路をたどったのでした
余談だが社会科見学できたのを忘れていた為、クラスメートや担任に心配されたが怪物に襲われたのを正義の仮面ライダー二人が救ってくれたと言った

ウオズ「こうして、sのメンバー園田海末は仮面ライダーブレイ

ドの力を継承した、さて次は一体どのレジエンドが待っているのか……」

果実のなっている森に一人の鎧武者が戦っていた

「ここからは俺のステージだ！」

『ソイヤ！』

次回仮面ライダーウィザード

「すっかり元に戻ったのね」

「あっごめん！大丈夫か？」

「俺の名は…駆紋戒斗」

次回第41話フルーツ鎧武者

劇場版 平成ライダー対昭和ライダー!ライダー大戦

（街中）

ドゴオン!

仮面ライダーカブトである絢瀬絵里が火球に包まれながら、ビルに衝突した

カブト「ふう…キャストオフ!」

『キャストオフ!』

『チェンジ!ビートル!』

絵里はマスクドフォームからライダーフォームになり、下に降りたストロンガー「はあ!とお!はあ!」

カブト「ふっ!はあ!やあ!」

ストロンガー「ふっ!とお!」

カブト「うっ…クロックアップ!」

『クロックアップ!』

絵里はベルトのサイドボタンを押した

ストロンガー「とお!とお!電パンチ!」

カブト「ふっ!」

ストロンガー「おわあ!うう…」

絵里はクロックアップして、ストロンガーの攻撃をかわし、攻撃した

カブト「はあ!ふっ!はあ!」

ストロンガー「うわあ!ぐわあ!」

カブト「はあ!やあ!」

ストロンガー「うわあ!…エレクトロファイヤー!」

ストロンガーは地面に電撃を流し、絵里にダメージをあたえた

カブト「うわあ!」

ストロンガー「とお!」

絵里が怯んだすきにストロンガーは高くジャンプした

『1、2、3!』

ストロンガー「ストロンガー電キック!」

カブト「クロックアップ!」

『クロックアップ!』

『ライダーキック!』

カブト「はあ!」

ストロンガー「うわあー!」

絵里はストロンガーのキックが当たるギリギリの所でクロックアップを使い、カウンターキックをした

ストロンガーは爆散し、ライドウオッチとなり、じめんに吸い込まれた

カブト「ふうく…うつ!?!」

絵里が安心してしていると空から攻撃された

カブト「あれは確か…スカイライダーだったかしら…」

スカイライダー「はあ!ふっ!はあ!」

カブト「うつ!うわあ!」

攻撃するもスカイライダーは空が飛べる為簡単に避けられる

スカイライダー「スカイフライングソーサー!」

スカイライダーが空中で前方宙返りして、絵里に向かってキックした

カブト「うわあー!」

絵里はクロックアップが間に合わず爆散し、ライドウオッチとなり、じめんに吸い込まれた

すると空からロケットステイツの仮面ライダーフォーゼこと松浦果南がやってきた

フォーゼ「絵里さんの仇!はあ!ふっ!はあ!」

スカイライダー「ぐっ…うつわあ!」

フォーゼはスカイライダーの先を行くように体当たりをしまくっている

フォーゼ「チャンス!はあー!」

スカイライダー「うわあー!」

体当たりをした影響かスカイライダーが怯んだ

その隙にフォーゼはマンションをぐるつと一週し、スカイライダーを地面にたたき落とした

スカイライダーは爆散し、ライドウオッチとなり、地面に吸い込まれた

フォーゼ「やった…つてうわあ!？」

またまた安心してしていると隣から仮面ライダーJがフォーゼを殴るがフォーゼはギリギリかわした

フォーゼ「巨人!?!…まあいいわ、仮面ライダーフォーゼ! タイマンはらしてもらおうわ!」

そして、近くの屋上にて

千歌「果南ちゃん!」

『リミットブレイク!』

フォーゼ「はぁー!」

J「ふん!」

フォーゼはJに向かってキックをしたがJにパワー負けして、爆散し、ライドウオッチとなり、地面に吸い込まれた

千歌「…昭和ライダーがこれ以上皆を倒すなら…やるしかない! 変身!」

『スイカ!』

『ロックオン!』

『ソイヤ! スイカアームズ!』

『大玉! ビックバン!』

千歌はスイカロックシードを使い、仮面ライダー鎧武スイカアームズになった

そもそも何故こんなことになったのか…

それは氷海美晴が謎の事件を調査している時だった

美晴「こんな所に本当に手がかりあるのかよ…:…ん?」

美晴は一人で地下に来ているのだが、その近には一人の少年がいた

美晴「君、どうしてここに?」

「分からない」

美晴「いや、分からないってお前なあ……？足音？」
コツ、コツ、コツ

美晴の上にあるパイプで出来てる通路から足音がし、一人の男がそこにいた

美晴「あんた誰だ？」

猛「俺は本郷猛、貴様仮面ライダージオウだな？」

美晴「だったら何だ！」

猛「お前なようなひよっこをライダーとしてはみとめる訳にはいかん！」

美晴「はあ？」

次の瞬間、美晴の周りに怪人が現れた

猛「はあ！ライダー……変身！とお！」

本郷よ腰にベルトが現れ、本郷は仮面ライダー1号に変身した

1号「とお！はあ！」

1号は美晴の周りに現れたバタンの戦闘員とたたかい始める

美晴「今のうちに……僕こつち！」

美晴は少年を連れ、地下を脱出した

く街中く

美晴「君、名前は？」

シユウ「僕の名前はシユウ」

美晴「シユウか、俺は氷海美晴、よろしくな」

地下から脱出し、街中に来た美晴とシユウは互いに自己紹介をしていた……が

「きゃー……！」

悲鳴がし、そちらを向くとショッカーを引き連れてるおとこが美晴の方に歩み寄ってくる

「貴様シユウをこちらに渡せ……」

美晴「!?あんた何もんだ、物騒な奴らも連れて……！」

「お前に応える義理はない」

男はそう言い、ジクウドライダーとライドウォッチを取りだした
美晴「ジクウドライダー!?それにウォッチ!？」

『オーガ!』

男はベルトを巻き、ウオッチを起動した
「変身!」

男はベルトを傾け、回転させた

『ライダータイムー!』

『仮く面くライダーくオーガく!』

男は仮面ライダーオーガに変身した

美晴「そっちがその気なら! シュウ離れてろ!」

美晴はシュウにさういうとシュウは頷き、近くの物陰に隠れた

『ジオウ!』

美晴はベルトを巻き、ウオッチを起動した

美晴「変身!」

『ライダータイムー!』

『仮面ライダージオウ!』

美晴は仮面ライダージオウに変身した

ジオウ「行くぞ! はあー! はあ! ふっ! はあ!」

オーガ「ふん! はあ! おらあ!」

ジオウ「ぐっ! はあ! てやあ!」

オーガ「ふん! はあー!」

士「全くあいつ何やってんだ?」

渡「あのライダー見た事ない」

ウオズ「その前に我が魔王を助けよう」

士・渡「ああ!」

『ガブツ!』

『ウオズ! アクション!』

士・渡・ウオズ「変身!」

『カメンライダー! デイクライド!』

『投影! フューチャータイム!』

『スゴい! ジダイ! ミライ! 仮面ライダーウオズ! ウオズ!』

ジオウ「ふっ! …!? 皆!」

デイクライド「はあ!」

キバ「てやあ！」

ウオズ「ふっ！汚らしい手で我が魔王に触れるでない！」

オーガ「チツ！面倒だ、こいつを使ってやる」

オーガはそういうとウオツチを取り出した

『インフィニティスタイル！』

ジオウ「インフィニティ!?それはダイヤさんの！」

『アーマタイム！』

『輝け！ウィザードインフィニティ！』インフィニティー！

オーガはインフィニティアーマになつた

ジオウ「そんな！だったら俺も！」

『グランドジオウ！』

『グランドタイム！』

『クウガ!!アギト！龍騎!!ファイズ！ブレイド！』

響鬼！カブト！電王！キバ！ディケイド！

ダブル！オーズ！フォーゼ！

ウィザード！鎧武！ドライブ！

ゴースト！エグゼイド！ビルドー！』

『祝え！仮面ライダーグランドジオウ！』

ジオウは平成ライダーの集合体グランドジオウになつた

オーガI「無駄だ！ふっ！はあ！」

オーガはアックスセイバーを持って、斬りかかってきた

『鎧武！』

ジオウは鎧武の彫像を押し、大橙丸を装備した

グランドジオウ「はあ！ふっ！はあ！てやあ！」

オーガI「ふっ！はあ！ふん！」

グランドジオウ「うわあ！」

シャドームーン「ふん！はあ！」

キバ「うわあ！」

オーガI「ふん！はあ！」

『フィニッシュタイム！ウィザード！』

『シャイニングストライク！タイムーバースト！』

オーガはジオウをどかし、でかくなったアックスセイバーを振り回し、キバを叩きつぶした

キバ「ぐわああああ！」

キバは爆散した

デイケイド「渡ー！ー！」

グランドジオウ「そんな……！くっ！」

『ファイズ・ドライブ！ダブル！』

ジオウはファイズ、ドライブ、ダブルの彫像を押し、ライダーを召喚した

オーガI「無駄だとまだわからんのか！」

『キングフォーム！』

オーガはインファイニティライドウオッチを取り外し、別のウオッチを取り付けた

『アーマタイム！黄金色の鎧！ブレイドキング！』エボリューションキング！

オーガはキングアーマになった

『フィニッシュタイム！ブレイド！』

『ロイヤルストレート！タイムーバースト！』

オーガK「はあ！」

ウオズ「我が魔王！」

グランドジオウ「うわあ……!?ウオズ！」

ウオズ「ぐはあああ！」

ウオズはジオウを庇い、爆散した

グランドジオウ「くっ！……！」

オーガ「あとはお前達だ」

デイケイド「ここまでか……！」

その時だった

シュウ「やめて！」

シュウが二人の前に出た

グランドジオウ「逃げろ！」

ジオウが言うとシュウが光り始めた

「デイケイド「何!? うっ」

「ジオウとデイケイドは光に包まれた

オーガ「うっ……何!? どこ行った!」

光が無くなるとそこにはジオウとデイケイドとシユウはいなかった

美晴視点

く音ノ木坂学院・部室く

美晴「うわあ!」

士「ぐわあ!」

俺達は街中から音ノ木坂学院の部室にいた

そこには真姫を除くμ'sの皆がいた

穂乃果「どうしたの!? 二人とも上から降ってきたけど」

凛「それにその子は誰にゃん?」

μ'sの皆からの質問を全て答えた

海末「どういうことですか!? ジオウをライダーとして認めないって!」

海末が言うとおーロラの壁が現れた

士「鳴滝……」

鳴滝「デイケイド大変だ、地下帝国バダンが動き始めた」

士「バダン……ZXが戦った奴らか!」

鳴滝「それを阻止するためには平成ライダー20人の力を結集せよ!」

士「何故平成ライダーだけなんだ? 1号達は?」

鳴滝「残念だが昭和ライダーと平成ライダーは共存できない……」

美晴「は!? どういうことだ!」

俺がそう言うとお鳴滝はオーロラの壁を使い、消えた

士「なるほど……だいたいわかった」

にこ「ちよつとにこ達にも分かるように説明しなさい! そもそも昭和ライダーとか平成ライダーとかなんなのよ!」

士「平成という時代に生まれた仮面ライダーが平成ライダーと言われている、だが平成の前つまり昭和という時代にも仮面ライダーがい

た、それが昭和ライダーだ」

美晴「俺ちよつとA q o u r sのみんなにも伝えてくる」

穂乃果「お願い！」

俺はそう言い、浦の星女学院に向かった

とあるお店へ

真姫「凜の言った通りここのお店はおいしいわね」

「お嬢さん一人で来たのか？」

真姫「ええ…つてあなたは！」

敬介「西木野先生の後輩の神敬介だ、久しぶりだな」

真姫は父の後輩の敬介には小さい時に何度かお世話になっており、
今でもたまに真姫の家を訪れることが多い

敬介「大将、ごちそうさん、じゃあな真姫ちゃん」

真姫「はい、さよなら」

真姫はそう返したら敬介は店を出た
すると

「きやーーーーー！」

真姫「!？」

外から悲鳴が聞こえ、急いで店を出るとバダン兵が敬介と女子高生
を襲っていた

真姫「敬介さん！はなれてて！」

敬介「真姫ちゃん!？」

そう言い、真姫はベルトを巻いた

『St a n e b y!』

真姫「変身！」

『コンプリート!』

真姫はファイズフォンをベルトにさすと仮面ライダーファイズに
なった

そして、ファイズエツチを持ち、バダン兵とたたかい始める

ファイズ「はあ!ふっ!はあ!やあ!」

バダン兵「はあ!」

ファイズ「ふっ!やあ!」

バダン兵「くわお！」

ファイズ「はぁー！はぁー！」

ファイズはバダン兵を一掃した

すると敬介が歩み寄ってくる

ファイズ「敬介さん？」

敬介「真姫ちゃん、平成ライダーだったのか…次はおれが相手だ」

ファイズ「え？」

すると敬介の腰にはベルトが巻かれている

敬介「…Set up！」

そう叫ぶとbeltからレッドアイザーとパーフェククターを持ち、顔にはめるとXライダーに変身した

ファイズ「Xライダー!？」

Xライダー「ライドルホイップ!はぁ！」

ファイズ「うわあ!うっ！」

Xライダー「はぁー!とお！」

ファイズ「うわあ!ちよつと待て!ぐわあ!どうして敬介さんが!」

Xライダー「はぁ！」

ファイズ「ふっ!うわあ！」

Xライダー「どうした!戦わなければ死ぬぞ!それでもいいのか!」

ファイズ「うわあ!ぐわあ！」

Xライダー「ライダーステイツク!はぁ！」

ファイズ「うわあ!うっ…うう」

Xはステイツを上投げ、鉄棒のように回った

Xライダー「とお!Xキック！」

ファイズ「うわあぁあ！」

Xのキックがファイズに当たり、変身が解除される

一方美晴と士は

現在美晴と士とシユウは海辺に来ており、そこには葵椋の父親、葵蓮がいた

美晴「……お前何故バダンと手を組んだ!?連!」

連「俺は柘さえ蘇ればそれでいい!」

シュウ「でも僕を蘇させる為に母さんや他の人を巻き込まないでよ!」

連「お前が蘇れるならお母さんも喜んでくれる!わかってくれ柘!」

美晴「……土、シュウを連れて、お母さんに会わせてやってくれ」

土「……分かった、行くぞシュウ」

そう言い、土はシュウを連れて、その場を去った

『ジオウ!』『オーガ!』

連・美晴「変身!」

『仮面ライダー!ジオウ』

『仮く面くライダーくオーガく!』

美晴と連は変身した

ジオウ「…はあ!」

オーガ「ふん!はあ!ふっ!はあ!」

ジオウ「はあ!おらあ!」

オーガ「ふん!こいつで相手してやる!」

そう言い、オーガはウオツチを取り出した

『コズミックステイツ!』

『アーマタイム!宇宙を掴め!フォーゼコズミック!』コズミック

オーガはコズミックアーマになった

オーガK「ふん!はあ!ふっ!はあ!」

ジオウ「うわあ!はあ!だったらこれで!」

ジオウもウオツチを取り出した

『ジオウII!』

『ライダータイム!』

『仮面ライダー!ライダー!ジオウ、ジオウ、ジオウ!II』

ジオウはジオウIIになった

ジオウII「行くぞ!はあ!ふっ!とりやあ!」

オーガK「ふっ!はあ!はあ!はあ!はあ!」

ジオウII「……はあ！」

オーガK「くっ！……俺は20人の平成ライダー全員になれる！勿論お前にも」

そう言い、オーガは別のウォッチを取り出した

『グランドジオウ！』

『アーマタイム！』

『アルティメット！シャイニング！サバイブ！ブラスター！キング！』

アームド！ハイパー！ライナー！エンペラー！コンプリート

！

エクストリーム！プトティラ！コズミック！

インフィニティ！極！トライドロン！

無限魂！ハイパームテキ！ジーニアスー！』

オーガははグランドアーマになった

ジオウII「なっ!?くっ！」

『ライダーフィニッシュタイム！』

『トウワイズ！タイムブレイク！』

『フィニッシュタイム！』

『オールトウエンティ！タイムバースト！』

ジオウII・オーガG「はあー！！」

一方士とシュウは道中で千歌と合流し、共に行動していた

士「……!?ジエネラルシャドー!?!」

千歌「士君、私がやるから先に……」

シャドー「ふん！ぐわあ！」

ブラック「とお！はあ！」

RX「とおらあお！」

シャドー「ぐわあ！」

突然現れたブラックとRXがシャドーを倒した

士「助かったぜ、ブラック、RX」

ブラック「貴様を助けた訳では無い、次はお前を倒す！」

千歌「どうして？」

RX「許すまじ！平成ライダー！我らがここで潰す！……うわあ！」

RXがそういい、襲いかかってきたが後ろから打たれた

善子「クロのライダーといえばこのヨハネ様でしょ？」

後ろを向くとトリガーマグナムを持った、善子が居た

千歌「善子ちゃん！」

善子「善子じゃなくてヨハネ！ってこんなことしてる場合じゃなかった：2人共早く行って！ここは私が引き受けるわ」

士「頼む！行くぞ！シユウ、高海！」

シユウ・千歌「うん！」

そう言い、士達は先に行った

善子はロストドライバーを巻き、メモリを取り出す

『ジョーカー！』

善子「黒のライダー…あなた達とは近い何かを感じるわ、変身！」

『ジョーカー！』

ジョーカー「さあ、あなたの罪を数えなさい！」

善子は仮面ライダージョーカーに変身した

ジョーカー「はあ！ふっ！はあ！」

ブラック「ふん！はあ！はあー！」

ジョーカー「うわあ！うっ！はあ！とりやあ！」

RX「うっ…はあ！」

ジョーカー「うっ…はあ！」

天文台く

士「ここがお前の母さんが来ていた場所だ」

シユウ「母さんがここに、…」

シユウが天文台に行こうとしたがオーガが現れ、シユウがボタン

兵に捕まった

シユウ「うわあ！助けて！」

士「!?シユウ！」

千歌「なんで…美晴君はどうしたの!？」

オーガ「あんな奴はただの雑魚だ！お前らもこれ以上邪魔をするな

！」

士「邪魔なのはお前だ！母親の誤解を解きたいあまりに物をひつく

り返す力まで得た…願いの強さが分からないのか!? 高海お前は生き残ってる平成ライダーをかき集めに行ってくれ!

千歌「うん!」

千歌はそう返事し、その場を走って去った

『カメンライダー!』

士「変身!」

『ディケイド!』

ディケイド「…はぁー! はぁー! ふっ! やあ!」

オーガ「ふん! はぁ! おらぁ!」

ディケイド「うわぁ! うっ」

『コンプリートフォーム!』

『アーマタイム! 最強は俺だ! ディケイドコンプリート!』ファイナルカメンライダー

オーガDK「はぁ! ふっ! はぁ!」

ディケイド「何!? 俺のアーマだと!? ぐわぁ!」

オーガDK「笑わしてくれたお礼に今ここで潰してやるよ!」

『フィニッシュタイム! ディケイド』

『ファイナルアタック! タイム! バースト!』

オーガDK「はぁー!」

ディケイド「うわぁー!」

ディケイドはオーガの攻撃をくらい、爆散して、ライドウォッチとなり、地面に吸い込まれた

シュウ「そんな…!」

オーガ「行くぞシュウ」

オーガはそう言い、シュウを連れて、基地に帰った

一方善子は

ジョーカー「うわぁ! うっ…そろそろキツイわね」

ブラック「はぁー!?!」

ブラックとRXがジョーカーに追撃しようとした時二人の目のところに御札が投げられた

花丸「善子ちゃん、いつまであそんでるぞら」

ジョーカー「ずら丸！つて善子言うな！」

花丸はアイコンを取りだし、ベルトに入れた

『バッチリミナ！バッチリミナ！』

花丸「変身！」

『開眼！オレ！』

『レッツゴー！覚悟！ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

花丸は仮面ライダーゴーストに変身した

『ガンガンセイバー！』

ゴースト「いくずらよ！」

ジョーカー「はあ！ふっ！やあ!!」

ゴースト「てやあ！はあ！ずら！」

ブラック「ふっ！うわあ！」

RX「ぐわあ！…リボルケイン！」

ブラック「はあ！とお！」

RX「はあ！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

『大開眼！オレオメガブレイク！』

RX・ジョーカー「はあー！！」

ゴースト「はあー！！」

ジョーカーのキック。そしてゴーストとRXの剣のぶつかり合いが始まった

RX「ぐわああああ！」

ぶつかり合いの末、とRXが爆散し、ライドウォッチとなり、地面に吸い込まれた

ジョーカー「やったわね」

ゴースト「ズラ…!!?」

アマゾン「キィキィ！」

スーパー「スーパー！」

ジョーカー「うわあ！ちよつとずら丸！」

アマゾン「大切断！」

スーパー「スーパーキック！」

ゴースト「うわあああ！」

ゴーストがジョーカーを庇い、爆散し、ライドウオッチとなり、地面に吸い込まれた

善子「うっ……くっ！」

善子は変身を解除し、悔しみながらその場を去った

そして、生き残ってる平成ライダーを探しに行った千歌は

千歌「はあ…はあ…はあ…!？」

アギト「うわあ!うっ……」

千歌「穂乃果さん!？」

スーパー「エレキハンドー!はあー!とお!」

アギト「ぐわあ!……ふっ!」

アギトはトリニティフォームになり、フレイムセイバーとストームハルバードを両手に持った

スーパー「とお!」

アギトT「はあー!」

「うわあー!」

アギトとスーパーは相打ちとなり、爆散し、ライドウオッチとなり、地面に吸い込まれた

千歌「穂乃果さん!……!？」

空からボロボロなデンライナーがやってきた

花陽『まずいですよ!モモタロスさん!』

電王「くっそ!俺のクライマックスはまだなんだよー!」

デンライナーは操縦不可能となり中にいた電王は爆散し、ライドウオッチとなり、地面に吸い込まれた

千歌「花陽さん!」

そして、冒頭の場面に戻る

鎧武S「はあー!セイハー!」

J「ぐわあああ!」

Jは爆散し、ライドウオッチとなり、地面に吸い込まれた

千歌「はあ…はあ…」

美晴「千歌さん!」

千歌「美晴君！それに真姫さんも！」

美晴「オーガの計画をぶっ潰しに行くぞ！」

千歌・真姫「うん！」

そのまま俺達はバダンの基地へ走り向かった……が

美晴「!？」

奥から昭和ライダーの1号、2号、V3、ライダーマン、アマゾン、Xライダー、ブラックが洗われた

美晴「所詮昭和ライダーと平成ライダーは戦う定めて事か……」

ジョーカー「私達もいるわよ！」

真姫「皆！」

後ろから声がし、振り向くと

仮面ライダージョーカーこと津島善子

仮面ライダーウィザードこと黒澤ダイヤ

仮面ライダーキバこと南ことり

仮面ライダーオーズこと小原鞠莉

ウィザード「集められたのはこれが全員でしたけどね……」

千歌「ううん！十分だよ！」

美晴「あんた達！なんで邪魔をする!？」

1号「俺は言ったはずだ、お前たちは手をひけと」

美晴「仲間がやられてるのに指をくわえて見てられるかよ！」

1号「やはり話し合いは無理か……」

真姫「だったらどうするのよ！」

1号「倒すしかあるまい……」

美晴「望む所だ！昭和ライダーは俺達平成ライダーが倒す！行くぞ
！」

千歌・真姫「うん！」

『ジオウ！』

『オレンジ！』

『Staneby?』

美晴・千歌・真姫「変身！」

『仮面ライダー！ジオウ！』

『オレンジアームズ！花道オンステージ！』

『コンプリート！』

美晴達は変身した

残りのおんなも美晴たちの横に並ぶ

ウィザード「さあ、シヨータムですわ！」

それが合図のように両ライダー走り向かう

平成ライダー「はあー！ー！」

昭和ライダー「うおおおおお！」

ジオウ「はあ！」

1号「ふん！はあ！ふっ！とお！」

キバ「はあ！ふっ！とりやあ！」

V3「てやあ！はあ！とお！」

アマゾン「キイキイ！大ー切断！」

『ビック！プリーズ！』

アマゾンがウィザードを真つ二つにしようとしたがウィザードの魔法で握り潰される

『スキヤニングチャージ！』

オーズ「セイヤー！」

ライダーマン「ホッパー！」

オーズの足にホッパーをくぐり付け、地面に思いつきり落とす

オーズ「ノオオオオ！」

ブラック「とお！」

『ジョーカーマキシマムドライブ！』

ブラック・ジョーカー「はあー！ー！」

ブラックとジョーカーのキックは相打ちとなった

2号「ライダーキック！」

鎧武「うわあー！」

2号のキックに鎧武に当たる

ライダーマン「てやあ！」

キバ「はあ！」

ライダーマンはウィザードをキバはV3を攻撃して、倒した

ZX「ジオウの力を利用させてもらった、全てのライダーは時空の世界で健在だ！マイクロチェイン！」

ZXは鎖で透明のクリアケースに入れられてる全てのライドウオッチを釣り上げ、ジオウの元に渡された

ジオウ「はぁー！はぁー！」

すると金色の扉から全ライダーが出てきた

ジオウ「そうだったのか1号」

1号「うむ」

連「貴様らここで潰してやるよ！」

『オーガ！』

『ライダータイム！』

『仮々面々ライダー々オーガ々！』

ジオウ「よし！行くぞ！」

「おうー！」「うん！」

平成ライダーと昭和ライダーは一丸となり、地下帝国バダン軍に走り向かった

《クウガ&アギト&龍騎&ブレイド&ビルド&ブラック対シャドームーン》

クウガ「はぁ！ふっ！とお！」

アギト「ふっ！はぁ！」

『ソードベント！』

龍騎「はぁ！やぁ！はぁー！」

ブレイド「はぁ！ふっ！やぁ！」

ビルド「ふっ！はぁ！たぁー！」

ブラック「ふん！はぁ！」

シャドームーン「はぁ！ふっ！はぁー！」

クウガ・アギト・龍騎・ブレイド・ビルド・ブラック「うわぁ！」

シャドームーン「はぁ！」

龍騎「はぁ！にやぁ！はぁ！」

『ストライクベント！』

『スラッシュー！サンダーー！』

『ライトニングスラッシュ！』

龍騎「はぁー！ー！」

ブレイド「てやぁー！ー！」

シャドームーン「ぐわぁー……ぐっ！」

『ファイナルベント！』

『ライトニングブラスト！』

『ボルテックフィニッシュ！』

クウガ「はぁー！ー！」

アギト「やぁー！ー！」

龍騎「にやぁー！ー！」

ブレイド「はぁー！ー！ー！」

ビルド「はぁー！ー！ー！」

ブラック「おらぁ！ー！」

シャドームーン「うわぁ！ぐわぁぁぁぁ！」

《響鬼&キバ&V3&ライダーマン対牛鬼》

響鬼「はぁ！たぁ！やぁ！ー！」

キバ「はぁ！やぁ！ー！」

キバット『ことり！あいつにはこれでいけ！』

キバ「うん！来て！ー！」

『ドツカハンマー！』

キバD「はぁ！やぁ！吹っ飛べー！」

牛鬼「………！」

キバD「うわぁ！嘘!?ドツカハンマーでもパワー負けするの！」

ライダーマン「ホッパ！はぁー！ー！」

ライダーマンが自分のホッパで牛鬼の動きを止めた

ライダーマン「今のうちに！」

『ウェイクアップ！』

キバ「はぁー！ー！」

V3「V3キック！」

牛鬼「………!?!」

キバ「希ちゃん！」

ジオウ「よし!...うわあ!」

オーガ「ふん!はあ!おらあ!」

ジオウ「うわあ!うっ!」

ドライブ「美晴君!」

ジオウ「曜ちゃん...みんな...よし!行くぞ!」

平成ライダー「うん!」

ジオウ「はあ!ふっ!おらあ!」

オーガ「ふん!はあ!てやあ!」

『サイクロンジョーカーエクストリーム!』

『アーマタイム!』

『究極極限!ダブルエクストリーム!』エクストリーム!

オーガE「ふん!はあ!」

ジオウ「うわあ!うっ!」

ダブル「エクストリームなら私よ!」

『エクストリーム!』

ダブルE「はあ!やあ!はあ!」

オーガE「くっ!はあ!」

ドライブ「うわあ!」

『極アームズ!』

『アーマタイム!』

『天下無双!鎧武!極!』フルーツバスケット!

オーガ極「はあ!やあ!ふっ!おらあ!」

鎧武「ふっ!はあ!次は私が!」

『カチドキ!』『フルーツバスケット!』

『ロックオン!ソイヤ!』

『カチドキアームズ!いざ出陣!エイエイオー!』

『ロックオーブン!』

『極アームズ!大・大・大・大・大將軍!』

鎧武極「はあ!やあ!はあ!」

『バナスピアー!』『ブドウ龍砲!』

鎧武極「はあ!はあ!はあ!やあ!てやあ!」

オーガ「ぐわあ！何故だ！何故平成ライダーの最終フォームと同じ力を得たはずなのに！」

『エンペラーフォーム！』

『アーマタイム！』

『鎖を解き放て！キバエンペラー！』ウエイクアップファイバー！

ジオウ「違う！それは元々俺らの力だ！」

『変・身！』

キバE「はあ！やあ！」

オーガエンペラー「ぐわあ！くっ！小娘ごときがアアアアアア！」

『グランドジオウ！』

『アーマタイム！』

『アルティメット！シャイニング！サバイブ！ブラスター！キング！

アームド！ハイパー！ライナー！エンペラー！コンプリート

！

エクストリーム！プトティラ！コズミック！

インフィニティ！極！トライドロン！

無限魂！ハイパームテキ！ジーニアス！』

オーガG「俺は絶対にシユウを蘇れさせる！」

黒色のかかった金色の扉からライダーの最終フォームが出てきた

『祝え！仮面ライダーグランドジオウ！』

ジオウG「シユウを蘇らしたい為に他の人を巻き込むのは間違ってる！…あんたの間違いは俺たちが正す！」

『サバイブ！』『Awake n i n g！』『エボリューションキング！』

『ハイパービートル！』

『ライナーフォーム！』『ファイナルカメンライダー！ディケイド！』

『プレラ！トリケラ！ティラノ！』『コズミックON！』『インフィニ

ティ！』

『ターイプトライドロン！』『ムゲンシンカ！』『ハイパームテキ！』

『グレイト！オールイエイ！ジーニアス！』

ジオウG「平成ライダーの力を思い知れ！」

『ビルド！』『カブト！』『ファイズ！』

美晴「シユウ……最後に母さんに会ってきな」

シユウ「え？……うん！行こ！父さん！」

連「シユウ……！」

（天文台）

シユウ「お母さん！」

「シユウ……？シユウなの!？」

連「生き霊みたいな形だけどな」

「あなた……！」

シユウ「母さんごめんなさい！僕が勝手な事をやったから……」

「いいのよ……お母さんこそあんな言い方してごめんね、そのせいであなたを死なせてしまっし……」

そう言い、連とシユウの母親はシユウに抱きつく

するとシユウが光り始める

連「シユウ……お前は俺達の宝だ、だから……」

「だから最後に会えてよかったわ」

シユウ「……お母さん、お父さん、さようなら……バイバイ！仮面

ライダー！」

シユウはそう言い、光となって消えた

美晴「シユウ……生まれ変わったらまた会おうな……」

穂乃果「美晴君ー！」

美晴「今行くよ！……それまで俺達とお前の両親は待ってるぜ！」

士「いいのか？あいつらに何か言わなくて」

猛「大丈夫だ、ジオウが……氷海美晴がこれからの歴史を作ってくれるだろう」

渡「そうですね、それじゃあお元気で、」

渡がそう言うのと猛はバイクで去っていた

第41話 フルーツ鎧武者

海未が仮面ライダーとなってから5日経った

俺は今、浦の星女学院の屋上でAqoursの練習を見ている

　　浦の星女学院・屋上

美晴「1、2、3、4…OK！今日はここまでしつかりとストレッチしてくれ」

Aqours『はい！』

それぞれAqoursは二人一組になり、ストレッチを始めた

曜「ねえねえ今日はこのまま帰っちゃうの？」

美晴「いや、今日は千歌さんの家にお邪魔させてもらうからね」

曜「珍しいね、内浦に一日中いるなんて」

美晴「どつかのラブアロシユーターにそう言われたからな」

曜「あはは…」

でも実際はすごく安心している

海未が仮面ライダーになったことで士と渡さんだけに負担がかからなくなった

　　けど少し不安なところもある

仮面ライダーになったとはいえ、海未はスクールアイドルだから、それが1番の不安だ

　　帰り道

『ガルーダ・ユニコーン・クラーケン・プリーズ！』

美晴「ファントムがいるか見回りしてきてくれ」

ガルーダ「ピイ！」

俺がそう言うのとガルーダが返事をし、見回りに行った

果南「本当に元に戻ったんだね」

美晴「まあね」

まあドラゴンも最近は調子がいいからな

美晴「？ねえあれ何？」

俺が目をとめたのは音楽に合わせて踊ってる男たちだった

ルビィ「あ、あれは内浦のダンスグループ『チームバロン』です」

美晴「チームバロン？」

鞠莉「YES！他にも『チーム鎧武』っていうグループがイマース
チーム鎧武：鎧武？それって確か：

俺は気になり、ポツケから鎧武ウォッチを取りだそうとしたがな
かった

美晴「あれ？」

千歌「どうしたの？」

美晴「え？なんでもないよ」

果南「じゃあ私と鞠莉はこっちだから」

鞠莉「see you！」

そう言い、二人は港に向かった

花丸「丸もこっちなので」

ダイヤ「私達もこっちなので」

ルビィ「さようなら」

千歌「ばいばーい！」

ダイヤさんも花丸さんもルビィさんも自分達の帰路を辿ってた

美晴「内浦もいいねえ」

梨子「どうしたの？急に」

美晴「いや、ずっと東京にいるからこういう自然でのどかな場所も
悪くないなって思ってたな」

千歌「じゃあ引越す？」

美晴「それをすると花陽と海未になに言われるかわかんないから
いよ」

こうして話しているとバス停に着いた

曜「わたしと善子ちゃんはこっちだから」

善子「ヨハネ！さらばだリトルデーモン達よ！」

そう言って、バスに乗り、発車した

美晴「それでなあ…イテッ！」

話しながら歩いていると上からみかんが降ってきた

美晴「みかん？」

上を見上げると男の人がいた

「悪い、兄ちゃん大丈夫か？」

美晴 「いえいえ大丈夫です」

「良かったらみかんいる？」

千歌 「いるー！」

男の人からみかんを貰う千歌さん

その時

「ぎゃー……！」

美晴 「!?」

悲鳴を聞くと俺を含めた3人が走り出した

『鎧武……!』

広場でアナザーライダーが暴れていた

美晴 「なんでここにアナザーライダーが！」

2人とも隠れてて」

そう言いながら、ウィザードドライバを召喚した

『シャバドウビタッチヘンシーン!』

美晴 「変身！」

『フレイム・プリーズ!』

『ヒーヒー……ヒーヒー……!』

左から現れた魔法陣を通って、ウィザードに変身した

ウィザード 「さあ、ショータイムだ！」

ウィザードソードガンを手にして、アナザー鎧武に向かった

ウィザード 「はあ!ふっ!はあ!」

アナザー鎧武 「うう……うお!はあ!」

ウィザード 「うわあ!」

ウィザードはアナザー鎧武の大剣に吹き飛ばされた

ウィザード 「パワーでは圧倒的に負けるか……なら!」

『ランドー・ドラゴン!』

『ダン、デン、ドン、ズッドッゴン! ダン、デン、ドッゴン!』

ウィザードLD 「はあー!はあー!」

アナザー鎧武 「うおら!」

ウィザードLD 「うわあ!これで!……どうだ!」

『グラビティー！プリーズ！』

アナザー鎧武の頭上に黄色の魔法陣が現れ、アナザー鎧武を押し倒す

『カモン・スラッシュ・シェイクハンド！』

『ランド！スラッシュユストライク！』

ウィザードLD「はあ！」

ウィザードソードガンの刃先に土のエネルギーが溜まり、アナザー鎧武めがけて放つ……………

が

アナザー鎧武「うう……………」

ウィザードLD「何!?!」

アナザー鎧武はウィザードの攻撃を大剣で防いだ

アナザー鎧武「はあ！」

ウィザードLD「ぐわあ！」

ウィザードはアナザー鎧武の大剣に吹き飛ばされ、変身が解除された

美晴「くっ…どうすれば」

千歌「美晴君！大丈夫？」

美晴「千歌さん!?!来ちゃダメだ！」

アナザー鎧武「はあ！」

アナザー鎧武が手を下げると美晴と千歌の後ろにクラックが開いた

美晴「チャック?…うわあ！」

千歌「きやつ!?!」

クラックの事に気を取られていると美晴と千歌はアナザー鎧武に押されて中に入ってしまった

くへルヘイムの森く

美晴「ここは？」

千歌「森？」

美晴「なんだこれ？果実？」

千歌「美味しそう！食べてみようかな？」

美晴「やめといた方がいいよ」

千歌「一口だけなら……！」

その時、トランプが飛んできた

「その果实を口にするな、インベスになるぞ」

美晴「誰だ！」

戒斗「俺の名前は……駆紋戒斗だ」

次回仮面ライダーウィザード

「ここはあの化け物が作った世界だ」

「私にはなんにも出来ない……」

「千歌には千歌にしかできないことがあるよ」

「俺ごと斬れ！」

次回第42話 新オレンジ鎧武者見参

『わたしにできること……それは！』

第42話 新たな將軍

くヘルヘイムの森く

美晴「インベス？」

戒斗「その果実を口にした物は皆、怪物になる…あんな奴らにな」
戒斗さんがそう言うのと森の奥からドラゴンの怪物がでてきた

千歌「あれがインベス？」

戒斗「奴らの攻撃を食らうな、ヘルヘイムの芽が傷口から出てくるぞ」

そう言うのと戒斗さんはドライバーを腰に着け、錠前を取りだした

戒斗「離れてろ、変身！」

『バナナ！』

錠前をドライバーに取り付けた

『ロックオン！』

そして、ドライバーについてる小刀で錠前を切った

『カモン！バナナアームズ！ナイツ・オブ・スパアー！』

上からバナナが降ってきて、頭に被ると仮面ライダーに変身した

美晴・千歌「バナナ!？」

バロン「バロンだ！」

そう言い、バロンはバナスピアーを取りだし、ドラゴンインベスと

戦い始めた

く第三者視点く

バロン「はあ！ふん！ふっ！」

ドラゴンインベス「はあ！」

バロン「ふっ！ぐわあ！」

ドラゴンインベス「はあー！」

バロン「ふっ！確か貴様パワータイプだったな」

そう言い、バロンは別の錠前を取りだした

『マンゴー！』

ベルトに着けていたバナナロックシールドを取り外し、マンゴーロックシールドを取り付けた

『ロックオン!』

『カモン! マンゴーアームズ! ファイト・オブ・ハンマー!』

バロンはマンゴーアームズになった

バロンM 「はあ! ふん! ふん! ふつ! はあ!」

ドラゴンインベス 「ぐわあ! ぬわあ!」

バロンM 「トドメだ」

『マンゴースカッシュ!』

ベルトの小刀でロックシードを1回切るとマンゴパニツシャーにエネルギーが溜まる

バロンM 「はあー! はあ!」

ドラゴンインベス 「ぐわああああ!」

バロンがマンゴパニツシャーでドラゴンインベスを殴った

ドラゴンインベスを倒した後、ベルトにあるロックシードを畳んで取り外した

戒斗 「貴様もその実を食べていたら、俺に倒されていたぞ
実を食べようとした千歌さんに言った

千歌 「ご、ごめんなさい」

美晴 「戒斗さん、ここは一体どこなんだ?」

戒斗 「ここは大剣を持った怪物が作り出した世界…ネオ・ヘルヘイム」

千歌 「ネオ・ヘルヘイム?」

美晴 「ここから抜け出す方法はあるんですか?」

戒斗 「あるにはある…; クラックで入ってきた者が現れるとどこかに出口のクラックが開く」

千歌 「じゃあそのクラックっていうのを探せば帰れるんだね!」

美晴 「問題はどこにあるかだ」

戒斗 「安心しろ、目星ならついてる」

ついて行いと戒斗さんが言ったので俺と千歌さんはあとをついてった

く道中く

千歌 「ねえ、美晴君、私ってさ足でまといじゃない?」

美晴「え？どうしたの？急に」

千歌「美晴君や戒斗さんは仮面ライダーとして戦ってるのに私は2人に守られながら進んでるだけなんて…だったら私がここに残れば…！」

千歌さんが続きを言う前に俺が人差し指で押さえた

美晴「そういうことは言っちゃダメだ、千歌さんには大切な仲間が待ってるんだから

大人しく守られてな」

千歌「うん…」

渋々うなづいてくれた

その時、俺は気が付かなかった

千歌さんがロックシードと戦国ドライバーを持っている事に
くクラック前へ

戒斗「あそこだ」

美晴「つて遠！」

戒斗さんが指さした所は崖の向こうだった

戒斗「バイクを使えば問題ない」

そう言い、ロックシードを投げて、バイクを出した

美晴「そういうことなら」

『コネクト・プリーズ！』

後ろに魔法陣が現れ、手を入れてバイクを引きずり出したら

美晴「千歌さん乗って」

千歌「う、うん」

千歌さんが俺の後ろに跨る

戒斗「行くぞ！」

そう言い、ふたつのバイクがクラックに衝突する

く現実世界へ

梨子視点

あの後、警察の人が来て、美晴君と千歌ちゃんを探したけど見つからなかった

梨子「千歌ちゃんと美晴君どこ行っただら…」

果南「まさかそんなことがあったなんて…」

私は次の日に部屋で皆に事情を話した

鞠莉「そういえば梨子、美晴と千歌つちをどこかに閉じ込めたって言う化け物はどんな見た目だった？」

梨子「え？えつと確か…？侍みたいに鎧を着てて…あつ！オレンジを模した大剣を持ってたよ」

A q o u r s 「オレンジを模した大剣？」

ダイヤ「土さん達に連した方がいいんじゃないですか？」

果南「そうだね、私渡君に電話してくるよ」

鞠莉「あら〜果南つたらいつの間にも、sのマネージャーとそういう関係にいく？」

果南「なっ!?そんな訳ないじゃん！／／／／／」

顔を真っ赤にしながら、電話しに行った果南さん

梨子「思い出した！その怪人の鎧には確かG A I M E っって書いてあった！」

A q o u r s 「鎧武？」

ルビィ「鎧武ってあの『チーム鎧武』ですか？」

梨子「分からない、でもそう書いてあったよ」

電話をしに行った果南さんが戻ってきた

果南「ダメみたい、向こうでもなんか起きてるみたい…」

ウオズ「では私が話しましょう」

A q o u r s 「!?誰!？」

ウオズ「私の名はウオズ、しがない預言者だ」

ダイヤ「よ、預言者ですの？」

ウオズ「そんなことより、桜内君が見たのは『アナザーライダー』だ」

梨子「アナザーライダー？」

ウオズ「アナザーライダーとは見出した人間をもとに勝手に創り出した仮面ライダーのこと。アナザーライダーが誕生した瞬間、その時代に活躍する正規のライダーは消滅、アナザーライダーにとって代わられてしまい、歴史そのものが変化してしまうのだ」

曜「じゃあ『G A I M E』って文字は…」

ウオズ「本来の仮面ライダー、仮面ライダー鎧武の事だ」

ウオズさんが解説していると外が騒がしくなった

善子「外がうるさいわね」

花丸「見に行くズラ」

全員外に向かった

浦の星女学院・校庭へ

アナザー鎧武「うおー！はあ！」

校庭に行くとそこではアナザー鎧武が暴れていた

果南「あれがアナザーライダー…」

鞠莉「もう、どうするのよ！」

ウオズ「ここは私が」

そう言いながら、ウオズさんが前に出た

曜「ウオズさん？」

ウオズさんの手には緑色のドライバーが

『ビョンドライバー！』

腰に巻くとデバイスを取り出した

『ウオズ！』

デバイスを起動して、ベルトの右側につけた

『アクション！』

ウオズさんの後ろから緑色のレーザービームが出てきた

ウオズ「変身」

ベルトの右側を曲げた

『投影！フューチャータイム！』

『スゴい！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

ウオズさんは仮面ライダーになった

A q o u r s 『え？』

ウオズ「祝え！過去と未来を読み解き、正しき道を記す預言者！

その名も仮面ライダーウオズ、新たな歴史の1ページだ！」

ダイヤ「ウオズさんが仮面ライダーですよ!？」

『ジカンデススピアー！』

『ヤリスギ！』

ウオズさんは武器を構えた

ウオズ「はあ！ふっ！はあ！」

アナザー鎧武「はあ！うおー！はあ！」

ウオズ「ふっ！はあ！」

アナザー鎧武「ふっ！はあー！」

アナザー鎧武が大剣を上にとやるとチャックのようなものが開き、そこから怪人が現れた

ルビィ「うゆ!?かかかかか怪人が出てきた…」

ウオズ「うーん、大人数でやるのは好きじゃないんだ」

ウオズさんは武器についてあるボタンを押して、スライドさせた

『フィニッシュタイム！』

『爆裂DEランス！』

ウオズ「はあー！」

槍にエネルギーが溜まり、周りの怪人を一掃する

ウオズ「よし…あとは主役に任せよう」

そう言うともまたチャックが開き、バイクが2台出てくる

美晴視点

美晴「はあ！」

戒斗「ふっ！」

アナザー鎧武「うわあ！」

クラックを強行で抜け出し、出たのは浦の星の校庭、そこにはA9
Oursメンバーとアナザーライダー、そしてウオズがいた

千歌「もうー、強引すぎない？」

美晴「仕方ないでしょ？」

梨子・曜「美晴君！千歌ちゃん！」

戒斗「・貴様、あの時の借りを返してやる！」

戒斗さんはバナナロックシードを取り出したが歴史の影響のせいで粒子となって消えた

戒斗「チッ！やはりダメか、氷海ここは任せたぞ！」

美晴「はい！」

『ドライバーオン！プリーズ！』

『シャバドウビタッチヘンシーン!』

美晴「変身!」

『フレイム!プリーズ!』

『ヒーヒー!ヒーヒーヒー!』

ウイザード「さあ、ショータイムだ!」

ウイザードはウイザードソードガンを手にして、アナザー鎧武に走
てった

ウイザード「はあ!ふっ!はあ!とりやあ!」

アナザー鎧武「ふん!ふっ!はあ!」

ウイザード「グッ!はあ!」

アナザー鎧武「ふん!」

ウイザード「ぐわあ!やっぱりダメか」

千歌「み、美晴君!」

ウイザード「千歌さん!?早く離れろ!」

千歌「……!」

千歌さんは意を決したような顔で戦国ドライバーを腰に巻いた
ウイザード「そのドライバー…まさか!」

千歌「…変身!」

『オレンジ!』

『ロックオン!』

『ソイヤ!』

オレンジアームズ!花道オンステージ!』

千歌さんは仮面ライダー鎧武に変身した

鎧武「はあ!やあ!」

アナザー鎧武「うう!はあ!」

鎧武「ふっ!はあ!やっ!たあ!」

アナザー鎧武「うう!グッ!うおー!」

鎧武はカッティングブレードをスライドさせた

『オレンジスカッシュ!』

鎧武「はあああー!」

アナザー鎧武「うわあ!」

鎧武のライダーキックがアナザー鎧武にあたり、煙に包まれた
アナザーライダーは正規の仮面ライダーに倒されると生滅する
……が

アナザー鎧武「うう…」

鎧武「そんな！」

アナザー鎧武「はあ！」

千歌「キャツ!？」

アナザー鎧武の攻撃で変身が解けてしまった

『シールド・プリーズ!』

だが千歌と戒斗を守るような水色のドーム状のシールドが現れた

千歌「美晴君！」

ウイザード「お説教は後だ！まずはそこで大人しくしている！」

そう言い、ウイザードはインフィニティリングを取り出した

『インフィニティ！プリーズ!』

『ヒースイフードー』

ボーザバアビュードゴーン!』

ウイザードI「はあ！ふっ！はあ！」

アナザー鎧武「ウオ！はあ！ふん！」

ウイザードI「ふっ！はあ！でえりやあ！」

千歌視点

戒斗「高海と言ってな、貴様何故鎧武に変身できた？」

千歌「え?」

戒斗「元々それはあるひとりの男のロックシードだ、貴様が扱える
はずがない」

確かになんでだろう

千歌「でもあの怪人は倒せなかった」

戒斗「当たり前だ、貴様まだ本当の力という者に気づいていないか
らな」

千歌「本当の力…?」

戒斗「とある男から教えもらった、本当のとはテキを凌駕する力で
はなかった

本当の力は守りたい物を守る力だった、貴様にはあるのか？守りたい物が」

千歌「私の守りたい物…」

戒斗「氷海美晴という男が何故あそこまで戦えるか分かるか？」

千歌「え？」

戒斗「あの男は言っていた『大切な仲間を守る、その為に俺は戦う』と」

守りたい仲間…私にも

ウィザードI「うわあ！」

美晴君が倒れたと同時に魔法が切れて、シールドが消えた

千歌「私の守りたい物…それは私の事を支えてくれる、背中を押してくれる仲間を守るために私は戦う！美晴君が戦うように私も A
ours を、s を世界のみんなを守りたい！」

その声と共に私の手には鍵のようなロックシードとオレンジ色の
ロックシードが握られていた

千歌「美晴君！後は任せて」

『カチドキ！』

『ロックオン！』

『カチドキアームズ！いざ出陣！エイエイオー！』

『フルーツバスケット！』

『ロックオープン！』

『極アームズ！大・大・大・大・大將軍！』

私は仮面ライダー鎧武極アームズに変身した

『バナスピアー！』

フルーツバスケットロックシードを捻らせるとバナスピアーがで
てきた

鎧武極「はあ！ふっ！やあ！」

アナザー鎧武「うわあ！ぐわあ」

『イチゴクナイ！』

鎧武極「はあ！ふっ！はあ！」

アナザー鎧武「うう！」

『クルミボンバー!』

『マンゴパニツシャー!』

『パインアイアン!』

鎧武極「はぁー!」

アナザー鎧武「グツ! うわあ! ぐわああ!」

『無双セイバー!』

『火縄大橙DJ銃!』

無双セイバーと火縄大橙DJ銃を連結させて、剣モードにした

ロードバロン「行け! 高海! 俺ごと斬れ!」

戒斗さんが押さえてくれた

だがその戒斗さんはインバスになっていた

鎧武極「はぁー!」

アナザー鎧武「ぬわあああ!」

ロードバロン「ぐわあああ!」

2人の叫びが聞こえ、爆散した

美晴視点

全ての点と点が繋がった

鎧武ウオッチが無かったのはウオッチが千歌さんを選んで知らぬ

間に彼女を鎧武の適合者にしたんだ

美晴「千歌さん!」

千歌「美晴君ごめんね」

美晴「いいんだ、鎧武の歴史を千歌さんに…いや、“千歌”に任せた」

千歌「／／／／う、うん任せて!」

美晴「?」

なんか顔が紅いのが大丈夫だろうか?

曜「私なんてちゃん呼びなのになんで千歌ちゃんと梨子ちゃんだけ」

けー

と曜ちゃんが言っていた

ウオズ「こうしてA q o u r sのリーダー、高海千歌は仮面ライ

ダー鎧武の力を受け継いだ

さあ、次はどんなレジェンドと出会えるのか」

透明な喋が飛んでいるところに発光していて携帯で戦う仮面ライダーがいた

次回仮面ライダーウィザード

「美晴が居ない間頑張るぞ」

「何よ！あの怪人」

「真姫さん！」

「久しぶりだな」

次回第43話 913

第43話 913

く屋上く

《渡視点》

美晴君がしばらくの間裏の星女学院の方に行き、音ノ木坂にはしばらく戻ってこないようだ

渡「少し休憩にしましょう」

穂乃果「ううく…疲れた…」

そう言いながら、地面に寝そべる穂乃果さん

海未「穂乃果！だらけすぎです！」

絵里「いいじゃない、休憩中なんだし」

海未「いくら休憩中だからと言って、地面に寝そべるのは行儀が悪いです！」

士「まあまあ落ち着け」

真姫「全くうるさい人達」

僕はこの状況に苦笑しながら、時計を見た

渡「よし、皆さん練習を再開しましょう！」

僕の声に応じて、皆さんは練習を再開した

く30分後く

士「今日はここまでにしよう、解散！」

穂乃果「よし、みんな一緒に帰ろ！」

練習が終わると穂乃果さんの提案で全員で帰ることになった

花陽「いつになったら帰ってくるんだろ…」

絵里「仕方ないわよ、A q o u r sには守ってくれる仮面ライダーが居ないんだから」

海未「そうですよ、我儘言っても仕方ありません」

ことり「とか言ってるけど海未ちゃんが1番会いたいんだよね？」

海未「なっ!?そんな訳ありません!／／」

おおく!これはニヤニヤものだねえ

その時、男の人の肩が真姫さんの肩にぶつかった

真姫「あつすいません…」

「西木野…真姫だな？」

真姫「え？…はい」

「そうか…なら」

男の人は紫暗い時計を手にした

「消えてもらう」

男の人は時計を起動して、自分の体内に入れた

黒いモヤが男の人の周りを覆う

モヤが消えるとそこに居たのは

『ファイズ…！』

士「ファイズ…？」

仮面ライダーファイズの見た目をした怪人がいた

穂乃果「海未ちゃんこれって！」

海未「アナザーライダー…！」

ことり「まだ居たの!？」

渡「アナザー…ライダー？」

士「詳しくはこいつを倒してから聞くとしよう」

絵里「そうね」

そう言いながら、士さんがベルトを、絵里さんがカブトゼクターを手に持つと

海未「待ってください！」

海未さんが前に出てきた

士「園田!？」

絵里「海未どきなさい！」

海未「このアナザーライダーは私が相手をします」

そう言つて、ベルトを腰にまく

渡「そのベルトは…！」

士「ブレイバツクル!？」

待機音が鳴ると海未さんは変身ポーズをとった

海未「変身！」

『ターンアップ！』

海未さんの前に水色の壁が現れ、海未さんが走ってくぐり抜けると

仮面ライダーブレイドに変身していた

士「ええー!?!」

穂乃果「海未ちゃんファイトだよ!」

ブレイド「参ります!」

〜第三者視点〜

ブレイド「はあ!ふっ!やあ!」

アナザーファイズ「うらア!はあ!はあ!」

ブレイド「ふっ!このカードで!」

ブレイドはブレイラウザーに2枚のカードを読み込んだ

『スラッシュュー!サンダー!』

『ライトニングスラッシュュー!』

ブレイラウザーは電気を纏い、アナザーファイズに攻撃する

ブレイド「はあ!」

アナザーファイズ「うう…はあ!」

真姫「え?キャ!」

渡「真姫さん!」

アナザーファイズはブレイドの攻撃を受けたあとよろめいたが倒

れず、真姫を攫ってた

ブレイド「待ちなさい!」

「はあ!」

ブレイド「!?!」

ブレイドがアナザーファイズを追おうとしたら、横から蹴りが飛ん

できた

ブレイド「あなたは…!」

「久しぶりだな、皆」

凜「パラド君!」

そこにいたのは如月蒼一に消されたパラドがいた

士「なんで…なんでお前が生きてる!美晴が言うにはお前は死んだ

んじゃ…」

μ s『え?死んだ?』

士の衝撃のカミングアウトにμ sは驚いた

パラド「そんなことはどうでもいいんだよ、俺とゲームをしようぜ」
そう言いながら、腰にゲームードライバーを巻く

パラド「美晴よりかは遊び相手にはなるよな？」

パラドはギアデュアルを手に持った

パラド「心が踊る…」

『デュアルガシヤット！』

The strongest fist! What's the
next stage?』

ゲームードライバーにギアデュアルを差し込んだ

パラド『MAX大変身！』

そう言っつて、パラドはゲームードライバーのレバー横にした

『ガツチャン！マザルアップ！』

『赤い拳強さ！青いパズル連鎖！赤と青の交差！パーフェクトノック
アーウト！』

希「何…？その姿」

いつものパラドクスとは違う見た目をしていた

パラドクス「パーフェクトパズルとノックアウトファイター…」

レベル50ファイターのふたつのゲームが融合し、ひとつになった…その名
も」

『パーフェクトノックアウト！』

パラドクス「仮面ライダーパラドクスLv 999！」
ナインティナイン

花陽「ナインティナインってことは…999!？」

『カメンライドー！』

『ガブツ！』

渡「皆さん少し離れてください」

絵里「ここは私達4人で」

『変身！』

『ディケイド！』

『バッシヤーマグナム！』

『チェンジビートル！』

ディケイド「はあ！ふっ！オラア！」

パラドクス「ははは！はあ！オラア！」

カブト「はあ！やあ！」

パラドクス「無駄無駄！」

カブトの攻撃をパラドクスはパズルのピースの壁を出し、防いだ

キバB「はあ！はあ！」

パラドクス「よつと！遠距離攻撃なら！」

『ガシヤコンパラブレイガン！』

『ズツガンー！』

パラドクス「はあ！はあ！」

キバB「うっ！」

『1！2！3！』

パラドクスはパラブレイガンのBボタンを3回押した

パラドクス「ほらよ！」

キバB「うっ！うわあ！ぐわあ！」

『3連鎖ー！』

1発の弾しか当たっていないのに3発分のダメージをキバは受けた

パラドクス「おいおい…もう終わりかよ…！」

パラドクスはゲーマードライバーからギアデュアルを抜き、パラブレイガンに差し込んだ

『パーフェクトクリティカルフィニッシュー！』

パラドクスの横に4体のパラドクスが出てきた

キバB「くっ！」

『バツシャーバイトー！』

キバB「はあ！」

パラドクス「無駄だ！はあ！」

キバB「うわああ！」

『オールクリアー！』

パラドクスの必殺技を受けてキバは変身解除された

穂乃果「渡君大丈夫？」

花陽「しっかりしてください！」

デイケイド「こいつ！」

『カメンライダー！』

『エグゼイド！』

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティアクションX！』

デイケイドはエグゼイドになった

Dエグゼイド「はあ！ふっ！はあ！」

ブレイド「やあ！はあ！」

カブト「はあ！」

パラドクス「おっと！ふははは！近距離攻撃なら！」

『ズッゴーン！』

パラブレイガンはアックスモードになった

パラドクス「はあ！はあ！オラア！」

Dエグゼイド「うわあ！」

ブレイド「はあ！ふっ！やあ！」

パラドクス「オラア！」

ブレイド「くっ！」

カブト「ふっ！やあ！」

『1！2！34567！』

パラドクスはパラブレイガンのBボタンを7回押した

パラドクス「はあ！」

カブト「うっ！うわあ！」

『7連打！』

1回の攻撃の重みが7回分になり、攻撃の強さでカブトは変身を解除された

絵里「うう…ケホケホ！」

にこ「絵里しかしなさい！」

希「えりち大丈夫？」

パラドクス「おいおい…この程度かよ…やっぱり美晴と遊んだ方が何倍も楽しいな」

再びゲームードライバーからギアデュアルを抜き、パラブレイガンに差し込んだ

『ガシャット!』

『ノックアウトクリティカルフィニッシュ!』

パラドクス「はアア!」

デイケイド「ぐっ!ぐわあ!」

ブレイド「くっ…うう…うわあ!」

パラドクスの強烈な必殺技の一撃が決まり、デイケイドとブレイドの変身は解除された

ことり「海未ちゃん!士君!」

士「がはあ…」

海未「くう…うう…」

パラドクス「ふう…この程度か全くしらけるぜ、美晴の場所は…
浦の星女学院か」

士「お前…今どうやって美晴の場所を…?」

パラドクス「あ?んー教えといてやる、俺は……だ!」

士・渡「!?!」

パラドクス「じゃーな!」

そう言い残し、パラドクスは消えた

く一方別の場所く

真姫「ちよつと離して!」

アナザーファイズ「うう…!?!」

真姫「痛!」

アナザーファイズが急に吹っ飛んだ

真姫「ヴェエ!?!どうなってるのよ!」

「久しぶりだな、真姫ちゃん」

真姫「!あなたは……!」

「よっ!」

真姫「乾巧さん…」

次回仮面ライダーウィザード

「パラドは敵だ、それ以下でもそれ以上でも無い」
「あの男の目的は…」

「俺には夢が無い」

「私は夢がある…だからそれを叶えるまでは死ねない！」

次回第44話 555

第44話 555

真姫「乾さん…どうして」

乾「それより今は逃げるぞ」

乾は真姫の手を引きながらアナザーファイズから遠ざかった一方その頃渡達は

士「…これがパラドがμ、sの前から姿を消した真実だ」

μ、s『……………』

僕らはあの後、近くにあった絵里さんの家で手当をしている

そして士さんがパラド君が消えた理由をみんなに話した

穂乃果「でも穂乃果がことりちゃん達と喧嘩した時は慰めに来てくれだよ！」

渡「恐らくその時にはもう蘇っていたんだよ」

士「あいつは美晴が浦の星女学院にいることを突き止めていた、蘇った際に何か探知的なものを渡されたんだろ」

海未「花陽も知っていたんですね」

士さんが話してる最中に花陽さんも説明していた

花陽「うん…美晴君がライダーの力を奪われた時に…みんなの為に言わない方がいいかなって」

そんな前から知っていたんですか…

士「だがあいつは俺たちと敵対した今、敵であることに変わりはない」

穂乃果「士君…でも」

絵里「士の言う通りよ、どうやってパラドが蘇ったのかは知らないけどライダーが美晴しかいない浦の星女学院に向かったのだから黒も同然よ」

穂乃果「絵里ちゃんまで…」

海未「私たちと戦ってる時に一切躊躇も見せませんでした、今回は士の言う通りかと…」

穂乃果「海未ちゃん…」

士「これからはパラドに遭遇したら俺達4人の誰かに連絡してく

れ」

「そう言い、僕達は解散して、真姫さんを探しに行った

乾「ここなら大丈夫だろう」

手を引かれてやってきたのは古い家だ

真姫「乾さんここは？」

乾「俺が以前使っていた所だ、今じゃボロくなってるけどな」

「そう言いながら、古い家の中に入っていく

乾「西木野先生は元気か？」

真姫「元気です、うるさいくらいに…」

乾「あの人は相変わらずだなあ…真姫ちゃんは将来病院を？」

真姫「…分かりません、なりたいとは思うんですけど親からしたら

当然だと思われるようなきがして…」

乾「いいよなー真姫ちゃんは夢があって」

真姫「え？」

乾「俺にはずっと夢がなかった、何年生きてても夢がなかった…だからせめて他人の夢を守る仮面ライダーとして」

真姫「夢を守る……」

乾「けど俺は一人の仲間の夢を守れなかった…」

渡視点

渡「真姫さんはどこに行っただろう…」

凜「あっちかもしれないにやー！」

僕達は今、真姫さんを探している

凜さんが前に走っていくと誰かにぶつかった

凜「ご、ごめんなさい……」

渡「大丈夫ですか？すみません…!?あなたは」

凜さんがぶつかった人は真姫さんをさらったアナザーファイズに変身した人だった

『ファイズ……！』

おとこの人はアナザーウォッチを起動して、自分の体内に入れた

アナザーファイズ「はあ！」

渡「よっ！凜さん離れててください」

凜「了解にやー！」

渡「キバツト！」

キバツト「よっしゃー！久しぶりのセリフだぜー！」

渡「メタいよ！」

そう言いながら、キバツトを掴んだ

『ガブツ！』

僕の手をキバツトに噛ませると腰に赤いチェーンのベルトが現れた

渡「変身！」

そしてベルトの真ん中にキバツトをぶら下げると僕はキバの鎧を纏った

キバ「はあ！」

アナザーファイズ「うう…！」

キバ「真姫さんをどこにやった?!」

アナザーファイズ「知るか！あの後別のヤツに連れてかれたからよ！」

そう言い、殴ってくる

キバ「つまり他の人に助けられた…？」

アナザーファイズ「おらあ！」

キバ「ふっ！来いドツカ!!」

僕は横にあるスロットから紫のフェッスルを取り出した

『ドツカハンマー…！』

キバツトに吹かせるとキャッスルドランからドツカの彫像がやってきた

僕が手に持つとハンマーになり、キバの鎧が紫色になった

キバD「はあ！」

アナザーファイズ「うわあ！はあ！」

『コンプリート…！』

アナザーファイズの体がしろくなった

キバD「何だ？」

『スタートアップ…！』

アナザーファイズが腕についてるボタンを押すと突然加速した
キバD「ぐっ！うわあ！ぐわあ！」

『タイムアップ……！』

時間が経つとアナザーファイズは元に戻った

キバD「はあ……はあ……」

アナザーファイズ「終わりだな、はあ！」

乾「おらあ！」

アナザーファイズ「ぐっ……またお前か……」

真姫「渡！」

キバD「真姫さん……どうして」

真姫「乾さんが助けてくれたの」

乾さんつて……仮面ライダーファイズの

乾「そのコウモリ！」

キバD「コウモリつて……僕!？」

すると乾さんは僕にライドウオッチをなげつけてきた

キバ「これつてライドウオッチ!?!なんで」

乾「気がついたら持ってたんだ、それはあんたらのもんだろ？」

キバ「うわあ！」

ファイズウオッチが勝手に浮き、真姫さんの元に渡った

キバ「まさか……ライドウオッチが真姫さんを適合者に選んだ？」

真姫「ヴェエえ!？」

乾「真姫ちゃん夢があるんだろ、ならやめといたほうがいいんじゃないか？」

真姫「確かに私には夢がある……でも他人の夢を見捨てるなんて医者
の娘がやることじゃないわ、守ってみせるわよ自分の夢もみんなの夢
も！」

そう言い、真姫さんはウオッチを起動した

『ファイズ！』

すると真姫さんの腰にファイズギアが取り付けられた

真姫さんはファイズフォンを開いた

『スタネバイ?』

ファイズフォンに数字を打ち込むとファイズフォンを閉め、空高く手を上げた

真姫「変身！」

『コンプリート！』

赤い光が光り、光が消えると真姫さんは仮面ライダーファイズになっっていた

ファイズ「行くわよ！はあ！」

アナザーファイズ「はあ！おらあ！」

ファイズ「ふっ！はあ！はあ！」

アナザーファイズ「ぐう：はあ！」

アナザーファイズは空に飛び、ファイズに向けて赤い槍のようなものを投げつけ、キックをしてきた

ファイズ「そっちがその気なら！」

そう言い、ファイズフォンを取り出し、数字を打ち込んだ

『エクシードチャージ！』

ファイズの足に力が溜まり、アナザーファイズに向けて赤い槍を蹴った

アナザーファイズ「何!？」

ファイズ「はあああああああ！」

アナザーファイズ「ぐわあああああ！」

アナザーファイズは爆散した

仮面ライダーファイズの力を継承した西木野真姫、次は一体どんなレジェンドに出会えるか

赤い車からタイヤ人間がでてきた

次回仮面ライダーウィザード

「ライブの衣装の手伝いをして！」

「なんだ…これ」

「私があなたに彼女を取り戻す力をあげるわ」

「曜ちゃんに近寄らないで」

次回第45話 堕ちた月

『僕の曜ちゃんに触るな！』

第45話 堕ちた月

千歌「美晴君く♪」

アナザー鎧武を倒した後の翌日、俺は鞠莉さんの指示でこっちに
いる間はまた浦の星女学院の生徒としていて欲しいとのことで再び浦
の星女学院で生活している

：だけどアナザー鎧武を倒してから千歌が異様に甘えてくるよう
になった

聞くとここによると千歌は末っ子らしいから甘えたい欲があるのか
？

曜「モテモテだねえく美晴君」

梨子「…いいなあ」

そして、千歌が甘える度に曜ちゃんが茶化して、梨子が羨ましそう
に見てくる

美晴「みんな歌は順調？」

千歌「うん！みんな頑張ってるよ！」

美晴「そっか…」

曜「美晴君？どうしたの？」

美晴「え？いや…なんか千歌が仮面ライダーになったからμ'sも
A q o u r s もみんなライダーになるのかなって最近考えちゃうん
だ」

梨子「そんなこと考えてるの？」

美晴「うん、仮にみんながライダーになったとしたらみんなスクー
ルアイドルなのに危険を犯すことになるから…」

千歌「ちゃんと千歌達のこと考えてるんだね！」

美晴「当たり前だろ、マネージャーなんだから」

についと歯を見せながら笑顔を見せる

曜梨千「／／／／／」

すると3人とも顔を赤くした

美晴「どうした？」

千歌「え!?!な、なんでもないよ！なんでも！／／／／／」

美晴「え？そうか…ちよつとトイレ行ってくるな」

梨子「うん、行つてらっしゃい／＼／＼」

そう言い、俺はトイレに向かった

くトイレく

美晴「ふうく…危ない危ない」

俺はトイレを済ませて手を洗っている

美晴「！なんだ…これ」

手を洗うために袖を捲ると腕には傷が出てきており、傷の中にヘルヘイムのツタができています

美晴「これは…ネオヘルヘイムの…」

ウオズ「お困りのようだね、美晴君」

美晴「うわあつ！ウオズいつの間に…」

ウオズ「それよりこの本によればその傷は仮面ライダー鎧武の歴史にあるインベスもしくはオーバーロードの攻撃が肌に触るとヘルヘイムの芽が腕に移植されるだ」

美晴「でもなんだ急に…インベスの攻撃だつて受けてないのに…」

ウオズ「おそらく高海君が極アームズを使用したからだろう」

美晴「どういうこと？」

ウオズ「仮面ライダー鎧武は極アームズを使用する度にオーバーロードに近づくのだ」

美晴「つまり千歌に出るはずだったヘルヘイムの芽が俺の腕に移植されたつてことか」

ウオズ「結論から言うとそういうことになる」

なるほど…千歌はむやみに極アームズにはなれない…いや俺が頑張ればどうだつていいんだ

美晴「ありがとうな、ウオズ」

そう言い残し、俺はトイレを出た

く部室く

時は過ぎ、放課後

俺は少し訳あつて、千歌達より出るのが遅れた

俺が部室に入ると広がった光景はみんなが勉強している場面だつ

た

美晴「えつと…みんな何してるの？」

俺がそう言うのとダイヤさんが代表して説明してくれた

ダイヤ「テストが近いということなので練習を休みにして、みんな
でテスト勉強をするということになったのですわ」

美晴「それはわかったけど…でもなんで千歌と善子と果南さんはあ
んなツーマンセルなんですか？」

俺が聞くとダイヤさんは顔を引き攣らせた

ダイヤ「実はあの御三方はA q o u r sの中でずば抜けて成績が悪
いのです」

美晴「あつ…理解しました」

千歌「美く晴く君く…助けてく…」

梨子「美晴君に助けを求めないの！勉強をしない千歌ちゃんが悪い
んだから」

曜「そうだよ？だからは・や・く勉強しようねえく？」

おおく…怖えく

千歌「待つて！梨子ちゃんが言うのは分かるけど曜ちゃんまでどう
したの!？」

凄い機嫌悪いじゃん!？」

曜「べつつにく？私の方が早く会ったのに呼び捨てで呼ばれて羨ま
しいとか思っていないしく？」

美晴「あはは…」

俺はこの光景に苦笑するしか無かった

すると俺は音ノ木坂でのテスト勉強を思い出した

確か…あの時もこんな感じだったよな…

そう心で呟いて、口を緩ませ、善子と果南さんの所に向かった

美晴「ダイヤさん、俺も手伝います」

ダイヤ「しかし、美晴さんは高校3年の勉強は…」

美晴「安心してください、今回のテストの3年の範囲は許容範囲で
す」

そう言い、1年生達の方にも目線やった

美晴「こつちも手伝うからね？」

花丸「美晴さん、ありがとうずら！」

そして、俺は善子と果南さんの方を見た

美晴「2人とも4人より厳しく行くけど…文句は無いよね？」

果南「いや…ちよつ…無いよね？」…はい」

そして、俺の優しいく勉強会が始まった

く数時間後く

美晴「じゃあ終わりです、よく耐えましたね」

善子「本当に墮天するかとおもった…」

美晴「じゃあ復習をしっかりとってくださいなね」

果南「はい…」

そう言い、俺は2年の方に向かった

美晴「よつ！どうだ？」

千歌「疲れた…」

曜「んー…良し悪しで決めるのなら悪いかな？」

梨子「千歌ちゃん！きようは千歌ちゃんの家泊まるからみっちり勉

強…ね？」

千歌「…はい」

曜「あはは…あつそうだ美晴君、帰りにうちに寄っててよ！」

美晴「え？いいけど…なんで？」

曜「ええーと…勉強で分からないところがあるから…」

勉強？千歌の家じゃダメなのか？

でも曜ちゃんの家に行ったことないし、別にいいか

美晴「いいよ、じゃあ行こつか？」

曜「うん！」

曜ちゃんはそう返事し、いつしよに部室を出た

???視点

今は僕は衝撃な光景を目にしている

浦の星女学院で曜ちゃんの帰りを待っていたら、見知らぬ男が曜

ちゃんといっしょに出てきた

曜ちゃん、すごく楽しそうに話してる…曜ちゃんは僕のものなのに

…

あー…そつか…曜ちゃんはあの男に弱みを握られているんだ、じやなきや曜ちゃんは浮気なんかしないしね

「あの男…許さない」

そう言葉を零したら突然時が止まった

「え？…一体何が…」

あんじゆ「はあーい、そこのお嬢さん」

後ろから声がし、振り向くと女の人がいた

年齢は僕と同じ？

あんじゆ「ねえお嬢さん、あの銀髪の女の子と一緒にいるあの男、殺しい程許せない？」

女の人は僕に当然の質問してきた

「当たり前じゃないか、曜ちゃんは僕のものなのにあの男が曜ちゃんを脅しているんだよ」

あんじゆ「ふふつ、なら私と契約してくれたあなたの彼女を取り戻す力をあげるわ

あの男を始末したい私と彼女を取り戻すあなた、願いは違えど目的は同じよ」

そう言い、僕に黒いデバイスを見せ付けてきた

この人と契約すれば曜ちゃんを取り戻せる…

曜ちゃんを守る…

また僕だけを見てくれる…

あの男を殺せる…！

「契約するよ」

あんじゆ「契約成立ね、今日からあなたが仮面ライダードライブよ」

そう言い、黒いデバイスを僕に渡してくれた

美晴視点

曜「そしたら善子ちゃんがね…「曜ちゃん」…月ちゃん？」

声がした方を振り向くと黒いボーイツシユな子がいた

美晴「誰？」

曜「従姉妹の渡辺月ちゃん、今はイタリアにいるはずなんだけど…」

月「ねえその男誰？」

曜「え？A q o u r s と μ , s の マ ネ ー ジ ャ ー の 氷 海 美 晴 君、今から勉強を教えて貰うと」

月「フウーン、氷海美晴：ねえ」

月さんは俺をじっくりと観察する

なんだろう：この人

月「まあいいや、とりあえず君に一言」

美晴「？」

月「曜ちゃんに近寄らないで」

すごく低いトーンで話してきた

：正直少しびびった

美晴「何を言ってるんですか：？」

その時、俺と曜ちゃんの肩が触れてしまった

それを月さんは見逃さなかった

月「僕の曜ちゃんに触るな！」

そう言い、アナザーウオッチを取り出した

美晴「それは！」

『ドライブ：i』

月さんはアナザーウオッチを起動して、自分の体内に入れた

美晴「アナザーライダー！曜ちゃんに離れてて」

『ドライブバーON！プリーズ！』

『シャバドゥビタッチヘンシーン！』

美晴「変身！」

『インフィニティプリーズ！』

『ヒースイフドー！ボーザバビュードゴーン！』

俺は仮面ライダーウィザードインフィニティスタイルに変身した

ウィザードI「はあ！はあ！やあ！」

アナザードライブ「ふっ！はあ！はあ！」

ウィザードI「ふっ！でえやあ！」

アナザードライブ「うわあ！うう…」

ウィザードI「今だ！はあ！」

アナザードライブ「はあ！」

アナザードライブが前に手をやると急にウィザードの動きが遅くなった

ウィザードI「(なんだこれ?!体が重い…)」

アナザードライブ「ふっ！はあ！はあ！はあ！てやあ！」

ウィザードI「ぐわあ！うわあ！そうだ！」

『インフィニティプリーズ！』

再びインフィニティリングをかざすと時間に干渉して高速移動をした

ウィザードI「ふうく…体が楽になった」

アナザードライブ「はあ！」

ウィザードI「はあ！」

アナザードライブが殴りかかったところを切り返すとアナザードライブは転がり、動きも元に戻った

ウィザードI「ファイナルだ！」

アナザードライブ「ふっ！」

曜「美晴君…！」

ウィザードIが攻撃しようとした時にアナザードライブは曜ちゃんを人質にした

ウィザードI「曜ちゃん！お前卑怯だぞ！」

アナザードライブ「曜ちゃんが手に入れば手段は選ばないよ！はあ！」

ウィザードI「ぐっ…！」

また体が重くなり、その隙にアナザードライブは逃げた

次回仮面ライダーウィザード

「月ちゃんやめてよ…！」

「俺と遊ぼうぜ？」

「美晴君先に行つて」

「月ちゃんがそうだった原因を作ったのは私だよね」

次回46話 start your ヨーソロー

第46話 s t a r t y o u r ヨーソー

く古びた家く

月「やつと2人になれたね」

曜「月ちゃん：なんでこんなことを：」

月は曜を連れ去った後、古びた家に入り、曜を椅子に縛り付けたのだ

月「なんでつて：曜ちゃんが悪いんだよ」

曜「え？」

月「曜ちゃんは僕のもの、僕の彼女：なのに氷海美晴だっけ？そんなマネージャーに浮気するんだもん」

月は笑いながら言うが瞳が笑っていなかった

そもそも月の瞳は闇に染っていた

曜「わ、私月ちゃんの彼女にも物にもなっていないよ!」

曜がそう訴えると月の表情が変わった

月「そつかあ：曜ちゃんはそのままであの男に毒されたんだね、でももう大丈夫、僕がいるから」

曜「だから：!」

月「大丈夫だよ、今までよく頑張ったね、彼女のフリして」

そう言うのと曜の周りに煙が漂った

曜「あれ：？なんだか：眠く：」

月「ふふつ、ゆつくりと寝な曜ちゃん、」

そう言うのと曜は睡眠に堕ちた

月「目覚めた時には君を唆した彼はこの世にいないから」

く十千万・千歌の部屋く

美晴「：つて言うことが」

俺はあの後、すぐさま十千万に行き、千歌の部屋に立ち寄った

そして千歌とその場にいた梨子に状況説明をした

梨子「そんなことが：」

千歌「曜ちゃんは大丈夫なの!」

美晴「分からない：それより二人は渡辺月っていう人を知ってるの

？」

千歌「ううん、曜ちゃんに従姉妹がいることも初めて知ったよ」

梨子「幼馴染の千歌ちゃんが知らないならお手上げね」

美晴「……………」チラッ

俺は横目で時計を見た

時刻は18：40だった

美晴「…俺ちよつと今から探してくるわ」

梨子「今から!？」

千歌「今18時だよ!?!今から探しに行ったら夜になっちゃうよ」

美晴「でも今から探しに行かなきゃ、曜ちゃんが…!」

渡辺月の事だ、曜ちゃんに何しでかすか分からない…!

千歌「…梨子ちゃん確か明日って学校も部活も休みだったよね?」

梨子「え?そうだけど…」

千歌「じゃあ私が言いたい事…わかる?」

梨子「え?…!そういう事ね」

なんか知らんけど梨子が納得した

千歌「…よし!美晴君、いっしょに探しに行こ!」

美晴「ええ!?!どうした急に」

梨子「思い出したの、Aqoursの約束事をね」

美晴「Aqoursの約束事?」

千歌「うん!それが……………」

…数分後

千歌「ふう…何とか説得できた…」

千歌は今から外に行くことをお姉さんたちに伝えてきたらしい

美晴「なら早く探しに行こう」

梨子「そうね」

千歌「とりあえず曜ちゃんが攫われた場所に案内して?」

美晴「ああ、こっちだ」

俺は二人にアナザードライブと戦った場所に案内した

美晴「ここだ」

千歌「ううーん、なんとも絶妙な場所だね」

梨子「ここだとどこに連れて行かれたか分からないわね」

「お悩みのようだな」

美晴「!?お、お前は!」

声がし、振り返るとそこには俺の手の中で死んだパラドがいた

パラド「久しぶりだな、美晴」

美晴「パラド!?なんでお前が…!」

千歌「パラドって、sのマネージャーの?」

パラド「ああ、渡辺月と渡辺曜ならあそこにある山の古びた家に居るぜ」

美晴「なんだお前が2人のことを知ってる!」

パラド「どうでもいいだろ、教えたってお前は俺と遊ぶんだからよ」

そう言つて、パラドはギアデュアルとドライバーを取りだした

パラド「心が踊るなあ!」

『デュアルガシャット!』

パラド「MAX大変身!」

『ガツチャーん!マザルアップ!』

『赤い拳強さ!青いパズル連鎖!赤と青の交差!パーフェクトノックアウト!』

パラドクス「行くぜ?オラ!」

美晴「くっ…お前と遊んでる暇はない!」

千歌「美晴君、梨子ちゃん先に行つて!」

梨子「千歌ちゃん!」

千歌「ここは私が引き止めるから、曜ちゃんを助けて」

そう言い、千歌は戦国ドライバーを巻き、ロックシードをとりどした

『オレンジ!』

千歌「変身!」

『ロックオン!』

『ソイヤット!オレンジアームズ!花道オンステージ!』

千歌は仮面ライダー鎧武に変身した

パラドクス「お前も仮面ライダーか…楽しそうだ!」

美晴「…千歌頼んだ！梨子行こう」

梨子「う、うん！」

俺と梨子は山へ入っていた
（山）

美晴「はあ…はあ…あれか」

山へ入って、少し登ったところに古びた家が1軒あった

梨子「あの中に曜ちゃんが…」

美晴「よし、行ってみよう」

俺と梨子は古びた家に近づき、中に入った
ぎいいいい…

美晴「……！梨子危ない！」

梨子「キヤツ！」

突然ナイフが飛んできて、俺は梨子を押し倒した

梨子「いててて…」

美晴「大丈夫か？」

梨子「…（これはいつも夢見る床ドン!?しかも相手が美晴くんなんだな
んて…最高く!）」

美晴「にしてもなんでナイフが…」

梨子「あ、あつちから飛んできたなら、あそこの扉にいるんじゃない
い?／／／／／」

謎に梨子は顔を赤らめながら扉を指さす

確かに…扉がある方向からナイフが飛んできたから、一理あるな

美晴「……！」

その扉のドアノブに手をかけるが開かなかった

梨子「鍵がかかっているの？」

美晴「ああ、でも探してる余裕は無い」

梨子「え?じゃあどうするの？」

美晴「ぶっ壊す！」

『コネクトープリーズ!』

俺の横に魔法陣が現れ、中に手を入れるとウィザードソードガンを取り出した

美晴「はあ！」

俺は扉を斬った

梨子「随分ダイナミックね…」

中に入ると梨子の予想通りそこには椅子に縛り付けられてる曜ちゃんがいた

美晴「曜ちゃん！」

曜「美晴君！梨子ちゃん！」

梨子「良かった…」

曜「どうして？」

梨子「忘れちゃったの？A q o u r s の約束事『メンバーが困ってたらメンバー通しで助け合う』でしょ？」

曜「あつ…！」

曜の目には涙が出てきている

曜「ありがとう…」

美晴「2人とも感動してるとこ悪いけど梨子、曜を連れて逃げろ」

梨子「え？」

月「全く、A q o u r s メンバーである梨子ちゃんだけなら曜ちゃんと話せてあげたけど…」

曜ちゃんに毒をつけた野郎までなんてね」

曜「月ちゃん…」

月「曜ちゃんも酷いねえ…お仕方必要だね？」

そう言い、渡辺月はアナザーウオッチを取りだした

『ドライブ…！』

アナザーウオッチを起動して、自分の体内に入れた
く千歌視点く

パラドクス「ふっ！おら！」

鎧武「ふっ！はあ！てやあ！」

パラドクス「よっと！やるなお前、楽しめそうだ！」

『ガシヤコンパラプレイガン』

『ずっガン』

パラドクス「おらよ！」

『イチゴ！』

『ソイヤット！イチゴアームズ！シュツシュツとスパークング！』

鎧武はイチゴロツクシードを使って、イチゴアームズになった

鎧武I「はあ！てやあ！はあ！」

パラドクス「ふっ！はあ！おらあ！」

パラドクスのパラプレイガンが撃った弾と鎧武のイチゴクナイがぶつかる

『ズッゴーン！』

『パイン！』

『ソイヤット！パインアームズ！粉碎デストロイ！』

パラドクス「はあ！よっ！おら！」

鎧武P「ふっ！はあ！ほっ！やあ！」

鎧武はパインアイアンを振り回した

パラドクス「おっとと…次で決めてやるよ」

『ガツチャーン！ウラワザー！』

『パインスカッシュ！』

パラドクス「はあああああああ!!」

鎧武P「やあああああああああ!!」

2人の激しい蹴りが激突する

パラドクス「ぐわあ！」

勝ったのは鎧武だった

パラドクスは地面に横たわった

パラドクス「こんかいは俺の負けってことにしといてやるよ、だが

次は負けない」

そう言い、パラドクスは消えた

千歌「美晴くん達の所に行かなきゃ！」

ウオズ「待ちたまえ、高海君」

千歌「うわあ!?!ウオズさん？」

ウオズ「これを持っていきませえ」

そう言い、ウオズは千歌にベルトを渡した

千歌「え？これなに？」

ウオズ「これを渡辺君に渡してくれ、あとは本人がわかる事だろう」
千歌「うん！わかった！」
そう言い、千歌は山を登った

ウィザード「くっ！ぐはあ！」

アナザードライブ「ふっ！はあ！」

ウィザード「くっ！はあ！」

アナザードライブ「ねえその程度なの？」

ウィザード「なんだと？」

ウィザードはアナザードライブの言ったことに戸惑い、止まった

アナザードライブ「あの一戦からめげずにここまで来たのは褒めて

あげるけど、つまらなすぎる」

ウィザード「こいつ…！」

『ウォーター！ドラゴン！』

ウィザードの前に青いドラゴンが現れた

『ザバザババシャーン、ザバンザバーン！』

青いドラゴンがウィザードの中に入るとウィザードはウォーター

ドラゴンスタイルに変身した

ウィザードWD「はあ！はあ！」

アナザードライブ「ふっ！はあ!!ねえ言ってるでしょ？君の攻撃は無意味なの」

アナザードライブはウィザードを弾き飛ばしてから、そう言う

ウィザードWD「ぐわあ！だったらこれでどうだ！」

『セットアップ！』

『スタート！』

『フレームドラゴン！ハリケーンドラゴン！ランドドラゴン！』

『ファイナルタイム！』

ウィザードWD「はあ！ふっ！だあ！」

ウィザードFD「でやあ！」

アナザードライブ「はあ…だから…無意味なんだって、はあ！」

アナザードライブが手を前に出すと体が重くなった

ウイザードWD「これはあの時の…！」

するとどこからか赤い車が来た

ウイザードWD「く、車!？」

赤い車はウイザードを囲むように走り、アナザードライブは赤い車から弾かれるようにウイザードにキックをかます

ウイザードWD「ぐっ!…ぐわあ!うわあ!」

ウイザードは吹き飛び、変身を解除された

美晴「がはあ…」

曜「美晴君!」

アナザードライブ「ふ、ふはは!これで曜ちゃんに近づくと毒は消えた!」

梨子「…いれば」

アナザードライブ「?」

梨子「さつきからずっと黙って聞いてれば曜ちゃんは私の物だ、美晴君が毒だとか…

うるさいのよ!」

曜「り、梨子ちゃん?」

梨子「美晴君はどんなことにも挫けずに自分が守りたいものを守る…あなたのように勝手に曜ちゃんを私物化してるような人とは違うの!」

アナザードライブ「黙れ!」

アナザードライブが梨子に剣を投げようとした時

曜「待って」

曜が前に出た

曜が前に出たことにアナザードライブは投げるのをやめた

曜「ごめんね、月ちゃんがこうなった原因は私にあるんだよね」

美晴「どういう…意味だ…?」

曜「月ちゃんは小さい時からいつしよにいた、月ちゃんは小学校の時からボーイッシュの見た目のせいでクラスからいじめられるようになって、私はいつも泣くのを我慢してる月ちゃんを放っておけなくて慰めてた…これが原因なんだよね?」

アナザードライブ「そ、そんなことは…！」

曜「でもそんな月ちゃんには私に恩返ししてくれた、私はそれを今でも大事にしてる」

そう言い、曜は首につけてるペンダントを見せつけた

アナザードライブ「そ、それは…！」

曜「覚えてるでしょ？月ちゃんがくれたペンダント…これをいつも私は肌身離さずつけてるの」

曜の思い出話を聞いて、アナザードライブは元に戻った

月「曜ちゃん…ごめん」

その時月は泣いていた

月視点

あんじゅ「あーら？やめちゃうの？」

時が止まると僕に黒いデバイスを渡してきたお姉さんがいた

月「僕の浅はかさを知ったからね、もういらないよ」

僕はお姉さんに笑みを浮かべる…が

あんじゅ「あら？これに手を出したらもう戻れないわよ？」

月「え…？」

あんじゅ「大切な人を殺して、怪人へと進みなさい！」

『ドライブ…！』

そう言い、お姉さんは僕から黒いデバイスを奪い取って、起動し、無理矢理僕の体内に入れた

第三者視点

月「うわあああああ！」

月が突然叫ぶとアナザードライブに変化した

曜「月ちゃん！」

アナザードライブ「うう…はあ！」

アナザードライブは曜に剣を振るった

曜は突然のことに目をつぶるが…

美晴「がはあ！」

曜「美晴君!？」

美晴が曜の盾になっていた

美晴「おいあんた…曜ちゃんが好きなんだろ?…:だつたら手を出すなよ…:あんたは曜までの悲しみ顔が見たいのか」

そう訴えるがアナザードライブからは唸り声しか聞こえない
アナザードライブは美晴を蹴り飛ばす

美晴「ぐはあ!」

梨子「美晴君大丈夫?」

美晴「あとあれは渡辺月じゃない…:おそらくアナザーウォッチに操られてる…:

治すには仮面ライダードライブの力が必要だ」

梨子「でもそんなの…:」

「あるよ!」

声がし、振り向くと千歌がいた

美晴「千歌?」

千歌「曜ちゃん!これ使って!」

千歌は曜にベルトを投げる

曜「これは…:」

『久しぶりだね、曜』

曜「べ、ベルトさん!」

そう千歌が投げたのは仮面ライダードライブの相棒、クリーム・スタインベルトである

美晴「べ、ベルトが喋った…:?」

クリーム『曜、脳細胞はトツプギアか?』

曜「…:うん!全速前進であります!」

そう言い、曜はクリームを巻いた

クリーム『OK!start your engine?』

曜はクリームの鍵の部分を回した

そして、手首についでるシフトブレスにシフトカーを刺した

曜「変身!」

そう言い、シフトカーを曲げた

『ドライブ!ターイプスピード!』

曜は仮面ライダードライブに変身した

ドライブ「月ちゃん今助けるからね？」

アナザードライブ「うう！」

アナザードライブは唸り声を上げながら、殴りかかってきた
ドライブ「はあ！ふっ！でやあ！」

アナザードライブ「うう…！」

ドライブ「はあ！やあ！」

アナザードライブ「ぐう…！」

ドライブ「ベルトさん行くよ！」

クリム『ああ！派手に行こう！』

ドライブはシフトブレスについてるシフトカーをもう一度曲げた

『フルスロットル！スピード！』

また赤い車が来た

仮面ライダードライブの愛車『トライドロン』だ

ドライブ「はあ！はあ！はあ！はあ！」

ドライブはアナザードライブの周りを走ってるトライドロンに弾
かれるようにアナザードライブにキックを入れた

アナザードライブ「ぐわあ！」

アナザードライブは爆散し、月の姿に戻り、アナザーウォッチが砕
けた

曜「良かったです」

曜は気絶してる月を抱き抱える

美晴「良かったね、曜ちゃん」

曜「…むー…：さつきは呼び捨てだったのに戻すの？」

曜は不機嫌気味に美晴に問う

美晴「およ？呼び捨てがいいなら呼ぶけど？」

曜「ほ、本当!？」

美晴「ああ」

曜「じゃあそうして！」

美晴「わかった、これからもよろしくな曜！」

曜「…プシユ…：／／／／」

千歌「ああ!？曜ちゃんしつかり！」

梨子「…最大の敵は美晴くんかもね」

ウオズ「ライドウオツチ無しで仮面ライダードライブに変身したA

ours 渡辺曜

さて次は一体どんなレジエンドライダーが待ってるのか」

『マキシマムドライブ!』

「さあお前の罪を数えろ!」

次回仮面ライダーウィザード

「酷い目に合わさられるぞ?」

「あれ?土、ドライバーは?」

「ちよつとぐらいいいじゃない!」

「知らねえよ、あんなやつ」

次回第47話 Dは怒る／墮天使だつて戦いたい

『俺らは遊び戦ってんじゃないやねえんだよ!ひとつしか命貼って戦ってんだよ!』

第47話 Dは怒る／墮天使だつて戦いたい

く浦の星女学院・部室く

千歌「美晴君、大丈夫?」

美晴「うん、大丈夫だよ」

俺の顔には湿布、手には包帯が巻かれている

この怪我は昨日の月さんにつけられたものだ

曜「ごめんね…月ちゃんが…」

美晴「別にあの人が悪いわけじゃないんだし、大丈夫だよ」

あの事件の後、月さん曰くアナザーウオッチは

茶髪の女性に渡されたと言つてた…

そういえば、天音さんもアナザーウオッチも茶髪の女性に渡された
と言つてたな

どういうことなんだ? どうして、アナザーウオッチを…

アナザーブレイド、アナザードライブは人が使つていたけど

アナザー鎧武は人がいなかったな…なんなんだ一体…

俺が色々と考えていると部室の扉が開いた

士「随分、ボコボコだな」

美晴「士!?なんでここに?」

渡「美晴君がいない間に色々あったから、報告に来たんだ」

美晴「報告?」

俺がそう聞くと士が一息ついた

士「西木野が仮面ライダーファイズになった」

美晴「えっ!?真姫がファイズに?つてことは…」

渡「うん、こっちにもアナザーファイズが現れたんだ」

美晴「そうなんだ…あつ、そういえば!」

俺はとあることを思い出した

美晴「実はA q o u r sにも仮面ライダーが生まれたんだ」

士・渡「えっ!?!」

千歌「私と曜ちゃんが仮面ライダーになったんだよー!」

士「高海と渡辺が…?」

曜「私がドライブ、千歌ちゃんが鎧武なんだ」

渡「嘘でしょ…」

美晴「…あと、二人に後で話すことがあるんだ」

士「??わかった」

こうして、俺たちの報告会ほ終わった

その後、梨子と3年生組が来て、雑談に花を咲かせた

士「美晴、早めに帰ってこないと小泉と園田に凄い目に合わさられるぞ」

美晴「海未と花陽に?なんで」

梨子「なんで気づかないかなあ…」

千歌「まあ、美晴くんだもんねえ」

曜「ねえ」

ええ…なんか酷い言われようなんだけど…

鞠莉「美晴はもう少し乙女の気持ちに気づいてあげなさい!」

美晴「乙女の…気持ち…?」

渡「それすら分からないのか…」

果南「渡君だって気づいてくれてもいいじゃん…」

美晴「士、お前、ドライバーは?」

士「はあ?ここに…つて無い!」

ダイヤ「無くしてしまったのですか!」

士「いや、さっきまでここに…」

すると扉が開いた

善子「ふふ、あなたが求めているのはこれかしら?」

善子がデイケイドドライバーを巻いた状態で部室に顔を出した

士「…お前、早く返せ」

善子「ちよつと使わせてよ!」

そう言い、善子がカードをドライバーに入れようとしたが…

士「言ってる意味がわかんねえのか?」

士が善子の手を止める

その事に善子は腹が立った

善子「何よ、さつきから！ちよつとぐらいいいじやないの！」

士「俺たちは遊びで戦ってるわけじゃねえんだよ！一つしかない命張って

戦ってんだよ！なのに、命知らずのやつがこのベルトを使う権利は無い！」

善子「な、何よ！」

善子は涙目になって、部室を去った

美晴「士！今のは言い過ぎだ！」

士「あいつにはこれぐらい言わなきゃ分かんねえよ」

そう言つて、士は出ていった

千歌「でも士君の言ってることは分かるかもしれない」

曜「うん、私も」

千歌「仮面ライダーになつてから、私達も守られる側から守る側に変わったから

命の重みをより理解してるからね」

美晴「…でも心配だから俺行つてくる」

梨子「あつ、私も行くわ」

そう言い、俺と梨子は部室を出て、士と善子を探しに行った

善子 s i d e

善子「もー、何なのよ！」

私は士に怒られてから、部室を出て、外にいた

善子「…でもそうよね、私はいつもあいつらに守られてるのに…」

私は自分の罪悪感に苛まれていた

そんな時

蒼一「貴様、力が欲しくないか？」

善子「あんたは浦の星女学院を襲った！」

如月蒼一が私の目の前に来た

蒼一「デイケイドを越す力を欲しくないか？」

善子「デイケイドを…越す力…」

蒼一「俺と契約すれば、あいつらを見返せるぞ？」

そう言い、如月蒼一は私に黒いデバイスをチラつかせる
このおとこは危険だ、そうわかっているはずなのに

この場を離れようとはしなかった

善子「…わかった、契約しましょう」

私はそう言ってしまった

蒼一「今日からお前が仮面ライダーWだ！」

『ダブル…！』

そう言い、如月蒼一は私の中にデバイスを埋め込んだ
アナザーダブル「…土、あなたの罪を数えなさい」

次回仮面ライダーウィザード

「なんで熱くなちまったかなあ」

「お前、何やってんだ！」

「土くんは善子ちゃんのことを大切にしてるよ」

「お前がデイクライドに変身するのを見たくなかったんだ！」

次回第48話 Dは怒る／ 怒りの真実

『私はただあなたに守られるんじゃないやなくて、一緒に守る立場になりた
かったのよ！』